

浜松市民文芸

71



浜 松 市

浜
松
市
民
文
芸
第
7
1
集

浜
松
市

浜松文芸館



松島十湖



加藤雪腸



柳本城西



原田濱人



鷹野つぎ



相生垣瓜人



百合山羽公



藤枝静男



清水みのる

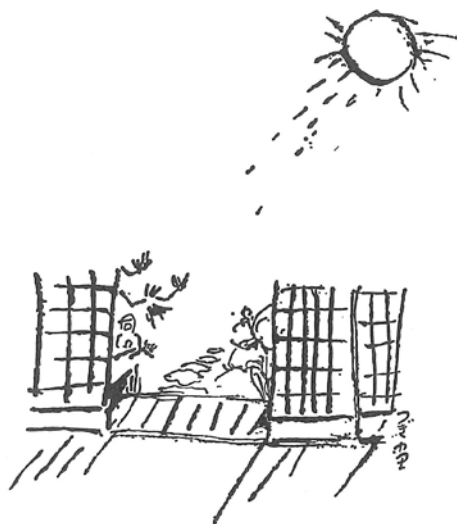


小百合葉子

先人の感性にふれてみたい
今日のはままつを語りたい
明日を語ってみたい

浜松市民文芸

第 71 集



鷹野つぎ 画（自著「四季と子供」表紙）

浜 松 市

川柳	自由律俳句	定型俳句	短歌	詩歌	随筆	評論	児童文学	小説	選者
今田久帆	宮本卓郎	高柳克弘	清水正人	橋本由紀子	たかはたけいこ	中西美沙子	住吉玲子	柳本宗春 竹腰幸夫	

〔表紙の作品〕

作者 神谷 満

令和七年度 浜松市芸術祭「第73回 市展」
芸術祭浜松市長大賞受賞作品 彫刻・工芸部門
題 『記憶の中に』（天竜区 石神小学校）

「浜松市民文芸」第71集 市民文芸賞受賞者

定型俳句	短歌	随筆	随筆	児童文学論	小説	部門
植草量平 松田健喬 加藤美代 金指芙裕 木俣統裕 神谷は司 平谷はれ 宮田悦自 金田太郎 ヒメ巴勢里 尾内甲太郎 河合香織 松島良一 峯村友香里 高橋祐三 大平悦子 岩崎芳子 二橋三千代						受賞者
川柳						部門
自由律俳句 鈴木浩子 川口八重子 館石照子 小栗道子 松尾孝子 和久田郁江 尾内甲太郎 中津川久子 河合香織 リコ リス 山口英男 浅井常義 池田常義 宮崎和子 足立和子 曾立和子 藤原孝志 石原陽元						受賞者

目次

小説

市民文芸賞

雑草パトロール	植草 量平	10
貼り紙・妻は神様	松田 健	25
男達の門出	加藤 喬	44

入選

えんじ色の花	たみのさち	63
祐介の妻	大重晴よし	75
青春の一片、バルビゾンの森	澤木 辰子	95
選評	竹腰 幸夫	111
選評	柳本 宗春	112

児童文学

市民文芸賞

おじょうさんのひみつ	金指美美代	113
------------	-------	-----

入選

ダイダラボッチは今どこに？	内山 文久	125
選評	住吉 玲子	137

評論

市民文芸賞

村木道彦論	木俣 統裕	138
-------	-------	-----

随筆

市民文芸賞

父の最期	平 はられ	153
------	-------	-----

入選

匂いのある場所	亀田 貴子	156
家族の肖像画	鈴木千佳代	158
子と見つめる四季	富永 優花	160
心のつぶやき五七五	池谷 静子	162
花道	中津川久子	164
古里へ行く	藤原百合子	166
堪え切れなかった涙	流 雲	169
選評	たかはたけいこ	172

詩

市民文芸賞

海	宮田 悦自	174
犬	金 太 郎	175
ちようだい	ヒメ巴勢里	176

入選

遠い国から	平野 旭	178
蒸気機関車C58形	石黒 實	178
灰色を乗り越えて	船橋 次郎	180

金原明善について	神谷 司	145
選評	中西美沙子	151

カーテンの向こう……………高柳 龍夫……………181
 九十九里……………内山 文久……………183
 選 評 ……………橋本由紀子……………185

短 歌

市民文芸賞

尾内甲太郎 河合 香織 松島 良一
 峯村友香里 高橋祐三子

入 選

大山 啓 坂口 ちせ 佐藤 一央
 鈴木 和子 和久田郁江 井口 絹子
 石井 泰子 石黒 實 伊藤 友治
 内山 文久 内山 正則 遠藤 ゆき
 大庭 拓郎 岡部 澄子 加藤 久子
 川合 陽子 柴田千賀子 清水 孜郎
 杉浦 庸暢 鈴木 賢三 鈴木 脩慧
 鈴木 壽子 高橋 幸 谷口 章子
 坪井いち子 西村みゆき 袴田 成子
 古谷聰一郎 馬塚 五朗 南出 秀重
 みみハム 宮澤 秀子 美山 愛
 谷野富久恵 吉川 一美 由倉 典之
 渡野澄すみ子 赤堀 進 安藤 圭子
 飯尾 久光 井口 海 池谷 和廣
 伊藤 雅章 伊藤 美代 岩城 悦子

定型俳句

市民文芸賞

遠藤ひろみ 桜花 ふみ 大檐 一郎
 岡部すみれ 岡本 蓉子 尾上 正代
 神谷 司 河口 美緒 くらげのおぼけ
 栗原 恵子 皐 月 澤木 辰子
 澤口 真理 すすきとしやす 鈴木由起子
 早田 キヨ 大文字草 高山 紀恵
 竹内オリエ 田畑 颯太 手塚 みよ
 寺澤 昌子 戸田田鶴子 富永 香
 夏 央 子 中津川久子 中野万里子
 中村 篤宏 中村 照美 仲本 明咲
 根本フミ子 飛 天 女 平井 要子
 平野 旭 藤原 孝志 みずのさきゑ
 森川クララ 山下 静子 山田 文好
 山中 伸夫 和久田俊文 渡辺 寿三
 選 評 ……………清水 正人……………198

入 選

大平 悦子 岩崎 芳子 二橋三千代
 鈴木 浩子 川口八重子 館石 照子
 小栗 道子 松尾 孝子 和久田郁江
 尾内甲太郎

池田 智子	池谷 和廣	石塚 十三一	戸塚 忠道	富岡 百子	永田 恵子
市川 敏	伊藤アツ子	伊藤 正	中津川久子	中野ふさ子	中村日出子
伊藤 好子	梅川 一恵	大熊柚希枝	中村 史子	ノリターン新	中村 旭
大重晴よし	太田沙知子	大村千鶴子	藤原 孝志	松本憲資郎	松本 栖枝
小粥 通恵	小川 恵子	小澤 幸一	ミネラル	みみハム	山川美恵子
おっさん	勝田 洋子	加藤 雅子	山口 英男	山田まつ子	吉野 民子
河合三代子	川合 泰子	川島 泰子	赤堀 進	井口 絹子	池谷 静子
笹瀬 幸代	清水 康成	杉田みさき	市川 園美	伊藤 美代	岩城 悦子
鈴木みちゑ	鈴木由紀子	たろ う	内山 文久	大村 猛	岡部 澄子
外山 加代	中川 正男	中村つぎ子	岡部すみれ	岡本 蓉子	加藤 喬
根本 文子	野田多満子	橋本 英夫	河合 香織	菊地奈々子	切畠 正子
林田 昭子	菱田 淡海	藤井 星子	後藤 とも	酒井 浩之	柴田うた子
藤田 節子	藤本 幸子	古谷 とく	鈴木 章子	鈴木 綾子	鈴木 賢三
松島 義徳	峯村友香里	宮澤 秀子	鈴木 早苗	高山 紀恵	竹田たみ子
宮田 悦自	美山 愛	山口 一郎	竹田 道広	田中 愛子	田畑 颯太
山田 知明	和久田俊文	有賀 千子	坪井いち子	手塚 みよ	野田 俊枝
伊藤 倭夫	伊藤 久子	伊奈 宜子	服部 節子	飛 天 女	古橋美由紀
右崎 容子	内山 昭子	大田 勝子	堀内 太賀	牧 元 久	松本 幹一
小楠恵津子	小楠 勝代	小楠 達司	山下 静子	由倉 典之	渡辺 晴子
小野田みさ子	尾林せい子	糟谷 修子	飯塚日出子	氏原 未織	尾上 正代
片橋 絹代	金子 治夫	齋藤 純子	神谷 司	澤木 辰子	澤口 真理
笹本 栄里	柴田ミドリ	清水 孜郎	塩見 規子	杉浦 庸暢	鈴木 敦子
すず き	鈴木 嘉子	関 和子	鈴木 和子	鈴木 利定	鈴木由起子
竹平 和枝	竹平 安則	戸田田鶴子	高橋祐三子	高山 功	竹内オリエ

自由律俳句
市民文芸賞

選評

戸田 敬三 中嶋 倫夫 中野万里子
藤本 仁子 別所 慶則 間部 凜咲
水野 健一 村松 夢 山中 伸夫
高柳 克弘

230

自由律俳句
市民文芸賞

入選

中津川久子 河合 香織 リコリス
杉田みさき 伊藤 正 河合 香織
豊田 恵子 中津川久子 リコリス
井手賀代子 岩城 悦子 加藤美恵子
神谷 司 菊川 文江 竹内オリエ
ちばつゆこ ヒメ巴勢里 古谷聰一郎
縣 敏子 岩本夢津子 内山 文久
お里さん おっさん 尾内甲太郎
河本まり子 か ん 鈴木 和子
鈴木 脩慧 鈴木由起子 高橋祐三子
戸田田鶴子 ヒ デ 藤井 星子
ミ チ 渡邊美恵子

選評

宮本 卓郎

237

川柳
市民文芸賞

入選

宮崎 和子 浅井 常義 池田 稔
藤原 孝志 石原 陽元 曾 根

伊熊 靖子 牧田 龍司 縣 芳子

浅井 常義 浅岡久二一 池田 稔

石原 陽元 稲垣久美子 梅川 一恵

曾 根 高原 詩音 高柳 龍夫

高山 功 竹川美智子 谷田貝忠弘

赤堀 進 足立 和代 安立 壯汰

伊藤 正 氏原 彩帆 小川 憲雄

島田 紗衣 鈴木 賢三 鈴木 敏子

竹内オリエ 手塚 美誉 寺田喜代子

夏目 正樹 根本 文子 長谷 雄也

藤井 星子 藤原 孝志 宮崎 和子

め い 明戸 柁徳 池谷 和廣

石野 裕大 大重 貴子 大庭美依奈

岡本 蓉子 尾内甲太郎 叶木 裕翔

神谷 司 賀茂 直央 嘉山 和美

くるみん ゴンちゃん 舜 大

しよーた 鈴木 海斗 鈴木 和子

鈴木 健留 高須 逸希 高須 祐太



選評

渡邊順也	りんご	由倉典之	森下侑哉	間測颯太	松井康男	古谷聰一郎	西林杏彩	中津川久子	徳田湖羽	竹田道広	高林快	菅沼秀代	佐藤凜	絆	川口愛奈	大村猛	内山敏子	伊藤アツ子	渥美陽奏	松浦陽太	パン粉	戸田田鶴子
和久田俊文	リコリス	山口英男	森下彩心	村上陽依	馬塚五朗	ぼん酔	長谷川優	中野万里子	戸田敬三	竹平安則	高山紀恵	鈴木彩隼	澤木辰子	恭子	河島いずみ	片橋十輝	大城空也	伊藤公太	荒木優吾	みゆみゆ	藤田盛雄	長津陸矢
渡辺明子	りな	山口英男	森下彩心	松本	本多柚一郎	平野滉大	なな	戸塚忠道	つよみ	竹内奏人	鈴木均	柴田琉生	児玉遼平	河本彩里	片山亮太	大塚千聖	伊藤美代	池谷八重子	山田良藏	松浦剛士	西野榛希	

257

「浜松市民文芸」第72集作品募集要項……………259



作品掲載については、清書原稿のままを原則としました。
 掲載順については、市民文芸賞受賞作品は選考順、入選作
 品は選考順または五十音順としました。
 第71集の作品応募状況

部門	作品点数	部門	作品点数
小説	一二	短歌	四一四
児童文学	七	定型俳句	七七四
評論	三	自由律俳句	二〇七
随筆	二一	川柳	六八四
詩	三〇	計	二、一五二

小説

「市民文芸賞」

雑草パトロール

植草量平

夏が近づき気温が高くなってくると、家の庭の雑草が目立ちはじめた。

専門家に言わせたら、

「雑草という草はない」

と言うところなのだろうが、量平にとっては名前を知らない草ばかりなのだから、すべてが雑草であった。中には一、二センチ程度の小さな花を咲かせているものもあったが、名前を知らない花はやはり雑草の仲間である。では、名前を知っていたら雑草ではないのか、花の大きさがもう少し大きかったら雑草ではないのかというところ、これは心情的な問題が大きくて、邪魔だなあと思つたらそれは雑草なのだった。

「庭に雑草が目立ってきたね」

妻にそう言うと、妻は、

「今までは、ばあばが頑張つて取っていたからね」と言った。

「去年の暮れから体調を崩しちゃったでしょう。だから、今年は草取りをする人がいないのよ」

「ふーん」

「でも、私もパートの合間に少しは草取りしてるのよ。気づかなかった？」

「草が伸びていることにも、取られていることにもまったく気づかなかったなあ」

量平は、今年の四月に定年退職をした。再雇用で同じ会社に引き続き勤めることになったが、給料は半分になった。それでも、週五日勤務が週四日勤務に変わり、残業もほとんどなくなったため、時間と気持ちに少しゆとりができた。ストレスはかなり減った。だが

ら庭の草を見る余裕ができたのだろう。今までは、朝七時前に仕事に出かけ、夜遅くなつてから帰宅するという毎日だったから、庭の草のことなど眼中になかった。伸びていても、取られていても、それがまったくなくなつてしまつていたとしても知つたことではなかつた。

「今年、俺も少し草取り頑張つてみようかな」と量平が言うと、妻は、

「少しじゃなくて、いっぱい頑張つてよ」

と言つた。当然「ありがとう、助かるわ」と言われると思つたのだが、退職後の世の中はそんなに甘いものではなかつたのであつた。

量平は、その日の午後、さつそくホームセンターへ出かけ、草取りグッズを購入することにした。

店員に確認してから草取りグッズのコーナーに行くと、まず目に入ったのが、いろいろな種類の除草剤が大量に並べられた棚だった。量平は、それだけ多くの人草取りに頭を悩ませているということなのだと思つた。

大量にある除草剤の中から、一番手前の一つを手にとって説明書きを読んでみた。その除草剤は駐車場や道路脇などで使うようにと説明書きに書かれていた。

なるほど。

次に、隣にあつた、ラベルが色違いのもう一つの除草剤を手にとって説明書きを読んでみた。すると、それには畑などでも使つてよいと書かれていた。

さて、我が家の庭の場合はどちらを使えばよいのだろうか。畑じゃないんだから最初の方だろうか。しかし、もう少しくわしく読んでみると、庭の植木にかからないように注意してくださいと書いてある。庭の隅の方にいくつかのプランターがあり、そこに母が花を植えていたことを思い出した。亡くなった父が植えた数本の庭木もある。それならば二つ目の方かなと思つた。

さらに数種類あつたので続けて説明書きを読んでみた。しかし、どれにも同じようなことが書かれていたので、どれを選んだらいいのかさっぱりわからなくなつてしまつた。

これだけたくさん種類の除草剤を皆は説明をきちんと理解して、用途ごとに使い分けているのだろうか。それとも適当に選んで使っているのだろうか。いや、量平が知らないだけで、除草剤業界の有名なメーカーというのがあつて、そのメーカーの除草剤を使っているのだろうか。

そういえば除草剤のテレビコマーシャルなんてあつ

たっけ、と量平は思った。そうしたコマーシャルがあれば、とりあえず有名メーカーということで選びやすくなるのに。もしかして、量平がテレビを見ない早朝や深夜の時間帯の番組でコマーシャルをやっているのかもしれない。そうだ、通販番組かもしれない。朝や深夜などにテレビショッピングの番組がたくさんあるではないか、見たことないけど。「じゃんじゃんカラスゾー」とか、「ヌケルンデス」なんていう爆売れ商品があつて、皆はそちらの方を使っているのかもしれない。あまり大々的にコマーシャルをすると自然保護団体からクレームがくるから、ひっそりと、知人ぞ知るみたいな感じでやっていたりして。それならそれで、ディーブでダークな、マニアックな世界を見てみたい気もした。

そんなくだらないことを考えて、一人でやにやしている、通路で店員が不審者でも見るような目つきで量平のことは見ていることに気づき、あわててその場を離れた。

通路を歩きながら、それにしても「ヌケルンデス」はないな、と寂しくなりつつある自分の髪の毛を触りながら量平は思った。「ヌケルンデス」の商品名に抵抗を覚える人がいないとは限らない。それならば、「カレルンデス」か。いやいや、そんなネーミングではだ

めだ。もつとインパクトがないと。「根こそぎ君」なんてどうだろうか。力強さもあるし、名前もかわいらしいではないか。いや、ジェンダーレスの時代に「根こそぎ君」は合わないか。ならば「根こそぎさん」か。「根こそぎちゃん」か。

隣のコーナーには電動草刈り機が何台も並べられていた。腰のところでハンドルを持って、一気に草を刈っていくワイルドな道具だ。これを使えたらカッコいいなと量平は一瞬思った。飛散防止用のサングラスをかけ、バリバリと音を立てて草を刈っていったらずいぶん気持ちいいことだろう。日ごろのストレスも全部ふつとびそうである。しかし、残念ながら狭い我が家の庭には必要なさそうだった。

草取りというと、イメージするのは、潮干狩りのようにしゃがんで草を取る姿である。立ったまま雑草取りができる道具もいくつかあったが、さんざん悩んだ末、結局一番オーソドックスな、値段があまり高くない草刈り鎌と軍手、それから植木の枝が伸びていたことを思い出し、枝切りばさみを購入して帰宅した。

帰宅してから妻に見せると、妻は、

「それ家にあるわよ」と冷たく言い放った。

「えっ?」

「だから、それは家にあるの。私がいつも使っているのと同じ」

「そうなのか」

「まあ、枝切りばさみは使えるわね。ちよつと枝とか蔓が伸びているのが気になっていたから。それはオーケー」

せつかく悩んで買ってきたのと思うと、量平はがつかりしてしまった。そんながつかりした様子に気がついたのか、妻は、

「二つあったって別に困らないから気にしないで。やってくるのが大事なんだから」と励ますように言った。

翌週の土曜日から、量平はさつそく草取りを始めることにした。

休日の朝にいつもしているウォーキングを少し早めに切り上げて帰宅すると、買っておいた草刈り鎌と軍手を持ち出し、

「じゃ、ちよつと草取りしてくるから」

と妻に声をかけた。すると、

「ちよつと待って。その格好でやるつもり？」

と妻は驚いたように言った。

「そうだよ。汗をかいてるし、そのままやって、その

後シャワーあびようかと思って」

「それはだめよ。あつという間に虫に刺されるわよ」

量平は、半袖にハーフパンツといった格好で草取りをしようとしていたのだった。

「草取りするのに半袖、ハーフパンツはないわよ。帽子もかぶってないし」

と妻はあきれ顔で言った。

「そうか？ 虫よけスプレーをたっぷりかけてもだめかな」

「甘い甘い。長袖を着てたって、その上から刺してくるんだから。洋服の上からいっばいスプレーをかけなきゃ」

「そうだったか……」

服の上からスプレーをかけるだけでなく、首筋や耳元にもスプレーをたっぷり塗り込んでやつと草取りが始まった。

まずは目立つところからと、玄関周りの草を取り始めた。しかし、いきなり草取りの困難さに量平は直面したのだった。草がとにかく思うようにぬけないのである。がりがりと地面をけずれば簡単に草がぬけるものだと思っていたが、実際の草はそんな弱いやつらではなかった。

確かに小さくて弱そうな細い草はそうやれば簡単に

ぬけた。しかし、少し太い草、大きい草になるとそうはいかなかった。うっかり地面の表面の方だけをけずってしまおうと草が切れてしまい、根っこが土の中に残ってしまった。やれやれと思いつつ、草刈り鎌の尖った先で根っこを掘ると、思ったよりも大きな穴があいてしまった。

もつとやつかいなのは、地面にへばりつくように広がって生えている草だった。コンクリートの隙間から生えている草の中には、どうやつてもぬけないものもあった。

そうやってしばらく作業をしていると汗びっしょりになり、汗が地面にぼたぼたと落ちてきた。

もう三十分も働いたのだから休憩しようと思計を見ると、実際には十五分も働いていなかった。すでにへとへとなのにも思うと、がくつと力が抜けてしまう思いがした。

さらに、どれくらいきれいになったのだろうと思いい、草を取ったところを振り返って見てみると、想像していたよりもきれいになっていないのだった。

両手を地面について、やつとのことではよろよろと立ち上がり、固まってしまった腰を伸ばし、庭を見回してみた。狭いはずの庭が、太平洋のように果てしなく広く見えた。

もう一度腰をぐーんと思いきり伸ばしてから、ゆっくり歩いて台所に行き、水を飲んだ。

「もう終わったの？」

洗濯物を干し終わって、台所に戻ってきた妻が言った。なんだか、その言葉に棘があるように感じたので、量平は少しむっとして、

「水分補給に来ただけだよ」

とこたえた。

「ふーん」

「悪い？」

「いや、別に」

「もう草取りに飽きたって思ってるんだろ？」

「そんなこと言っていないでしょう」

「ふん」

あまりゆっくり休憩していると、さらに妻に嫌味を言われそうな気がしたので、水をもう一杯飲むと外に戻って草取りの続きをすることにした。

草取りを再開する前に改めて庭を見回すと、なんだかいつまでやつても終わらないような気がしてきた。

初日は、結局その後三十分ほど草取りをして、なかなかきれいにならないもんだと思つて終了ということにした。慣れないことをしたせいか、体のあちらこちらが痛くなりそうな気がした。

翌日曜日は、玄関前の草取りは草がぬげにくいのであきらめて、父が植えた庭木の周りの草を取ることにした。

まず蜘蛛の巣を払いのけ、伸びた草を中心に草を取り始めた。玄関前とは違って、木の下は多少柔らかかったのではるかに草取りがしやすかった。それでも簡単にスポンスポンとぬけるわけではないので、これは雨上がりにやったらよかつたなと思った。土が水をふくんで柔らかくなつたらもつと草をぬきやすくだらう。

とりあえず最初は目立つて伸びた草だけを取るつもりで始めたのだが、いざ草を取り始めると、今度は残つた短い草がかえって目立つようになってしまった。もう少し取るか、と思つてさらに取ると、もうこれは終わらないじゃないかというエンドレスのループに入つてしまった。取つても取つても次々に短い草が目の前に現れるのである。木の表側がきれいになると、今度は庭からは見えない木の裏側の草が気になり、草取りが終わらなくなつてしまった。

始める前は、二、三日草取りを頑張ればだいたい終わるだろうと考えていたのだが、それはとんでもない思い違いであつた。汗びっしょりになって自分が取つた草を見ると、あれっ、これしか取つてないのかとい

うような量なのだった。

それでも少しづつこつこつをつかみ、数回の草取りで確実に雑草は減つていった。完璧な草取りを目指すことはあきらめて、草取りのエンドレスループにはまらないうように、七十点の草取りでオーケーということにして先へ先へと草取りを進めていった。(妻は最低でも八十点にしてよねと言つたが)

取つた雑草たちを見るたびに、量平は「勝つた」と思つた。そして、やつらを征服したような気持ちになつた。昔の王様とか武将たちも同じような気持ちで自分たちの領地を広げていったのだらう。

雨の日や仕事がある日はできないので、晴れた休日を使って草取りをするのだが、そうすると草取りがなかなか思うように進まない。そのうち、仕事がある日も少しづつ草取りをするようになった。根がはつていてなかなかぬけない草があると、どうしても根っこからぬきたくてしかたなくなり、その草がうまくぬけると、「やつたぜ、まいったか」などと言いながら作業をした。

庭がきれいになってくると、今度は家の周りの草も気になってきたので、それも取ることにした。家の周りの草を全部取つていくと思つたよりも時間がかつた。大きな草をぬくと、そこからぶわつとアリたちが

出てくる場合があり、その時は大慌てでアリを駆除する薬をまいた。そんなこともしていたので余計に時間がかかったのである。しかし、雑草だけでなく、アリのたちの駆除に成功すると、それもまた快感になったのだった。

庭は、一か月ほどでかなりきれいになった。完璧ではないにしても、これなら合格点を与えられるといつてよかった。妻は庭を見て、

「きれいになったわ、ありがとう」と言った。

「もつときれいになるところはないかな」

「もうないわよ。そんなにあつたら、かえつて困っちゃう」

そこで草取りの仕事は終わつたはずであつた。しかし、量平は雑草の生命力を甘くみていた。量平が取つたはずの雑草たちは、少し雨が降るとすぐに復活してきたのである。さらに夏本番が近づくとつれ、雑草のやつらは仲間を増やして復讐にきた。

これじゃあエンドレスゲームじゃないか、と量平は思った。

さらに量平を悩ませたことがあつた。

量平は、休日の朝晩、ウォーキングをすることを習慣としていた。それぞれ一時間弱歩いて汗をかくので

ある。歩くコースはその日の気分によって変え、いろいろなコースを歩いて季節の変化を楽しんでいたのだが、今度は、ちよつとした短い草が生えていると、それが気になって気になってしかたない、というようになつてしまつたのである。少しでも庭の雑草が伸びていると、「どうして草取りをしないのか」と思った。

また、ウォーキングコースの中で、歩道の方にまで植木の枝や蔓が張り出しているところがあつたのだが、その枝や蔓を切りたくて切りたくてしかたなくなつた。それまでは、これっぽっちも気になつていなかったのにである。

夕食後、そのことを妻に相談すると、妻は洗い上げをしながらめんどくさそうに、

「それは、よその家だから勝手に切るのはまずいんじゃないかしら」

と言つた。

「でも、道の方まで出ているんだぞ。歩くのに、よけて歩かないといけなくらい出ているところもあるんだ」

「それでも勝手に切るのはねえ。その家の人に断つてから切ればいいじゃない」

「いや、わざわざ断つてまでは……」

「じゃあ、我慢するしかないわね」

でも、やっぱり気になってしかたないのだった。

切りたいのを我慢してウォーキングを続けていた量平だったのだが、ある日のこと、朝のウォーキングの際、ついに量平は、はさみを持ってウォーキングに出かけた。

その前日、庭にある植木に絡まっていた蔓が伸びてきたので切っていた時、これは大きい枝切りばさみではなく、小さな剪定ばさみが切りやすいよなと思つたことがきっかけだった。いや、普通のはさみでも蔓くらしい切れるのではないだろうか、と思つたのである。試しにはさみで切ってみると、細い蔓は簡単に切れた。

プラスチックも切れるというような万能ばさみならば、細い枝くらい切れるかもしれない。ならば、もしも切れそうな枝や蔓があったら、ほんのちよっぴり切ってみようかなと思ひ、普段はスマホを入れているウエストポーチにはさみを入れて量平は出かけたのだつた。

五分ほど歩くと、植木の枝が道の方にまで張り出している家のところに来てきた。周囲が植木で囲まれた大きい家である。大きい家だからこそ、手入れが行き届かないのだろう。

見ると、太い枝だと持ってきたはさみでは切れそう

にないが、細い枝なら簡単に切れそうであった。チョキンと切つた時のことを考えると、なんだか頭がぼんやりしてきた。

周囲を見回しても人はいない。今がチャンスである。よしつ、一本切つてやれ、と思つた時、ごみ袋を持つて来ていないことに気がついた。

切つたらその枝はどうするのか。持つたまま歩くのか。それは不自然だ。でもよく考えたら、ごみ袋を持つて歩くのも不自然である。切つた枝をその場に置いていつたら切つたことがばれてしまう。

うーんと考えて、量平は切るのを我慢することにした。

そのままさらに歩いて行くと、今度は植木だけでなく、植木からまった蔓が道の方まで伸びている家のところにやってきた。この家が今のコースの中では、一番ひどいといつてよかつた。伸びた蔓を避けるために一メートルもよけて歩く必要があるところだった。

この蔓なら切つてもいいだろう、と量平は思つた。ここを歩く人はみんな迷惑をしているにちがいない。今までもまったく切つている様子はないし、蔓は伸び放題である。おそらく、伸び放題の蔓を早く切つてほしい、早く切つてくれ、早く切れと思つている人がたくさんいることだろう。

周りに誰もいないことを確かめてから、試しに蔓の先の方を一本だけはさみで切ってみた。植木の枝とは違うので、蔓は簡単に切れた。

切れた蔓は、そのまま地面に捨てた。あたかも自然に切れたかのようにした。

もう一本切ってみた。今度も簡単に切れた。

ぱっと見て、全体的に変化があるようには見えな
い。この調子ならもう少し切れそうである。

少し上の方から伸びている蔓は、蔓がからまつてい
るように見えた。

あの蔓を切ってみようかと思っていると、犬を散歩
させている人が歩いてくるのが見えた。髪の毛の長い若い
女の人で、連れているのは柴犬だ。手には緑色の小さ
なバッグを持っている。おそらく犬のお散歩グッズが
入っているのだろう。

あわててはさみをウエストポーチにしまい、量平は
知らん顔をして歩き出した。はさみを持ってるところ
を見られたかもしれないと思うとドキドキしたが、
距離があつたし、知らない女の人だから大丈夫だろう
と思うことにした。それに、別に悪いことをしていた
わけではない。蔓をたつた二本切っただけだ。しかし、
今度はもう少し早い時間にウォーキングに行くことに
しようと思つたのだつた。

次のウォーキングの時も、はさみをウエストポーチ
に入れて量平は出かけた。妻に見つかると何か言われ
るかもしれないと思つたので、はさみは前回の散歩の
時からウエストポーチにしまったままにしてあつた。
また、前回のことがあつたので、ウォーキングの時間
を十五分ほど早めにし、さらにコースも変えた。

今度のコースは家がたくさんある住宅街のコースだ
つた。一軒一軒の家は隣接していて比較的小さいし、
駐車場や庭も狭いので、せっかくはさみを持っていて
もこのコースでは使うことはないように思われた。

しかし一軒だけ、庭の草が伸び放題の家があつた。
庭に車が一台停まつていたが、車の下にもたくさん草
が生えていた。また、家の周囲の低い塀の隙間からは
雑草が道の方に伸びていた。以前歩いた時にはこんな
に草がたくさん生えているとは思わなかつたから、こ
こ数日の雨や暑さで急激に草が伸びたということなの
だろう。

その様子を見て、雑草の生命力の強さに驚くと同時
に、なぜか量平はむかつとしてしまった。

周りの家はきれいにしているのに、どうしてあなた
の家はきれいにしないのですか、伸びた草を取ってく
ださい、歩行者にも迷惑です、と言つてやりたいよう

な気がした。

瞬間的な怒りの感情にまかせ、道の方に二十センチほどとび出して伸びている草をはさみでチョキンと切った。これで歩く人の邪魔にならないだろう。切った草は拾って庭の中に放り込んだ。

改めて草が伸び放題の庭を見ると、ちよつとやそつとでは草が取りきれないと思わざるをえなかった。庭だけでなく、玄関の周りも草で埋まっているような状態だった。ならばいっそのこと電動草刈り機で俺が刈ってやろうか、それとも除草剤をばーつと撒いてやろうか、などと思った。ここまで雑草たちがのさばっているのなら、何をしたらって大丈夫だろう。……しかし、勝手に庭に入っていくわけにもいかない。次回まではどうするか考えておこうと決め、今回は許してやることにした。

そんなふうにして、コースを変えつつ、量平は雑草パトロールをしながらウォーキングをした。

雑草パトロールをしていると、雑草が伸び放題になっているところがけっこう多いことがわかった。どの家も若い世代に変わってしまったと、手入れを怠るようになるのだろう。若い世代は子育てや仕事に忙しいし、よほど庭いじりが好きな人以外は草取りや植木の手入れなどはしないに違いない。量平も同じだった。

耕作放棄地だって似たようなものだろう。

朝は人通りが少ないので、枝や蔓、雑草を切るのなら朝だと思っただが、犬の散歩をしている人が意外に多いため、なかなか思うように切ることはできなかった。

パトロール初日に会った、髪の毛長い若い女の人はあれから何度も会った。毎朝犬の散歩をしているのだろう。手にはいつも緑色の小さなバッグを持っている。もしかすると、朝のウォーキングの際、それまでも何度も会っていたのかもしれないが、まったく気にしていなかったたので記憶に残っていなかった。一度気になりだすとすぐに気がつくもので、遠くにもすぐ「あつ、あの人だ」とわかるようになった。一緒に歩く柴犬は、暑いのでいつも舌べろを出してはあはあ言っていた。何回も顔を合わせるうち、お互いにぺこりと頭を下げるようになった。

八月のお盆休みの期間中は暑くて外に出るのも億劫だったので、暇にまかせて雑草のことをいろいろ調べてみることにした。ネットで検索してみると、雑草に関連してたくさんページのページがあることがわかった。

「雑草の種類」と検索してみると、いろいろな雑草が写真付きで紹介されていた。エノコログサ、メヒシ

バ、スギナ、ハルジオン、コニシキソウ……名前を見てもピンとこないのだが、写真を見ると「あっ、あいつだ」とすぐにわかった。知り合いの写真が載っているようで、庭の雑草とネットの写真を見比べて、思わずニマリしてしまうのだった。

除草の仕方のページもたくさんあった。中でも除草をしている動画がおもしろくて、量平はエンドレスで何度も見た。そして、見ているうちに家の雑草の草取りはすべて完璧に終わったような気がして気持ちよくなった。

それにしても、と量平は思うのだった。

雑草に悩まされている人は、この世界にいったいくれくらいいるのだろうか。雑草を取り除こうとしているエネルギーを全部合わせたら、きつと膨大なものになるだろう。除草にかける時間だってそうだ。全部合わせたら、何百時間、何千時間、何万時間になるにちがいない。もちろん、すべての雑草が役に立たないということはないだろうけど、その雑草を取り除きたいと強く願っている人が大勢いることは厳然たる事実である。ならば、その強い思いやエネルギー、時間を別の何かに生かすことはできないのだろうか。あふれるエネルギー、大量の時間を雑草に向けて使うなんてもったいないことである。

そうだ、これは仕事にできるのではないだろうか、と量平は思った。

雑草処理にかける膨大なエネルギーや時間（エネルギーや時間の浪費）を請け負うのである。草取り会社なんてのを立ち上げて、安い値段で草取りや植木の手入れを請け負う。それなら注文が殺到するに違いない。

これはいいアイデアだ。

はじめは敷地内の草取りから請け負うことにしよう。たぶん毎日のように注文が入るはずだ。軌道に乗ってきたら、今度は植木の手入れをすることにしよう。従業員を少しづつ増やして行って、仕事の範囲もちよつとずつ広げればいい。あせることはない。そのうち耕作放棄地の草刈りだってできるようになるだろう。

だんだん量平は興奮してきた。

これはいける。

その夜、量平はさっそく妻に相談してみた。

「草取り会社つてのを立ち上げようと思うんだけど、どう思う？」

食後のコーヒーを妻の分と自分の分、二杯入れてから量平が言うのと、妻は、

「はあっ？」

と言った。

「草取り会社なんて名前はかつこ悪いから、たとえばグリーンキーパーなんて名前にしてさ、庭の草取りとか、植木の手入れとかを請け負うんだよ。きつと困っている人がたくさんいるはずだから、これから注文がいつぱいくると思わないか？」

「何言ってるの？」

妻は、量平の興奮をよそに、テーブルに置かれたコーヒーを一口飲んでから淡々とこたえた。

「だって草取りってさあ、労力だけじゃなくて時間もお金もかかるじゃん。それを安い値段でやりますって言ったら注文がくると思うんだけど」

「そうかもね」

「電動の草刈り機買って来て、近所から始めてみようかな」

「……」

「いくらぐらいで請け負ったらいいかなあ？ 一日二千元とか三千元とかかなあ」

「そうね」

「明日さっそく電動の草刈り機買ってこようかな」

妻は、量平が電動草刈り機を買おうと聞いて、うんざりしたような口調で言った。

「で、一日二千元として、二日かかったら四千元、五日かかったら一万円払ってもらおうわけ？」

「えっ？」

「だって、あなたは一日中草取りできないでしょう？ そうなると何日かかるじゃない。一日中草取りできるの？」

「そうか。時間で行くらした方がいいのか」

「でも、庭の草取りしてもらうだけで、一万円払うかな？ 人によるだろうけど」

そう言って、妻はまたコーヒーを一口飲んだ。

「……」

「全部の草取りが終わって二千元とか三千元とかなら安いつて思うけど、それも庭の広さによるわよね。すごく広い家なら当然何日もかかるだろうし、それで二千元なんて言われたら安いから頼むんじゃない？」

でも、庭全体をきれいにしてほしいから、草取りだけじゃあ頼まないかな」

「どうして？」

「だって、また別の人に頼まないといけないじゃない。そんなめんどくさいことしないわよ。かえって高くつくし。……植木の剪定とかはしないの？」

「はじめは草取りだけから始めた方がいいかなと思っ
ているんだけど」

「草取りだけって言われたら、あまり需要はないかもね。安さを売りにしたら少しは注文があるかもしれないな」

いけど。……たとえば、高い木の剪定をちよつとしてよ、なんてお年寄りに頼まれたらそれはできませんで断るの?」

「……」

「あれはできません、これはできませんなんて言つたら仕事にならないと思うけど」

「ちよつと木を切るくらいならできると思うけど……」

「前にシルバー人材センターにお願いして庭の植木の剪定してもらつたことがあるけど、それなりに高かつたわよ。いろいろな道具も持つてきていたし。準備にだつてお金かかるからそれなりの料金をとるんじゃないかしら。危険な作業だつたら保険に入る必要もあるだろうし」

妻の話を聞きながら、量平は冷めたコーヒーをぐりと飲んだ。

いちいち言うことがもつともなので、量平は何も言えなくなつてしまつた。確かに単にちよきちよきと切れれば終わりというわけではなく、切つた草や木の片付けだつて必要である。それなら片付け用の袋やトラックなども必要になるかもしれない。そんなことさえ忘れていた。以前に公園をきれいにしていた業者は、クレーンのようなものを持って来ていたつ。あれで切

つた木を吊り上げたのだろうか。

準備や設備投資に半端ないお金がかかりそうな気がしてきた。また、誰かを雇うのなら給料を払う必要があるし、雇うのも素人を雇うわけにはいかない。保険にだつて入る必要がある。

これは実現までに時間がかかるし、先行投資がはんばじゃないぞ……。

こうして量平の雑草パトロールの熱はあつさり、急激に冷めていったのだつた。

九月に入つても日中はまだ夏のように暑かつたが、大きな台風が一つ通り過ぎた後、朝晩はかなり涼しくなつた。季節は確実に秋に向かつて一歩進んだのだ。

雑草たちの勢いも、以前に比べるとかなり落ちたように感じられた。まだしっかりと生えているとはいふものの、根元に黄色い部分が増えていたし、バツタたちはその間を楽しそうにはねていた。

しかし、量平にとってはそんなことはもうどうでもよかつた。大量に目につくようになったネコジャラシを見るたびに、

「これから季節が秋から冬に変われば、やがてすべて枯れてしまうのだよ、君たちは」

今朝の新聞には、《何でも屋》の広告が入っていた。それには、「ごみ屋敷の片付け」「引越し手伝い」「遺品整理」「解体工事」などと並んで、「樹木の伐採、草刈り請け負います」と書かれていた。もう仕事にしている人がいたのである。先見の明だと思っていた自分が恥ずかしかった。

そんなある日、朝のウォーキングをしていると、以前に会った髪の長い若い女の人が向こうから歩いてくるのが見えた。今朝も柴犬を連れてくる。手に緑色の小さなバッグを持っているのも同じだった。犬は、涼しくなってきたからか、はあはあと舌べろを出していない。

「おはようございます」

量平が言うと、彼女も、

「おはようございます」

と言った。いつからか彼女とは挨拶を交わすようになっていた。

「朝晩はだいぶ涼しくなりましたね」

量平が言うと、彼女はにっこり笑って、

「そうですね」

と言った。

そのまま頭を下げて行くこうとした時だった。彼女が、「ここ、蔓が伸びていて歩きにくかったんですけど、

歩きやすくなりましたよね」と言った。

そこは、以前、散歩コースの中では一番ひどいと思っていたところだった。蔓の伸びがひどくて、それを避けるために一メートルもよけて歩く必要があった。ここで量平はつい二本だけ蔓を切ったことがあった。

「そうですね」

と量平はこたえた。おそらく、あまりのひどさに、この家の家主があれから植木の手入れをしたのだろう。確かに以前よりも歩きやすくなっていた。

「ありがとうございます」

「えっ？」

量平はどきっとした。

ちよっと待て、ありがとうございますってなんだ？

ひよっとして、彼女はここの手入れをしたのは量平だと思っているのではないだろうか。あの時、はさみを持って見ているところを見ていたのだろうか。

いや、違います。私はここの家の者ではないし、この蔓の手入れの状況とはなんの関係もありません。私は何も切っていないんです。いや、あの時二本だけちよっぴり切りましたけど、本当にそれだけなんです。あれ以降、何もしていません。信じてください。……と言おうとしたが咄嗟には言葉が出てこなかった。それ

でも勘違いされたままでは困るし、誤解があったとしたら、なんとかそれを解きたいと思っただので、懸命に量平は言葉を絞り出した。

「いえっ、あのっ、違うんです……」

しかし、彼女は、量平のそんな言葉などいっさい無視して、緑色の小さなバッグからはさみを取り出すと、チョキンと一本植木の枝を切ったのであった。

(浜名区)

貼り紙・妻は神様：

松田健

私と妻の間には一人息子がいて、その息子夫婦の下に二人の孫がいた。世間では、孫は目に入れても痛くないほど可愛いというが、私もご多聞に漏れず、普段からこの二人の孫が本当に可愛くて仕方がなかった。

彼ら家族は、郊外のわが家から一〇キロ程離れた市中心部に近い隣の区で暮らしていたが、姉のゆいは今年の春から小学校の三年生に。弟のハルはこの春に入学して小一になっていた。

そんな愛おしい孫たちが、漸く少しは涼しくなりかけてきた九月下旬の週末、久々にわが家を訪ねて来ることになった。

共稼ぎの息子夫婦に、二人とも休めない事態が発生し、息子が自分の出勤前に、わが家まで孫たちを届け

に来て、昼中だけ、こちらで預かることになったのだ。来た。

お嫁さんの実家は、まだ建て直したばかりの立派なお屋敷だったが、私たち夫婦の家はといえば、既に築四〇年以上も経過していながら、この間、全くりリフォームも施していないので、真つ白に輝いていた外壁も薄汚い灰色に変色し、家屋内の廊下や板の間は至る所、今にも床が抜け落ちそうだった。

こんなボロ屋でも嫌がらず、遊びに来てくれる孫たちの心意気も、私には有難かった。

強いて言えば、わが家には、ゲーム機以外にも、本格的なグラブドピアノやギター等の楽器が揃っていたので、それが少しは孫たちの興味を惹いてくれていた

のかも知れない。

また家屋はボロでも、郊外の立地なので裏庭だけは広く、そこ一面に芝生を敷き詰めてあった。そこで思う存分、飛び跳ねて遊ぶことが出来たので、それも救いの一つには、なってくれていたのだろう。

私はこの日も、深夜早朝からアルバイトの新聞配達に出掛けていた。それを終えての帰宅後は、何時もの様に二階の自室に籠って少しうたた寝をしていたので、彼らが訪れて来た時、妻と一緒に玄関先で出迎えてやることは叶わなかった。

それでもそのうちに、階下から聞こえてくる孫たちの賑やかな声を覚まされた私は、慌ててすぐに飛び起き、リビングへと駆け降りて行ったのだった。

リビングの扉を開け、私が孫たちの前に顔を出した途端、

「じいじ、お、はよおー。でさあ、これって、なあ〜に?」

「じいじ、お邪魔してま〜す。これは何?」

と、彼らからサイドボードの脇に貼ってあった画用紙を指差しながら、問いかけてきて、そこへ目をやった私は、思わず、

——うわあー あっちゃあ……

と、心の内で叫び声をあげていた。

それは先日來、私が自分自身を戒めるための注意事項を、派手な赤色インクのマジックを使って画用紙にしたため、貼りだしてあったものだった。その下手くそな筆跡で、すぐに私が書いた物だということも既にばれていて、孫たちは興味津々その貼り紙を、ずっと眺めていたらしい。そこに私は、

※あんたは わたしが

ひろってやらなきゃ

いまごろ

のたれ死んでただにい

※カミさまに 口ごたえしない

と、記していた。

しかも、子どもでも読んでしまう、ひらがなやカタカナで……。

しかし私は、まさか孫たちから、その貼り紙に好奇心を持たれることになるとは、つゆ想像すらしていなかった。

それらの文言は、普段から私が妻から投げかけられても当然の言葉として、肝に銘じておかなくてはならない内容のもので、ここでのカミさまとは勿論、妻の

ことであつた。

実際には、妻がそんな乱暴な言葉遣いをしてくる訳ではなかつたが、私は自分を厳しく律するために、あえてきつい口調にしてあつたのだ。

孫たちは、その書いてある内容の意味を、どの程度のところまで理解できているのか定かではなかつたが、兎にも角にも面白がつて、何度もそれを声に出しては読み返し、笑い転がっているのである。

「じいじ、何でこんなこと書いたの？」

「じいじ、これつて、どういう意味か教えて」

と問い詰められる度に、私は、

「二人とも、もうちよつと大人になつたら、解るから……」

と言つて誤魔化していたが、バツが悪くなる一方で、冷や汗をかいていた。



私が、その貼り紙をしたのは、ひよんな切っ掛けからだった。

私は若い頃から人一倍の酒好きで、七十五歳にもなつた今でも晩酌が欠かせないでいたが、時折、酔い過ぎては調子に乗り、妻から響ひびくをかうことがしばしば

だった。

その貼り紙をした日も、私は何時もより更に杯が進み、心地よく酔いしれていたのだった。その頃、数日に渡り、ほっこりとさせられる嬉しい出来事が立て続けに起こり、気を良くしていたからである。

その日の数日前、自宅の車庫で突然、壊れてしまつたと思つていた車が、更にこの日はリビングのエアコンが、共に診に来てくれた良心的な業者によつて、思いがけず、あつという間に直つてしまい、こうも立て続けに善良な業者と巡り会えるなんて奇跡に近い……と、私は嬉しくなつていたのでした。

車は、修理工場へ運ぶべく来てくれたレッカー業者の初老の男が、

「運ぶ前に原因を探ってみましょう」

と言つて、早速、ボンネットを開けエンジンルームを調べてくれていたうちに、あつという間に直つてしまった。

そして男は、ただガソリントタンクに水がたまつていて、点火プラグが上手く作動しなかつただけのことだったのだと説明してくれた。

これで結局、修理会社への持ち込みも、それに伴うレンタカーの借り入れも、全てキャンセルにすること

が出来た。

現役を退き身軽になったこれからは、少しでも困っている人の役に立ちたくて、この仕事を始めたと話す男だったが、もし端から「俺は運び屋で、ただ運ぶのが仕事だから」と、そのまま運び去られていたら、経費こそ保険で賄えたとしても、どれだけの無駄な時間を奪われていたことだろう。

そして、こんな思いがけない幸運は、これだけにとどまらなかった。何と次はまさに、この日の昼間のことだった。

この十年前から使用していたリビングのエアコンが、これも突然、壊れてしまい、先日、区内の大型電器量販店に出向き、新規購入の契約を交わしていたのだが、その際、わが家はこれまでずっと旧式の設置方法だったので、今では安全のために、すぐ本体の近くに専用のコンセントが必要だという説明を受けていた。

そしてこの日、まずはその新たなコンセントを設置するために、私たち老夫婦の前に現れたのが見るからに感じの良い青年だった。

彼はコンセントの設置と共に、ついでに念のため、壊れた筈のエアコンも診ておきますと、ケースカバー

を外して見るなり、

「導線が錆ついているだけかも……」

と言いながら、これも即座に直してくれたのである。もし、どうせこっちは訳の解らない年寄りだからと、壊れたままのフリをされていたら……。

これで結局、当初は少なくとも十五、六万円の出費を覚悟していたのに、コンセントの設置料と導線の張替修理の数千円で済んでしまったのだった。

そんな訳で、すっかり気を良くしていた私は、己の機械音痴を棚に上げて、しこたま酒を飲んで酔っぱらい、上機嫌になっていた。それでも黙って飲んでいれば良かったものを、また酔った勢いで、

「俺ってさあ、普段から優しい良い男だもんなあ。だで、善人には善人が寄って来る訳だよ。これが因果応報ってやつだ」

と、私は自らぬけぬけとほざき、悦に入っていた。すると脇にいた素面しよめんの妻から、

「うんっ？ ただの飲んだくれのボンクラ亭主が優しくて良い男だっ？ ちゃんちゃらおかしいわ」

と、即座に否定されてしまった。

「家のこととか、全部、わたし任せにしといて、何が善人よ」

「えっ どここの家もそうだら。そういうのは女がやってくれるだら」

「よく言うよ。そんな言い方をするなら、あんたは車のガソリンまで、女のわたしに入れさせてるだにいい」

——あちゃあ。これは不味い……

「だけど、こっちだて、ゴミ出しとか家周りの草むしりとか、やってるじゃん」

と言いつ返し、これでチャラになるかと思いきや、

「あんたは、ただそれだけじゃん。他には何にも出来ん。この前だつて何時だつて、業者に連絡を取つて、色々手配してやったのも、せうんぶ、このわたしだよねえ」

「……………」

「そもそも、あんたはただ飲むだけで、男のくせに機械のことがさっぱり解らん。だもんで、普段から、なぐんの役にも立たん」

「トホホ……………」

凶星の弱点を突かれてしまった私は、ついさつきまで浮かれていたのも何処へやら……。

ぐうの根も出なくなり、手に抱えていた酒グラスも、そつと脇に置き一転、黙り込んでしまった。

——それにしても、いったい今日のカミさんは、ど

うしてしまったのだろう。何時もより機嫌が悪過ぎるではないか……。

私は一気に酔いも醒め、ここでふと気付かされたのだった。

この数日、日常生活での必需品が相次いで動かなくなり、落ち着かない思いでいたところに、肝心の夫たる私は、具体的に何一つ行動を起こさず、何時も通り業者への連絡等も全て妻任せにしていた。

しかも解決したら解決したで、相変わらず能天気な、酒を飲んで調子の良いことをほざいている私の態度に、妻も流石にカチンときたのだろう。

それに今更、己の機械音痴はやむを得ないことだとしても、こうして他人からの優しさ暖かさに感動を覚えるぐらいの感性があると言うのなら、何故、日頃からの妻の好意には、ずっと鈍感のままだったのか……と。

これこそが『灯台下暗し』というやつだった。生来、末っ子の甘えん坊だった私は、自分より四歳も年下ながら、何時も姉の様に優しく、何でもてきぱきとやってくれてしまう妻に、ずっと甘えっ放しでいたのだった。

「お妙さん!!」

「なにっ?」

「あの……」

「だで なによ?」

「これまで、こんなバカな宿六の面倒を見て来てくれて、ありがとうね。何時も世話になりつ放しだったのに、お礼の一つも言えずに、すみませんでした」

私は妙美という名の妻に、「さん」付けどころか「お」まで付けて、殊勝な言葉を投げかけた。これで妻の機嫌も少しは直り、「そんな……。お互い様じゃん」とか言ってくれることを期待して……。ところが意に反して、妻から返ってきた言葉は、

「ふんっ どうせあんたは、今夜も、とことん酔っぱらって、調子が良いだけじゃん ったく。相変わらず飲むのだけは一人前なんだから」

の一言だった。私が普段から酒に酔っては調子の良いことをほざくのを、妻は百も承知しているのだった。因みに妻の方は普段から一滴も酒は飲まなかった。

そんな妻と一悶着あったその日の夜、私は妻に対する反省と今後の自戒を込めて、自分が妻から投げかけられても当然の言葉と共に、妻に対する態度、接し方の注意事項を画用紙にしたため、それを普段から目を通し易いリビングのサイドボードの脇に、貼り付けていたのだった。

それを今日、訪ねて来た孫たちに発見されてしまったという次第だった。



若い頃、妻は地元の音大を出て、ピアノとエレクトーンの教室を運営する頑張り屋の娘だった。一方の私は、当時、東京に住んでいたが、しがないただの安サラーリーマンに過ぎなかった。

そのくせ、おめでたいほどの大いなる勘違い男で、お遊びに過ぎない下手なギターを、自分では超一流のプロ並みの実力だと勝手に思い込み、夜な夜なネオン街に、そのギターを持ち込んで得意がって弾きまくり、酒に溺れる日々の糞野郎だった。

それでもなくても私は、元々あまりの出来の悪さに、十五歳の春には京都府下にあった生家を、追われるという落ちこぼれ男だった。

小学校に入学以来、中学を卒業するまでずっと酷い成績のまま、志願さえすれば誰でも入れると言われていた地元の府立高校への受験にさえ、失敗していた。

その後、最初に移り住んだ京都市内で、昼間働きのながら何とか夜間の定時制高校だけは卒業を果たせたものの、大学までは進めなかった。人の価値は学歴だけ

で評価されるものではないとはいえ、世間の最初の評価基準はどうしてもそこになる。

以来、自分の郷里には二度と戻れず、私は更に東京へと進出していたが、都会で、どうあがき泳いでいても一向に浮かばれず、いよいよ三十路を目前にして自分の将来への展望が見出せず、精神的にも追い詰められていた時、その頃、遠距離ながら交際していた妻の進言によって心機一転、この浜松に移住して来たのだった。

こうして転地療法ではないが、新たに住み始めた浜松で、私は運良く自分に合った職場に恵まれ、その会社で愉しく働かせてもらいながら、健全な日常生活を取り戻し、数年後には、人並みに結婚にまで漕ぎつけることが出来たのだった。

また同時に土地持ちだった妻の実家から、その一部の浜名区内の土地を提供され、すぐにマイホームまで構えることが出来た。この時、私は自分の母親から、「(優秀な) 兄を差し置いて、まさか、おまえの方が早く家を建てることになろうとは」

と、驚かれたものである。それは私の力ではなく全ては妻の側のお陰だったが……。

そんな妻に私は感謝こそすれ、偉そうな口を利けた

道理は全くなかった。それに妻は忙しい仕事の傍ら、自分たちに授かった一人息子のことも、殆ど自分一人の力で無難に育て上げてくれたのだった。

一人っ子にさせてしまった息子には、淋しい思いをさせて申し訳なかったが、それでも幸い息子は捻くれることもなく、素直にすくすくと育ち、身長も百八センチを超え、イケメンになった。

だからと言って、息子は端から勘違いをする様な素振りも欲もなく、進学先も大学まで全て家から通える距離の地元で済ませてくれていた。しかも学費も奨学金を自分で申請し、それを利用しながら尚且つ、アルバイトにも精を出し、なるだけ親に負担を掛けない様にしてくれていた。

そして就職先も堅実な公務員に落ち着いてくれた。妻は、

「父親のあんたが、あんただでねえ……。○○(息子)には、そんなあんたが反面教師になっただにいな」と、笑いながら喜んで言っていたものである。

やがて息子は、伴侶となる美しい女性も自分で見つけてきて結婚し、最初に娘を授かり、その二年後には男の子にも恵まれた。それがゆいにはハルだった。

更に、この数年前には自力で市内中央区に自分たち

の土地を購入し、マイホームを構え親子四人、私から見ればまさに順風満帆、恙なく暮らしてくれていた。

孫たちは、そんな父親のことが母親に対して抱く感情と同じく、間違いなく好きで誇りにも思えることだろう。また孫たちの母方の祖父も、某公的機関の署長にまで登り詰めた人物で、現役引退後は居住地区の自治会長を務める地元の名士だった。

その一方で、父親側の祖父たる私は、何の実績もなく無教養だった男。孫たちは余りにも情けないそんな私の経歴を知ると、自分の持つDNAにも懐疑的になり、将来への夢も希望もヤル気まで、半減してしまうかも知れない……。

私は孫たちの貼り紙への興味を逸らさせ、加えて少しでも自分の名誉挽回を目論むつもりで、唯一、バカの一つ覚えだったギターを、孫たちに弾いて聞かせることにした。

私は内心、若い頃からギターにだけは太いなる自信を持っていて、クラシックギターで「禁じられた遊び」や「アルハンブラの思い出」を奏で、アダモの「雪が降る」やエンリコマシアスの「恋心」などを弾き語り、エレキギターでゲイリームーアの「パリの散歩道」や、ベンチャーズの「キャラバン」などを演奏していた。

ただ今更、孫たちには古過ぎる楽曲ばかりで、彼らには全く面白くも何ともなく、ただの耳障りに過ぎないかも知れなかった。

だが、孫たちは優しかった????

早速、思惑通り、姉のゆいが目を大きく見開いて、大袈裟に、

「じいじ、格好いいじゃん。じいじの声も素敵。じいじ、最高」

と、盛んに誉め始めてくれ、弟のハルも姉に負けじと、「じいじ、凄い。ギター、むちゃくちゃ上手いじゃん」などと、褒めてくる。こうして孫たちから煽てられて、

——— いったい、どっちが大人なんだよ……

と、私は孫から褒められて単純に喜んで己を自嘲しながらも、これで貼り紙の件も、何処かに吹き飛んで行ってくれるだろうと、ひとまず安堵した。

そのうち何時もの様に、ゆいが私の腰に絡み付いてきて甘えてきだしたので、私はさっきまでのモヤモヤも何処へやら、益々相好を崩すまでになっていた。

もう現実社会では、若い娘や妙齢の女性達からなど見向きもされないというのに、孫娘とは何とも有難いものだ、つくづくと思うのだった。何れ、そんな孫

娘からも、「じいじは臭い。汚い」と、相手にもして
もらえなくなるのだろうか……。

ここで思いがけず、私には更に有難い追い風まで吹
いてくれた。

「ゆいちゃんは、じいじのことが好きだねえ。ハル君
もだけど」

と、妻が孫たちに話しかけながら、次いで、

「じいじって、偉いだに。まだお仕事を続けてやって
るだにい」

と、言ってくれるではないか……。

——ええ、この俺が、え、偉い？

妻が孫たちの前で、ただの飲んだくれの私のことを
「偉い」だなんて誉めてくれるとは、どういう風の吹
き回しなのかと思って聞いていると、私が普段、新聞
配達のアルバイトをしていることを、まるで誇らしい
ことでもやっているかの如くに、孫たちに話してくれ
ているのだった。

だが孫たちは、そもそも「新聞」と聞かされても、
それがどんな物なのか知っているのだろうか、私は
最初、半信半疑でいた。

今、若い世代だけで暮らしている世帯では、殆ど新
聞は購読されていない。もはや現代社会では、新聞そ

の物が時代遅れの産物になりつつあった。ところが、
私が、

「ゆいちゃん、ハル君。新聞って知ってる。知らんよ
ねえ？」

と尋ねると、

「知ってるよ。新聞って、これだら」

と、二人の孫は揃って、すぐに部屋の隅にあった新聞
を指差して言ったので、

——えっ 新聞を知っていたのか……

と驚いた。それどころか、

「じいじ、ちゃんと新聞も読まないかね」

と、姉のゆいが言ってくるではないか。

「あれっ ゆいちゃんち、新聞、取ってたの？」

「ううーん。取ってないけど」

「ええー、じゃあ、何で新聞って知ってたの？」

「新聞、学校に行ったら、あるもん」

「そうなんだ」

「そうだよ。新聞には、ちゃんと正確な情報が載って
いるから、いろいろ世の中のことを知る参考になるの」

——ひえー 孫が、そんなことを言う様になるなん
て、人間はこうやって成長して行くものなのだろうか
……

と、感心していると、今度は弟のハルが、

「じいじ、ツイッターとかラインとか、ティックトックとかあるじゃん。だけど、そういうSNSは、あんまり信用しちゃあ、いかんだにい」

「えええ……。そんなことまで知ってるの」

と、私が更に驚いていると、

「ハル、他にインスタグラムやユーチューブ、フェイスブックもあるじゃんね」

今度はまた、ゆいも口を挟んできた。

「二人とも色々知ってるだねえ。だけど何で、あんまり信用しちゃあいけないの？」

今度は妻が、孫たちに問いかけると、

「SNSは情報を得るには手っ取り早いけど、注意して見ないとフェイクが多いから」

ハルが答えてきた。

——げっ 小一でフェイクだなんて言葉まで。ハルはもしかして、やっぱり天才かも？

私は思わず爺バカになり、そう呟いていた。

ハルがこの春、小学校に上がってからのというもの、息子が、

『ハルがまたテストで満点を取りました』

『ハルの快進撃、まだまだ続きます』

『ハルがテストで、間違った回答をしたところを、見たことがあります』

というコメントと共に、その解答题の写真を何度もアップして、妻のラインに送りつけてきていたが、その度に私は、

——ちえっ 息子も相当な親バカだなあ。おめでたいもんだ……

と冷笑していたくせに、

——もしかしたら、ハルは隔世遺伝で、M・Mみたいになるのかも……

と、今日、この瞬間に、心高ぶってくる私がいた。

M・Mとは私の父方の大叔母で、ハルとは異なり女性だったが、私の実家や身近な親族の中では一番の誇りとなっていた人物だった。

明治時代、京都で第一高等女学校が創立される際、市内から百キロ以上も離れた府下の小さな城下町に住んでいるながら、その逸材ぶりが当時の知事の耳にまで届いていて、その知事から直々に第一期生の一人として、入学することを請われたという天才少女だった。

そこでも優秀な成績を収めていたMは、その頃、津田塾の創設者だった津田梅子女史が提唱し、国内で初めて実施されることになった、女子のための米國派遣

留学の選抜試験に、臨むことになった。

結局、この時の審査は予想以上に厳しいものとなり、全国でたった一人だけの合格者を輩出するという結果になったが、その合格を果たした唯一の人物がMだった。

こうして単身、アメリカへと渡って行ったMは、G大学とK大学で学び、帰国してからは横浜のF女学院等で教鞭を執るなど、日本の女子教育の発展に尽力し、最後は京都のD女子高等専門学校（現女子大）に招かれ、そこで女性初の校長となった人物だった。

私は幼少期の一時期、そんな大叔母と一緒に暮らしていたことがあった。彼女は渡米中に厳格なクリスチヤンの洗礼も受けていて、生涯、独身を貫いていたので、最晩年は私の父がその身を預かっていたからである。

しかし、ここで私には同時に苦い思い出までもが甦ってきた。そして下手に爺バカになってもいけないと思ひ直すのであった。

私が物心ついた頃には、父方の祖父母は既に亡くなっていたので、私はこの大叔母を実のお婆さんだと思つて、毎日、甘えていたのだったが……。

古代製鉄たたらの研究を続けていた素人学者の父

は、その傍ら地元総合病院で事務職に就いていたが、母は、そんな稼ぎの少ない夫の所為で、少しでも家計を補うために町の保育園で保母として働いていた。

また末っ子の私とは七歳以上も離れていた姉や兄も、就学のため、昼間いないので、幼い私は、この大叔母に母代わりとしても世話になっていたのだった。

彼女は私が小学校に入学する直前、一月生まれだった私の誕生日の前日、八十七歳の生涯を閉じたが、私が入学する小学校の八〇年近く続く歴史の出身者の中で、最も代表的な偉人とされていた。

そんなこともあって、淋しい反面、私には誇らしい気分での入学式となった。

しかも私の姉や兄も優秀だったので、当然、私も出来て当たり前だろうと思われていたのである。特に大叔母を尊敬し心酔してやまなかつた私の父は、私に対しても相当な親バカになっていて、勝手に何か運命的な期待まで抱いてくれていた。

ところが一学期が修了し、これから楽しい夏休みに入ろうかという時、私には衝撃的過ぎる程、辛い出来事が起こった。

私は注目すべき生涯最初の通信簿で、担任教諭から全てオール下という、これ以下はないという最悪の成績評価を下されてしまったのだった。

老境にある今でこそ、あの頃の私は授業中、何度も身勝手な振る舞い、行動を起こし、授業を中断させていたので、現代で言う発達障害を抱えていたのだろうと推測でき、そんな成績を付けられても、やむを得なかったのだと達観しているが……。

その時の私は、子ども心にも、いきなり落伍者の烙印を押されてしまったかのような、絶望的な気分に陥ってしまった。

それでも、これを機に発奮していれば、まだ救われていただろうものを、私は学校の勉強に、益々興味とヤル気を失くしてしまったのだった。



「じゃあさあ、そんな新聞を配っている、じいじって、偉いだよねえ」

私はただ単に、その新聞を配っているだけに過ぎなかったが、妻からそのことで誉めてもらい、またその新聞という存在を孫たちが知っていたことにも気を良くしていた勢いで、孫たちに催促がましく聞いてみた。

「……………」

孫たちは、これには返答に窮したのか、クスクスと笑っただけで黙り込んでしまった。すると妻が、

「新聞配達って朝早いから大変なんだよ」と、言ってくれたので、今度は、

「じいじ、凄いやん」

と、これについては何となく理解できるのか反応してくれたので、また私は少し頬を緩め悦に入っていた。

元はと言えば、微々たる額の年金収入しか得られない生活になってからも、相変わらず飲酒の量を減らすことが出来ないで、妻の手前、そのせめてもの罪滅ぼしのつもりで、苦肉の策として始めたものだったが……。

私は、その新聞配達のアルバイトを始めて、今年で十年目となったが、約一五〇軒、二時間半余りをかけて配っていた。

新聞配達は顧客先への誤配、欠配が生じない様に常に頭と神経を使うので、一寸したボケ予防となり、また同時に、こまめにバイクを乗りこなすので、衰えがちな握力と体幹の維持にも役立つ。

そればかりか私の担当区域は郊外の農村地帯だったので、変化の少ない市街地とは異なり、ほどほどの起

伏や坂道、カーブも多く、まるでモトクロスレースを堪能しているかの様なゲーム感覚まで味わえるのだった。

時折、バイクのヘッドライトの先に大きな野生の鹿や猪が現れ、一瞬、肝を冷やすこともあったが、それさえも慣れてくると、

——おっ また出たか。ということ、今日は何か良いことでも起こる前兆かな……

などと眩く位のこと、何とも恐怖にまでは感じなくなっていた。これが今、全国各地で騒がれている熊だつたりしたら恐ろしいが、幸い今のところ、この遠州地方では、まだ一、二件程度の目撃情報だけで納まっている。

それよりも、そんな獣以上に、時折、おかしな人間達と遭遇することの方が、私には面白おかしかった。

昼間は観光地の一つとして賑わっているR洞だったが、人気のない深夜未明では辺りもひっそりとしていて物寂しい。その裏山の峠の崖淵に、たった一人で立ち尽くしていた若い男……。

私は、その若者の淋しそうな背中を見て、いよいよ死に場所を求めて、さまよっているのではないかと心配になった。だが下手に声を掛けるのも憚られる。

帰宅後、そのことを妻に話してみると、

「考え過ぎ。そんな訳がないわ。願掛けで日の出を拝むつもりで、山頂に向かって歩いていただけじゃないの」

と即答され、失笑を買ってしまった。たしかにネットで調べてみると、R洞のあるR山の山頂は、浜松の市街地は勿論、遠く浜名湖、遠州灘まで見渡せ、日の出を拝む絶好の名所の一つだとあった。

ある集落の食料品店の自動販売機の周辺で、数日置きに怪しい行動を繰り返している中年男……。

最初は、その店の主人が開店前の点検作業でもしているだろうと思っていたが、毎回、こつちが近づく慌てて自販機の裏に身を隠すので、どう考えても様がおかしい。

これも帰宅後、妻に話すと、

「たしかに、怪しいちゃ怪しいけど、換金できるアルミ缶でも、漁ってただけならあ」

と、あっさり言われ、そういえば自販機というより、その脇にある空き缶の回収箱を覗いていただけだったかも知れないと、合点したのだった。

そろそろ太陽も顔を出してきそうな勢いになって来

て、迎りがすっかり明るくなってきた頃、屋敷前の畑の真ん中で、お尻を丸出しにして突っ立っていた老女……。

どうやらまだ薄暗い早朝のうちから畑仕事を始めていて、もよおしてきたのは仕方がないが、家の中まで戻るのが面倒になり、立ちションをしていたらしい。遙か昔、自分がまだ幼少期の頃、それこそ田舎の畦道で、そんな光景を目撃したこともあったが、

——むむっ 今は平成？ いやいや令和。うーん

昭和は遠くになりけり……

などと、訳のわからぬことを私は思わず呟いていた。

やはりこれも妻に話すと、苦笑しながら、

「あんたは、周りをキョロキョロ見てるだねえ。そんなあんたの方が怪しいじゃん」

と、これまた呆れられてしまった。こうして深夜未明の朝刊配りでは、時々おかしな場面との遭遇も、あるなのだった。

それにしても、こうして既に後期高齢者になる私
が、まだ新聞配達をやっているのも、若い頃から
難しい仕事からはずぐに逃げ出し、簡単な仕事しかや
ってこなかったの、まだまだ脳内に余力が残ってい
たのが幸いしたのだろう……。

実は私には自分とはまるで真逆で、子どもの頃から
努力家だった七つ違いの兄がいた。

K大の博士号を取得し、更にアメリカの研究機関で
生命工学を学んでいた兄は、帰国後、某地方の国立大
の教授になり、そこで学生たちを指導する傍ら、遺伝
子、応用微生物学の分野で、数々の研究成果を挙げる
学者になっていた。

特に病原性大腸菌O一五七などの食中毒が猛威を振
るっていた頃、その予防に効果のあるモズク酢等の食
品類を発表した時には、学会だけでなく一般のマスコ
ミでも大きく扱われていた。

他にも心臓病の特効薬の開発等で、その成果が報道
される度に、私は弟として誇らしく思っていた。

だが、そんな兄が不運にも大学を退官して七〇歳に
も満たないうちに、アルツハイマーを発症してしまっ
たのだ。

兄は私と異なり早くから頑張り過ぎて、脳内の容量
がパンクしてしまったのだとしか、私には思えなかつ
た。

——こうなると、いったい人の幸不幸なんて何なの
だろう。人生は短くとも長く生きるのが理想なのか、
はたまた細々とでも長く生きるのが良いのか……
と考えてしまう。私の場合は何をやっても中途半端だ

つたが、それでもどうにか、ここまで無事に生き延びて来られたので後者の口だった。

私は老境にある今にして、これまでの人生の中で、この兄にも幾度となく救われていたことを、つくづくと思い知らされていた。

「そんなお兄さんがいるのなら、君も本当はバカなんかじゃないだろう……」

と、他人から買い被ってもらえるという恩恵が、何度かあったからである。

それぞれ個人のプライバシーを尊重する現代では、他の身内のことまで詮索するのは、とても考えられないタブーなこととなったが、私がまだ若い頃には、就職の際などに提出させられる履歴書に、本人の経歴だけでなく、親、兄弟の勤務先、肩書まで丁寧に記載ねばならない欄があつて、私の様な人間には却つて、それが幸いしていたのである。

面接を受けている当の本人に何の取柄もなくても、面接官から、

「ほう……、あなたのお母さんは保育園の園長さん。そして、うんっ お兄さんは大学の教壇に立つ職員さん、じゃあ近い将来は教授になられる訳だから凄いですねえ」

などと、言ってもらえたのである。

もしかしたら恋愛中の妻も、少なからずそんな私の家族構成を知つて、私のことも信用してくれていたのかも知れない。

そんな世話になつていた兄が、晩年には、認知症という運命に翻弄されてしまうなんて、なんとという皮肉なことなのだろう。

兄は少年時代から、私のことを愚弟だからとバカにしたりはせず、

「ケンちゃんは、簡単に楽譜が読めるだけでも凄い。お兄ちゃんに言わせりゃあ、英語を読むより難しいもん」

「ケンちゃんは、青空大学の出身」

などと言つて、何時も優しく励ましてくれていたものだった。

そんな兄は一度、私と妻との夫婦関係にも感動を示してくれたことがあつた。

それは私が五〇代の時、私にしては珍しく二〇年近くも継続して勤務していた印刷会社から、突然リストラを宣告され失職した時のことだった。

コンピュータがまだ最先端の技術として難しいものだとしていた当時、たまたま私はそのコンピュータ

機器を任され、それを駆使していたので、会社には多大な貢献をしていた筈だと自負していた。

ところがパソコンが普及し、誰でも当たり前にキーが叩ける時代になった途端、印刷業界は一気に斜陽化してしまい、私は世襲で二代目となっていた社長から、嫌われていた所為も大きかったが、いの一歩に無用の長物扱いにされてしまったのだった。

それでも、くよくよと悩んでいても仕方がないので、この僅か数日後、私は妻に付き合ってもらい、信州の秘湯に気晴らしの温泉旅行に出かけていたのだった。

後日、そのことを知った兄から、

「遠州の女性は太っ腹やねえ。そんな人に支えられて、おまえは、なんちゅう幸せ者なんや。羨ましい」と、言ってもらったのだった。

そして中途半端な年齢で奈落の底に落とされ、窮地に追い込まれていた筈の私が、この旅行の後、禍を転じて福と為す思わぬ転職にまで恵まれたのだった。

人一倍の酒好きだった私が、ここに来て何と浜松の老舗の酒蔵・H酒造で雇用してもらえることになったのである。しかも現場の瓶詰や事務職、営業、運搬係でもなく、正に真正正銘、日本酒造りの職人である蔵

人として……。

元々酒好きだった男が、まさか五〇歳を過ぎて、そんな酒造りの仕事に就けるなんて、まるで夢物語だった。

これも伴侶たる妻が、やたら次の仕事を思慮なく急かせてきて、焦らせてくる様な性格だったら、夫たる私に、こんな幸運は訪れなかつただろう。

こうして兄にまで感心してもらえる人柄だった妻への恩義を、私は一生、決して忘れる訳にはいかないのだった。思い返せば、私がまだ東京に住んでいた、あの時だつて……。



もうすぐ二〇代も最後の二十九歳になろうとしていたあの頃、私は新宿の路地裏にあった古ぼけた木造アパートの二階、一番奥の狭い一室で、夜、部屋の灯りも点けずに、一人悶々と暗く沈み込み床に臥せていた。何気なくカーテン越しに窓の外に目をやると、何時の間にか雪が舞っていた。まるで己の胸の内を見透かされているかの様に……。

——もう俺の人生もお仕舞いだ。所詮、バカは馬鹿。どうあがいても浮かばれやしない……。

そこへ、部屋のドアをノックする音が聞こえてき

た。ドアを開けてみると電報の配達員だった。電報を寄越してきたのは、先日まで遠距離ながら交際していた浜松の女性からのものだった。

用紙を開くと、そこには、

『シキユウ デンワ マツテマス』

と、記されていた。

——心配してくれるのは有難いが、もう構わないで欲しい。これまで、こんなバカな男と付き合ってくれていただけでも、ありがとう……

私はそう呟くと、また部屋の灯りを消して再び床に伏していた。前途あるまだ若い彼女まで不幸にする訳にはいかなかった。

すると、それからまた一時間も経った頃だろうか、またさつきと同じ配達員が電報を届けに来た。

『トニカク スグニ レンラクラ』

今度は、そう記されていた。

——しようがない。せっかく電報までくれたのだから……

まだ身近に、パソコンもスマホも普及していなかった時代のことである。

私は重い足を引きずりながら、小雪が舞い散る下、近くの公衆電話ボックスまで出向いて行くと、冷え切った手先の指に息を吹きかけながら、浜松の彼女の元

へとダイヤルを回した。

数秒、呼び出し音が聞こえた後、

「もしもし……。もしもし」

すぐに彼女の声が聞こえてきた。

「大丈夫なの？ どうして、すぐに電話をしてこれなかったの？」

と、少しきつい口調で矢継ぎ早に問い詰められてきたが、私は何も答えられず、ただただ電話口で沈黙し、彼女の言葉に耳を傾けるしかなかった。

「私がいる浜松に来れば何とかなるよ。浜松は山、海、川、湖まであって、自然豊かな良いところだよ。人生は、まだまだこれから。諦めないで」

「……………」

「こっちで落ち着けるまで、私が間違いなく生活のフォローをします。だから何のご心配もなく。安心して大船に乗ったつもりで来れば良いよ。ここで人生を投げ出してしまわないで、勿体ないでしょう」

この時の妻からの救いの言葉、助言がなかったら、私は間違いなくこの後、富士の樹海の苔か、はたまた日本海の藻屑になっていただろう……。

あの頃、私は子どもの頃から、全く学校の勉強が苦

手だった劣等感の払拭を果たすべく、自分なりの大きな夢を抱いて頑張っていたつもりだったが、結局は、その夢の実現にも破れ、仕事も失職し、絶望の淵を彷徨っていたのだった。

あの時の彼女は、年に一度、自分が主宰する音楽教室の子どもの発表会を間近に控えていて、それだけでなくも神経をすり減らし、忙しい時期の筈だった。そんなところに、私は彼女に余計な心配まで、かけさせてしまっていたのだった。

しかし、喉元過ぎれば熱さを忘れる……

私は何時しかそんなことも、すっかり忘れていたのだった。



光陰矢の如し……。

あれから私がこの浜松に来て、ここを終の棲家と定めて以来、半世紀近くもの歳月が流れた。私の様な落ちこぼれ男が、ここまで何とか真っ当に生きて来ることが出来たのは、やはり全ては妻のお陰だった。

そればかりか私は、自分の若い頃に似つかわない、まともな息子を授かり、更には純真無垢な可愛い孫たちにまで恵まれたのだ。

私は、せめてものその代償として、現在、実践して

いる新聞配達のアルバイトを、後五年、傘寿を過ぎるまで粘り強く続けてみる決意を固めてみた。

偉業でも名誉でも何でもない、ただの新聞配達だとは言え、そこまで頑張れば、何をやっても不甲斐なかった私にも、少しは根性があったことを証明できるだろう。

八〇歳にもなって、まだ新聞配達をしている年寄りなんて、世間の目から見れば、「何もその歳まで」と、ただの哀れみの対象にしかならないのかも知れないが……。

だが現在の私にとっては、これこそが生きる糧、張りでもあるのだった。ごく短時間の仕事で微々たる額の収入でも、こうして未だ働くことによって、日々好きな酒を忌憚なく嗜むことだって出来るのである。

ただ、また酔い過ぎて調子に乗り、妻に戯言をほざき、妻の鬢ひんしゅくを買かい夫婦仲が陰悪になるのだけは避けたい。

私は孫たちから笑われてしまった例の貼り紙だったが、今暫く、そのまま剥がさないで置いておくことにした。

※あなたは わたしが

ひろってやらなきや

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

いまごろ

のたれ死んでただにい

※カミさまに 口ごたえしない

私にとって、妻は、まさに神様なのだった。

(浜名区)

「市民文芸賞」

男達の門出

加藤 喬

九月下旬の浜松の空は、晴れ渡っていた。秋気は澄み、人々は安堵の深い息を吐いた。酷暑をやり過ぎたのだ。陽光もやさしさを取り戻し、光合成に勤しむ木々の葉も、緑の厚さを増している。

ここ宮本康太さんのガーベラハウスも残酷な暑さから解放され、しなだれていたガーベラは背筋を伸ばし始めた。とは言えガーベラの株は、まだ夏の疲れを引きずっており、例年通りこの季節の収穫量は少なく、早めに仕事が付いた。

「智也、おめえはえれーなー」

宮本さんは腹から感心したように、真顔で褒めてやった。

「なんで俺が偉いんだ？」

「智也は小学二年生から学校行ってねーんだろ。嫌だから行かなかつたんだろ。そこが立派だ。他の子供らはやだなあと思っても、母ちゃんに怒られるからとか、何で休んだって友達に聞かれたら面倒だと思つて、無理して行くんだ。大人だつてそうだぞ、会社やだなあつて吐きそうなぐらい感じて、上司の小言言う顔が浮かんできて、ため息交じりで会社へ行くんだ。智也は嫌なものは嫌だつて自分の意志を通したんだろ。なかなかできることじゃない。ああ立派なものだ」

ガーベラの採花の仕事を終え、帰り際にいた智也は、「ほう、そうか。そんなもんか」といつものごと

く言葉数は少ない。それでも四十一歳の男が無邪気な笑顔を遠慮せず、愛犬の「はな」を前かごに載せると、自転車にまたがった姿は、いつもよりピンと背筋が伸びている。三十メートルほど行った所で自転車を止め、おもむろに振り返ると、「お先です」と言い置いて、今度は勢いをつけてペダルを踏んだ。

「おい、翔ちゃん、言ったよなあ。智也のやつ、お先ですって言ったんだよなあ」

宮本さんは目を丸くした。

「宮本さんが驚くのも無理はない。智也は挨拶が出来ない。母親に連れられて初めてこのガーベラハウスへやってきた時も、翔平やパートさん達には勿論のこと、経営者の宮本さんにすら「こんにちは」の一言すら言わなかったのだ。それが「お先です」といっちゃ前の挨拶を置いて行ったものだから。」

小林智也は小学二年生の途中から、不登校を決め込んだ。いじめにあったとか、腑に落ちないことで担任にひどく叱られたとか、何か確たる理由があった訳ではないらしい。ただある朝いつものように登校して教室に入ってみると、物が見えるのだが、全ての物が色を失っていた。眼を擦ってみたがそれでも色が付いてこない。気味が悪くなつて、以来一度も学校たる所へは行ってないと言う。不登校の子供たちが時として集

う支援センターのような所へも、一切足を運ばなかったという徹底ぶりである。

そんな風に頑固を貫いて、四十一歳まで年を重ねた智也であったので、当然日常生活を送るのにさえ、基礎知識に事欠く。しかしさらに困ったことに、集団の中で生活した経験がほぼ皆無なため、人との接し方が皆目見当がつかない。挨拶が出来ないばかりか、顔に表情が乏しい。ところが一転、時として人を射抜くような目つきをすることがあり、パートさんの中には、「昔のお侍の目つきってきつとああたったんじゃないの」と声をひそめる人もいた。

宮本さんも、いくら何でもこれじゃあ仕事は続くまいと思っていたが、智也はまさかの坂を登り、無遅刻のうえ、仕事に穴をあけたことは一度としてなかった。それどころか仕事ぶりもたいしたもの、花取りも速く正確だった。

「智也の花取りはうまいなあ、今まで来た人の中で一番だ」

と宮本さんが褒めてやると、うれしい時にはこんな顔をするものだという笑顔を作った。そうか、こいつは褒めてやれば登って行くんだな、それからはことあるごとに持ち上げた。

「よく虫を見つけてくれたな、智也の目は本物だ」

「智也は仕事が速いから、きつと体が強いんだ。男はそれが一番だ」

褒め続けたことが奏功したのか、宮本さんが「おはよう」と言えば、「おはようです」と返すようになり、次第に会話しきものが成り立っていった。

パートのおばさんたちとも一ミリずつ距離が近づいていく。きつかけがあった。智也が大切にしている愛犬の「はな」を仕事場に連れてくるようになってからだ。パグという犬種で、しわしわの顔に真ん丸の眼、フォーンの毛色でよく言えば筋肉太り。まったく吠えず誰にでも穏やかに体を差し出すので、すぐに仕事場の人気を得た。

「今朝は散歩したの」

「エサは何をやってるの」

などと聞くおばさん達に、はなのことになれば智也も逐一答えを返した。そんな繰り返しの中で、「おはようです」の挨拶はパートさん達にも発せられるようになる。

翔平も智也と糸を結ぶきつかけが欲しくて、犬用のビーフジャーキーを買ってきて、「智也さん、これはなちゃんにやってもいい？」と聞いてみた。

「中国の物じゃなかったらいいよ」

と智也はレベルの高いことを言う。

「違うよ、国産だよ」

「国産って何？」

「日本で作られたものだよ」

それならやってもいいと言うので、二つばかり鼻先から下げてやった。

「あんまり食べるとご飯が食べられなくなっちゃうからね」

と人間の子供に言うようなセリフとともに、残りを袋ごと智也に差し出した。智也はコクンとうなずいて受けとってくれた。

翌日、翔平が採花を終えてハウスを出ると、「これ食べてみな、俺の作った親子丼だ」と智也がタッパを突き出してきた。割りばしが一つ添えられている。午前十時のこと。まだ胃袋からのサインはないが、智也との糸を切りたくなくて、外のベンチに座りすぐに食べてみた。冷めた親子丼が、しかし汁が米粒に滲みて、思いの外美味かった。

「こりゃあーうまいや、智也さんの腕はプロの料理人並みだ」

「母ちゃんも俺の作った親子丼が好きなんだ」

智也は悦に入っている。こんなことがあって、智也と翔平の間のとつとつとした会話は滑らかなものになった。

智也の料理上手には訳があつた。智也の父親は若くして病気で他界し、弟がいたが高校を卒業すると就職して家を離れた。母と二人の生活。パート勤めの母が仕事に出れば、家に一人の智也が昼飯ぐらいは自分で作るようになり、腕をあげて今では夕飯も作るようになったそうだ。

小宮翔平の生い立ちは、智也とは真逆である。第一に翔平の父親は医学部の教授であつた。きつい言葉で人を貶めるようなことはなかつたが、その立場の人にあるがちな重苦しい空気をまとつた人である。母はそれを趣味のガーデニングに流していた。父には反抗の限りを尽くしていた兄は、反抗の証だとのろしを上げ、医学部に合格して見せた。次男の翔平には、相手の空気が深く浸透しないように、心の中心を薄膜で覆つたような精神が育つた。

第二に翔平は慶応大学を出ていた。大学名を口にすれば、大体の人が尊敬の表情を浮かべたが、その学歴は、附属の小学校から一直線に続くエスカレーターに乗つた産物であつた。

勉強は特に頑張りもしなかつたが、全くサボつたりもしなかつた。成績は中の上辺り、中の中まで下がると家庭教師がつけられた。それをうれしいとは思わな

かつたが、特別いやだとも思わずに、家庭教師の人とも結構うまくやつていた。翔平はほとんどの人と円滑な人間関係を築くことが出来る。しかしそれは、心の底からとか腹を割つてとかいう粘り気のあるものではなく、翔平はいつも涼しげであつた。「笑つていても眼は笑つてないね」と友達に時々言われたりもした。

大学は医学部には進まなかつた。成績云々の前に、人の命や健康といった大きな責任を引き受けるだけの大志は、もともと翔平にはない。親元を離れたくて、自宅通学するには少し無理な、一番遠くのキャンパスにある学部を選んだ。父親は殊更反対はしなかつたが、医学部に進学しなかつた翔平に、興味を失つたように見受けられた。

大学入学と同時にアパートでの一人暮らしが始まり、完全な自由人を享受していた。アパートの隣室には独身の女性が住んでいた。会えば月並みな挨拶はしたが、ある日偶然にもスーパールのレジの所で出会い、帰路を共にすることとなつた。それがきっかけとなつて親交が深まつていき、時には夕飯のおかずや夜食を差し入れてくれるようになった。互いに部屋を訪れ、そこで過ごす時間が長くなれば、間もなく肉體関係を持った。土曜日の夜をどちらかの部屋で過ごし日曜日

の朝を迎えるに至り、初めてではなかった翔平も、その筋にはそれなりの手馴れとなった。

彼女は翔平の腹筋の割れ目を指でなぞりながら、「翔ちゃんの心にも筋肉があるのかな？」なんてことを言った。心の筋肉、どういう訳か、その言葉は翔平の記憶に張り付いた。

彼女は女子会なるものにも、よく翔平を連れ出した。翔平を隣に据え、自慢とものろけとも判断のつかないことを口にした。

「翔ちゃんはルックス最高、学歴最高、家柄も申し分なしだもんね、性格だってこんなに優しい男はいない」とすると友達の一人は翔平の顔をまじまじと見つめながら、「翔平君って、母性本能に刺さるんだよね」と翔平の意識の外にあることを言った。

小宮翔平とは、身長183cm体重75kg、いわゆる細マッチョの体軀。二重の眼はあくまでも涼し気で、肉食を感じさせず、軽いくせ毛はかえって髪に緩いウェーブを与えている。

彼女との交わりは一年で終わった。彼女が東京の本社に移動となったのだ。翔平は彼女を東京に追わなかった。翔平は思った。時の流れの中で出会い、体の関係ができ、いくらか月日が経って別れの時が来た。すべては時の流れの中のことだ。彼女は東京で、「やつ

ぱり翔ちゃんの心には筋肉はなかったんだわ」ときつとつぶやいている。そうつぶやけば、彼女の心には傷一つも残らないだろう。

二年になると履修の方向を都市計画に向けた。あくまでも大学を卒業するための机上の学問としてであった。凹凸がないならかな日々が過ぎていた。ある日友達が唐突に写真に納まれと妙なことを言い出したが、悪さをするわけでもないだろうと、言いなりになつてやった。数週間して、翔平は大学のミスターコンテストの本選に出場する羽目になった。つまり友達がエントリーシートに翔平の名前を書き、写真を添えて事務局に提出したところ、書類審査を通過してしまったのである。もちろん翔平は拒否したが、友達たちに半分拉致されるような形で本選の会場へ連れていかれた。

舞台上に立つと、遥かまで観客が密に埋まっている。自分の意志でここに存在している出場者たちは、だからこそこの緊張感に堪えることが出来るのだが、翔平は足がすぐみ、自分の意志力のなさを悔やんだ。翔平の登場の段になった。可哀そうなくらいひょうきんを演じている司会者が、質問をしてくる。

「ぶしつけな質問で恐縮ですが、でもやつぱり聞いちやいます。今まで女性経験は何人ですか？」

「昨日の夜までは覚えていましたが、今朝になって忘れてしまいました」

とつさにそんな風にいなしてやると、それがうけた。

「会場にもきつとあなたのファンの女性が沢山いらっしやるのでしょうか、理想の女性のタイプを教えてください」

「小学校から附属の気弱な僕を、優しく包んでくれるような女性がいいです」

今度は拍手喝さいを浴びた。

「翔平さんの夢を教えてくださいいただけますか？」

「早くこの舞台を降り、大谷翔平君の所へと日本を脱出することです」

最後に特技を披露してくれと言うので、バク転を三回してやった。悪友たちがヒューヒューと指笛を鳴らした。視線を一身に浴びる緊張感を何とかしのいだだけで満足していたのだが、何のいたずらか、頂点のグラプリを獲得してしまった。

グランプリの威光は予想を超えていた。毎日キャンパスには翔平詣での女子学生が現れた。遠回しに翔平に視線を送る学生もいたし、一緒に写真に納まってほしいとせがんで、別れ際に握手を求める者もいた。

翔平は険のある態度を取らなかつた。

ある日午前の授業を終え学食に向かつていた翔平

に、二人の女子学生が「ご一緒させてもらってもいいですか」と声をかけてきた。三人で食事をする事になったが、Aランチを食べる翔平の隣で、このキャンパスの感想などを語りながら、彼女たちはソフトクリームをなめていた。来週同じ時間にまた来てもいいですかと言うので、翔平はそれも許してやった。

次の週には二人のうちの一人がやって来た。驚いたことに彼女は医学部の学生であった。荒木志保というその子は翔平と同じ年の二年生、静岡県磐田市の出身で、高校までは地元の公立に通い、現役で医学部に受かったという才女であった。慶応大学の医学部はトップオブ医学部であり、どの予備校の調べでも偏差値は七十を超えている。まさに彼女は偏差値の女王、公立の星である。翔平は自分とは全く違う歩みをしてきた彼女に興味を引かれ、交際が始まった。

同じ大学の学生同士であったが、キャンパスを異にしている。志保が翔平の元を訪れることは稀で、大抵は翔平が彼女のいる東京へ向かった。志保の父親も地元でクリニックを開業する医者であった。翔平の父親も医者、兄も志保も医学部、ただ一人門外漢の翔平であったが、志保には医学部生に特有の特権意識がないことに、翔平は安堵した。体が結ばれる時には、志保はもっぱらシャイな幼さをまもっている。翔平は、そ

の時の彼女のありようと偏差値の女王との落差に、志保をいじらしく思うのであった。この時間だけは与えているのは俺なんだと翔平は自分を仰いだ。彼女も翔平と過ごす時間に安らぎを覚えていくようであった。

しかし翔平はなぜか達観していた。そうは言っても志保はそのうちやはり医学部生と付き合い、医者同士で結婚する。子供が出来れば志保の子だ、必ずその子も出来が良く、きつと医学部に進む。そんな人生が彼女にはお似合いだ。

大学生活も後半を迎え、就職に意識が向きだすと、学生たちの表情にも一抹の不安が見え隠れする。しかし翔平は、今までの人生が無難に流れてきたように、これからの職業生活もそれなりに回転していくのではないかと、楽観の域に留まっていた。大学では都市計画なる分野をかじったので、東京に本社を置く不動産関連の会社を受けることにした。その会社は就職ランキングの上位にランクインする。さすがの翔平も面接試験の下書きを用意した。

面接の場に緊張して臨んだ翔平を前に、しかし面接官は踏み込んだ質問をしてこない。型通りの質問に月並みな答えを返す翔平に、「そうですね、なるほど」などと応じるばかりである。これは脈なしだなと翔平は観念したのであったが、面接の終わり際に「お父さ

ん、お元気で何よりですね」と面接官は機嫌のよい表情を見せた。合点がいった。父親が手を回していたのだ。その後何回かの面接を経て内定の通知が届いた。塩辛い就職活動を繰り返す前に、翔平の就職が決まった。

東京の実家に戻り、会社員生活が始まった。入社式当日、会場に入ると、最近会社が手掛けた大規模プロジェクトの映像が流れており、いやがうえにも新入社員たちの気持ちを高揚させた。社長の訓示の後、社歌が流れ、先輩社員のエールが続いた。最後に人事部長から次なる話があった。

「新入社員の多くに最初はマンシヨンの販売等の営業職に従事してもらいます。我が子を谷底に落とすライオンさながらに、君たちに根性を植え付けようなんてことでは、全くありません。街づくりは、そこに住む人の幸せづくり、人を想う力が街を創造する力なのです。またプロジェクトを成し遂げていくには、沢山の人を巻き込み密度の濃い仲間を作らなければなりません。人をひきつける力、そんな魅力の養成を、最初に皆さん自身に課してもらいたいです。営業の第一線に立ち、お客様の幸せづくりにまい進するうちに、君たち一人一人にデヴェロッパーとしての人間力が備わることを切に期待しております」

部長の言葉通りに翔平も営業の前線に立つことになった。国分寺方面のマンション販売である。ここで翔平は初めての挫折をなめることになった。覚悟はしていたものの全く契約に至らない。話のとつきはうまくいく。相手の表情も柔らかい。しかし契約の関を超えてはくれないのだ。上司は「営業とはお客さんに好かれること、お客さんの気持ちに入り込まないとダメなんだ」と。お説ごもつとも、百も承知、翔平自身もお客さんの心に座り、張り付くくらいになりたいと思っていた。この人と契約せずに、上司から嫌味の一つでも言われたら可哀そうだと、最後には損得を超えてそう思ってもらえるくらいになりたいと切に思った。しかし最終の関を超えてもらうだけの目力が足りないのか、翔平の営業成績は最後尾を定位置としていた。志保とは続いていた。翔平は仕事上の愚痴を志保にはこぼさなかった。二人の会話は翔平が聞き役に回るのが常だったし、会話を探さなければ二人の時間が成り立たないような段階は過ぎていた。ただ会って同じ空間に身を置き癒される関係が続いていた。

二年後には他の部署へ移動となる同期の社員も出始めた。同じ慶応の出身で時々酒席を共にした男も企画推進部に移動となった。彼は酒が入ればいつも同じ話をした。それは長年寝かせているスポーツジムの建設

図案である。そこいらのジムと違うのは、いわゆる筋トレ器具以外に、五十メートルのランニングレーンを四つ設けるのだと言う。若い世代は筋トレの成果を五十メートルのタイムに反映させ、年配層はランニングやウォーキングの理想のフォームをインストラクターに指導してもらえる。彼の企画が具体化されるか否かはわからぬが、それでも彼はデヴェロッパのスタートラインに立った。

彼が移動となった半年後、翔平にも辞令が降りた。それは賃貸部門への異動であった。大手不動産会社に入社したものの、街の不動産屋と変わらぬ仕事内容となった。企画推進部に移動となった同期とは大きな差がついてしまったが、マンション販売より毎日毎日確実に動きのある賃貸の方が、ストレスはかなり少なく、それをよしとするしかない。翔平は毎日を呑み込んでいた。

志保は当たり前のように医師国家試験に受かり、附属の病院で研修医としてのキャリアに着いた。修行の場は甘くなく、週末に志保のマンションで映画を見ていても、志保の眼はストーリーを追っていないことがあった。翔平の心音を聞きたいと言って翔平の胸に耳を押し当て、鬼の指導医の鬼ぶりを、声を詰まらせ語ったりもした。そんな日の別れ際には、「こんなに愚

痴ってばかりじゃ、翔平に嫌われちゃうね」と寂しそうな顔を見せた。翔平は志保が志保らしく、まあるくいるための保護膜であり、翔平はそれを是としていた。

二年を経て研修医の修行が開けると、志保は都内の総合病院に臨床医として勤務することとなった。落ちついた志保が戻った。しかしいよいよ翔平は覚悟した。医師の中にはもちろん独身の男性もいて、志保に好意を寄せれば交際が始まることもあるだろう。志保が申し訳なさそうにそのことを告げてくれれば、応援団となり潔く身を引く覚悟は出来ていた。

ところがまさかの坂は翔平にもあった。病院勤務になつて一年ほど経った頃、「医師の道を歩く私を受け入れてくれるのなら結婚してほしい」と志保の方からプロポーズされた。結婚生活は翔平が志保のマンションに転がり込む形で始まった。

志保が姓を変えたことを、翔平は少し不思議に感じた。むしろ翔平が志保の姓を名乗った方が、収まりが良いような気がした。翔平の父親は医者嫁ができたことを喜んだ。志保の父親はどうであったのだろう。

医者嫁が医者以外の男と結婚することを。翔平は医者ではないが、その親父が医学部教授ならば、翔平も医療人の端くれだ、とでも思ったのだろうか。

特記事項のない平穏な日々が続いたが、最初の結婚記念日を迎えた直後、暴風雨に見舞われた。心臓に病気を抱えた志保の父親が、その病状が思わしくなく、志保に磐田のクリニックに入ってくれと告げてきたのだ。志保は大いに悩んだ。それは当然だ。志保とて医師としての未来予想図を見据えていたのだから。しかし同じ医者としてそれを察していた父親にしても、帰ってくれと言うまでには、相当の葛藤があったはずだ。

志保は結局磐田に帰る決意をした。

「やっぱり磐田のクリニックは捨てられないわ、ごめんね。別居婚になっちゃうのかなあ？」

「いや、俺も磐田に行くよ」

翔平には東京に留まる理由がなかった。

磐田での生活が始まった。職を探さなければならぬ。学歴に恵まれているとはいえ、新卒ではない翔平に多くの就職口が開かれているわけではなかった。翔平は中規模の進学塾に就職した。

教室の空気が少し肌に合わない。翔平は、小学校から附属を通して大学まで進んだ。そういう環境に身を置いていたからには、そこで染みついた皮膚感覚はなかなか剥がれず、それはやはり地方都市の生徒のものとは違っていた。

しかしそれは感覚的なもので、大きな負とは意識していなかった。どうにも違和感があったのは学習指導の内容だ。翔平が担当したのは中二から高二までであった。高校受験は内申書重視だ。それは今も昔も変わらない。一方大学受験は大きく変わってきた。私立大学の中には、いわゆる一般入試で入学する学生の比率が五十%に満たない大学もある。学校推薦や自己推薦、あるいは他の入試方式が急増してきた。昔は高校生の授業は高一から一般入試に対応したカリキュラムであったと言うが、推薦入試が増加する中で、高校生の授業も主流は高校別のもになり、高校の定期テストで点を取らせることに主眼が置かれた。

定期テストの直前になると、各教師が試験範囲に合わせて予想問題を作る。それが実際の試験問題と近ければ、生徒はニンマリ笑って、高得点を取るようになる。だいたい予想問題は当たることになっている。それはそうだ。単元別に学ぶべきポイントがあって、それを踏み外さなければ、誰が作ったって大差はない。そんな風にしてテストで良い点を取ったところで、本当に生徒にとって喜ばしいことなのだろうか？自分から能動的に勉強することを次第に止めてしまい、依頼心ばかりが強い人間に落ち着いてしまわないだろうか？翔平はそんなことを考えると同時に、苦笑いを禁

じえなかった。自分はどうであったのか、少し成績が下がると、翔平が依頼心を覚える間もなく、母親が家庭教師を依頼していたというのに。

そんな不満を抱えながらも、翔平はらしさを發揮して、うまい具合に人間関係を築いていた。生徒とも、教師達とも、上司や社長とも関係は円滑であった。社長は中規模塾から脱皮を図るためには、激戦区と言えども浜松に進出する他ないと考えていた。第一の候補地を定め、地主との交渉に前職が不動産関連だった翔平を指名した。

その土地の所有者が宮本さんであった。翔平は拙速を戒めた。地主に塾舎を建ててもらい、賃貸借契約を結んでもらうというのは、地主にとっても大きなかけである。初回は顔見世と塾のパンフレットを手渡す程度にとどめよう。そんな心づもりで訪問したところ、宮本さんは面会はしてくれたものの、取り付く島もない。

「私は、申し訳ないが、塾には全く興味はないね。塾の校舎を建ててだなんてあり得ん話だ。子供らは学校で教えてもらって、後は自分で勉強すればいい。私らの頃には塾なんてなかったが、昔の子供らの方が優秀だった気がするがね」

「ザッツ ライト」

心の中では言った。ここで引き下がれば二回目はない。一か八かで生徒を大切にするという当塾のうたい文句と契約内容の概略を伝え、社長が立地を大変気に入っているの、さらに宮本さんのご意向に沿った形にさせてもらいますとまで言い切った。それでも宮本さんの眼は「一方通行だよ」と語っている。

これ以上この筋で話を押しても到底無理だと思、先ほどハウスから出られるところをお見かけしたのですが、農業のお仕事をされているのですか?」と話に小休止を打った。

「ガーベラを生産しとるんですよ。私は花農家です。

浜松のガーベラは有名だに。ガーベラは知つとるら

「はいそういう名の花があることは知っています、その程度で、正直言いますとどんな花か見当が付きません」

「そうかね、御出身はどちらだね?」

「はい東京生まれの東京育ちでして、こちらにきてまだ日も浅く、初心者マークの域を出ていません」

目的とは無関係とはいえ、会話が成り立っていることに、翔平はほんの少しの光明を見た。

「東京の人かね、道理で言葉がきれいだ。東京の男の人がガーベラを知らんのも無理はない。一回ハウスで

咲いているガーベラを見てみるかね? 塾の先生の勉強にもなるら」

「うれいしです、是非ともお願いします」

宮本さんに案内されてハウスに入った途端、翔平は感動で立ち尽くし、目が釘付けになった。色とりどりのガーベラが遥かまで競うように咲き誇っている。赤い花は深々と赤く、白い花はなんとも涼し気で、ピンクの花には寄り添うようなやさしさがある。

「負けたな」

夢見心地の中で、しかし翔平は確かにそう思った。

人を想い街を創造する、今思えば大仰なフレッズだ。そんな大仰さとは無縁の一本の涼し気なガーベラに、癒されている。受験勉強に疲れた女子生徒を癒すのは、家族の言葉より、このやわらかなガーベラかもしれない。あるいはこれまでの自分の人生が、なんだか空虚に思われたのだろうか。

仕事でここに来たことはもうすっかり忘れている。

「塾舎のことは諦めます。宮本さんには全くその気がないことを伝え、代替地を探すほかないと上に伝えます。ですが、仕事とは全く無関係にまたガーベラを見に寄つても構いませんか?」

宮本さんに感動をおつけた。

「初めて見れば驚くかもしれんね。ガーベラもハウス

も逃げやせん。時間があればいつ来てくれてもいいよ」
宮本さんは花に魅入られた翔平を暖かく迎え入れてくれた。

会社員としての役割を全く果たせないまま帰社すると、すぐに社長の元に報告に向かった。宮本さんの態度がかたくなで、どうにもこれは無理筋だと言わざるを得ないと伝え、お役に立てず申し訳ございませんと深く頭を下げた。

少しだけ責任から解放された翔平は、今日初めて会った宮本さんと小さな絆が生まれた不思議を改めて感じた。予想だになかった展開をなぞり、しかし人生にはこんなスパイスも必要だと、自分勝手を良しとした。

翌朝朝食をとると、もうガーベラハウスに行きたくなった。出社は午後からなので、午前の時間は自由になる。

「おはようございます」

「やあ、もう来たのか、名刺をもらったけど、ええと名前は何だったかな」

宮本さんの早口が忙しさを物語っている。

「小宮翔平です。昨日会社に戻って、社長には宮本さんの気持ちは報告済みです。今日はもう一回ガーベラを見たくて来ました」

「そうかね、ちよつとガーベラ取ってみるかね」

そう言うや花の取り方を教え始めた。翔平を後ろに従えて十メートルほど一緒に歩きながら、この花は取る、これはまだ早い、これは咲き過ぎだ、花粉が詰まっている、などとやはり早口だ。

「茎をひっぱるんだが、一つ方向にひっぱって取りにくかったら向きを変えてひっぱってみな、この列の花は取りやすいから、小宮君でも取れるだろう。ちよつと他のハウスに行ってくるから、よろしく頼む。よくわからなかったら、あそこにいるパートさんに聞きな」
宮本さんは同じハウスで花取りをしているパートさんに二言三言言い残し、本当に行ってしまった。

右も左もわからない翔平は、それでもガーベラを取り始めた。五本とってパートさんに見てもらい、十本とってまた見てもらい、二十本を取って見てもらいしているうちに、半列を取り終わった。なんだかりズムに乗ってきた気がして、そのまま花を取り続け一時間以上が過ぎた。エイプリルフールのこの日、自分のやっていることは現実なのか何なのか半信半疑のまま、しかし翔平は夢中になって作業を続けている。二時間ほどして宮本さんが帰ってきた。翔平が取り終えた範囲を確認すると、うんうんとうなずいて、指導してくれたパートさんに声をかけた。

「随分たくさん取ったみたいだけど、小宮君の筋はどうだ？」

「上出来ですよ、かなりセンスがいいみたいです」

「だってよ、小宮君。土曜日も取らないかんから、また手伝ってくれると大助かりなんだがな」

土曜日でもまた来ることに、いやまた来れることになった。後で聞いたのだが、ガーベラ農家は三月が書き入れ時、春を迎え花立ちも増えたその三月をうまく乗り切り、四月になれば今度は改植の準備に追われ、かわいそうなくらい忙しいと言う。翔平は労働力として期待されることとなった。

土曜日ハウスに入ると、前回指導してくれたパートナーさんが手招きしてくる。彼女のもとに行くと、「この花よく見てみな、ちっちゃい虫がはつてるでしょ、これが花につくダニ。ダニは繁殖が速いから見逃したらすぐに広がっちゃう。慣れればダニに吸われた葉っぱを見て、こちら辺にいるな、と見当がつくけど、最初は花をよく見ることだね」採花する際のポイントの一つを教えてくれた。

次の週から週三日の採花には、翔平も参加することになった。

「夜は塾で、午前中は花取りじゃあ、体に堪えない？」と志保は気遣ってくれたが、それは違う。塾での仕事

は、翔平の心に多少のえぐみを生じさせる。翌日に引きずったその苦みが、午前のガーベラハウスの労働で帳消しになる。

三週間ほど経つと日曜日の出荷の作業も手伝うようになった。翔平にできるのは、花を入れる段ボールを組み立てたり、ガーベラを入れてある容器の水を切ったりする程度のことである。四十種類に及ぶガーベラの名前と、花の大きさ・ポリウム感などが分かっていないと、出荷の作業を一人ではできない。ガーベラの出荷先は、東北は秋田、関東は千葉・埼玉・東京、北陸は金沢、関西は姫路の各市場である。市場に出荷してしまえば、花屋に売るのは市場の仕事だ。つまりお客さんと直接接触することがないので、営業の出番がない。そのうえ市場は減ることはあっても増えることのない花農家を、むしろお客様扱いしてくれる。汗を流して花を咲かせ、出荷してしまえば完結するという、営業の色が存在しない心に優しい仕事がこのにあった。翔平の中に、決意のつぼみが形を作り始めた。

五月になると智也が加わった。智也の指導係はもっぱら宮本さんであった。教えても相応の返事が返ってこないのが、改善の度合いは花取りの実際を見て判断する他はなかった。それでも智也の成長は早く、それ

を宮本さんが褒めそやせば、智也の花取りは益々勢いを得た。二人は採花に一区切りがつくと、改植のハウスに移動し、苗を植える準備に追われた。智也は残渣を片付けたり、ヤシガラを鉢に詰めたり、飽くことなく黙々と肉体労働を引き受ける。

しかしガーベラ農家の仕事には、科学の色を帯びたものもある。また空の鉢を殺菌消毒するところからは、ある程度の神経戦が加わる。鉢にヤシガラの培地を詰めれば、それも殺菌消毒し、あく抜きできるまで真水を流す。あく抜きの完了は、廃液の濃度を計器で測定する。次に液肥を培地に流し続け、養分をある程度含んだ培地を作る。この時の液肥濃度も計器で測る。また四つある全てのハウスでは、光量を計り水やりの量が決められる。毎日流す液肥の濃度もEC計という計器で測定して決められる。そんな繊細な作業は、さすがに宮本さんが一手に引き受けた。

三十日はガーベラの苗植えの日であった。翔平も智也も含めパートさん全員が参加した。四月から二か月続いた改植の準備がやっと実を結び、空のハウスに命が植えられる。農家にとっては晴れの日となる。手際がよい作業は順調に進み、三時間ほどで終了した。

六月に入った。植え付けた苗が活着するまでは多めに給水するが、水を絞るタイミングが難しい。給水が

多いままでは、今度は根腐れを起こしてしまう。熟練の眼が必要となる。しかし改植の準備に時間を割くことはなくなり、日々の仕事に余裕ができた。日曜日の出荷が終わると、宮本さんから昼飯に誘われた。翔平の車に乗り込んだので、察しがついた。今日はもう仕事終わりにして、昼から一杯やるつもりだな。

隣町の和食の店に入ると座敷席に収まった。

「悪いな、車じゃなかつたら勧めたいところだが、今日は我慢してくれよ」

「家までちゃんと送り届けますから、好きなだけ飲んでください」

「酒飲みじゃあありがたい言葉だな。ところで智也はどうだ？ 智也の母親に、このままじゃあ死んでも死に切れん、仕事をさせてやってくれと拝むように頼まれてな」

「しつかりやってますよ、本来は体を動かして働くことが好きだったんじゃないですか、パートさんとも少しずつ馴染んできましたし」

宮本さんはあの智也がなあと笑った。

「だけど智也が立ち直る気配を見せたのは、俺のせいじゃないよ。きつと農業やガーベラがそうさせたんじゃないかな」

それは翔平も同感であった。この仕事は本物だ。何し

ろ三十年以上社会に背を向けていた男を、輝ける男に変えようとしているのだから。酒が進んでくると、宮本さんは饒舌になり半生を語り始めた。

智也は宮本さんの息子さんと幼馴染で、小学校一年までは互いの家を遊び場として仲が良かったそう。ところが智也が二年生で不登校になり、付き合いが途絶えたと言う。

息子さんとは言えば、農業を継ぐべく東京農大に進学したのだが、大学二年の夏休み、帰省すべく東京からバイクで東名を駆けて来たところ、袋井まで来て事故で命を落としてしまった。宮本さんの言葉で言うと、「あの時の俺は半狂人であった」と。

「なんで袋井まで来て、俺の息子が死ななならんだ、霊安室で警察官の胸倉をつかんでしまった、今思うと恥ずかしい」
苦笑いを浮かべた。

宮本さんは奥さんと涙が枯れるまで泣いた。たった一人の子供を失い、仕事が手につかない。何のために仕事をするのかと思うと、むなしくてとても仕事とは向き合えない。全てのハウスの水を切ってガーベラを枯らしてしまったそうだ。一年半ほど無為に時間を過す日々が続く、酒量だけは増えていく。このままでは廃人になるなど思ったある日、ふと浮かんだ。

「何のために働くのか、なんて思うからいけない。働くために生きるんだ」

そう思えば萎えた足に踏ん張る力が湧いてきて、ハウスを復興させる決心をした宮本さんであった。

そこから大変だった。ハウスにはガーベラの残渣が溢れている。それを片付ける所から始めなければならぬ。奥さんと来る日も来る日もその作業に明け暮れた。するとパートさんが、無給でもいいからと、一人また一人と手伝いに来てくれた。

「働くために生き、生きることを手助けしてくれる人がいる、俺はうれしくて涙が出た」
宮本さんは当手を振り返った。

働くために生きる、その言葉は翔平の胸を打った。

俺はそんな熱量で仕事をしたことがあっただろうか。仕事をしていて息を吐きただけではないか、翔平は深く内省した。

翔平はこの仕事に自分をかけてみようかと決めた。しかし息子さんの死を知ったたつた今そのことを口にすれば、感傷に駆られてと思われかねない。場を改めて宮本さんに話そうと、酔いのまわった宮本さんを車に乗せた。

七月に入り、会社には夏期講習をもって退社させて

ほしい。二学期からの時間割は、自分抜きで組んでもほらいたいと申し出た。会社からは教師の数に恵まれている訳ではないので、今年いっぱい授業を担当してほしいと頼まれた。無責任を決め込むことはできなかった。

宮本さんには、年内で塾講師は止め、来年からはガーベラの仕事に専心したい。熱のこもった仕事をしようと思っていると伝えた。宮本さんは、張り合いが出来たと喜んでくれた。

「翔ちゃん、二つの事を言っておくからな。一つはこの前話のように、俺には跡取りがない。働けるうちは働くが、俺も若くない。体がついてこなくなったら、どうしたもんかと考えていた。俺は俺で小宮翔平という男を見てきたつもりだ。ゆくゆくは全てのハウスを経営するつもりでおってくれ。」

二つには智也を頼むぞ。あの世に行つて息子に会ったら、俺も智也と遊んだんだぞ、と言つてやる」

翔平の眼に涙が滲んだ。

以降の宮本さんの指導は、栽培の核心ともいふべきものに移った。液肥のレシピ・給水のコンピュータや液肥を打ち込むポンプ、光量計の操作方法などであった。翔平は聞き漏らさぬようメモに取り、帰宅するとパソコンに入力した。

八月は午前中から夏期講習の授業があり、平日はガーベラの作業に参加できなかったため、日曜日の出荷を手伝った。ガーベラの品種ごとの名前やその特徴がほぼ頭に入っていたので、一人できる作業量は多くなつた。それにしても八月のガーベラは可哀そうだ。暑さにやられ、茎は細くなり、花径は縮み、花色はくすんでくる。酷暑にいたぶられるのは人間だけではない。智也は靴の中で汗をしみこませ、それでも無遅刻無欠席を貫いて、酷暑をやり過ごした。

花のへたりは九月を迎え、徐々に回復してきたが、度を越えた猛暑がはじめた株は、つぼみを多く立たせない。十時前に仕事終わりになった日に、翔平は智也をドライブに誘つた。

最初は海を見に浜名バイパスを走つた。智也は、「はな」を膝に乗せ、太平洋の白い波しぶきを喜んでゐる。

「翔ちゃんは車運転できるなんてすげーな、いつ免許取つたんだ？」

「大学生の時だよ」と言おうとして、「二十歳の時だよ」と言葉を変えた。

「車はすげーいいよ、いいよ」

智也を感動させたのは、ガソリン走行と電気走行を自在に操るハイブリットの妙や、緻密なカーナビなどではない。座席に座れば人力の及ばない速さで、どこへ

でも行けるといふ車の原点に感動しているのだ。湖西市に入り、道の駅に車を止めると、近くの海岸まで歩いた。

二度目は浜名区細江町気賀を抜け、引佐の龍潭寺に行った。門前の店先には、今だに井伊直虎ののぼりが掲げられている。井伊谷宮に回り、「こうやってお参りするんだよ」と二拝二拍手一拝をして見せた。「智也さんもやってみな」と言うと、周りに人がいないのを確認して、不器用なやり方で智也もお参りを済ませた。

午後に仕事を抱えていれば、長いドライブには行けないので、三回目は日曜日を選んだ。出荷を早めに済ませ、龍潭寺を超えて、奥山まで行った。奥山山の家でジンギスカンを食べた。一生懸命食べる智也が愉快だった。方広寺を指して急な坂道を登って行く。巨木が天をめぐって連なっている。両手を回しても半分ほどにしか届かない。

「こんなばかでかい木が、世の中にあるもんなんだな、俺初めて見るよ」

方広寺を散策して、帰りに竜ヶ岩洞に寄った。洞窟に入ると外の残暑が嘘のように寒い。冷気が細胞に染み入ってくる。

「一体ここは地球かね。今日は驚くもんばかりだよ」

智也は心底驚いている。智也を家まで送り届けると、車を降りる時にうれしいことを言ってくれた。

「翔ちゃん、今日みたいに楽しいことは初めてだった。一生分のありがとだな」

それはよかったね。智也さんこれが遠足だよ。俺も宮本さんの息子さん以来の友達になれたかな。

十月を目前に控え、秋本番が見えてきた頃、農家にとつて最大の難敵が立ち上がった。大型の台風が浜松を直撃しそうな雲行きだ。宮本さんの長年の経験によると、沖繩を通過した台風が九州の手前で偏西風になり、向きを東に変えれば、もう浜松周辺を襲つてくと決まっているらしい。五日間進路を見ても、どうやらそのようだ。明日は智也とハウスの養生だと宮本さんは言った。二十八日のこと。

二十九日、採花の日ではなかったが、翔平はハウスが気になって八時前に到着した。宮本さんはベンチに座り、立ったままの智也と向かい合っている。

「翔ちゃん、おじさんの様子がおかしいよ」

「ええ？ どうしたの、宮本さん俺も養生手伝いますよ」

そう言ってみたものの、会話が成り立たない。

「そうだなあ、ああ、やる……いま……」

地面に落ちた軍手を拾おうとしても、その動作も完結

しない。ただ事ではない。すぐに救急車を呼んだ。奥さんにその旨伝え、保険証などを予め用意しておいてもらった。救急車が来ると、宮本さんは担架に載せられ、奥さんの付き添いの元、救急車内の人となった。心配で何も手につかない。智也も同様で、言葉にストレートに表してくる。

「おじさん死んじまうのけ?」

「そんなこと、言うもんじゃないよ」

と答えてみたものの、翔平も同じことが頭をよぎった。十時ごろになって奥さんから携帯に連絡があった。

「翔ちゃんのおかげで、処置が早くて命に別状はないよ。軽い脳梗塞、言葉もさつきよりはかなりはつきりしている。ホントにありがとね。ただ一週間から十日は入院することになるし、退院してもすぐには前のように働けそうもない。二人に頼るしかないね」

OKマークを作つて智也に知らせながら、心配だから二人でそちらに行きましようかと言うと、怒られた。

「そんな場合かね。台風が来るよ。ハウスの養生をしないでどうするの。ハウスを守れるのはあんたらしかないんだよ。お父さんいつ何があるかしれんと言つて、栽培方法やら消毒の仕方やら、水やりやら何から何まで全部ノートに書いてたよ。きつとハウスの養生のやり方もそこに書いてあるら。作業場の机の上から

二番目の引き出しに入っている。すぐに養生を始めて。頼むよ」

宮本さんは発見が早くて助かったと智也に告げ、ハウスの養生を急ごうと言つて作業場に向かった。奥さんが言つたノートがあった。鉛筆書きの字で書かれているのに、訂正箇所は消しゴムで消さず、二重線を引いて書き直されている。苗の植え付けから始まり、水やり、消毒等々インデックスを付けられ克明に書かれている。その最後にハウスの養生についてという項があった。

ビニペットという金属の細い板にハウスの屋根の端のビニールをばねで固定し、直管パイプをマイカ線という丈夫なひもで樋に結び付ける。側面のビニールの端も同様にビニペットに固定し、塩ビの雨どいに直管パイプを縛り付ける。

すぐに必要な工具を準備し、作業場前のハウスの屋根に上つた。一つ目を翔平がやってみせると、智也は呑み込みが早い。しかしなんとか持ちこたえていた重苦しい空から雨が降り始めた。降り始めるや激しく打ち付けるように降る。風も勢いを増している。二人一組で当たらないと危険だ。一人がハウスの屋根に登り、それぞれ両端に向かい作業の手を速めた。時間との戦いだ。

ハウスは四つある。一つを終えると、梯子を軽トラに載せ二つ目に移る。二つ目を終えて、三つ目。いよいよ風が強くなってきた。雨は斜めから降って地面を走る。最後の四つ目のハウスに着いた。やっと完成が見えてくると、激しく手を動かしながらも、翔平は志保のことに思いが至った。

志保とは離婚しよう。この頃では父親との関係を俺にこぼしてくることが多い。しかし医療上のことが発火点であるのなら、俺には如何ともし難い。それで志保の気持ちも少しだけ柔らかくなっても、それは気休めの域を出ない訳で、気休めを繰り返していても、志保は人間としても医者としても成長はしないだろう。俺を緩衝材にしているだけではだめだ。もうすぐ三十になる志保に再婚話が持ち上がった。今の社会においては、女性の三十歳だつてさながら晩婚にはならないだろう。志保の幸せを祈りつつ、俺は働くために生きてみよう。汗粒の数だけ咲かせた花の数だけ、心の中心に鼓動のようなものが芽生えるはずだ。

もうこれ以上屋根の作業は無理だと思わせる風力に至り、やっとすべてのハウスの養生を成し遂げた。梯子を伝い地面に降りる。ふと智也の腕を見ると、擦り傷に薄く血がにじんでいる。武骨で太い男の腕だ。こ

れが働く男の腕だ。俺もこんな腕を持つとう。翔平はそう思い空を見上げた。

鈍色の空には重さに耐えかねた雲がひしめいている。いよいよ台風が檻を乗り越えたようだ。作業場に帰ると、机の上に宮本さんが鉛筆書きで記したノートがある。翔平はタオルで腕をぬぐうと、そのノートの裏表紙に、「働くために生きる」太いマジックの黒で書いた。

(中央区)

「入選」

えんじ色の花

たみのさち

彼女が浜松にやってきたのは、昭和二九年の初夏の頃であった。六月生まれの彼女は東京の地を離れ、見知らぬこの地で、新たな人生を歩むことになったのである。

「果たして、私みたいな新米が、みんなと仲良くやっ
ていけるのかしら。」

でも、やると決めた以上、精一杯力を尽くしてやる
しかない」

彼女は、不安と希望を胸にいつぱいに抱きながらや
ってきた。

「うん、絶対大丈夫！」

これまで何度も何度も、業務のための試験を繰り返
してきた。全ての試験にパスして、試験官に太鼓判を
押された。東京から送り出される時、私に関わってく
れた人々が、みんな揃って大きく手を振ってくれた。

真新しいえんじ色の、スマートなコートに身を包ん

だ彼女は、初めて浜松の地に降り立った。

浜松の街は、活気に満ちていた。

九年前の忌まわしい戦禍の跡は影をひそめ、街中の
道路をオートバイやトラックがひっきりなしに行き来
している。

繊維、楽器、木材加工、二輪車といった製造業がよ
うやく息を吹き返し、人々は日々を懸命に生きていた。

街中には、千円バラックと呼ばれる簡素な住宅が並
び、市民の生活は決して豊かではなかったが、戦争の
ために抑圧された屈辱を晴らすように、未来に向かう
活力が、この街には溢れていた。

彼女は、この街が自分の活躍の舞台かと思うと、急
に元気が湧いてきた。

彼女の就職先は、遠州鉄道奥山線である。

奥山線の車両基地は、浜松城の北側の、元城という
駅構内にあった。

彼女は、到着するなり、複数の作業員による身体検
査を受けることになった。

何人かの男たちが、彼女のコートの裾に潜り込んで
点検を始めた。また、別の男たちは、彼女の扉を開き、
中に入り込んで、スイッチ操作の点検にかかっている。

「よし、異常なし！」

「こっちも、水漏れ、油漏れなし、OK！」

「なら、次は走行試験だに」

セルモーターが回され、彼女はブルンと体を震わせてエンジンを始動させた。

「アイドリングは安定してるだね」

「ちーと、走ってみっか」

彼女は、エンジンの回転音を上げ、駅構内をゆっくりと走り出した。五〇メートルほどの距離を、何度か往復して、異常がないか確認する。

「よし、走行試験もバッチリだに！」

「明日から、本線で試運転だで」

彼女の名前は、キハ1803といった。

汽車会社製の、長さ約一〇メートルほどのディーゼルカーである。

*

その日の夜、彼女は、駅構内の留置線に留め置かれた。夜遅くまで働いていた従業員たちも、すでに帰ってしまい、常備灯だけが、駅構内の線路や車両たちをほのかに照らし出していた。始発列車が走るまでの

間、時が止まったかのように静寂があたりを支配する。

「よう、新入り」

彼女は、不意に声をかけられた。

ふと声のする方を見ると、留置線の一番隅っこに、凸型のディーゼル機関車がたたずんでいる。DC1901形だ。

「こんばんは、おじさん」

彼女は言葉を返した。

「ふっ、いいな、若い衆は。スマートでピカピカしててさ」

「やだ、そんなことないですよ。おじさんだって若く見えますよ」

「ははっ、そうか？ 幾つに見える？」

「二、三歳くらいかな」

「バカ言え、そんな若くなんてないぞ。俺は今年で43歳だ」

「えーっ！ 信じられない！ だって、ボディもまだ新しいじゃないですか」

「そう見えるだろ？ 俺は改造を受けて、生まれ変わったんだ」

奇妙な凸型をしたディーゼル機関車が答えた。

「おじさんは、どちらの生まれなんですか？」

「ああ、俺の故郷はイギリスだ。最初は、蒸気機関車として製造された」

「えー！ 信じられないーい！ イギリスから海を渡ってこられたんですか？ しかも、蒸気機関車って、あの煙モクモク吐くやつでしょ？」

「そんなに驚くことじゃないさ。昔は、外国から機関車を輸入するのは当たり前のことだったんだ。日本にはまだ技術がなかったからねえ。」

だが、さすがに、この歳になってディーゼル機関車に改造されるなんて、俺もびっくりしたよ」

「そうだったんですね。そういえば、おじさんの車輪のあたり、SLっぽいすねー」

「そう、足回りは昔のままなんだ。この、車輪をつなぐロッドだってそうさ」

「ふーん。なんだか、おじさんもいろいろ歴史がありそうね」

「ああ、俺がこの奥山線にやってきたのは、昭和二二年だ。それまでは、福島県の沼尻鉄道にいたんだがな」

*

第二次世界大戦で空襲を受けた浜松は、壊滅的な被害を受けたが、浜松鉄道も元城の本社や駅舎を空襲で

焼失し、車両も破壊、焼失して使い物にならないものが多数出た。戦時中の非常事態で、保守点検も行き届かず、線路はガタガタになっていた。

線路も車両も満身創痍の上、物価も高くなり、自力での再建の目処のたない浜松鉄道。そこで、名古屋鉄道局の勧めで遠州鉄道と合併の道を選び、遠州鉄道奥山線として新たな出発をしたのである。

*

「俺は、まさにこの時に奥山線にやってきたんだ。はじめにやらされた仕事は、傷んだレールや枕木を交換して、線路を整備することだった。そしてもう一つ、線路を電化することになって電柱を立てたり、架線を張ったりする仕事もやったな」

「え？ 電車が走ってるの？ だって、おじさんも私も、ディーゼルエンジン積んでるじゃない。なんで私が、こんな電車の走る鉄道に送り込まれたのかしら」

「あれ、お嬢さん、この奥山線のこと、何も聞かされていないのかい？」

「ええ、とにかく行って頑張つといで、って送り出されただけで」

「そうか、じゃあ、今の奥山線の状況から説明しよう

か」

DC1901が言った。

*

戦後の鉄道の燃料事情は不安定だった。

石炭は質が悪いものが出回っていて、蒸気機関車は力を発揮できなかつたし、かと言って、石油燃料も、石炭とともに品不足から高止まりが続いていた。

そこで、各地の鉄道では、非電化の路線を電化しようという動きが活発になり、ここ奥山線にも電化の波が押し寄せた。

また、電化はされなくても、蒸気機関車の煤煙が嫌われ、路線は無鉛化、つまりディーゼル機関に置き換えられていったのである。

*

「それで、起点の板屋町から、曳馬野（ひくまの）までが四年前、昭和二五年に電化され、曳馬野から終点奥山までが三年前、昭和二六年にディーゼル化されたんだ。

これまで活躍していた蒸気機関車はお払い箱になっ

てしまった。俺は幸運にもディーゼル機関車に改造されて生き残ったんだけどな」

「おじさん、奥山線は、全線電化はしなかつたんですか？」

「曳馬野から先は、お客が少ないから、電化するメリットがないので、ディーゼルカーで運行しているんだ。俺も出動することもある」

「……ってことは、わたし、その非電化区間に配属されるってこと？」

彼女は、激しく落胆した。きっと田舎の寂れた風景の中を走らされるんだわ。

せっかく浜松のシテイガールとして華々しくデビューしようと思つてたのに。

*

翌る日、彼女は、元城駅の駅長から、同僚たちを紹介された。

電車、いわゆる電動客車は、

モハ1001、モハ1002、モハ1003、モハ1004の四両である。皆、お揃いのえんじ色のコー

トを着用している。いずれも、戦前の気動車の車体を流用、もしくはコピーして新造された車両たちであった。設計が古いためか、窓周りは補強用の鉄板をぐるりと回したゴツゴツしたデザインで、窓ガラスの面積も小さめだった。だが、頭の上には髪飾りよろしく、大きなパンタグラフが乗っかっていて、都会の雰囲気をかもし出していた。

「初めまして、キハ1803と申します。みなさん、よろしく願います」

キハ1803は、あいさつをした。

「あなたが新入りさんね。窓も大きくて、ボディもスラッとして、なんだかスマートで羨ましいわ」

モハ1001が言った。

「そんなことないですよ。お姉様方こそ、立派なパンタグラフがあって、素敵ですね。とつてもモダンで、憧れてしまいます」

キハ1803が言った。

早朝の元城駅は、小鳥の鳴き声だけが響いている。街はまだ、静寂の中であった。

「さて、キハ1803さん、今日は、奥山まで試運転だに。モハ1001さんが始発電車としてここを出発するもんで、そのあとについてほしいやあ」

駅長が言った。

「わかりました」

キハ1803が答えた。

朝の澄み切った空気の中を、一台の客車を引き連れて、モハ1001が元城駅を発車した。そのあとにキハ1803が続く。

駅を出ると、すぐに亀山トンネルである。モハ1001は、大きなパンタグラフをギョッと縮めて、背の低いトンネルの中をくぐって行った。

亀山トンネルを抜けると、線路は右に大きくカーブを描き、広沢の駅に滑り込む。ここで乗り込む乗客はまばらである。

広沢の駅を出発すると、線路はなだらかな登り勾配にかかる。坂の途中から、浜松の街が見下ろせる。

「まあ、なんて素晴らしい風景なの！」

キハ1803は驚きの声をあげた。

やがて列車は幅の広い国道の踏切を二つほど超えて、街中の裏通りを走り抜ける。ここから先は、三方原平野を一直線に北へ、幾つもの停車駅に止まりながら進んでいく。人や車に溢れた街中の賑わいは、彼女の心を踊らせた。

だが、北に進むにつれて、建物はだんだんと少なく

なつていき、畑や草むらが目につくようになってきた。曳馬野の駅に着く頃には、周りは畑ばかりで、民家や商店がポツポツと点在している、すっかり田舎の風景になってしまった。

「さあ、曳馬野駅に着いたわ。私が来れるのはここまです。ここから先は、あなたたち、ディーゼルカーの出番よ」

モハ1001が言った。

「あ、はい！」

キハ1803は慌てて答えた。

「じゃあ、ここから先は、よろしくね」

モハ1001は、しばらくして、もと来た道を帰っていく。

え？ここに一人置いていかれるの？

わたし、寂しいわ。こんな田舎にポツンと一人なんて。

その時、

「モー——」

という鳴き声が聞こえた。見ると、黒い牛が、荷車を引いて、ゆつくりと彼女の横を通り過ぎていく。

ああ嫌だ。ホントにド田舎！

わたしは、本当だったら、浜松の街中を、満員のお客さんを乗せて走るはずだったのに。

「やあ、キハ1803さんかね？ ようこそおいでなすつたなーや」

声のする方を見ると、曳馬野駅の駅長さんが、人懐こい笑顔をたたえて立っていた。

「あ、おはようございます」

キハ1803は、かしまって答えた。

「まあまあ、そんな緊張せんでもいいでね。

あ、1803で、番号で呼ぶのも変なもので、『サリ』と呼ばせてもらっていいかね」

「え？『サリ』ですって？ キヤツ、素敵！」

キハ1803は、嬉しそうに笑った。

「ここには、先に『イーダ』と『ニーナ』という先輩達がいるもんで、仲良くしてやってほしいやあ。よろしく頼むでね」

「え？『イーダ』と『ニーナ』？」

「キハ1801さんは、末尾が1だから『イーダ』。

キハ1802さんは、末尾が2だから『ニーナ』。アントは、末尾が3だから、『サリ』」

駅長さんは、車両にニックネームをつけて楽しんで

いるようだ。

*

しばらくすると、北の方から、ディーゼルカーが客車を引いてやってきた。車体には、1801と書いてある。ディーゼルカーは、曳馬野駅のホームに、ゆっくりと入って止まった。

「おお、イーダ、お帰り」

駅長が声をかけた。

「ただいま。あら、新入りさん？」

イーダは、サリーの方を見て言った。

そして、駅の車庫の中から、もう一台のディーゼルカーがあくびしながら顔を出した。車番は1802だ。

「あー。眠いー」

「ニーナ、シャッキリせんかい！」

駅長さんが喝を入れた。

「あ、ごめんなさい駅長。あれ、この人新人？」

ニーナもサリーの方を見て言った。

「これで三人揃ったな。イーダ、ニーナ、こちらが今日から奥山線で一緒に働いてもらうサリーだに。これからは、三人で力を合わせて、頑張ってくださいよう」

駅長さんが言った。

「サリーと言います。さつき駅長さんに名付けてもらいました。昨日、東京からやってきました。よろしくお願います」

キハ1803は言った。

「初めまして、ウチはイーダ言いますねん。よろしいのんますわ」

キハ1801が言った。

「ウチは、ニーナですねん。ウチら、双子の姉妹ですねん。よろしく」

キハ1802が言った。

「ウチらの故郷は、兵庫県の尼崎やねん。ナニワ工機の工場から。もう四年前の話や」

「月日の流れは、あっちゅう間やねー」

二人の姉妹は、そう言って笑い合った。

「せやけど、アンタ、体もシュツとして、カッコええなあ」

イーダが言った。

「まあ、ホンマに、ここで働くにはもったいないような美人さんやなあ」

ニーナが言った。

「いや、そんなことないですよ。わたし、わからないことだらけなので、いろいろ教えてくださいね」

サリーは言った。

そうなのだ。正直、わたしはこんなところで埋もれるために生まれてきたんじゃない。

あなたたちと一緒にしないで。

密かにサリーは思った。

*

「サリー、今日は、終点奥山までの試運転だに」

駅長さんは、サリーに向かって指示を出した。

「はい、わかりました」

サリーは答えた。

「サリーちゃん、初めまして。今日はよろしく」

そう言つて、制服制帽でビシツと決めた運転手が乗り込んできた。

運転手がアクセルレバーをふかすと、エンジンは回転音を上げ、ゆっくりと車輪が回りだす。

曳馬野を出発したキハ1803は、進路を北に向けて走り出した。三方原、豊岡、都田口と、平坦で直線の線路が続く。周りは真つ平らな畑で、民家があちこちに点在している。夏の蒸し暑い空気を追い出すかのように、窓は全開だ。涼風と一緒に、オニヤンマが一

匹、車内に飛び込んできて、また出て行った。

「さあ、ここから急な下り坂だでね」

都田口を出発した時、運転手が言った。

「了解」

サリーは答えた。

線路は左の方に大きくカーブを描きながら下り勾配となり、両側は深い切り通しとなって、深い谷に分け入っていく。

切り通しを抜けると、小さな鉄橋で川を渡り、山の中腹を縫うように、長い下り坂が続く。狭い谷ではあるが、右手に視界が開け、築堤の下には青々とした田圃が広がっている。

坂の途中に、ポツンと小さな停留所があった。谷駅である。周りには全く民家がない。

ただ一つ、駅の下の方の田圃の中に、水車小屋があって、コットン、コットンと時を刻んでいた。

サリーは、この駅に静かに止まった。

周りの山の木々は、盛夏の日差しを浴びて、深い緑色の葉をゆらゆらと揺らしていた。

カエルの声と、小鳥たちのさえずりと、水車小屋の音だけが狭い谷間に響き渡る。

「この駅にはなあ、昔、蒸気機関車の給水塔があっただよ」

運転手が言った。

「え？ それはなんでなんですか？」

サリーが訊いた。

「この坂はなあ、急な勾配が長いこと続くもんで、蒸気機関車が途中で水を補給しないと登れなかったもんで」

「そうなんだ。大変な時代があったんですね」

サリーはまた、静かに走り出して、祝田（ほうだ）駅への下り坂にかかった。

線路の築堤は、坂を下りきったところで大きく右にカーブを描いて、祝田駅に滑り込む。ここから都田川にかかる鉄橋を渡る。太陽の光が、川面に跳ね返って、枕木の間からキラキラと輝いている。すぐ足元に水が流れていると思うと、足がすくむ。

「わっ、怖い！」

「サリーちゃん、下を見ちゃいかんに！ 前を向いて！」

運転手が言った。

「はい……」

サリーはガタンゴトンと音を立てながら、そろそろと鉄橋の上を進んでいく。

左右に揺れないように、そつと、そつと。

やがて、向こう岸が近づいてきた。もう少し、もう少し。

「よし、渡り切った！ サリーちゃん、やったな！」
運転手が言った。

サリーは、ホツとため息をついた。
目の前に国鉄の線路が見えてきた。奥山線の線路は今度は大きく左にカーブを描き、国鉄二俣線と並行に並ぶ。ここが金指駅である。

*

「よっ、かわいい子ちゃん！ どこから来たんだい？」
サリーに声をかけてきたのは、国鉄蒸気機関車のC58型だった。

「東京よ」

サリーは短く答えた。

「へー、シテイ・ガールなんだね」

何よ、この男。なんだか、真っ黒で、図体がでかくて、ガサツなやつ。

シテイ・ガールだなんて、当てつけみたいでイラツとするわ。

わたしはもう、カントリー・ガールに成り果てようとしているのに。

「悪いけど、あんたなんかとランデブーはできないわ。だって、線路の幅が違うんだもん」

「チエツ、つれないなあ」

サリーは、C58には目もくれず、線路をずんずん進んで行った。

金指駅を出て、奥山線の線路は、国鉄二俣線の上を乗り越えて、その北側を並走する。

この辺りは金指街道沿いで、少し賑やかだ。

道ゆく人が、みんな、サリーが通ると振り返ってゆく。

「わたしって、やっぱり、魅力的なのかしら」

サリーが言った。

「いや、違ったら。初めて見る車両だもんで、みんな珍しがってるだけだら」

運転手が言った。

「もう、運転手さんのいじわる！」

サリーはふくれた。

線路は、岡地駅を過ぎて、気賀口駅に向かって伸びている。

並走する二俣線を、さっきのC58がモクモクと煙を吐いて走ってきた。

「よう、かわいい子ちゃん」

「何よ。ここまで追いかけてきたの？ しつこいわね」

「バカ言え、俺は配送の任務を果たすために走ってきただけだよ」

「あっそう。頑張ってるね」

「俺の名は、シゴハチって言うんだ。覚えといてくれよ。君の名は？」

「わたしは、サリー」

「サリーちゃん、じゃあ、またな」

シゴハチは、ポーッと汽笛を大きく鳴らすと、大勢の貨車たちを引き連れて走り去っていった。

「へえー、シゴハチって、悪いやつでもなさそうね」

サリーが言った。

「あいつは、働き者だに。客車から貨車から、なんでも運びよるでな」

運転手が言った。

気賀口を出発すると、すぐに線路は井伊谷川を渡り、今度は右に大きくカーブして川沿いを走る。やや上り勾配となり、やがて井伊谷川を離れて林の中を進んだ先に、正楽寺の停留所がある。正楽寺を過ぎると、伊那谷駅、四村駅、田畑停留所、中村駅と、緑の木々のトンネルやのどかな田園風景の中を、緩やかなカーブが左に右に連続して線路は続く。小さな切り通しや鉄橋などをいくつか過ぎて、涼風が車内を吹き抜けていく。

「なんだか、奥山線の名前の通り、山の奥までやってきてしまったわ。大丈夫かしら」

サリーは思った。

低い山々に囲まれた、神宮寺川に沿った谷を、サリーは走っていた。あたりは一面の水田で、鮮やかな緑色の稲が、風に吹かれてそよそよとたなびく中を、一台のえんじ色のディーゼルカーが、ゆっくりと通り過ぎてゆく。

田んぼの中で、草取りをしているおばさんが、サリーを見つけて手を振ってくれた。

「おー、おヨネさーん、元気かいねー」

運転手も、おばさんに手を振り返している。

「ああ、人情があつて、あつたかくて、田舎も悪くないわね」

サリーは思った。

神宮寺川を鉄橋で渡り切ったところが、小斎藤（こざいとう）停留所である。

「いよいよ、次は終点の奥山だに」

運転手が言った。

サリーのエンジンは、うなりをあげて、最後の上り勾配に挑んでいく。

やがて、竹やぶの脇を通り、神宮寺川を再び鉄橋で越え、左にカーブした先が終点の奥山駅である。

サリーは、まっすぐ進んで、駅の改札に面したプラットホームに滑り込んだ。奥山駅の本屋は、瓦葺きの屋根の木造駅舎で、こじんまりとまとまった印象を受ける。

線路は、動力車であるディーゼルカーを客車の前に付け替えるための機回し線が一本。そして、ポツンと

一つある車庫に続く線路が一本。駅構内は閑散としており、終着駅の哀愁が漂っていた。

「やあ、サリー、よく来たなーや。

どうでえ、奥山線の走り心地は」

奥山駅の駅長が言った。

「駅長さん、はじめまして。

最初はとんでもない田舎に来てしまったと思いましたが。でも、沿線風景は、坂があったり、鉄橋を渡ったり、緑のトンネルをくぐったり、けっこう変化があった面白かったです。

それに、なんだか人も温かそうで」

サリーは答えた。

「そうだら？ ここはのどかでいいところだら？」

奥山線の駅長さんが言った。

その時、オニヤンマが飛んできて、サリーのヘッドライトに止まった。

「おう、オニヤンマさんが、お祝いにやってきたぞら」
運転手が言った。

「ここはまだ、道が悪いもんで、鉄道は大事な交通機関だぞな。サリーちゃん、しっかり頑張ってお客さんを運んでくりよう。

室内も明るくてきれいだから、みんな、きつと喜ん

でくれると思うやあ」

駅長さんが言った。

「わかりました。精一杯頑張ってみます」

サリーは答えた。

そうね、カントリーガールも悪くないわね。

サリーは、心の中でそう思いはじめていた。

「サリー、ほちほち曳馬野まで帰ろうかね」

運転手が言った。

「それじゃ、駅長さん、また今後ともよろしくお願いします」

サリーが言った。

「はいねー」

駅長さんが答えた。

プアーン、と汽笛を鳴らして、サリーはもと来た道を、軽やかなジョイント音を残して引き返していった。

テールライトの灯りは、やがて小さくなって、山影に消えた。

祐介の妻

大重晴よし

(一)

青木祐介がアパートに帰宅したのは、八時を過ぎていた。彼は、自宅の明かりが消えていることを確認して、玄関のカギを開けた。予想していたことだが、妻の姿はなかった。

靴を脱いでキッチンまで行くと、テーブルの上にメモが置かれているのに気がついた。妻である早紀の手書きのもので、急いでいたのか、いつもより乱暴な文字に見えた。

「今日は少し遅くなります。食事は自分でお願ひします」

祐介の口から思わずため息が出た。本当に夕食の用意はできなかつたのだろうか。

早紀が、「工芸社」という美術工芸品を扱う会社に勤めたのは、美大を卒業してすぐのことである。それは、もちろん二人が結婚する以前のことだ。二人の勤

めには接点がないので、彼女の仕事の内容を詳しくは知らない。ただし、結婚式の時、彼女の上司がどんな挨拶をしたかは今でも覚えていいる。

「早紀さんから、結婚を理由に会社を辞めたいという申し出があつた時、正直言つて当惑しました。なぜなら、彼女の才能を惜しいと思つたからです。ですから、必死で慰留しました。辞めることはいつでもできる。仕事を続けられるようにしてほしいと……」

背の高い、中年の男だったが、彼がお世辞で早紀を褒めているのではないことだけは分かつた。誠実そうな印象を受けたのは、彼が妻の才能を認め、辞めるのは惜しいと言つてくれたからかもしれない。

四月の連休から市内の百貨店を会場にして、陶器展が開かれることになつた。新聞にも既に、それを知らせる記事が載つた。主催は百貨店側で、協賛の一つとして「工芸社」の名前があつた。だが、実際には、企画そのものは工芸社に任されていた。そして、妻もその仕事に携わることになつたようだ。

今日が四月の半ばで、開催まであと二週間という時期だつた。だから、早紀の仕事が増えるのは仕方ない。勿論、妻の不在を問題にするつもりはなかつた。

二人が結婚してもうすぐ三年になる。早紀と付き合

いを始めたのは社会人になってからだだが、もともとは小学校の同級生だった。二人の出会いには、少し運命的なものだった。

祐介は市内の中堅の設計事務所働いている。ある日、ランチをとりに入った喫茶店で偶然早紀に出会ったのである。彼女も食事に来たのが分かり、そのまま同席した。

「よくここへ来るの？」と、祐介が尋ねると彼女は「うん、初めて」と答えた。

「確か小学校の時、早紀さんは、いつも髪を綺麗にしていたよね。女の子って、髪形を変えると顔まで変わるって思った」

「祐介君は、あのころチビだったよね。でも、今こんなに大きくなっていて、ビックリ」

二人がお互いのことを僅かずつでも覚えていたことで、十年ぶりの再会なのに不思議と話が弾んだ、共通に知っている先生や友達の話、別々に過ごした高校、大学時代のエピソード、それから自分の現状報告。お互いの状況を夢中で交換し合った。この時、早紀が工芸社という会社で働いていることも知った。お互いに仕事が始まる時間が迫っていた。

「今、誰か付き合っている人いる？」

と、店を出る前に、彼女が聞いてきた。急な話の転換に、祐介は少しドギマギした。

「残念ながらいません」

と、祐介は冗談っぽく言った。さっきまで異性と同席して平気で話していたことを、改めて意識した。

「じゃあ、また来週、ここに来ない？」

早紀が、自分に興味を持ってくれたことが、祐介には嬉しかった。

小中学校の同級生というだけの早紀。色白の顔や、笑うと柔らかく感じられる目は魅力的だった。髪は綺麗な女の子という以外には特別な印象もなかったけれど、今はなぜか気になった。二人の邂逅に運命を感じた。

こうして二人は再会し、毎週一度同じ喫茶店でランチをとった。二人の話題も、家族のことやら、同級生のこと、現在の自分の興味を持っていることなど多岐に及んだ。自分の仕事のことを熱心に話す彼女が一番好きだった。ガラス工芸や陶器など、祐介が知らない世界を説明してくれた。その興奮気味の早紀の顔が好きになり、話の合間に浮かべる優しい表情も好きになった。情熱的な早紀の言動に、祐介は好意を感じ始めた。

一年間交際した後、お互いの両親に会ってもらい、二人は婚約した。それから一年して結婚式を挙げた。

それが、二十六歳の時だ。

それから、三年の月日が流れた。今はもう既に恋人時代の甘さはないかもしれない。それでも、これまで大きな波風を立てることなく、今日までやってきた。ただ、子供がまだないのが、夫婦の唯一の課題だった。

祐介は、ぼんやりとテーブルのメモを見ていた。今さら外に出て、コンビニで弁当を買うのが面倒な気がした。

それで、トースターに食パンを入れ、冷蔵庫から牛乳とハム、マーガリンを取り出した。焼いた食パンを皿に乗せ、マーガリンを塗ってハムを挟む。自分ではこれくらいは食事しか用意できない。

早紀は、特別料理が得意というわけではないが、二人が知り合った時から、ちよっとした工夫をして、食事を用意してくれた。カット野菜を小鉢に入れ、缶詰のツナを上に乗せ、周りにミニトマトとクルトンを置いたサラダ。皮まで作りはしないけれど、中の具は必ず手作り、ニンニクも細かくすり潰して作った餃子。中でも、早紀の作る味噌汁が美味しかった。玉ねぎ、じゃがいも、カボチャ、豆腐、あざりと、季節に合わせて食材が変わるのが楽しかった。婚約中も結婚した後も、それは確かに続いていた。

けれど、四月から陶器展の準備が始まると、彼女の事は俄かに忙しくなった。残業が多くなると、祐介のために夕食を用意できない日が増えた。と同時に、祐介への気持ちの熱量がなくなってきたように思われた。

日常生活の中では、さほど大きな変化はなかった。起きると「おはよう」と声を掛けてくれることも、祐介が家を出るときの軽い抱擁も、以前と同じように行われていた。

祐介は、ベランダから二人の洗濯物を取り入れて、ソファァーに腰掛けそれを畳み始めた。結婚当初から、洗濯は早紀の仕事で、それを畳むのは祐介の分担だった。バスタオル、フェイスタオル、普段着などの後、下着を畳んだ。見慣れた自分のトランクスの下から、ワイン色の少し妖艶な感じの妻の下着が見つかった。それが、今までとは違ったもののように見えた。なんでもない筈のことが、彼は妙に気になった。

壁の時計はすでに九時を示している。早紀が通勤に利用しているバスはもうすぐ最終ではないだろうか。「帰りがこんな時間になるのなら、ラインで知らせてほしかった」と、心に怒りの火が小さく灯った。また、一方で、事故でもあったのではないかと嫌な想像が祐介の脳裏を過る。コンビニ強盗くらいは平気で起き

る時代だ。祐介は、携帯を握りしめた。

「ただいま」

早紀の少し疲れたような声が玄関から聞こえてきた。十時になっていた。

「遅かったね」

祐介の苛立ちの感じられる言葉に、リビングに入りながら早紀が小さい声で答えた。

「ごめんなさい。思ったより仕事が長引いてしまつて。夕食は、どうした？」

「面倒だったので何も買いに行かなかつたよ。だから、家にあつたパンで済ませた」

「今日、商品のリスト作りがあつたの。それを思い出したのが、家を出る前だつたから。本当にごめんなさい」

「そういうと、早紀は寝室に入り、着替えを始めた。ドアをしっかりと閉めていないので、着替えをする妻の姿が見えた。早紀の胸は白く、少し曲げた長い脚が綺麗だった。それを見て、祐介の気持ちは高揚した。

「早紀。今日、夜はできる？」

居間に戻つた早紀に、祐介は話しかけた。急にそんなことを訊く自分自身を少し恥ずかしく思つたけれど。

早紀は少し考える様子を見せたが、

「ごめん。今日は何だか疲れていて。明日でいいかな」

期待していた分、その返事を聞いて、祐介は落胆した。

「分かつた。じゃあ、明日。早紀、楽しみにしているから」

(2)

ドアが開いているので、寝室からでも、包丁を使う音が聞こえた。南向きのガラス窓から朝の光が差し込んでいた。祐介が目覚めたのは、六時だった。早紀は、それよりかなり前に起床したことになる。

「祐介。起きた？」

リビングに入る祐介を見て、早紀が声を掛けてきた。「今日も残業だと思う。今、ハンバーグ作っているから、帰つたらチンして、食べてください」

ガスコンロの上には、朝食の味噌汁の鍋が置いてあつた。その横に、ハンバーグのフライパンがあつた。

早紀は、今日は朝食と同時に夕食の準備もしているようだった。

祐介は、いつものように茶碗に二人分のご飯をよそい、テーブルの上に置いた。既に彼女が用意してあつたサラダを並べ、箸を横に置いた。その間に、早紀が

湯気をあげている味噌汁の椀を運んできた。妻が、笑い顔を自分に向けているのが分かった。

昨夜の些細な気持ちの行き違いは消えていた。いつも通りの日常に戻っていることに、祐介はどこかほっとしたのを感じた。

家を出かけるとき、祐介は普段より強く早紀の背中を抱いた。柔らかく温かい体だった。

「じゃあ、いつてくる」

「いつてらっしゃい」

祐介が靴を履いて、玄関のドアに手をかけたとき、

早紀が付け加えるように言った。

「今日は、多分早く帰って来られると思う。でも、遅くなったら、本当にごめん」

「うん」

と、声を出したが、祐介は自分の気持ちがいくらか沈んでいるのに気付いた。

帰宅すると、やはり早紀は不在だった。何か連絡は来ていないかと、携帯を取り出すと、ラインにメールが入っていた。

『ごめんなさい。今日も陶器展の準備で帰りが少し遅くなります。悪いけど、ハンバークをチンして食べていてください』

祐介の口からいつもより大きな溜息が出た。これまでは、早紀の帰宅は自分より一時間くらい早かった。だから、夕食は早紀の手作りが当たり前だった。でも、今はどうだろう。

工芸社にとっては今が一番大切な時期かもしれない。でも、重役でもない早紀が連日帰るのが遅くなる必要があるのか。早紀は、仕事とは違うことに嵌まっているのではないか。一度そう考えると、憂鬱になった。

早紀の帰宅は八時だったから、昨日よりはイライラして待つ時間は短くてすんだ。玄関で靴を脱ぐ音が聞こえて、早紀がキッチンに入ってきた。そして、息を切らしたまま、

「ごめんね。夕食一緒に食べようと思ってたのに」不思議なことだが、その一言で、嫌味でも言っちゃろうと思っていた気持ちが晴れた。

「いいよ。仕事の都合があるのに、早紀だけ帰ることはできないだろう。それより早く食べちゃって。一緒に食器を洗うから」

早紀は頭を下げると、寝室に行って着替えを始めた。昨日と同じようにドアを閉めないで、早紀の白い眩しい姿態が目に入った。

祐介は、妻のために、残っていたハンバーグをチンして、ついでにご飯を茶碗によそって、テーブルの上に置いた。

普段着に着替えてリビングに入ってきた早紀に尋ねた。

「今夜は、できるの？」

早紀は椅子に座りながら、笑って頷いた。疲れたことを理由に、今日は断らなかつた。そのことに、祐介はほっとした。

早紀が入浴している間に、祐介は二人分の食器を洗った。そして、普段とは違って籠の中に脱いであったものを洗濯機の中へ放り込んだ。その中に、昨日自分が畳んだ赤い下着があるのが分かつた。今日もこんな下着を履いていったのか。ふとそう思った。

交替に祐介が入浴を終え、リビングに入った。早紀がドライヤーを使っていた。早紀の髪は癖もなく、肩まで綺麗に伸びている。その時、鼻を擽るシャンプーの香りがした。

「まだ、時間がかかるの？」

後ろから早紀の肩に手をかけて、動きをとめてみた。すると、早紀は黙ってドライヤーを床に置いた。

髪を手入れする前に、パジャマに着替えていた。

早紀の首筋に、唇を押し付けた。くすぐったいのか、早紀は笑いながら体を振った。だから、追いかけるように唇を背中に移した。今度も軽く笑い声をあげた。

「やめてよ」と言いながらも、早紀は嬉しそうだった。今日のように機嫌の良い早紀は、天使のように可愛いと思つた。

前夜とは違って、早紀は寝室で祐介を待っていた。祐介は、ベッドに上がると、早紀を背中から抱きしめた。彼女の温かい体温を感じ、甘い体臭を嗅いだ。右手を、早紀の白い胸に伸ばした。掌に乳房の柔らかい弾力を感じ、指で乳首を摘まんでみた。すると、早紀は少し息を荒くさせ、両手で祐介の手の動きを押さえた。祐介が、ふうっと、早紀の耳朶に息をかけると、彼女は小さな声で悶えた。

行為を終えてしばらくすると、早紀は眠りに落ちていた。祐介は、薄暗い常夜灯の下で、眠っている早紀の顔を見つめていた。形の良い鼻筋や笑っているような唇。睫毛は長く、二重の瞼も美しかった。起こさないように気をつけながら、彼女の頬にそっとキスをした。

祐介はベッドで寝がえりをうつつた。そして、天井の常夜灯を眺めて、安堵したようにふうと息を吐いた。

その時、早紀の体が祐介の方にゆつくりと動いたの

が分かった。彼女がいつ目を覚ましたのか、分からなかった。

「ねえ、祐介」

と呼びかけるが、心配な気持ちを無理に押し殺すような口調だった。

「起きていたの？」

と、祐介が問うと、

「あのね。祐介は、赤ちゃんがほしい？」

早紀の唐突な質問に、祐介は少し驚いた。妊娠を始めたということなのか。常夜灯が逆光で、早紀の表情は掴めなかった。

「結婚してから、もう三年だから、そろそろ子供がいても、とは思う。だけど、早紀がまだ今の仕事を頑張りたいのなら、無理には言わないからね」

そんな祐介の返事に、早紀は「うん」と言っただけ、その後は口を閉ざした。しばらく何か考えていたようだが、「もう、寝るね」と言うと、彼女は祐介に背を向けた。

(3)

陶器展の開催まで、後一週間になった。

実はそれまでの間に、二人にちょっとしたトラブルが生じた。

その朝、会社が休日だったにも関わらず、早紀は九時になると出勤の準備を始めていた。その時、祐介はその様子をベッドの中でぼんやりと見ていた。

「今日は、休みじゃなかったのか？」

「うん」

早紀は出勤前の化粧をしながら、夫に言い訳するよう続けた。

「陶器展の準備が、遅れていて」

「じゃあ、君の他にも誰か出勤するのか」

「主任の秋山さん」

祐介は上半身を起こすと、早紀の横顔を見つめた。その時、口紅を引いている妻に、自分の見知らぬ女の表情を感じたのはどうしてだろうか。愚かしく思いながらも、彼は妻に一言尋ねておきたくなった。

「休日出勤までして、やらなくてはいけないようなことが、まだあるのか」

「嫌なこと言わないで。変な人」

彼女は、困惑したような表情を浮かべた。

「必要があるから、行くんでしょ」

身支度を整え終わると、早紀はベッドの横まで来て、彼の頬にそっとキスした。

「昼過ぎに帰ってくるけど、昼食は一緒に外でとる方がいい？それとも、あなたの食べたい物を買ってきま

すか？」

彼の顔を覗き込むようにしていた妻の表情には、笑みが浮かんでいた。

その日、妻を送り出した後、彼は新聞に目を通したり、テレビ番組を見たりしながら、午前の時間を過ごした。けれども、時間が無為に流れていくようで、彼の心は次第に重くなっていた。

夕食にハンバーグを作ってくれて以降、早紀には家庭でゆつくりと過ごす時間はなくなつた。通勤バスに乗るのが始発の五時になり、彼女の方が家を先に出るようになった。残された祐介は、彼女が手早く用意した野菜サラダを食卓に置くと、パンと牛乳で朝食を取つた。それが日課になつた。

夕方は会社から帰る途中でコンビニに寄り、彼は自分の夕食の弁当を買つて帰つた。

早紀の夕食は、祐介は料理ができないので気にしないでいいと言われている。工芸社で残業する社員も多いので、夜食を注文してくれるらしい。時には、社長の計らいで鰻を食べることもあると、早紀は自慢げに言つた。

「でも、後、一週間の辛抱だ」

祐介は、この頃は何度もこう口に出してみる。見え

ない何かが自分を阻んでいるような閉塞感がある。自分の胸を押さえつけるような不安を拭うことができない。それは、仕事に没頭する早紀に向けられた祐介自身の嫉妬心かもしれない。

後二日で、ゴールデンウィークが始まるという日、早紀は八時に帰宅した。いよいよ展示会が始まる。だから帰りは遅くなると予想していたから、彼女がいつもより早く家に帰れたことに驚いた。

リビングに入ってきた早紀の顔は少し疲れていたが、不思議と輝いて見えた。興奮を無理に抑えたような眼を向けられた時、奇妙なことだが、祐介の心は痛んだ。

早紀は、通勤用のバッグと大き目の紙袋をソファアの横に置くと、着替えのため寝室に向かった。無防備にドアは開閉され、その奥に早紀の白い肢体が覗いた。部屋着になつた早紀は、何でもないように祐介にこう話しかけた。

「明日から二日、あなたのこと、何もかまつてあげられない。本当に、ごめんさい」

わざわざ分かり切つたことを言う早紀に、祐介は苦笑して「気にしないで」と答えた。

ただ、言葉に出しはしないが、祐介の心の中には鬱

屈する気持ちがある。ゴールデンウィークに、二人と一緒に過ごせないのは、結婚以来初めてのこと。早紀の仕事を応援している自分よりも、どこか不満を抱えて悶々としている自分の方が大きい。

しばらくソファアーに座り、二人でテレビを見ていた。画面には、駅前でゴールデンウィーク前の予定をインタビュする様子が映されていた。市街に買い物に来たらしい中年女性の二人組は、インタビュに答えて、

「キャンプを予定しています。初めてのテントを子供たちが楽しみにしています」

「ダンスを体験できるツアーがあるので、娘二人を連れて行つてきます」

と、子供中心の家族旅行の話をしていた。

祐介は、その時早紀が少し寂しそうな顔をしているのに気付いた。子供好きの早紀なので、家に子供がまだいないことを考えていたのかもしれない。

祐介が風呂から出てきた時、早紀がソファアーに座り、無言で携帯を使っている姿を見た。この頃仕事の内容が増えたためか、家でも携帯を使っていることが多い。ラインを使った連絡なのだろうと思った。「仕事の打ち合わせ？」

早紀の後ろから、祐介は声を掛けた。不意のことで驚いたのか、一瞬早紀の肩がピクッと持ち上がった。そして、彼女は急に携帯を畳むと、祐介の方に顔を向けた。なぜか顔色が変わったように見えた。

「うん。あと少しだから体に十分気を付けてほしいという連絡。会社からです」

「早紀の会社は、意外と部下思いだね」

祐介は納得したように頷いたが、一抹の疑念を抱いた。普通の連絡なら、どうして内容を知られたくないような仕草を、早紀は見せたのだろうか。

「この洋服、買っちゃった」

と言いながら、彼女は紙袋から洋服を取り出した。

新しい洋服は、これまでのやや薄い色合いのものではなく、ダークグリーンの少し大人びたものだった。彼女の仕事にかける気持ちが覗えるような気がした。

「落ち着いた感じだね。もしかして、誰か友達と一緒に選んだの」

「ううん、自分で。ちよつと背伸びをしてみたくて、いつもと違う洋服にしたの。襟ぐりも大きくしたの、分かる？」

確かに今回の陶器展を通して、早紀は少しずつ自信を持ってきたようだ。工芸社のなかでの確かな位置を感じ、頑張り認められていることに誇りを持った。

それは、パートナーとしては十分嬉しいはず。でも、その彼女に嫉妬している自分もいる。

その時である。突然、室内の電灯がゆらつと揺れ、食器棚の中の茶碗や皿がカタカタと大きな音を立てた。久しぶりに経験する大きな地震に、祐介は慌てた。ソファーに座っていた早紀の体が、床に落ちるのが見えた。

「早紀」と名前を呼ぶと、彼は彼女の体に自分の体を重ね、包み込むようにしてしゃがんだ。耳元に彼女の心臓の鼓動が聞こえる。早紀は、彼の肩を強く掴んできた。それと同時に、彼女の激しい息遣いが聞こえてきた。祐介には、とても長く揺れていたように思えた。地震が収まると、よっぽど怖かったのか早紀の体が震えているのが分かった。

「大丈夫だ。もう終わった」

と、声を掛けると、早紀は蒼ざめた顔のまま頷いた。早紀の体を支えて寝室に入ると、ベッドの上に彼女を寝かせた。早紀の固く閉じていた眼がゆつくりと開くのが分かった。少しだがさつきより落ち着いたらしく、頬に赤味が戻っていた。

「ごめんね」

そう言うのと、早紀の手が彼の方に伸びてきた。祐介は、

その手を取って自分の首に回した。早紀の顔が近づき、祐介はいつもより強く彼女の唇に自分の唇を押し付けた。体の芯が痺れるのを感じた。早紀のバジヤマの胸を割って、乳房に触った。彼女の乳首が固く尖っているのが分かった。自然な行為に向かっている、そのことが嬉しかった。

心地よい興奮が、まだ祐介の体に残っていた。早紀は、彼の傍らに顔を上にして寝息をたてている。行為の後は、いつものように早紀は口を少し開けたままだ。

少しの安らぎが、そこにあるようで、常夜灯がぼんやり照らしている天井を、祐介は見ている。

以前のようになかなか素直な気持ちで振舞えない自分を考えている。早紀に対する不満は、単に夕食のことだけでなく、彼女の仕事のことも起因している。理解しようと思うが、何故か嫉妬に近い感情を持ってしまふ。

その時、寝ていたはずの早紀が急に、彼の胸に腕を回してきた。そして、不意に意外な力で抱きしめてきた。

「起きていたの？」

でも、妻は祐介の問いに答えず、黙ったまま自分の体を、夫の上半身に密着させた。彼女の体が、先ほどの地震の時のように激しく震えているのが分かった。

震えが収まると、早紀は体を離れた。そして、ぼつりとこう言うのが分かった。

「祐介。本当に赤ちゃんは、まだほしくない？それで良い？」

(4)

連休初日が、陶器展の開催日だ。

祐介が起きると、早紀はもう化粧を済ませていて、上着も着終わっていた。いつもより少し濃い目の化粧は、今日の早紀の気持ちも反映しているように感じた。と同時に、早紀がいつも以上に緊張しているように見えた。

連休の開始日であり、祐介は休日である。玄関で、早紀が靴を履くのを見ていた。見慣れない型のおしゃれなデザインの靴だった。

「新しい靴だね」

「そう。ちょっとした気分転換」

履き終わると、悪びれることなく早紀はそう言っで、ドアに手をかけた。一瞬祐介の方に目をやったが、いつもとは違って抱き合うこともなく「じゃあ、行ってきます」と言っただけで、外へ出た。

午後になって、祐介は百貨店に向いた。催事に設けられたフロアはかなりの広さがあり、そこに三百

点を越す陶器が並べられていた。同時に即売会も行われている。

祐介は、会場を巡りながら、妻の姿を探していた。彼女には直接言わなかったが、短時間だけでも会場に寄るつもりで家を出たのだ。

「青山さん」

背後からふいに声を掛けられて、驚いた表情のまま、祐介は振り返った。

「今日は、本当によくおいでくださいました」

結婚式の時に、妻に祝いの言葉を贈ってくれた上司だった。顔はどうやら覚えていたのだが、名前を思い出すことが出来ず、祐介はとにかく彼の前に頭を下げた。

妻の上司は、髪に白髪が混じり、五十過ぎの年齢に見えるが、長身で穏やかな印象を与える人物だった。

彼は、「工芸社営業部長 門野慎吾かどのしんご」という名前の入った名刺を差し出した。

「早紀さんに、かなり無理なことを言ってしまった、ご主人にも迷惑をおかけしていると思います」

「とんでもありません、家内もこの数日生き生きとして、仕事に遣り甲斐を感じているようです」

「そう言っていたら、安心できます。日曜は、無理を言っただけですみませんでした。今回作品を提供して

もらう新進作家との打ち合わせが急に決まりました。本当に申し訳ありません」

祐介の表情は一瞬曇った。彼女は、日曜日は会社で仕事をすると言っていたはずだ。だが、事実は、作家との打ち合わせだという。敢えて嘘をつく必要があったのだろうか。

シヨーケースの中を指さしながら、門井部長は熱心に説明していたが、祐介の耳には半分も入らなかった。妻が仕事に没頭して、時として夫の存在を蔑ろにしているのではと感ぜられることもあった。それでも妻を応援してきたのは、彼女を信頼していたからだ。それなのに、妻から正しく知らされていない部分が多すぎる。

「ありがとう。やっぱり、来てくれたのね」

その声に顔を上げると、祐介の前に、笑顔の早紀が立っていた。会場で会う妻は、いつもより晴れやかな表情をしている。

「良かった。大盛況で」

「早紀さん、ご主人をご案内したら」

門井部長は、年長者らしく落ち着いた物言い、妻を促した。

早紀は、上司に向かって軽く会釈すると

「それじゃ、お言葉に甘えて」

と言いながら、お客に対するように、夫をエスコートして歩き始めた。

祐介が連れていかれた「楽焼」のスペースは会場全体の四分の一もあり、彼は、妻の任せられた仕事の大きさを感じた。シヨーケースの中に並べられてある陶器のうち相沢繁あいざわしげるという名前の付いたものが十点あった。

「私が発掘した新人なの」

陶器に素人の彼が見ても、ほかの作品よりも心を打つなにかを持っていた。作品に見入っている祐介の様子を見守っていた早紀が、

「若いけど、才能のある人なの」

と、誇らしげに言った。

さつき耳にした陶芸作家との打ち合わせ。それは相沢繁という男との打ち合わせ、ということだろう。祐介は、何故か胸騒ぎを覚え、そこに拘泥こうでいしてしまうのだった。

催事の期間が連休中の十日間というのは、それほど長いものではなかったろう。だが、今回の企画は、地元では大きく評価され、新聞に紹介記事が載った。

祐介は、そのことを妻に伝えながら、なぜか誇らしい気持ちとは異質のものが胸に兆し始めているのを感じ

じた。

陶器展の間、妻は忙しく立ち回らずを得なかった。そのため、祐介の生活に不都合があつたのは、仕方がないことだ。だから、夕食を一人ですませることも、休日に彼女が家を空けるのも、もちろん文句も言わずに大目に見てきた。

けれど、彼の正直な気持ちを言えば、妻の様子を平然と見ていられる状態とは程遠かつた。彼自身は気づいていなかったかもしれないが、妻の不在に溜息をつくことが目に見えて増えていた。

祐介の憂鬱な気持ちを掻き立てることがもう一つあつた。それは、もしかという不安であり、自分を孤独に貶める最大の理由かもしれない。妻への疑惑。一番失つてはならない信頼が、彼の心の深部で壊れかけている。早紀は今自分を裏切っているのではないか。

そして、ようやく催事の最終日になった。日曜日だが、早紀は早朝から百貨店に出向いていた。

祐介は、一人ベランダに立ち、欠伸を繰り返していた。アパートは少し高さがあるので、遠くにもビルが広がっているのが見えた。連休が終わる。街中が落ち着きを取り戻しつつある。そのことを感じながら、祐介は

「長かつた」

と、わざと声に出してみた。

妻が傍にいない時の、あの妙に空疎な感覚をもう二度と味わいたくない。仕事だから当然という態度にも不満があつた。

「でも、それはもう終わる」

(5)

玄関のドアが閉まる音がした。それは、まるで聞かれることを憚るような遠慮がちな物音だつた。

その時、祐介は妻の遅い帰宅を知つた。見上げたりビングの時計は、夜中の三時を回っている。彼はまだ、直前まで感じていた焦燥感を消し去ることが出来なかつた。

手間取るはずはないと思うのに、なかなかドアに内鍵がかけられる様子はなかつた。しばらくして靴を脱ぎ終えて、床を踏む音が近づいてきた。そして、キッチンが躊躇するようにゆっくり動いた。

リビングに入ってきた早紀は、ソファアに座っている祐介と顔を合わせると、小さな声で、「ただいま」と声を掛けた。

「遅かつたね。タクシーで帰つたの」
「うん」

抑えた語気の中に夫の怒りを感じたのか、早紀は弁解するように続けた。

「でも、今日は遅くなるって、断っておいたと思うけど。陶器展の打ち上げだから」

祐介は、彼女の目元が赤く潤んでいるのに気付いた。早紀は、顔色が変わるくらい飲んできたということだ。

「二次会にも付き合ったの？」

「そう」

彼には、妻が二次会に参加したことを責める気持ちはなかった。工芸社が陶器展を無事に終えたことを祝う宴会だから、多少羽目を外すことは仕方ない。でも、たとえそうであつても、帰宅が翌日になるようなことは論外に思えた。どこか夫の存在を無視したような彼女の態度に、彼は苛立ちを感じていた。

「こんなに遅くなるのなら、それが分かった時点で連絡できなかったのか」

「でも、みんな楽しんでる最中に、電話やラインはさすがに無理」

会が盛り上がっている時に、家に連絡を取りにくいという早紀の話も理解できないではない。けれど、今の祐介は、そんな妻の冷たい態度には納得できなかった。

「夕食は、もう済んだよね」

「ああ。帰りにコンビニに寄ってね」

「じゃあ、いいよね」

この時、祐介は、彼女が自分を見ようとしていないのに気付いた。祐介の気持ちは、これまでになくもやもやしている。

「ごめん。着替えたら、もう寝ます」

そう言うと、早紀は寝室に入った。今日は何故か寝室のドアはすぐに閉められた。

しばらくして、祐介が寝室に入ると、早紀が慌てて携帯を隠したのが見えた。妻の不審な様子に、疑念が深まった。それでも、祐介は黙ったままベッドに入った。彼女の横になると、こう問い掛けた。

「ねえ、早紀。二人で一緒に休みが取れたら、旅行してみない。だって、今年はゴールデンウィークも別々に過ごしたから」

「うん」

眠たいのか、疲れているのかはつきりしなかったが、早紀の返事はそれで止まった。

「遠くでなくても良いから、温泉なんて良いな。君は、どう」

「うん。でも、この話、明日にしない？」

さも眠たいという気持ちは祐介に伝わるような物言

いだった。自分は、さつきまで携帯を触っていたくせに、と彼は思った。

それからも祐介は眠れないまま、常夜灯がぼんやり照らす天井を見ていた。隣で早紀の寝息が聞こえる。話の途中で、本当に寝てしまった。早紀が、自分に背を向けて寝ているのに気付いた。

彼女がもし、夫の自分に言えない秘密を抱えているのであれば、今、何か良い方法を考えなければならぬ。これまでとは違って、彼女は確かに携帯に固執している。ちょっと前までは、無防備にソファアに置かれていた携帯は、彼女の手から離れなくなった。だから、妻の携帯の中味を知れば、そのヒントが分かるに違いない。

夫婦の關係に、言い知れぬ危うさを感じている。それが、単なる杞憂ですむのなら良いけれど。置き時計の緑のライトが、四時を指しているのが分かった。思わず溜息をついた。

(6)

翌日は日曜日ということもあって、早紀はなかなかベッドから起きてこなかった。一方、祐介はパンにハムを挟んだだけの朝食を終えて、ソファアに座って新聞を広げていた。

「もうすぐ九時だけど、まだ起きないの」

昨日の帰宅が三時を超えていたことを考えると、本当は妻をもう少し寝かせても良いような気もしたが、敢えて声を掛けた。

寝室から早紀が姿を現したのは、それから三十分も経ってからだった。眠そうに眼を擦りながら、「おはよう」と言うが、まだ赤い顔から、昨夜の酔いが消えていないように見えた。

彼女はソファアに腰掛けると、無造作に携帯をテーブルの上に置いた。

「早紀、今日は仕事ないよね」

祐介の問いかけに、妻は笑いながら、

「大丈夫。休日出勤も、残業も当分ない」

と答えた。

「じゃあ、良かった。昨夜の僕の提案、覚えている？」

早紀の首が、横に振られるのが分かった。

「旅行したい。そう思わない？」

「でも、お互いそんな時間、作れないでしょう？ 勤めを簡単に休める？」

早紀の言葉に、祐介は一瞬息を呑んだ。そんな答えを返されると思わなかったから。

「僕の方は、有休も十分残っているし、問題はないけど。早紀は、本当に数日でも休みを取ることではできな

いのかな？」

「今は、無理だよ。今回の仕事で、少し自信もついたり、休みたくない」

「そう。分かった」

妻の予想しなかった抵抗に、彼は強い疑念を抱いた。仕事を盾に、彼女は何かを企んでいる。夫の自分に内緒で。今漠然と感じているこの焦燥感の正体は何だろう？

「昨日は、酔っぱらっていたから、風呂に入れなかった。シャワー、浴びてくるね」

そういうと、妻は祐介の前でパジャマを脱いで、浴室に向かった。

ここ数日は、いつも手放さなかった携帯が、祐介の目の前のテーブルの上にあった。彼は、躊躇することなく、彼女の携帯を手にとって開いた。携帯は偶然にもロックされておらずラインの画面のまま繋がっていた。友達の登録の一番上が「相沢繁」になっていた。それを押すと、画面に相手と早紀のやり取りが現れた。

『昨日は、ありがとう。嬉しかった』

『わたしも。感謝しています』

『遅くなってしまったけど、大丈夫だった？』

『連絡しなかったことを怒っていたみたい』

『うん。仕方ないね』

『ところで、今日は、大丈夫？』

『時間があれば、もちろん会って話したい』

『三時に、イオンのフードコートで』

『了解です』

親密な二人の関係が覗えるやり取りに見えた。祐介は、これらの文面に言いようのない怒りを覚えた。前に戻って文面を確かめようとした時、早紀が浴室から出てくる音がした。バスタオルを使いながら早紀がリビングに入ると同時に、祐介は慌てて携帯を元あった場所に置いた。

「朝食は、もう済んだ？」

髪を拭きながら、早紀は祐介に聞いた。

「うん」という夫の返事に、早紀は「そう」とだけ、言葉を返した。無視されているようで辛かったが、それを顔色には出さなかった。

先程目にしたラインの会話が気になって、今すぐにも妻を問い詰めたかった。けれど、その一方で、早紀のプライバイシーを覗き見るような行為をしたことを恥じる自分もいた。今はまだ黙っているしかない。そう思った。

妻が髪をドライヤーで乾かしているのを見ながら、祐介は、今日の二人の密会を阻みたいという気持ち

抑えられなくなった。

「せっかく二人そろっての休日になったから、今日はどこかでランチでもしようか？」

早紀のドライヤーを動かす手が一瞬止まったように見えた。それでも彼女は平静を装って、こう答えた。

「うん。一緒に食事に出かけるのは久しぶりだね」

「ちよつと見栄を張つて、良いところ予約しちゃう？」

祐介は内心、ラインで知った彼女の予定を壊したいと願った。

「じゃあ、イオンの鎌倉パスタで食事したい」

妻の方が、一枚上手だ。祐介はそう悟った。ラインの会話は、二人の関係がはつきりと不倫と言えるほどのものではない。でも、不穏な空気を持った内容で、早紀にはこれ以上踏み込んでほしくない。それが、本心である。

「わかった。じゃあ、僕が車出すから」

早紀の口元がゆつくり持ち上がり、笑ったような気がした。強^{したた}かさを感じた。

イオンに向かう車中では、夏用に新しい衣服を買いたいとか、サーキュレータがほしいとかそんな程度の話で終始した。心の中では、食後の早紀の行動が気になっていた。

食事の前に、イオンの二階に上がり、お互いに自分がほしいシャツやパンツを購入した。それから、一階に戻り、鎌倉パスタに入った。小型のパンだが、焼き立てがおいしいと二人で時々利用するのだが、今日は食事中もあまり会話は盛り上がりなかつた。祐介自身、この後の妻の行動に意識が傾き、会話に熱中できなかったのだ。

店を出る時になって、早紀が思い出したようにこう言った。

「連れてきてもらって悪いのだけど、私、もう少しブラブラしていきたい。ごめんね、気が済んだら、すぐバスで帰るから」

「分かった。じゃあ、先に家に帰っているね」
車のキーを早紀に見せながら、祐介は駐車場に向かう素振を見せた。早紀が、それを素直に信じてくれるように願った。

待ち合わせ時間は三時のはずで、二人が会うまでにまだ一時間あった。早紀は、エレベーターで一階から三階まで行くのが分かった。時間つぶしに本屋にでも寄るのかもしれない。でも、この後の居場所は分かっている。祐介は施設内を意味もなく歩いた。

三時少し前にフードコートに行くと、早紀が所在無げな様子で椅子に腰かけているのが見えた。彼女の手

には携帯が握られていて、万一に備えているようだ、祐介は、彼女に見つからないように客に紛れて観察し続けた。

すると、三時ちょうどに、男が早紀のテーブルに近付いてきた。遠目ではつきりしないが、自分と同じような年齢に見えた。男と早紀は連れ立って、アイスの看板のある店の前に立った。肩を寄せ合って楽しそうに何か話している。パフェを二つ受け取ると、席に戻り仲良く食べ始めた。

これだけでは二人の関係はつきり分からなかったが、祐介の気持ちはもう限界にあった。男の正体が気になり、不倫の証拠を確かめるといふ余裕は持てなかった。彼は急ぎ足で移動し、二人の席の前で足を止めた。

「早紀。この男は、誰だ？」

ふいに聞こえた祐介の声に、早紀が思わず振り返った。彼女は、何か都合の悪いところを見られた子供のような顔をしていた。それは、恐怖に怯えて泣き出しそうな幼児の顔にも見えた。息が詰まったのか、早紀の顔が苦痛に歪んだ。

「どうして…」

「どうして、ここにいらかって言いたい？」

「あなた、家に帰ったんじゃない？」

「いや、帰らなかった。そんなことより、どういふことか説明して」

男は二人の関係を悟ったのか、祐介に頭を下げてきた。少し慌て気味に感じられたが、その場を無視するような態度ではなかった。

「相沢繁と言います。僕のことはご存じないと思いますが、陶芸作家です」

「早紀とは、どういう関係ですか」

「百貨店で開催される陶器展に、作品を出品させてもらいました」

二人が話している間に、落ち着きを取り戻したのか、早紀が言葉を挟んだ。

「相沢さんは、美大の同期。陶芸展で、私が推薦した新進の陶芸作家なの」

祐介は、百貨店の会場で、早紀から彼の名前を聞いていたことを思い出した。「若いけど、才能のある人」と称賛する言葉も。

「それは、理解しました。でも、なぜ、隠れて妻と会っているんだ」

「今日で、京都に戻ります。だから、早紀さんに最後の挨拶をしておこうと思って…」

それを聞いて、彼は皮肉な気持ちになった。

「挨拶したら、何か起こるんですか？」

早紀と男の顔が同時に曇った。並んだ二人の表情が驚くほど似ていた。

「ただ、また展示会の機会を戴けるかと：」

「早紀。君も同じ気持ちで、今日会ったの？」

言い訳を考えているのか、その質問に早紀は答えなかった。目が不自然に動き、困惑した気持ちが表れていた。

「ごめんなさい」

と、彼女は観念したように呟いた。「でも、誤解します」

「説明できる？ どういうこと？」

祐介は、自分の疑問に正直に答えてくれない早紀を思わず睨んだ。不倫の事実をここにきても認めないのか。二人に、嫌悪感を抱いた。そう感じてしまうと、妻の早紀が汚らしいものに思えてきた。

早紀は「分かりました」と言うと、持っていた自分の携帯を、祐介に渡してきた。

「相沢さんとのやり取りが、ここにありません。全部見て、二人の関係を理解してください」

祐介は、妻の携帯を受け取り、「相沢繁」のラインを開いた。そして、最初の画面にスクロールした。

『同窓会で、久しぶりに会えて嬉しかった。陶芸作家になっていて、羨ましかった』

こんな早紀の挨拶から、始まったメールだった。操作するうちに、二人のやり取りが意外に短いことが分かった。少し動かすと、こんな文面が現れた。

『相沢君と連絡をできて良かった。今度こちらで陶器展があります。推薦しておきました』

『まだ、ほとんど無名の自分。有り難う』

そして、画面は、陶器展の説明、採用されるまでのやり取り、展示作品についての手続きと続き、最後に以前祐介が見た画面で終わった。このラインだけ見て、男と早紀の不倫は疑うことができない。祐介は、半ば安心したような、でもまだそれを受け入れられないような混沌とした気持ちになっていた。

早紀は黙ったまま祐介を見ていたが、喰いしばった口元と涙を浮かべた瞳に、彼女の感情が全て集約されていた。

「信じてほしい。相沢君とは、仕事だけ」

祐介は、思わず溜息をついた。今は、安堵の気持ちの方が増している。男の方を見た。

「すみません。最近妻と感情の行き違いが多くて。彼女のラインを見て不信任感を持つて：」

男は安心したように笑顔を見せた。彼は立ち上がる。と、早紀に向かって話しかけた。

「陶器展に参加させてくれて、ありがとう。良い経験

になりました。また機会があれば」

そして、男は祐介に一札すると、二人から離れていった。

しばらくお互いに何も言わず席に座っていた。ようやく帰る決心がついて、祐介は立ち上がった。そして、早紀を促してエレベーターで一階に降り、外へ出た。駐車場に着いても、二人はまだ黙ったままだった。

イオンから三十分もかからないで、アパートに着いてしまう。祐介はさつきから、どうやって妻にどう問う質そうか、悩んでいた。

車を出して、十分もしたころ、早紀が意外にも静かな調子で話しかけてきた。

「ずっとあなたに話したいことがあった」

早紀の表情から、彼女の抱えるものの大きさが分かった。今まで言えなかったのだ。

「じゃあ、今、聞くよ。話して……」

祐介の言葉に少しの間躊躇していたが、早紀は思い切って話し始めた。

「結婚したんだから、自分の赤ちゃんがほしいよね。でもね、私じゃ、それは無理なの」

祐介には、妻の言いたいことが、理解できなかった。

「お正月に、体調が悪くて、クリニックに行った。そ

れで、精密検査を受けた。その時、お医者さんに言われたの」

正月の後、そういえば早紀がしばらく塞ぎ込んでいたのを、祐介は思い出した。

「あなたは、妊娠しにくい体質だった」

祐介は、早紀との会話を思い出していた。夫婦の営みが終わると、いつも「赤ちゃん」のことを訊いてきた早紀。あれは、妊娠できないことを、暗に自分からせよとしたのでは。そのサインに気付いてやれなかった。

「早く、言ってくれたら良かったのに」

「そんなこと、自分から言えなかった」

「そうだけ……」

早紀が涙を指で拭うのが分かった。

「それで」

と、彼女は躊躇いながら続けた。

「仕事を頑張れば、気が晴れるかもって。だから、工芸社で陶器展に取り組むって聞いた時、嬉しかったの」

大きな交差点に差し掛かった。アパートまで、後十分の距離になった。右のレーンに入り、右折のウィンカーを出した。

「あの男に連絡したのは、陶器展のため？」

「そう。同窓会の時、陶芸作家としてデビューしたと、

聞いていたから」

淡々と話す早紀の様子を見て、初めに連絡を取った時には、男に特別な思いはなかっただろう、と思った。

「いつから、あいつを好きになったんだ？」

祐介の質問に、早紀が戸惑うのが分かった。

「でも、信じて。大人の関係はないよ」

信号に、右折の矢印が出た。

「祐介。あなたが一番好き。本当に」

妻の声に、祐介の車はゆっくりと動き始めた。

(中央区)

「入選」

青春の一片、 バルビゾンの森

澤木辰子

昭和三十年四月、私は家から歩いて十分程で通える田舎の県立高等学校に入学した。明治生まれの母は、この高等学校前身の高等女学校まで一里半の道程を歩いて通い卒業したという。戦後になり男女共学校になってからは姉も卒業生だった。この度は兄が卒業すると入れかわりに私が入学したという訳だ。この学校は、街の中にある学校とは異なり近くに遊技場も喫茶店もないため、小遣いもいらず、交通費もかからず、県立ということが貧乏子沢山の家にとっても私にとっても打って付けの学校だった。

私と同室になった男子生徒達は揃って勉強が嫌いらしく、国語の授業が始まると一斉に「先生！ 今日から明日にかけての天気予報を教えてください」とお願いすると、先生は快く天気予報を教えた。そして天気

予報の話が終わると、次は「先生修学旅行の話をしてください」と入学したばかりの男子生徒達が声をかけた。このことも先生は快諾して、南禅寺山門の上で「絶景かな！ 絶景かな！」と石川五右衛門が叫んだ言葉を歌舞伎調で言ったその後は、必ず万葉集の歌を二首だけ朗々と読み聞かせてくださるのだった。国語の時間になれば、この様なことは毎回同じことの繰返しだった。

先生の出立ちいでたは面白く、長者の息子と言われていたのに背広ははげてよれよれで、履物は奥様の履く赤い鼻緒の下駄を履き、ズボンのベルトは、これも奥様が着る時に使う赤い板の入った腰紐だった。

英語の時間となり初めての英語の授業は、植樹祭の話で『アーバーデイ』だった。アメリカの進駐軍で英語の通訳をしていたというクリスチャンの女教師は首に十字架のネックレスを掛け、黒いブラウスに黒いロングスカートをはいいていた。「ようござんすか？ お坊ちやま方！ お嬢ちやま方！ 今日、は、チョイス、チョイスリーダーです。ようござんすね。では、レッスンワン、アーバーデイです」と教科書を読みはじめると、勉強嫌いの男子生徒達は声を揃えて「婆ー婆ーデイ」と読み返した。すると女教師はエヘヘいと声を出して笑いながら「お坊ちやま方、お利口さんのお

顔をしていてもおつむの働きは大変悪いようござんすね」と言い返した。こんな風だから国語と英語の授業ははかど捗らず一向に進まなかった。

そしてある日ある時のこと、校長室真上の教室で自習時間となった時、授業料が勿体ないと言いつつ出した男子生徒達が「授業料を返せ！」と騒ぎ出したのだ。暫くすると、アメリカ帰りでインディアンのような顔立ちをした長身の校長先生が教室に入ってきて「君達！ けちな心で騒ぎ立てることより少年は壮志を抱けだぞ！」と宥めてから英会話を始めたが、誰一人として英語の話せる生徒はいなかった。この時から自習時間は校長先生との英会話の時間となった。校長先生は珍しい外車のオースチンを運転して来ると、その自動車は学校の玄関横付けだった。

私は高校一年生の初夏が訪れた頃のこと、放課後の部室でミロのビーナス胸像を見ながら木炭紙という画用紙に葡萄の小枝を炭にした『木炭』を指でつまみ持ち、白一色の石膏ビーナス胸像を見詰めながら陰影をつけたり消したりしてデッサンをしていたが、描き続けて来た絵は五日間以上過ぎても気に入らずだった。様子見に来た美術の先生は、私の絵をチラッと観ただけで「トーンがいいねえ」と一言、言っただけだった。私は本当にトーンが良いのなら、この絵は既に仕上がっ

ていてもよい筈なのに、何日もかかってしまいがつかりしてしまった。仕方がない、明日もう少し手直しをして定着液を吹き付ければ出来上がりだ。私は重たいビーナス胸像を抱え持ち廊下に出た。すると、校舎の長い廊下の向こうから、顔馴染の道男がカラコロカラココと下駄の音を響かせながらやって来た。道男はこの学校の夜間高校の三年生で、私より二学年年長だった。彼の家は『織屋』で、世間ではガチャ万景気と言われていたのに、何故か夜間高校で学んでいた。私は「こんにちは！」と道男に声を掛けた、すると道男からも「こんにちは！」とニコニコ顔で軽く返事がかえって来た。道男が「愛ちゃんは遅くまで残っているんだね？ 理由はこの絵だったんだね？」とビーナスの胸像を差して言った。「うん美術部に入ったんだ」と私が答えると道男は「昼間の高校生は暇が沢山あって楽しそうでいいねえ」と羨ましそうに言い「じゃーまたね」と右手を少し上げて美術部室近くの教室に入ってしまった。私はビーナス胸像を抱え持ったまま道男の背中を見送った。

次の日の四時間目は、美術部全員が集まる日だった。美術部員は、一年生から三年生まで合せて二十名で、先生の挨拶が終わると自由行動となり、五名が道男の家近くにある『バルビゾンの森』へスケッチに出

掛けた。

『バルビゾンの森』とは美術の先生が名付けた森のこと、印象派の画家達が好んで描いていた風景画によく似ているということで、美術部の先輩達も『バルビゾンの森』と呼ぶようになったのだ。

『バルビゾンの森』は周囲が千メートルくらいでその森の中には小さな池があり、山桜、赤松、クヌギ、かしの木、椿、楓、もみじ等、その他私の知らない木々が沢山茂り、春は新緑が美しく、山桜の花が咲く頃になると三葉つつじの花も咲いて、その根元には丈が十センチ程しかない薄青紫色に咲く春リンドウの花が、螺旋状に閉じていた花弁を空に向けて咲いていた。私はこの花を『朝寝ん坊』と呼んでいた。訳は、朝はいつまでも蕾のまま昼頃になりやつと花が開くからだ。やがて笹百合の花が咲き撫子の花が咲く頃になると、トンボや蝶が飛び交い、兜虫や鍬形等は甘い樹液を求めて木の幹に集まって来ていた。雑草の中には食虫植物のハエ捕り草や石持草もまじり、ねじ花は小さな紫紅色の花を一本の茎に螺旋状に咲かせて、雑草の中で隠れるように咲いている。夏の終わり近くになると、女郎花の花も咲いていた。花と花は次から次へとバトンタッチをするかの様に咲き続けていた。小鳥達の種類も多く、鶯は春先から暑い八月に入っても鳴い

ていたし、特許許可局と鳴きながら飛ぶ時鳥は、虎模様のお腹を見せて驚く程沢山の毛虫を啄んでいた。時鳥は毛虫が好物だったのだ。バルビゾンの森は、植物にとっても昆虫にとっても野鳥達にとっても生息環境が良いらしく、多種多様だった。

秋が訪れると銀杏の葉は黄金色に輝き、もみじや、楓、ハゼ、山柿の葉等は紅に染まり最後を飾り散っていった。子供の頃、この森での思い出は、戦後の食糧難の時遊びながら栗の実や、椎の実、ギンナン等を拾ったことだ。――

自由行動時、バルビゾンの森では、ネムの木を手早くスケッチして花や蝶を描きたし、幻想的な絵を頭に思い浮かべながら下絵を描いていた。が、気が付けば森の中に残っていたのは、私一人だけだった。

放課後は夕方までスケッチの続きをああでもない、こうでもない、と、蝶の位置を並べかえたりして構図を考えたものの思う程には捗らず、仕方なくその後は描きかけのビーナス胸像のデッサンに少し強めの陰影をつけてから定着液を吹き付けた。すると珍しく遅くまで残っていた美術の先生が入って来て、私の描いたビーナスの絵を黒板に立て掛けると、目を細めて近くで見詰めたり少し離れた場所から眺めたりしていたが、以前と全く同じ言葉で「トーンがいいね」と一言、言

っただけだった。

今日も道男は一番乗りで、下駄をカラコロと鳴らせて長い廊下を走ってやって来た。「ヤー、今日も遅くまで頑張ってるね!」とニコニコ顔だ。私は道男にビーナスの絵を見せて「定着液を掛けたばかりで湿っているから乾かしていたのよ」と告げると、道男は私の描いた絵を覗いて「結構上手いんだね」と褒めてくれたが、美術の先生と言った言葉が少々不満で、私は気落ちしていた。私はこの日から絵を描くことがいやになり暫くの間、絵を描くことはお預けにした。

絵の代わりに興味を持ち始めたのがピアノで、私にとっては珍しさも加わり毎日のように音楽室に行き、馴れないピアノの鍵盤を悪戯をするような感じで鳴らしていた。数日間は両腕の首が痛んだが、それでも一人だけ音楽室で時の過ぎるのも忘れて、ピアノの前の椅子に腰を掛けていた。ある日の夕方のこと、突然音楽室の窓の外の赤目がしの生垣の間から道男が顔を覗かせて「愛ちゃん」と私を呼ぶ声が聞こえた。すぐその後で「下手だなあ! バイエル少し習ったら!」と道男が言った。私は「どうせ暇つぶしだもの」と道男の顔をチラッと見ただけで返答をした。「昼間の高校生は暇があつて楽天でいいなあ」道男は羨ましそうに言うと、急ぎ足で校舎の中に入って行った。私

は次の日も音楽室に行き、人差し指でポンポンとピアノの鍵盤をたたき、五時過ぎまで音楽室にいた。

以前ビーナスのデッサンの次はカラカラ帝のデッサンと決めていたのに、相変わらず絵を描く気になれず部活はさぼっていた。美術部員は大勢いたのに、常に出席する人はせいぜい五人くらいで、最年少の私が出て行くと必ず準備と後片付けの仕事が待っていた。当たり前前のこととはいえ重い石膏のビーナス胸像を運ぶ時、落として壊してしまつたらどうしようかと思ひ、抵抗感ばかりが先走り、もういやだ、部活等どうでもよい、と思うようになってしまつた。

音楽室へ行くようになってから数日が過ぎた夕食後のこと、私が姉の使つたバイエルの本を見てみると、姉が「『#』シャープは半音上の黒い鍵盤の音、『b』フラットは半音下の黒い鍵盤の音よ。わかるかな？『#』は白い鍵盤の右上の黒い鍵盤の音、『b』は白い鍵盤の左上の黒い鍵盤の音よ。わかつたかな？#は半音上りbは半音下るのよ」と紙鍵盤の上に私の人差し指を乗せて教えてくれたが、音の出ない紙鍵盤では#もbも頭の中には入つてくれなかつた。その後は自分の努力の足りないこともあり、このままではいつまで経つても音階や音符等を素早く頭と指先に教え込むことは出来ないと思ひ、以前よりも真面目になり、

放課後は音楽室に行き夕方になるまで自己流でバイエルを練習した。随分努力したつもりなのに、相変わらず両手の指先は思うように動いてはくれず、前へ進むことは難しかった。

そんなある日の夕方、音楽室で思ひ悩んでいると「愛ちゃん！ 今日もまた暇つぶししているのかい？ お暇な愛ちゃん！」と窓の外から道男の問い掛ける声が聞こえて来たが、私は知らぬ振りをしていた。この日から道男は私のことを「お暇な愛ちゃん」と呼ぶようになった。音楽室へ通うようになってから、何日も日を重ねてバイエルは一〇二番まで進んだ。

思い起こせば私が小学校低学年だつた頃、姉は中学生で日曜日が来ると中学校の音楽室に行きピアノを弾いていた。私が偶々たまについて行つた時に弾いていた曲がバイエルの一〇二番だつたのだ。あの時すぐ横で見ていた私に姉が「愛子！ ピアノ弾いてみる？」と聞いたので、私は恐る恐る鍵盤に指を置いてみたが音は出なかつた。あの時私は、ピアノは弾くというより叩くものだと知つた。私には聞き覚えのあるバイエル一〇二番を、自分なりに頑張つて弾けるようになったつもりだったが、ここまでは限界だつた。『#』が二つ以上とか『b』も二つ以上とか記号が増すと、頭が悪くて不器用で飲み込みの悪い私には、一生懸命努力

したつもりでも右手の指先も左手の指先も思うように動いてはくれなかった。

ピアノの鍵を預かっている職員室の松山先生が、私のことを気にして「音楽講師の鶴見先生に教わったかどうかね？」と助言してくださったが、私は鶴見先生に教えていただく気持ちにはなれなかった。それは、私があまりにもピアノを弾く程度が低過ぎることで、入学当初のことで、校歌練習始めの時、鶴見先生はピアノの鍵盤一つ叩いただけなのに「私にはこの様な狂った音しか出ないピアノは弾けません」と全校生徒の前で言い放ち、ピアノ演奏なしで校歌を教えたのだ。先生はとても優秀な方だと聞いていたが、私には大変に怖い人と思えた。そして、私の通うこの学校には音楽の科目がなく、ピアノは調律をしていなかったのだ。鶴見先生は、校歌を教えるだけの先生だったのだ。

今日もまた、私が下手なバイエルを弾いていると、「お暇な愛ちゃん！」と私を呼ぶ道男の声が聞こえた。道男は私一人しかいない音楽室の中に入って来ると「少しは弾けるようになったね」と言いながら、黒い長ズボンの右ポケットの中から、金色、銀色、銅色の三つの鍵を取り出すと、左手の手の平に並べ直して「どの色の鍵が好き？」と私に聞いた。一見して、金も銀も銅色の鍵も三つ共全く同じ形で、取っ手は孔雀

の羽根で、大き目の三つの鍵にはパールの様なメタリック鍍金めっきが施されており、七色の光を放っていた。私「どの鍵の色も好きでも嫌いでもないよ」とぶっきら棒に答えると、「一本あげるから気に入ったものをお取りよ」と、道男は三本の鍵を手の平の上で揺すらせながら言った。「でもこれは何の鍵？」と私が聞くと、「この音楽室のこのピアノの蓋を開けることが出来る鍵だよ。この鍵があれば離れた職員室まで鍵を借りに行かなくて済むし、楽でいいと思うよ」道男は授業の時刻を気にしているのか、急かせるように言った。私は少し考えてから「折角だからこの鍵を頂くね」と銅色の鍵を手にとると、道男が「どうせならこっちにしたら？ こっちの方が奇麗だからこれにしよう」と銀色の鍵を差し出して、銅色の鍵を私の手から取りあげると、ズボンのポケットの中にしまい込み銀色の鍵をくれた。道男に頂いた銀色のピアノの鍵は一度も使うことなく、私の家の大事な赤トンボの曲が流れる、赤いビロードを敷き詰めたオルゴールの箱の中で眠っていた。

やがて夏休みに入り、十日間だけのアルバイトを始めた。アルバイトは楽器会社の事務の手伝いで、一里程の道程を自転車を通い、与えられた仕事は楽器会社の本事務所から離れた、離れ事務所の専務室の片隅に

置かれた机の上で、工場内それぞれの部署から集められた生産記録を清書してから、輪転機でコピーをして、そのコピーしたものを一番先に専務さんのところへ持って行くことだった。

この楽器会社は景気が良くないらしく、離れ事務所の専務は、一昨日も、昨日もそして今日もまた、下請け会社の主人や、社内部長や課長を代わるがわる呼び出しては説教を続けている。「君！ しつかりしてくれなきゃ駄目じゃないか。社内の従業員三百名が毎日毎日五分間さぼっていたら、工場全体では膨大な損失になるんだよ」とか何とかで……云々 この様に毎日毎日のお小言は私の耳にタコがはり（何にもせんむ！）と言いたいくらいだった。

鳴かぬ蝉 専務の小言 今日も聞く

苦情聞く 蟻今日も一匹 専務室

昼食後の休憩時間が来ると、私が仕事をやる離れ事務所に近い工場の中から、アルバイト当日より今日もまた楽団を組んで、楽器が奏でる歌謡曲が流れ聞こえて来る。ドラムの音は異状に大きく、ベースの音は低く腹にまで響き、ピアノの音は程々で、ギターの音やトランペットの音も加わり、ドンチャカドンチャカ。流行歌手の岡本敦郎、伊藤久男、三橋美智也の歌う曲が、いつも同じ調子で次から次へと喧しく聞こえて

来るのだった。

私が工場の入口から中を覗き見すると、左側には造りかけのスタンダードピアノが並び、右側には出荷前のグラランドピアノとスタンダードピアノが、十数台整然と並び黒い光沢を放っていた。私は工場左側の奥に入って行き、楽団員の見えるところまで近付いて行った。楽器演奏は近付く程に音が大きくなり耳を塞いだ。カンナ屑や、おが屑の散らばっている中で、十名程の従業員が交代をしながら演奏をして歌を歌っていた。その後左側で驚くことに道男がピアノを弾いていた。私は自分の目を疑ったが、ピアノを弾いていたのは間違いなく道男だった。工場で働く楽器演奏者達や歌を歌う人達は、皆汗を流しながら、三橋美智也の『リング村から』の 月おぼえているかい 子供の頃に二人で遊んだ あの山小川 昔とちっとも変わっちゃいない 帰っておくれよ 俺らのナ 俺らの胸に と一 生懸命歌を歌い楽器を演奏している。リング村からの曲が終わると、岡本敦郎の『白い花の咲く頃』のイン トロダクションが始まり、待っていましたとばかりに、壁を背もたれにして足を投げ出していた三人の中の一人が出て来て、歌を歌い出した。顔や首、腕にも洋服までもおが粉がこびり付いている。月白い花が咲いてた ふるさとの遠い夢の日 さよならと云ったら

黙ってうつむいていた。お下髪 悲しかったあの時のあの白い花だよ。二曲終わると次は『山の煙』の歌となり、楽器演奏者はそのままで歌う人は別の人に代わった。イントロが流れて、月山の煙のほのほのとたゆたう森よ。あの道よ。幾年消えて流れ行く。思い出のああ。夢のひとすじ。遠く静かにゆれている。楽器を演奏する人達も歌を歌う人達も、流れ落ちる汗を拭いてもせずに、その次は『あざみの歌』と続いた。ここにいる音楽好きの人達は、休憩時間も休むことなく歌を歌い、楽器演奏を続けている。この人達にとって、は楽器を演奏し歌を歌うことが、疲れ知らずの薬になつてゐるのだと私には思えた。

道男は昼間この楽器工場で働き、夜は学生となつて夜間高校に通つていたので。私は今の今まで、道男は家業の織屋の手伝いをしているとばかりに思つていたが、彼は彼なりに苦勞をしているのだとつくづく感心した。

楽器工業での十日間のアルバイトは、アツと言う間に最後の日が来た。仕事が終わわり、帰り際に道男がやつて来て「今度の日曜日、友達と一緒にだけ海に行かない？」と私に誘いの声を掛けて来た。「うん行きたい！ 連れてって！」私の即答で、今度の日曜日は海に行くこととなつた。「それはそうとみつつちゃん！

ピアノ弾くの上手なんだね」と私が聞くと「たいしたことないよ。馬鹿の一つ覚えのようなもんだよ」道男は照れ臭そうに俯加減で答えて「同じことを百回も二百回もやつていれば、その内誰にだって下手なようにもピアノは弾けるようになるさ」と当たり前のように言う。「海に行くこと約束だよ」と念を押した。

日曜日が来て、私は道男と道男の友達も一緒に、楽器工場での夏の間だけ借りている海の家に行つた。

海の家保養所は『白砂の家』と呼ぶ木造建築の古びた旅館で、浜名湖に浮かぶ弁天島の中にあり、東海道本線の弁天島駅で降りて東海道の松並木を横切ると『白砂の家』だった。北向きの白砂の家表玄関両脇には、老松が太い枝を四方に伸ばし、玄関西側の松の枝の下には黒塗りの高級車が二台駐車していた。本館東側から南西一带には日本庭園が続き、その南側は湖に続く砂浜だった。が、夏も終わりに近いせいかな影も少なく、庭外れの竹垣根にそつて、尾花が穂をなびかせていた。

私と道男と道男の友達三人は、玄関を通らず、本館西側の脇を通り海の見える別館の広い畳の部屋へと足を進めた。別館に着くと昼食をとることにした。広い別館の湖側には、既に六人の先客が食事の最中で、私達には見向きもなかった。

昼食は、道男と道男の友達そして私と、三人共同じ海老とカキフライ、それに浜名湖産のドウマン蟹を二匹づつ注文した。私が浜名湖の今切れ口から東側の湖を眺めていると、道男が「あの今切れ口東側の広い中州よりこちら側に続く浅瀬と、このすぐ南側の砂浜との間には漁船の通り道があつて、そこは潮の流れが早いんだよ。去年は乗ったボートが引き潮時で今切れ口の近くまで流されてしまつて、こつちまで戻つて来るのに苦労したよ」と潮の通り道を指差し教えてくれた。海の家庭先の砂浜の南方向に、漁船の通り道らしきところを白く泡立たせて、その泡立った海水の流れが早く動いて行くところが、どうやら潮の流れのようだった。暫らくの間、道男と道男の友達との四方山話を聞いていると「お待たせしました」と中年女性が食事を運んで来た。海老とカキフライは揚がり過ぎて焦げ茶色になつていて、ドウマン蟹は大きな皿に六匹盛つてあつた。私が箸をつけずに海を眺めていると「カキは嫌いか？」と道男が聞いた。私は「カキも海老も大好きよ」と答えて、海老もカキもお腹に収めた。道男と道男の友達、ドウマン蟹の甲羅をはずし「この蟹味噌は絶品だよ」と互いに言っていたが、丸々と肥えた蟹を見て、私はどうしても食べることが出来なかつた。その訳は、一ヶ月程前に浜名湖の鉄橋を通過

する列車から一人飛びおりた人がいたのに死体が出てこないことから、もしかしてこの蟹達が食べてしまつたのではないかと。と気になつたからだ。私はこの時「もうお腹一杯で食べれないよ。みつちゃん二人で食べてくれない？」と聞くと「ああ頂くよ。こんなにおいしい物捨てたらバチが当たるよ」と言いながら二人で蟹を食べてくれた。やがて先客の六人の内の一人が「ごゆっくりなさつて、遊んで行ってくださいね、お先に失礼します」と声を掛けて帰って行くと、道男の友達も、「僕用事があるから悪いけど先に帰らしてもらうよ」と言いながら、六枚入一袋のチューインガムを置いて帰つて行つた。道男の友達を見送つた後、私は昼食代を支払う時は割勘が当然と思つたので「お代は払うからね」とそれ相当の金額を道男の前に置くと、道男はすかさず、「こんなことされたら男が廢たぶるんだよ」と言つて私が出したお金を返して来た。私は道男の持つて成しに、申し訳ない気持ちと嬉しい気持ちがちが重なり黙り込んでしまった。折角楽しみにして来た弁天島の保養所も、美しい日本庭園の中も砂浜も歩かず海を眺めていただけで時間が過ぎて行き、保養所の海の家には私と道男だけとなり、道男が「まだ早いけどそろそろ帰ろうか？」と言つたので、私は「うん」と頷うなづき帰ることにした。

浜名湖の 砂浜近く 引き潮の

流れ行く手に 海は輝く

道男の友達がくれたガムを道男と二人でかみながら松並木を横切り、浜名湖に浮かぶ弁天鳥駅から電車を乗り継ぎ、道男の家と私の家との最寄りの電車の駅に降りると、道男の家の前を過ぎてバルビゾンの森へと足を進めた。私は道男に今日の保養所行きのお礼の言葉も言い出せないまま、森の中の池の辺りの石に腰を掛けた。

空には赤トンボが群をなして飛び交い、叢の中から数匹の鈴虫の鳴く声が聞こえて、既に秋の到来を告げていたが、いやに蒸し暑く陽は西に傾き夕方近くになっていた。私は「今日は有難う、楽しかったよ」やつのことでお礼の言葉が出た。長い間立ち通しの道男は、私の前で思い詰めたように黙っていたが、私が立ち上がり帰ろうとした時、道男は無言のままいきなり抱きついて来た。驚いた私は道男の両腕の中をすり抜けてしゃがみ込むと、目の下の道男の履いた下駄の黒い鼻緒には、青と赤と白の糸屑が数本絡まり付いているのが一瞬目についたが、すぐに立ち上がり「みっちゃんのバカ！」と一喝し、一目散になって、来た道を三十メートル程走り、振り返って暫く道男の様子を伺うことにした。道男は私に背を向けて空を眺めて

いるかのようだったが、やがて座り込んだまま動かなくなつた。私は心配になりそつと近付いて見ると、道男の肩が微かに揺れているように見えて、その後は肩から背中までが前よりも大きく動くと、呻くような小さな声が漏れるように聞こえた。私が「みっちゃん！」と恐る恐る小声で呼び掛けると、道男は振り向きもせず立ち上がり、森の奥へと歩いて行ってしまった。私はまた「みっちゃんのバカ、バカー！」と道男の背中に向けて罵るののしように罵声ばせいを浴びせた。

鈴虫の音があちらこちらから叢の中から沸き上がるように聞こえ、沸き上がった鈴虫の音が、空から降り注ぐように聞こえ来る夕暮れのことだった。

私は、あの海の家に行った日から一年近くが過ぎた高校二年生の夏休みに入る一週間程前の日、思い掛かず道男の姿を見掛けた。ピアノのことはすっかり諦めて、美術部の部活でテーブルの上に鉢植えのサボテンとガラスのコップを置いた静物画を、夕方遅くまで描いていた日のことだった。道男が珍しく運動靴履きで走ってやって来た。私は何食わぬ顔で「みっちゃん久しぶりね。長いこと会わなかったよね？ 心配してたよ」と問い掛けると道男は、「一年振りだね」と短く答えた。その日道男は私のことを「お暇な愛ちゃん」とは呼ばなかった。そして私の気が付いたことは、道

男はいつでも下駄履きだったのに、今日は白い運動靴履き姿だということだった。私は「元氣だったんだね、ずっと遅れて来てたんだね?」と心配して聞いてみた。道男は「ああ、去年の九月に突然天下一の楽器会社と合併したんで、その本社工場へ転勤になってしまったんだ。学校から遠くなっていつも滑り込みセーフなんだよ。おまけに夕飯ぬきだよ」と言う溜め息を吐いた。私は「今まで大変だったんだね。でもよかった。元氣でいてくれて安心したよ——、あのね。それでね。みっちゃん! 今度また海に行きたいんだけど連れてってくれない?」私はためらいながら海に行きたいと、道男にせがんだ。道男は何故か黙ったまま俯向いていた。私は道男が怒っている様に思えて「御免ね。忙しいのにずうずうしいこと言ってしまうって。本当に御免ね」と謝ると道男は暫くしてから、言い辛そうに「僕がね、今一番欲しいのは、勉強する時間だよ。来春は国立の大学を受けたいんで、悪いが今遊んでいる暇はないんだよ。極端な言い方だけど一分一秒の時間も惜しいんだよ。風呂に入る時間さえもだよ。だから今は海へ行く暇等ないんだよ」道男は申し訳なさそうに告げて「大学に入学出来て無事卒業することが出来たら、その時はまた海に行こう。その日まで遊ぶことは禁止だよ。じゃあ! 授業があるんで御

免!」と侘びるように言うと、右手を上げて足早に教室へと走って行った。私は道男の意外な言葉に驚くと同時に、自分の感情ばかり押し付けて相手を思いやる気持ちになかったことに気付き恥ずかしいと思った。感心することの多い道男は、昼間は一生懸命に働き疲れた体に鞭打ち、夜は夜で寝る間も惜んで勉強に励み向学心に燃えているのだ。私は道男には、今後軽々しく声は掛けまいと心に誓った。

夏休みも終わりに近い日曜日、私はバルビゾンの森へ足を運んだ。道男の家はここから目と鼻の先だ。道男の家の前を通ると、長く低く続く細葉の生垣奥の庭先の木陰で、道男は本を片手に西瓜を食べていた。家の中で猛勉強をしているとばかりに思っていた私は、あのような勉強のやり方もあるのだと思わず笑ってしまった。森の入口から草道に入ると、今頃珍しく青い糸トンボが私の足元近くを低く飛び、森の中に入ると法師蟬が気怠そうに鳴いていた。池の辺りまで来て池の中を眺めていると、一年前の夏の日に道男に抱きつかれた時のことが思い浮かんだ。この池の辺りこの場所、たった今庭先で本を片手に西瓜を食べていた道男が泣いていた。私はあの時から、道男とは二度と会うまいと決めていたのに、この夏に入り放課後の学校で久々に出会い、大学受験の話聞いた時、勉強のさ

またげにならないために、今度こそ会ってはいけない人だと思った。それでも、受験勉強頑張つてね、くらいは言いたかったのにその言葉を言い出せないままの自分が辛かった。

池を眺めていると二匹のルリタテハ蝶が、ヒラヒラと舞いながら私の目の前を横切り、池の中に波紋が出来てその中に何故か、楽器工場でのアルバイト時の昼休みに見た楽器演奏や、海の家食事時の道男の姿が鮮明に浮かび出て来て、私は遣る瀬ない気持ちになつてしまった。数日後、私はまたバルビゾンの森にやって来た。

家を出る前に大事にしていたオルゴールの蓋を開けて、道男がくれた銀色の孔雀の羽根のついたピアノの鍵を見ると、赤トンボの曲の流れる中、赤いビロードの上のピアノの鍵は、以前より一層輝きを増している様に見えた。私は銀色の鍵をオルゴールの箱の中から取り出し、握り絞めたままバルビゾンの森へ行った。森の中の池の辺りに着くと、鍵を両手で握り直し池の中にそつと落とした。手のとどく程に浅い水底に落ちた鍵は、枯れた落葉の上で光り輝いて見えた。私が立ち去ろうとした時、気のせいか池に沈んだ鍵が「行かないで！ 苦しい！ 助けてエー」と悲鳴をあげたような気がして、私は捨てたばかりの鍵を池の中から掬

い上げてハンカチに包み、ポケットの中に入れて家に持ち帰り、再度オルゴールの箱の中に仕舞い込んだ。

私の頭の中には今までと異なる、真面目でキラキラと輝く道男の顔が浮かんだ。私は道男はどう見ても好い加減な私とは違い、甘い考えごとはず、常に努力で苦労も気にせず、着実に前へ進んで行く人だと思えた。

今度こそ会うまいと決めた日から、秋が来て冬となり時節は巡り、やがて春が来た。道男は目出度く念願の大学に合格、私は高校三年生になり、夕方からソロバン塾に通いソロバン検定三級に合格すると、次は駅前のタイピスト塾に通い和文タイピスト検定五級に合格した。私にとって初めての塾通いは、就職するため最低限の条件を満たしておきたかったからだ。そして私は、月に四回だけの華道部と茶道部に潜り込み、華道と茶道を習い、美術部の部活動は席を置くだけにした。

高等学校卒業が近付くと母が、「愛子。お前は見てくれが悪いから、洋裁学校か和裁学校に行きなさい。腕に職を付けておく方がいいわよ」と言ったが、この話を聞いていた姉が「これからはアパレルⅡ既製服の時代が来るのよ。どんなに肥えている人でも、痩せている人でも既製品で間に合うようになるわ。だから洋

裁学校へ行くなんてお金の無駄遣いよ」と、母と私を納得させるように言った。私は楽でもない家のことを考えて、早く自分の自由に使えるお金が欲しくて就職することにした。これと言って『伝』のない私は、小さな商社に就職することになり、入社早々二週間もかけて事務機械の講習を受け、事務員となり働くようになった。

仕事は雑用も多く、朝十時と午後三時に郵便局の私書箱の中から郵便物を取り出すこと、現金や小切手を銀行に預けること、その間に、支入金額と売上金額、入金金額と支払金額等それぞれの伝票を見ながら事務機械に打ち込めば一日の仕事は終わり、月末になればそれぞれの金額を機械が自動で計算してくれるので、試算表の作成もボタン一つ押すだけで楽に出来上がった。そして入金で嫌われていたのが『お産手型（十月十日）』と呼ばれていた、支払期日の長い手形だった。それから、時々お客様や仕入先から珍しい物が届いた時のお礼状を書くのも私の仕事だった。入社以来はじめての失敗は、年の瀬近くになり上司に年賀ハガキの宛名書きを依頼された時、私の机の上に山の様に積まれた年賀ハガキがありその葉書を見て、この山の量だから冗談に決まっていると思いき、ハガキは全部自分の机の引出しの中にしまい込んでしまった。数日後、上

司が「宛名書きは出来たかね？」と私に尋ねられた時「冗談と思ってまだ書いてないです」と答えると、上司が「仕事上のことで冗談はないよ」と笑いながら私を窘めてくれた。恥知らずで馬鹿丸出しの私だったが、入社以来の仕事は、朝八時から午後の七時半までで、事務所にいる時間は長く、日曜日でも出勤依頼の電報が来るので出社した。そして就職のためにと習ったソロバンも和文タイプも、この会社では全く必要のないものだった。

この様な状況の中で、私は週一回の料理学校に一年間だけ通ったが、洋裁と編物教室は三日坊主どころか一日坊主で終わりをつけた。

その後の道男は国立大学の工学部を卒業すると、以前働いていた街の中心部にある大手楽器会社に再就職することが出来た。その当時の道男から私に届いた葉書には、無事卒業、就職はOK、近々逢いたし、の電報のように短い便りだった。次に届いた手紙は、愛子様、昼休みに会社の購売横の休憩室まで必ず来てください。と、この時も用件のみ認めた短い便りだった。

道男との待ち合わせの約束の日は、初夏に入ってから暑い日だった。私の勤務する浜松駅前近くの事務所から、歩いて十分程の場所にある道男の勤める会社は天下一の楽器会社で、その会社の購売は一般の人で

も自由に買ひ物が出来る冷暖房完備で、当時としては珍しく冷房のきいた清潔で広々とした立派なスーパーマーケットだった。

私が欲しい品物を物色していると、入り口辺りが賑やかになって来た。何気なく見ると、年若い女の子達に取り囲まれて一人長身の好青年が入って来た。私が品物を並べた陳列棚の片隅で何気なく様子を伺っていると「今度はヨーロッパ方面で、その後はアメリカからしいよ？」とか云々、どうやら営業の見習いを兼ねた出張話をしている様だった。気になった私は陳列棚の陰から覗き見をすると、話の主は道男だった。白いYシャツに空色のネクタイが涼しげで、夏物のスーツもピシッと決まり黒く磨かれた靴を履いていた。離れた場所から眺めた道男の姿だったが、色白の顔は日焼けして頼もしく精悍に見えた。五年振りに見掛けた道男の姿には、夜間高校時代の面影は全くなくなり、履物も下駄から運動靴となり、今回は革靴を履いて、すっかり、ホワイトカラーワーカーになっていた。私は道男とは二度と会うまいと心に誓っていたのに、また会ってみたいと思うようになり、呼び出された場所まで来たものの怖じけてしまい、会話をすることも出来ず大手楽器会社の購売を後にした。私には道男が眩しく見えたのだ。

七月に入ると私の勤務する会社では、冬物の新商品の展示会をホテルで行った。

九州の宮崎県から訪れる百貨店の社長は、女子大卒の美人で背の高い愛人を連れて昼食はいつものこと、うなぎの肝水付きを注文し、四国の愛媛県から訪れるお客様は、札束を腹巻きに入れ、その上から晒を巻いてちんどん屋でもなく、ピエロでもない奇妙な出立ちで、頭の上には花を飾り付けた笠の様な帽子をつけてやって来る。この人、曰く「人が近寄らず、金は盗まれないよ」と。福島県のお得意先の老夫婦は、いつも和服姿で魔法瓶の中のお酒をチビリチビりと飲みながらの商談だ。

私の勤めることになった会社は、商社といえどもそれは名ばかりで、徒弟制度が残る『習練道場』と呼ばれた問屋だった。

やがて九月となり、秋とは名ばかりの暑さが残る日曜日の午後のこと、私はバルビゾンの森で偶然道男と出会った。「みっちゃん、本当に長い間の御無沙汰ね。

この前、私、購売まで行っただけで、みっちゃんは若い女の子達に取り囲まれていたので、悪いと思って出て行くのは遠慮したのよ。御免ね」と詫びると道男は「会社の女の子達のことは気にせず、気楽に声を掛けて欲しかったなァ、僕は休憩室と購売の中を行

つたり来たりして愛ちゃんを捜したよ。昼休みぎりぎりまでだよ。残念だったなあ！ でもここへ来てよかつたよ」と私に会えたことを喜んでくれた。「でも大学の四年間は長かったなあ、遊ぶこと等夢のまた夢だったよ」と道男は呟く様に言った後「ここは静かでないね。自然がいっぱいだし、第一気持ち落ち着くね。家にいると布を織る織機の音が喧しくて——何よりも暑い日でも涼しくていいね」と真情を話した。私には田舎者とはかりに思えた道男は、外国まで出向くような仕事をしている。「みっちゃんは凄いいね。入社早々海外に行くんだもの」と私を感じすると、道男は「先輩に仕事を教えてもらうためだよ。僕なんか一人では何も出来ないんだよ。周りは頭脳明晰の人ばかりだし、それに先輩達は頻繁に海外に行っているよ。僕なんか皆の足下にも及ばないよ」と道男は謙遜して答えた。その後、道男は私には理解出来ないことを喋り出した。「これからが大変だよ。英語も覚えなくてはいいけないし、それに、ハードウェアにソフトウェアの時代が来るからね」と、それとなく私に告げた。私にはハードにソフトの意味もわからず「ウエアードから??? 着る物のこと?」と道男に聞くと「全然違うよ」と道男は答えた。私はこのハードとソフトのことで道男との会話は辻褃が合わなくなり、惨めさを強

く感じた。道男は「要するにハードウェアは、コンピュータの機械装置の部分でソフトウェアは、コンピュータを動かすためのプログラムということだよ。テレビで言えばテレビ本体がハードで番組がソフトなんだよ。わかりやすくピアノで言えば、やがて人の指を使わずに自動演奏の出来る時が来る。その自動演奏機能がハードで、色々な曲を読みとらせるのがソフトなんだよ。ソフトは無敵なんだよ」と言った。私の前でハードとソフトの説明をする道男の姿は大手楽器会社の購売で見掛けた時よりも一層眩しく見えて、私には益々近寄り難い人になってしまった。そして道男を取り巻く環境と立場は、あまりにも私とかけ離れ過ぎていると思えた。そのような私に道男は「今度リフレッシュ休暇が取れそうだから、休暇が取れたら久し振りに海へ行こう。海が駄目なら、電話があることだし電話で話そう」と笑顔で同意を求めた。私は道男からの海への誘いは本当に嬉しかったが、以前のように「海に行きたい。一緒に連れてって!」と即答は出来なかった。私の心の中に近付いて来る道男の重圧を感じ、優しく声を掛けて来る毎に道男から離れようとする自分をどうすることも出来ず、森で約束までした海には行かなかった。そして私は自己嫌悪に陥り、これ以上道男の前に出ることは出来ないと思った。

真顔彼 ハードソフト語る 秋の道

雲二つ 流れ消え行く 秋の空

秋も深まった日曜日の夕方、私はバルビゾンの森に行った。紅葉も銀杏の葉もほとんど落ちて、雲一つない青空が広がっていた。私は池の辺りに立ち今まで長い間大切にしていた、銀色に輝く孔雀の羽根のついたピアノの鍵を、思い切り遠く池の中に投げ捨てた。これでみっちゃんとはさよならだ。と心に決めて——沈み行く夕日は、私の心と裏腹に赤く大きく燃えているように見えた。ここで私の青春の一片は終わりを告げた。

あの日から六十年以上の歳月が流れ去り、多くの物や自然を変えたりなくしたりして来た。バルビゾンの森もなくなり、跡地には住宅が立ち並び、高等学校も移転して、その跡地には老人介護施設が出来た。私の里の家も道男の家もすでになく、紡績工場の広い敷地跡には、大型複合店が出来た。

昭和、平成、令和へと時代は流れて、道男が語ったハードにソフトの時代もやって来て、姉が語ったアパレルも既製品で間にあい、安価な中国製品や、韓国製品、それにインド製品まで出回るようになった。

最近になりテレビや新聞紙上で、A IとかI Cとか言う英語の頭文字を時々見るようになったが、時代遅

れ（アナクロニズムと言うらしい）の私には意味がわからず、調べると、I Cは集積回路でA Iは人工頭脳とのことだった。ある日の午後見ていたテレビにA Iが出て来たので見続けると、人工頭脳満載の重さ四十kg丈百四十cmのロボットが、寝たままの老人を抱え上げて移動していた。次に見た時のロボットは、洗濯済みの衣類を乾燥機の中から取り出し、きれいに折り畳んでいた。驚いたことは、ロボットが重心を上手に持ってスケートボードに乗り、高い場所から低い場所へ登ったり降りたりしていたことだ。そしてもっと驚いたことは、空中で方向転換までしたことだった。また新聞の見出しに、A Iが調理をスタートとか、イチゴの受粉A Iがとか記載されていた。どうやらA Iの時代がやって来たようだ。

今や私は浦島太郎になってしまい、時代遅れのとるにたらぬ一介の老婆となってしまった。

初恋の 思い出遙か 遠退けど

彼の面影 今も変わらず

継る杖 道行く先の 彼岸花

（浜名区）

竹腰幸夫

今年の応募作は12篇。地域の伝説に材をとった1編と、イナカ帝国の滅亡を描いた異色作を除けば、題材は現代。書き手の皆さんの世代交代が進んできたのかという印象でした。文芸作品を読む楽しみの第一は、「発見」だと思います。新しい見方、人物、風景、問題意識など、いわゆる常識や日常の外に展開する、知られていない世界に触れる喜びです。そうした観点から、興味深かった作品を以下紹介します。

【雑草パトロール】雑草をめぐる物語。定年退職後、はじめて、自宅の庭の雑草の現実を目にした主人公。亡くなった母親の管理がいままで行き届いていたことに気づく。ホームセンターに行ってみる。店には雑草取りの薬品をはじめ、道具類が所狭しと並んでいる。いかに世間の皆さんが雑草に苦しめられていたかを思い知る。

やがて、なんとか自宅の雑草を取り終えてみると、近所のお宅の庭が気になる。散歩を妨げるように道路にはみ出している雑草がうっとうしくしてはかたが無い。断りなしに取っ払いのものは何かどうか……。『雑草』のモチーフだけで、軽快に1編を纏めた筆力に脱帽。

【貼り紙・妻は神様…】妻に頼り切って生きて来た半生。その恩を忘れていい気になっていて自分をとことん反省。その心得を貼り紙にした主人公。物語はその由縁を綴る。

主人公に比して、家族はみな立派な経歴をもつ人たちだ。なのに彼だけが落ちこぼれの日々。そんな自暴自棄の彼を救い出してくれたのが浜松でピアノ教師をしていた妻だった。就職をはじめ。以来、すべて妻の力におんぶにだっこ

だった彼なのに、いつかそれを忘れのほほんと生きて来た。これからは、しっかりとそれを自覚し、唯一孫たちに尊敬される新聞配達の仕事に精を出さなくてはいけない。ユーモアたっぷりの作品。

【青春の一片、バルビゾンの森】高校生の、淡い恋の物語。昭和30年代の田舎の高校生の息吹——無邪気でいたずらな男子生徒たち、美術部などのクラブ活動、放課後、自由に弾けるピアノなど、教室の背景は、同世代の読者の共感を誘うようだ。

昼間は仕事をしながら夜間高校に通い、大学を目指す先輩。彼の生き方の力強さにひそかにあこがれる主人公。その出会いと別れを「バルビゾンの森」が見守る。

【えんじ色の花】昭和29年。遠州鉄道奥山線に配備されたディーゼルカー「キハ1803号」通称サリーの物語。擬人化された列車たちは、今は廃線となった奥山線、曳馬駅、奥山駅間をひた走る。沿線の描写が楽しい。アイデアが生きた作品。

【男達の門出】ガーベラ農家物語。ガーベラの魅力に心奪われ、塾教師の仕事を止めて農場へ来た青年。一方、長い不登校とその後のきつい世間にもまれて、この農場へ来た41歳の男。二人を見守る農場主。彼はかつて跡継ぎの息子を交通事故で失っている。今は、二人にこの仕事を任せようと思っている。「生きるために仕事をするのではない。仕事をするために生きるのだ」その姿勢が、男たちの生き場を開く。

【縫合】色々の仕事、現場を縫合するようにして働き生きる主人公。40歳のころ脳腫瘍手術の後遺症で言語が不明瞭となる。そのために仕事も恋人も失い、介護の父親を抱える苦難の生活が始まる。しかし「浜松市民文芸」に投稿する一面も、彼の人生だ。

小説選評

柳本宗春

丁寧に綴られた作品が多く、興味深く読みました。中でも創作の妙が味わえるものに魅力を感じます。十二作品も応募いただいたのでほんの一言ずつですが、読後の感想を記します。

『改めて紡ぐ北水窪町の伝説と物語』

題名通り水窪町の地誌とそこに伝わる様々な話を自身の記憶とともに紹介している。最初の「おかわ様」の話などをもっと脚色した一遍として読んでみたい。

『タスキの重み』

高校駅伝の選手である主人公に焦点をあてた青春ドラマ。レース中の描写には臨場感があるが、三年間の「たすきの重み」を描くにはもつと紙数が必要だったのではないか。

『秩序(エントロピー)』

プラスチック成形に始まる会社を中心に工場発達の歴史の記録として面白い。ただ、創業した社長のドラマなのか、主人公と思しき社員のドラマなのか曖昧になっている感じが残る。

『十年後の睡蓮と地植えのシクラメンそしてジュフシクツリー』

ガーデンパークの植物をベースに、妻や息子との思い出を綴る。自然な語りの文体が生き生きと思いを伝える佳作。

『青春の一片、バルビソンの森』

昭和三十年代の高校時代から二十代までの自身の思い、成長を幼なじみとの関係を軸に描いている。まさに物語の「キー」となるピアノの「鍵」に関わる描写は切ない。

『えんじ色の花』

工場から納入されたディーゼル機関車を女性新入社員に見立てて、戦後復興期の遠鉄奥山線の歴史と沿線風景を綴る。アイデアが軽妙かつ生き生きとした文体が魅力的である。

『男達の門出』

ガーベラ農家で働く男達が抱える様々な事情と思いを描く物語。それぞれのエピソードがバランス良く配置され、その関わらせ方も良い。展開に引き込まれ、読後感も爽やかであった。

『祐介の妻』

会社で陶芸展の企画を任せられ多忙を極める妻への不満から揺れ動く夫・祐介の心情と行動の表現にリアリティーがある。余韻の残る結末であり今後の二人の関係にも想像が広がる。

『雑草パトロール』

いやいや始めた庭の除草作業の体験から、他家の庭の手入れの悪さまでが気になってしまう主人公。次第にエスカレートする行動と抑制する気持ちのせめぎ合いがとても面白い。最終盤の意外な展開、伏線の回収など非常に巧みな小説だと思ふ。

『貼り紙・妻は神様…』

だめな自分を支えている妻への感謝を忘れ、調子に乗りやすい夫が自戒の言葉を壁に貼ってあるという設定が面白い。口は悪いが夫を理解する妻の姿や孫との交流も描かれ心温まる。

『縫合』

何年も続くシリーズものであるが、今回は展開に、小説と現実をクロスさせる意外性もあり興味深かった。

『その昔』

スペインのインカ帝国征服を描く作品。深い造詣と人物の描写力を感じる。もう少し物語を整理するとさらに良いと思う。

児童文学

「市民文芸賞」

おじょうさんのひみつ

金指 芙美代

にぎやかな町の大通りから、せまい路地裏にはいると、小さく古い人形の店がある。

その店の中に、ひっそりとしている、フランス人形の私。一段しかない棚の片すみに立てかけられ、うすぐらい灯が、かすりきずだらけの私のひたいや、手あかのついたピンク色のほっぺを静かにつつんでいる。

私の名前はマリィ。

むかし、私をとともかわいがってくれたおじょうさんがつけてくれた名前だ。

私がこの人形の店にいるのには、深いわけがある。

私は、おじょうさんのひみつを知ってしまった。

おじょうさんは、私にそのひみつをうちあけると、「マリィ、絶対に誰にもいわないで！ 絶対によ」と、いった。その夜、おやしきから、姿を消してし

まったのだ。

信じられなかった。

まさか！ まさか、あんなにきれいなおじょうさんが…。

私は、息がとまるほどおどろいた。

おじょうさんが小さいころ、私はおじょうさんの、大切なフランス人形だった。

おじょうさんは、私をまいにち抱いて、楽しかったこと、悔しかったこと、嬉しかったこと、いっぱい、おはなしをしながら、ねむった。

私も、おじょうさんに抱かれながら、いい気持ちでねむった。

小学生になって、おじょうさんは、ブロンズの髪が肩まで伸び、ますますきれいになった。

私も、そんなおじょうさんの、楽しそうな笑い顔をみるのがすきだった。

高学年になって、ますます大人っぽく美しくなったおじょうさん。

くるとまたいたカールのポニーテールが、とても似合っていた。

いつも真剣なまなざしで、姿見をみていた。

そんな時、私は、

「おじょうさん、きれいなね」

と、よろこんでいった。

おじょうさんは、私をみて、

「マリー、ありがとう」

と、ほほえみ返してくれた。

でも、そのうちどうしてか、おじょうさんは、学校から帰ると、私の頭をたたくようになった。

まいにち、私の頭をたたいては、私にそっぽをむいてしまう。

私は、とても悲しかった。

その日も、おじょうさんは学校から帰ると私の頭を

ポーンとたたいて、私をなげすてた。

「いた〜い」

私は、ベッドのわきにぶつかってころがった。

おじょうさんは、ころがった私を横目でみて、ベッドの中にはいり、まくらをかかえてシクシク泣きはじめた。

「おじょうさん、どうしたの？ どうして泣いているの？」

「マリー、マリーには、わからないわ」

「わたしには、わからないことなの？」

「もういいの。マリーはだまってる！」

と、おじょうさんは、両手で顔をおおい、すすり泣いた。

それから、おじょうさんは、夜になるとベッドの中で私を抱いていつも泣いていた。

姿見もみなくなり、髪もたばねなくなった。

「どうしたの？」

私は、おじょうさんにきいた。

「そっとしておいてマリー」

おじょうさんは、そういつて横をむいた。一すじの涙が、おじょうさんの枕をぬらした。

何日かすぎた夜。

ベッドにはいったおじょうさんは、私をみつめて、とつぜんいった。

「マリー、あなたは、ほんとうのフランス人形なの？」

「えっ！ どうして？ わたしはフランス人形よ」

「そう、マリーは、人形なのね。わたしね、もしかしたらマリーは、人間かもしれないと思ってたの」

真剣な目で、そういうおじょうさんに、私は、やさしく笑うと、

「わたしは、人間じゃないわ、フランス人形よ、マリーって、おじょうさんが名前もつけてくれたでしょう」

「そうよね」

「そうよ、へんなおじょうさん、どうしちゃったの？

どうして、そんなこと、まじめな顔してきくの？」

「マリー、ごめんなさい。もうきかないわ」

おじょうさんは、うるんだ目でそういつて私の頭をなでた。

それから、私をそっと、胸にかかえると、そのままねむってしまった。

数日すぎた夜中。

おじょうさんは、私を抱いてねむっていた。

ブーブー ブーブー ブーブー

おじょうさんの胸のあたりから、音がきこえてきた。

ブーブー ブーブー ブーブー
おじょうさんがねむっている時にきこえるふしぎな音。

この音は、ずっと前からきいていた。

少しづつ、音は大きくなっていた。

私は、なんだかしらないこの音をききながらねむると、とても安心した。

空がどんよりうすぐらい日だった。

おじょうさんは、学校から帰るとすぐ、私を抱いて、

しみじみ、私をみつめた。

それから、

「マリー、だいすきよ」

つぶやくようにいった。

きえいりそうな声だった。

外は、雨がシトシトふつてきた。

大きなけやきの木の葉が、風に吹かれて、窓にしがみついている。

おこると、私をベッドになげていた、あのおじょう

さんから、私のこと、だいすきよといわれると、とても嬉しくて、涙がにじんだ。

おじょうさんは、私のほっぺを自分のほっぺに、くつつけて、

「マリー、いつも、わたしのみかたでいてくれてありがとう」

私は、あふれてきた涙を、ひとすじ流すと

「これからも、ずっと、おじょうさんのみかたよ」

そういう私を、ジィツとみつめて、おじょうさんはいった。

「わたし、わたしね、ほんとは…」

そつと、私から目をそらすと、窓の外をみた。さみしそつだった。

私は、おじょうさんのうるんだ横顔をみつめて

「ほんとは？　ほんとはどうしたの？」

おじょうさんは、窓の外をみたまま、

「マリー、今からいうこと、信じてくれる？」

そういうと、おじょうさんは、だまってしまった。

シーンと、静まりかえつた部屋に、風の吹く音が、大きくきこえた。

「今からいうことって？」

おじょうさんは、まだ窓の外をみていた。

いちようの葉がハラハラと、舞った。

「おじょうさん、今からいうことって、なあに？」

私は、ききかえした。

「おどろかない？　マリー」

「わからないわ。きかなければ、おどろくかどうかわ

からない」

「そうよね」

「そうよ、いったいなんなの？　おじょうさんには、なにか、かくしていることがあるの？」

私と、おじょうさんのあいだに、ゆっくり、時間が流れていった。

「わたしね…」

おじょうさんは、ポツリといった。

「わたし…。　ほんとは、人間じゃないの」

そういうと、遠く外をみていたおじょうさんは、さみしそつにうつむいた。

ブルンズの長い髪が、おじょうさんの顔におおいかぶさつた。

「えつ？　人間じゃないって？　うそ！　うそよ！！

おじょうさんが人間じゃないなんてそんなこと信じられないわ、うそでしよう？　おじょうさん、うそよね、うそつていつて！」

「ほんとよ…」

顔をおおつた髪をすくいあげ、

「ほんとに人間じゃないの」

そういうと、手の平で顔をおおい、苦しそつに声をあげて泣き始めた。

肩がふるえている。

おじょうさんの大粒の涙は、つぎからつぎにあふれ、私のほほに伝わってきた。

「おじょうさん、おじょうさんは、ほんとはなんなの？」

私は、あわててそういった。

「ほんとはね」

おじょうさんは、涙をふいて天井をみあげると、そのまま、

「マリー、わたし、ブーブーって音、するでしょう」

「ブーブーって音？ そうね、ブーブーって音は、おじょうさんの胸のほうからきこえてくるわ」

「マリーには、きこえてたのね」

「その音、とてもすき！ その音をきくと、私、安心したわ」

「マリー！ この音がすきって？ マリーはブーブーって音、いやじゃないの？」

「だってわたし、その音をきいてると、とてもいい気持ちになるの」

「どうして？」

「わからないわ、でも、なんだかふしぎなくらいすき」

「学校みんなは、わたしのブーブーって音が、ときどきになると、大さわざして笑うの。」

「へんな音、だすな」って、ずっとずっと、いじめら

れてきたのよ」

「そうだったの」

「きょうもよ。だんだんおともだちも、はなれていったわ。いつも一緒だったボーイフレンドもよ、さみしかった」

ためいきをつき、

「しかたないわ」

と、はきすてるようにいった。

「つらかったわね、わたしは、だいすきな音なのに」

「ありがとう、マリー。マリーってやさしいのね。でも、もうだめね、ひみつはいやだわ」

おじょうさんは、私を枕の上に置くと、また、目に

涙をいっぴいためていった。

「わたし、わたしね……」

フウーと大きく息をはくと、下をむいた。

そして、小さな声で

「ぶた、ぶたの子どもよ」

「えっ？」

「ぶたっていつているでしょう！」

おじょうさんは、そういったとたん、私をかべになげつけ、ベッドにつっぶして、声をあげて泣いた。

しばらく泣いたあと、私をひろいあげると

「マリー、ごめんね、いたかったでしょう」

と、なんども、私の頭をなでた。

おじょうさんは、私を抱き、ベッドにこしかけると、この家にひろわれたことを、少しずつ話してくれた。

あするとき、

子ぶただったおじょうさんは、大きなぶたのあいだには生まれ、ゆられていた。

トラックに、ぎゅうぎゅうづめに乗せられた、ぶた達が山の道をくだり、うっそうと、しげった林を通りすぎ、もうすぐ町へつくころだった。

トラックが小石をふんで急ブレーキをかけた、そのとき、子ぶたは荷台からころがりおちてしまった。

一瞬の、できごとだった。

空には、輝くばかりの星が、暗やみにおとされた子ぶたを照らしていた。

灯のないつたのからまる古い石のトンネルを、ひたすら歩き、やっとなのおもいで子ぶたはふんすいのある、広いおやしきにたどりついた。門扉の灯がキラキラ輝いていた。

(なんてすてきな、おうちでしょう)

子ぶたは、そのおやしきをみあげた。

庭には、リンゴの木や、カエデの木、畑には、白菜やキャベツの野菜も植えてあった。

あちらこちらに、むらさきや白、赤の花が咲いていて、とてもきれいだっただ。

子ぶたは、このおやしきの庭の片すみの、大きなイチヨウの木のかげにかくれて、なんにちも、夜をすごした。

だんなさまは、庭の水まきをしたり、おくさまは、花をつんだりしていたが、気づかれなかった。小鳥のさえずる声に、ふたりの、笑い声もきこえる。

そして、その仲の良いだんなさまとおくさま、すてきなおやしきをながめながら、いつも、

(いいなあ、こんな家の子どもになれたら、嬉しいなあ)

と、子ぶたは、ひたすら思いつづけた。

「オギヤア、オギヤア、オギヤア」

ある朝、目がさめた子ぶたは、人間の声で泣いていた。

たれさがった耳がない

大きな鼻が小さい

くるつとまわったシッポもない

子ぶたは、人間になってしまったのだ。

子ぶたは、自分のブーブーという、なきごえを、そのとき、心のネジでギユツと、とめてしまった。

「ネジでギユツと？」

マリーは、ふしぎそうにきいた。

「そう。誰にもわからないように心の中に、とじこめたの」

そのとき、庭で花の手入れをしていた、おくさまは、赤ちゃんのなき声のするほうにいつてみた。

すると、イチヨウの木の根元に、まるまる太った赤ちゃんが、おくさまをみて、にっこりと、笑った。

「まあ、なんてかわいいんでしょう」

と、おくさまは赤ちゃんを抱きあげ、やさしくほおずりをした。

「その赤ちゃんが、おじょうさんなの？」

マリーは、真剣な顔で、おじょうさんの話をきいた。

「そうなの、それからのわたしは、ぶただとわからないように、気をつけてきたの」

「それで、ぶたの声を心のネジでしめたってことなのね」

おじょうさんは、静かにうなずいた。

そして、話をつづけた。

「パパとママには、子どもがいなかったの。だから、わたしをととても大事に、かわいがってくれたわ」

「そう、よかったわ。しあわせだったのね」

マリーは、おじょうさんをみつめて、やさしくほおえんだ。

「ええ、とてもしあわせだった。わたしが、おしゃべりできるようにになると、パパとママは、フランス人形を買って与えてくれたの」

「そのフランス人形が、わたしなの？」

マリーは、目をまるくしてきいた。

「そうよ、フランス人形のあなたは、とつてもかわいかったわ。ピンク色のほっぺに、目が、ぱっちりで、まるで人間のような顔をしたのよ」

「そういえば、おじょうさん、『マリーは、ほんとうにフランス人形なの？』って、きいてたわね」

おじょうさんと私は、みつめあったまま、しばらくだまりこんだ。

そして、おじょうさんは、うつむいて

「わたし…」

「わたし、もう、うそをついてるのつらくなってきたの」

そしてそのまま

「それで、少しずつネジを開いたの」

「心のとびらね、おじょうさんの」

「ええ、そう」

「勇気があるわね、で、だんなさまとおくさまは、気

づかなかったの？」

「わからないわ、もしかして、パパもママもなにか、気づいてたかもしれないわ」

「そう……」

マリーは、ひとこと、そういうのが、せいっぱいだった。

「だって、パパとママと私が、おしゃべりしてたとき、急に、ママが『あら？ パパったら、おなら？』っていったの。でも、パパはにが笑いただけだった。私、だまって、自分の部屋にもどったの」

「そうなの」

マリーは、うなずいた。

そしてマリーは、

「かなしかったのね」

そっと、おじょうさんの手をにぎりしめた。

「マリー、あなたと一緒にいられたこと、とても、しあわせだったわ」

おじょうさんは、涙をうかべて、私の手をにぎりかえした。

そして、私をベッドにねかせて、いつまでも、頭をさすってくれた。

そして

「あゝあわたし、楽になったわ」

スウーっと、静かに息をはいた。

そのうち、おじょうさんは、ねむってしまった。

私は、おじょうさんのねがおを、そっとみつめた。

長いまつげ、やわらかな口びる、白くて、ふつくらしたほっぺ。

どのくらいいたったのか、いつのまにか私もねむっていた。

ふと目をさますと、カーテンのすきまからみえる夜は、シーンと暗く、木の枝がゆらゆらとゆれている。

私は、横にねているおじょうさんを、なにげなくみて、おどろきのあまり、あどずさりした。

「あ、あ、」

息がとまりそうなくらい、びっくりした。

まさか？ なぜ？

おじょうさんの頭に耳がある。

小さな鼻が、大きくなっている。

その鼻の二つの穴から、いつもより大きくブーブーという音がきこえる。

おじょうさんは、子ぶたにもどっていた。

笑っているように、ねむっている。

とても、かわいかった。

私は、おじょうさんの胸もとに、そっと、はいりこみ、ブーブーという音をきいた。

(なんていい気持ちなんだろう)

私はうっとりとして、子ぶたにもどったおじょうさんの胸の中で、ぐっすりとなむってしまった。

時計の針が、あしたを刻んでいた。

おじょうさんは、静かにまぶたをあけ、胸の上でねむっている、マリーを、そっと、抱き、枕の上にねかせた。

そして、やさしくきずだらけのほほに、口づけをして

「マリー、さよなら」

暗い部屋を出ていった。

そして、一階のパパとママの寝室のドアノブに手をあて、深いおじぎをして、おやしきを離れていった。

「チュチュユルル」

小鳥がやさしくないでいる、いつもと同じ静かな朝だった。

私が目をおさますと、一緒にねていたはずのおじょうさんの姿はなかった。

ベッドの下もさがした。クローゼットの中もさがした。だけど、おじょうさんはいなかった。どこにもいなかった。

さみしくて、つらい日が、その日からつづいた。だんなさまとおくさまは、おじょうさんが姿を消してから、悲しんで毎日、泣きくらしていた。

一年をすぎた頃、だんなさまとおくさまは、おじょうさんの思い出の部屋を少しづつ片づけはじめた。

娘の大切な宝物のマリー人形だけは、手ばなしたくなかった。ただ人形をみるたび、娘のことが思い出され、あまりにもつらすぎた。

それで私は、めぐりめぐって、この町の古い人形の店にやってきたのだった。

はだか電球が一つ、ついている、うすぐらい店。

丸いすに座り、おばさんがいねむりをしている、ひなびた店の棚のすみに私はいる。

だんなさまとおくさまは、あきらめきれずきょうもおじょうさんをさがしつづけ車を走らせていた。

「きょうは、一段と冷えるわね、こんな日にあの子、どこにいるのかしら？」

おくさまは、そうつぶやくと、車のウィンドウを少しあげ、木々に積もった雪をみあげ、

「パパ、あの子、寒いでしょね」

一すじの涙を流すと、お祈りするように手を合わ

せ空をながめた。

だんなさまは、ただ黙って車をゆつくりと走らせていた。

そして、トンネルにさしかかったとき、かすかに白い影が、せまってきた。

近づいていくと、片すみには、うずくまった子ぶたがいた。

「あなた、子ぶたよ、みて、あそこに子ぶたがいるわ。ちよつと、とめて」

「あの子をさがしているんだ、いそごう！」

「でも、子ぶた、ふるえているわ、まっつて！」

「もう、日が暮れてしまうぞ」

「わかったわ、でも、少しだけまっつて！」

おくさまは、車からおりと、子ぶたに近寄り、のぞきこんだ。

子ぶたになったおじょうさんは、おくさまをみあげると、

（ママ!! ママ、抱いて!）

と、叫んだ。

「あら、ふるえているわ、どうしましょう」

「ブーブー、ブーブー」

「泣いているわ、こんなに寒いのにどうしたの？」

「ブーブーブー、ブーブーブー、ブーブー」

大きな泣き声にかわっていった。

おくさまは、トンネルの片すみにいた子ぶたを、そつと抱きあげ、肩に巻いていた、グリーンの手スツールにくるむと、車に乗った。

だんなさまは、子ぶたの頭をなでるとほほえみ、車を走らせた。

おくさまも、だんなさまの横顔をみつめ、ほほえむと、やさしく子ぶたを胸に抱きしめ

「何だか、娘のメギーが帰ってきた気がするわ。この子ぶたの名前、メギーにするわね」

だんなさまは、ただ笑っていた。

「ごめんください」

グリーンのストールに子ぶたをくるみ、その子ぶたを子どものように抱き、店に入ってきたのは、おくさまだった。

「いらつしやいませ」

丸いすからゆつくり腰をあげ、ちよつと太ったおばさんは、にこにことおじぎをした。

おくさまは、抱いている子ぶたの頭をなでて

「この子のオモチャをさがしているの。なにかすてきなお人形あるかしら？」

「まあ、なんてかわいらしい子ぶたですこと」

「ありがたい、メギーっていう名前なの」

「あら、メギーちゃんっていうのね。いい名前なこと」

「ええ、娘の名前と同じなの。わけは、きかないでね」

「人間のような、かわいい顔ですね」

「そうでしょう？ ふしぎなくらい人間のよう、かわいいでしょう」

「ほんとに」

「メギーはね、トンネルの片すみで、悲しそうに泣いてたの、寒かったのよね、メギー」

おくさまは、メギーをみつめて、やさしくほほえみ、大切な宝物のように抱きしめた。

「そのときね、この子ったら、私をジィッとみつめて、ブーブーっていいながら、私の胸の中で眠ってしまったのよ」

「おほほほ、まあ、なんてすてきなこと」

おばさんは、口に手をあてて笑った。

おくさまも笑いながら

「メギーの寝顔をみていると、かわいくってかわいくって」

子ぶたになったおじょうさんを、ギュッと抱きしめた。

「しあわせですね、子ぶたのメギーちゃん、やさしいおくさんと一緒に暮らせて。さあ、どうぞ、ゆっくり

オモチヤの人形を選んであげてくださいね」

「ええ、そうするわね」

おくさまは、店の中をぐるっと回ってきた。

（おくさま、あつ、子ぶた！ おじょうさんだ！）

うすぐらい店の棚の上で、私は、いっしゅん、ころがり落ちるかと思うほど、おどろいた。胸が高なり

（おじょうさん、わたしよ！ マリーよ！）

と、叫んでいた。

おくさまは、子ぶたになったおじょうさんを抱いて、私の並んでいる棚のすみに立ち止った。

「あら？ このフランス人形、娘のメギーにはじめて買ったお人形だわ」

なつかしように、マリー人形の私をみつめた。すると突然

「ブーブー、ブーブー」

おくさまの胸の中で、子ぶたのおじょうさんがいない。

（マリー、マリー、あいたかったわ）

（おじょうさん！ わたしもよ）

「ブー、ブー、ブー、ブー、ブー」

おじょうさんは、私をみつけると、大きな声でなきつづけた。

「あらあら、この子、大きな声、おほほほ」

おくさまは、はだけたストールを子ぶたにかけなおすと

「メギーって、嬉しいとき、いつもブーブーってなくのよ」

おくさまは、子ぶたのおじょうさんに、ほほずりをした。

そして、フランス人形の私に、おじょうさんを近づけて

「メギー、娘の思い出のこの人形と、おともだちになりたいのね。まあ、手も足もこんなにバタバタさせて、そんなに嬉しいの」

（マリー！ めぐりあえたのね、もう離れないわ）
（おじょうさん、わたしもよ）

おじょうさんは、なんどもブーブーとないて、私にキスをした。

「パパ、コーヒーをいれたわよ」

広いふんすいのあるおやしきの庭で、花に水まきをしているだんなさまをよぶ、おくさまの明るい声がきこえる。

「いま、いくよ」

芝生の上の白い丸テーブルに、コーヒーの香りが漂っている。

おくさまの隣のイスには、ぶたになったおじょうさんと私が仲よく座り、おじょうさんはいしそうに、クッキーを食べている。

おくさまは、静かにコーヒーをすすり、やさしくおじょうさんをみつめていた。

「これであの娘がいたら、どんなにしあわせでしょう」
水まきが終わっただんなさまが、小走りにきてイスに座ると、おじょうさんの頭をなでて

「クッキーもおいしそうだな」
と、一つ、つまんだ。

さわやかな風に、イチヨウの葉が音もなく舞う。
おじょうさんと私だけの、小さなひみつにつつまれた、秋の昼下りのことだった。

（中央区）

「入選」

ダイダラボッチは 今どこに？

内山文久

今から昔話をします。大男のお話です。大男の名前はダイダラボッチといえます。それでは始めます。

*

むかあし、むかあし、ダイダラボッチはある場所にとどり着きました。やつとのことのでとどり着きました。

「どうやって、そこにたどり着いたの」
きみにきつとそう聞かれると思いました。実は海を泳いでそこまでやって来たのです。

ダイダラボッチのお父さんの名はアポリジニのデニイ。お母さんはジョウモンのシモメといえます。ふたりはミンダナオという島で出会ってけっこんし、ダイダラボッチが生まれました。ふたりとも、ほうけんが大すきでした。南の国に生まれたお父さんは海を泳いで北へ、北の国に生まれたお母さんは海を南へと泳い

で行って出会ったのです。(わかりやすくしましょう。お父さんは今のオーストラリア、お母さんは今の日本生まれなのです。そしてミンダナオ島というのは今のフィリピン国にあります。お父さんとお母さん、そしてダイダラボッチはミンダナオ島にあるアポ山という所に住んでいました。そこには深いジャングルがあり、三人でしずかにくらすことが出来たのです)

ダイダラボッチのかぞくはみんな、しん長が大きくて、お父さんは百六十二メートル。お母さんは百三十八メートル。ダイダラボッチはずいぶん大きく百九十三メートルもあるのです。みんなからだが大いから、たくさん食べなきゃなりません。それであちこち動きまわることになるのです。たくさんのお食べ物やさぐすのです。ミンダナオ島は海も川も野原も山もあり自然がゆたかです。食べられる動物の肉も、魚も、木の実も、草だつてたくさんありました。ダイダラボッチたちは食べられる物はなんでも食べていました。「でもどうして、ダイダラボッチはそこに行こうとしたの」

このことも君たちは聞きたいのでしょう。それはねダイダラボッチが小さい時からずっとお母さんの国に行きたいと思っていたからです。お母さんの話が大すきなダイダラボッチにお母さんが、その国は今住んでい

る南の島ミンダナオ島のように、ジャングルがあつてたくさんの木の実があつて、また動物もたくさんいるわけでもないけれど、そこには四つの（季節）^{きせつ}とというのがあつて、住むととても気持ちがいいということです。とくにお母さんの話の中で

「わたしに住んでいたイワテという所は秋という季節にはまわりがすっかり紅葉するの。赤やだいたい、また黄色の葉が緑の葉にまざつてきれいな。また冬になるとつめたいけれどまっ白な（雪）というものが空からふつてそれが大地にたくさんつもの、それはそれは、きれいなよ」

という話をなん度も聞いていたのでダイダラボッチはそのけしきを見たい、雪にもさわつてみたいと思うようになっていました。それで

「大きくなつたら、おいらはぜつたいイワテに行くんだ」

と決めていました。いよいよその時が来たのです。

ダイダラボッチは元氣よくミンダナオの海に向かって走り出し、そしてとびこみ北に向かつて泳ぎました。するとダイダラボッチはすぐにルソン島、そしてタイワン島に泳ぎ着きました。ミンダナオ島の海の水は北に向かつて流れていて、イワテのほうへ向かいます。黒しおといいます。ダイダラボッチはその流れに

乗つて泳いだので早かったのです。そこからオキナワ・アマミの島を左にながめながら、いっしょけんめい泳ぎ、キュウシュウ・オオスミ半島へと着きました。見ると北にむかつて広い大地が広がっています。近くの山からモクモクとけむりが上がっています。でも「まだここではないようだ」とダイダラボッチは思い、右のほうに見えたもつと大きな大地に向かつてまた泳ぎだしました。でも、とちゅうで泳ぎ着いた場所クマノでは、さすがのダイダラボッチもつかれてヘトヘトになっていました。それでもなんとかがんばつて、ここに着いたつてことになるのです。

「ぼくたち、わたしたち、なん度も思っているけど、いったいここつてどこなの？」

ああきみたち、そんなに急がないでください。もう少し待つてください。ちゃんとお話しますからね。

さつきもいいましたが、やつと大地にたどり着いたダイダラボッチはつかれきつていたので、地面に左のほつぺを横につけ、だらりと手をつかっているのです。ろうとしました。体の半分が海につかっているのです。が、少ししめつた砂も土も、せなかにやさしくふりかかる波も、とても気持ちよかったです。グッスリねむれそうでした。それでも時どき目を開けました。するとほるか向こう、いただきに雪をかぶつた大きな

山が見えました。

「あの山、ほかの山なんてかんけいなくらい、高く
てかっこうのいい山だな。何という山なのかな」
そう思いつつ、またうとうとし、ねむってしまいました。
た。あまりにもつかれていたので、どのくらいねてい
たのかはわかりませんでした。

しばらくすると、なぜかかみの毛がもぞもぞするの
で目がさめました。何かがさわっているのだけれど、
わからないのです。それでダイダラボッチはようじん
ぶかく、うっすらと目を開けてみました。そして気が
つきました。

「小さな二本足の虫たちがおいらのかみの毛を細いほ
うのようなものでいじっている」

それに気づいてなんとかおきようと思ったのですが、
じつはなんにんかのちいさな、ちいさなこどもたちの
手が、ダイダラボッチのかみの毛をわいわいいいなが
らさわっていたのです。それでダイダラボッチはだま
ってしずかにしていることにしました。よく見るとこ
どもたちはみんな本当にふつうの人間のこどもなので
すが、ダイダラボッチたちにとって（とつてもちいさ
なひと、アリスさんのようなこびと）としか言えないひ
とたちでした。みんな麻あさという（せんい）をたくさん
使い、ひとまとまりにあみあげたかんたんな服を着

て、動きやすいように、こしを木の皮をなめしたひも
でしばっているのです。そしてダイダラボッチにはわ
からないことばでしゃべっているのです。どうやら日
本のことばのようです。

「これは大きな人間だよね」

「たぶん、そうだよ」

「長いかみの毛、一本の太さがぼくの手のひらの大き
さだ」

「クジラより大きいよね？」

「もちろん。クジラなんかよりだんぜん大きいさ」

「足がずつと遠く、波のなかにはいついて見えない
よ」

「からだは茶色に日やけして、キンコツリユーリユー
だ」

「このひと死んでいるのかな、それとも生きている？」

「わからない。でももし目をさましたらこわい」

「そうになったらぼくたちみなふんづけられて（ぺしや
んこ）になっちゃう」

「キヤーこわい。どうするの」

「おとなたちをよんでこようよ」

「そうだそれがいい。そうしよう」

わいわいがやがやいいながら、ようすをうかがって
いたこどもたちでしたが、おとなをよぼうと、かけあし

で昼の浜はまからおざかっけていきました。

ダイダラボッチは思い出しました。

「そういえば母さんがいつかいた。この国に住むひとはせがとつても低いし、住んでいるひとも少ない。だけどみんなやさしい。おいらたちともなかよく、くらせるひとたちだつて」

つかれていたダイダラボッチでしたが、そのことがわかつて安心したのか、いつの間にかまたねむつてしまいました。

ふたたび気がつくとき数十人のおとなと思われる男のひとたちと女のひとたち、それからさつきのごどもたちがダイダラボッチの頭のまわりや肩かたの近くにいました。ダイダラボッチは目をつむつてだまっています。

おとなの一人・長老ちやうろう（その土地のいちばんお年よりで村長さんみたいなひと）と思われる男が話しはじめました。

「これはエゾというところに住むジョウモンキョジンじゃな。今ではすっかり少なくなつたようじゃが、このひとはまだ生きているようじゃ」

「このひとたちはとてもおだやかだから安心じゃ、ただあまりにもからだが大きすぎて寒いあのエゾだけでは住めなくなつて、多くのひとたちはほかの地へうつつて行つたというんじや」

「大きな鳥のはねをたくさん重ね、それを木や草のひもでしばつてまとめたこしみの（短いズボン）だけのすがた。このひとはきつと南の方からやつてきたのだから。じゃが今はつかれてねむつておるようだから、このままねかしておくのがいいじやろう」

村びとたちは（うんうん）とうなずいてそれぞれの家に帰つていきました。

ゆうぐれ時、太陽は西の方にしずんでゆきました。春になつたばかりというのですがなぜかその夜はあたたかく、ダイダラボッチはグルグル・グダグダとなんどもねがえりをうちました。ねむれないのではなく気が持ちがいいので半分ふざけて、ひとばんじゆう、何百回もゴロゴロ浜をころげまわつたのでした。朝ようやく目をさましてみるとダイダラボッチの上半身じやうはんしんは砂だらけになつています。それになんとダイダラボッチのまわりには何とまっすくな砂浜が出来ていたのでした。ダイダラボッチのかたはばは六十メートルもあるのですからそんなにグルグル、グダグダ動くとじめんはこすれてあつという間に何キロもの砂浜になつてしまったのです。きつとねがえりをうつたびはげしく音もしたのでしようが、高台近くに住む村のひとたちは「打ちよせるゴウゴウという波音が今日はいつもよりはげしいな」

くらいに思ったのでしよう、だれも起きてまっくらな夜のダイダラボッチのすがたを見ることはありませんでした。

つぎの朝、目をさましたダイダラボッチはゆつくりと立ちあがり、あたりを見ました。すると東の方、足もとに小川が流れているのを見つけました。ダイダラボッチは百九十三メートルの体です。今は朝です。ダイダラボッチはさっそく、小川に足を入れ両手を合わせて小川の水をくみ、顔をあらってみました。

「とつてもつめたいぞ、だんぜん気持ちがいいぞ」それで思い切つて飲んでみることにしました。

「あつ、これはとてもうまい水だ。南の島の水は生ぬるくて少しくさいにおいがした。だからあまり飲まなかつた。のどがかわいた時など飲むと、おなかをこわしたからな」

「おいしい、おいしい。おいしい、おいしい」

ダイダラボッチがあまりにも水を飲むので、しだいに水の流れは弱くなつて、ダイダラボッチの水をすくう両手には魚がいっぱい入つてくるようになりました。ダイダラボッチはぜんぜん気にしないで、水といっしょに飲みこみました。

「ゴクゴクゴク、ムシヤムシヤムシヤ」

「ああ水がうまい。魚がうまい。ウナギもうまいな」

むかしむかしのことですから小川にはたくさん大きな魚やウナギ、川エビなどもいました。人間はまだ少なく、また人間と同じように、遠くからたどり着いた動物もいっしょに住んでいましたから、どこもかしのひらは十二メートルもありました。両手で水をすくうとまるで二十五メートルプール一ぱいくらいの水になります。ダイダラボッチのすくつたのは小川の水です。でもとてもとてもゆう名な小川です。そうです、きみたちのよそうしていたとおり、そこは「天竜川」の水でした。またダイダラボッチがたどり着いたのは「えんしゅうなだかいがん」今の中田島海岸でした。ただダイダラボッチがたどり着いたころはまだまわりの山がそんなに高くなって、高かつたのはダイダラボッチが見ていた山、みんなが知っている「富士山」だけでした。

ダイダラボッチはさっそく探けんを始めました。ひとびとが主に住んでいるのは海から五キロ以上先の高い所でしたからその近くを歩く時はひとをふみつけないよう気をつけて、海や川では思いっきり動き回りました。まず海岸かがたにそつて西に歩いていました。するとすぐに北に向かつて長く手のひらを広げたような水たまりがありました。ダイダラボッチは天竜川と同じ

ように水たまりに入りました。足の五本指に色んな魚やカニやウナギがポコポコぶつかります。ダイダラボッチは夢中になりました。(ここにはこんなにも多くの生き物がある、食べるのにはこまらないな)と思つたからです。こしをかがめてりよう手で水をすくうと手の中にたくさん魚や手長エビ、モクスガニが入ります。ダイダラボッチは小川の水と同じように、ずらずると飲みこんでいます。

「ゴクゴクゴク、ムシヤムシヤムシヤ」

「ああ水がうまい。魚がうまい。エビもカニもうまいな」

ダイダラボッチは大きな水たまりを動き回り、飲みまくり、食べまくりました。おなががいっぱいになりました。すると急にその場所にドオオンとすわり、あおむけになってよこになったかと思うと近くのこんもりした丘をまくらに、両手をむねにつけ、赤ちゃんのようにねむつてしまいました。ダイダラボッチはとてもねほすけなのです。

ダイダラボッチが西に向かい食べものさがしに歩き回り、ねむつたのは今の浜名湖です。また魚とりにむちゅうになつて東の方の細い場所に魚を追いこんだ時、つまずいて、よろけてなんとも足をついた、そのあとが佐鳴湖だそうです。ねころんだ、またまくらに

したあとが鷺津魚港とその後ろの丘といわれています。そのあと目がさめたダイダラボッチは東に向かいました。天竜川の向こうには野原があつてさらにそのはるか向こう富士山がそびえていました。ダイダラボッチの約二十倍高い山です。ダイダラボッチは体のつかれをとり休ませるために、しばらくえんしゅうの浜辺ですぐすことにしました。「ここは海も川もそして平原もとてもすばらしい場所だ」とダイダラボッチは思つたからです。

*

「さて、これからどちらに向かつて行こうか」

と考えていたダイダラボッチでしたが、足元の天竜の小川にそつて北に向かうことにしました。遠くに富士山ほどではないのですが、高く雪をかぶつた白い山なみが見えるのです。この小川には水がどんどん流れています。どこまでも歩いていけそうです。ダイダラボッチの一步は百メートル。海から二百五十歩で谷が始まりダイダラボッチはその谷間を歩いて行きます。それから五百歩ほどで長くへこんだ場所の入り口に着きました。谷が始まったのは天竜市です。へこんだ場所は飯田から諏訪までのシナノの伊那盆地です。盆地両方の山の高さは二千メートルほどで続きます。盆地の距離は約百キロメートル、ダイダラボッチが歩くとき

歩ほどです。

歩きつづけてダイダラボッチは盆地の奥、上諏訪という所に着いたのですが、東の方向、それも雲の上から女性と男性の言いあらそう声が聞こえてきました。ダイダラボッチは自然の声、神様の声がわかるのです。どうやら古事記という古い本に出てくる富士山の神・コノハナサクヤヒメと「一つ山」の神・ゴンゲンサマが言いあらそっているようでした。その声が大きくグワンゴワンと空にひびいています。

「ほほほ、あなたの方が私より大きくて高いというの。私はみんなから美しく大きく、そして気高いとされているの」

「たしかにあなたのおられる場所はまわりからそう見えるようですが、この「一つ山」は人通りも少なくまたあなたの場所から遠くはなれております。それにまわりを高い山にかこまれていきますから、この国のみんなはここがあなたのいる場所より高いことを知らない、またわからないのです」

「おだまり。なん度でもいうわ。私の方が美しく気高いのよ」

「それはそうでございますが、じっさいには……」
そんなふうに二人が言いあらそっていますと、そこにコノハナサクヤヒメの父であるオオヤマツミノカミと

いうえらい神さまがあらわれ、なか直りをさせようとしていいました。

「待ちなさい。わたしが富士の山とこの「一つ山」の間にトイをかけて水を流そう。そうすればどちらかに水は流れる。流れた方がはつきりとひくいとわかるであらう」

そういつてオオヤマツミノカミがながあーい、ながあーい竹のトイを二つの山のとつぺんにかけてと、雨の神様・クニノトコタチノカミがそこへたっぷりの水を流しました。水はゆつくりと富士山の方へ流れていきました。

「一つ山の勝ちー」

オオヤマツミノカミがさげびました。コノハナサクヤヒメはくやくしくてなりません。コノハナサクヤヒメは「一つ山」の方が高いことを本当は知っていました。でもどちらが高いかを決めるのは自分のお父さんです。きつとうまくやってくれると思っていました。でもそうではなかったのです。それでコノハナサクヤヒメはカンカンにおこって何とふん火をくり返し「一つ山」をたくさんのおおきなふん火の岩石でバラバラにこわしてしまいました。それがいまある八ヶ岳なのです。「一つ山」は富士山より千メートルくらいひくい山なみになってしまいました。コノハナサクヤ

ヒメがあまりにもはげしくおこつてあばれたのを見たダイダラボッチは

「あんなに背せが高くきれいなのに。美人つてこわいな」と思いました。ただ話はそれでは終わりませんでした。

八ヶ岳の近くたてしなやまに蓼科山というかわいい女神の山がありました。元の八ヶ岳「一つ山」がお兄さん、富士山はお姉さんでした。女どうしですからお姉さんが気の強いことはわかっていました。それでもきょうだいげんかだからといって、バラバラになつたお兄さんがあまりにもかわいそうで、兄さんおもいの蓼科山は毎日しくしく、ないていました。そしてそのなみだがみるみるうちにそこよりひくい下諏訪しもの方に流れ諏訪湖という水の海になつて、たまつていききました。ダイダラボッチは蓼科山をとともかわいそうに思つて、キズついた八ヶ岳をていねいにふいたり、よごれた土や岩を小川などに流したり、きれいにならべたりしています。そうすると、すこしずつ蓼科山もきげんをなおして「ダイダラボッチさんありがとう」とお礼をいうようになったのです。ひと安心です。ダイダラボッチは諏訪湖の水があふれすぎないように湖の西の方に小さなくぼみをつくつて南に水を流し始めました。その時から前にもまして太平洋に向かつて、天竜川の流れ

はぐんと多くなつたようです。

*

ダイダラボッチはさらに北へと進みました。今の地名で言うところの長野の木崎湖まきこ・青木湖あおきこを通り、高い乗鞍岳のりくらだけや雪倉岳ゆきくらだけをこえて行こうとひつしにはいあがつたのですが、雪で足がすべり、いきおいあまつてでんぐりがえりをして、富山の海とやまにおしりからドボンと入つてしまいました。昔はそんなにも深くはなかつたそうなのですが、ダイダラボッチが入つておほれまいとあわてて足をバタバタしたため、富山の海は岸からすぐに深くなつてしまつたようです。今では深さが千二百メートルもあります。起き上がったダイダラボッチ、今度は海岸にそつて歩き始めました。目でき地はイワテにあるイワテ山のふもとです。エチゴの海岸はとても長いのですがダイダラボッチにとつては何でもありません。ほほ四千歩も歩くと、もうオガ半鳥ちかくまで来ていました。その場所はアキタといいました。そこに着くとなぜかなつかしいにおいがしてきました。そうです、そこから東に向かえばお母さんのふるさとイワテなのです。ダイダラボッチは日本海に流れこむ小川づたいに行くことに決めました。すると、とちゅうに大きな池がありました。ダイダラボッチはそこでも水を飲みました。あまりにもおいしいので何度も手です

くって飲みました。その時急にダイダラボッチの目からたくさんのなみだがあふれ始めました。それは滝のようにまわりの山にうち当たったり、雨のようにしみこんだりしました。

「なぜ、なみだが出るんだろう。なぜなんだ」と思いました。実は

「お母さん、お母さん、やっとイワテの近くまで来たよ」

そう思えば思うほど言葉にならない気持ちがあふれてきたのです。ダイダラボッチはもう気にもとめませんでした。うれしくて、うれしくて、わあわあなきましました。その結果、山にかこまれていたその池は何と今までよりぐんと深くなりました。それが今の田沢湖なのです。

ダイダラボッチは太平山おおいらいらまを通ってシズクイシという場所に着きました。北に大きな山がありました。その山はお母さんが言っていたイワテの山でした。春だというのに山のちよう上あたりは真っ白な雪でおおわれ富士山のような形です。少しひくいように思いましたが、なによりも雪の広がりひろがりが富士山よりすばらしく、どっしりとした力強さがありました。

*

うっとり、ほんやりながめていると、東の方からな

つかしい声が聞こえました。ふつうでしたら人間の声は聞こえても意味がわかりません。ダイダラボッチは人間ではないのですからむりもありません。でもその声はなぜかダイダラボッチにはよくわかりました。「おじさん。ここだよ、ここ。見て。この木の上にいるのがおらだよ」

といつているのです。ふしぎに思つてよく見ると、同じような大きさで星形をした森達のと真ん中にあるオモリヤマという山、そのいちばん大きく高い木のえだにこしかけてすわっていた男のこどもがダイダラボッチを見上げ、両手をふりながらさげんしていました。ダイダラボッチはひざを曲げながらこどもにいいました。

「こんにちは。すごいね、きみ」

「どうして、おいらのことばがわかるんだ」

「おら、おじいさんのキサブロウさんから教えてもらった」

話を聞くとこの子のおじいさんのキサブロウさんは昔、けがをしたジヨウモンキョジンのこども一人を助け、きずを治したことがあったようです。おじいさんはイワテ山の森の奥深いところで炭やきをしていました。ある日、大きな岩がころげおちたあと、こどもといつても大きなこどもが小屋のそばまでおちてき

たのを見ました。こどもはみるからに六十メートルくらいはありました。足に大けがをしていました。どうやら岩に足をかけた時、岩がくずれてきつづいたようです。おじいさんは薬草をたくさん山からとってきて治なほしてあげました。こどもは三か月ほど小屋の近くで休みましたがその間、かんたんな言葉や話し方をおじいさんに教えたそうなのです。そのころのおじいさんはわかかったし、またかしこかったから、言葉をたくさんよくおぼえていました。それを孫まごのキタハチロウに教えていたのです。おじいさんには何か感じるものがあつたのでしょう。キタハチロウもまたかしこいこどもでした。

「おらはキタハチロウ、おにいさんはどこに行くの」
「おいらか。おいらここでしばらくすごしてみたいんだ」

「そうなの、今は春だから何でもある。だから大じょうぶ」

「ここにはどんな食べものがあるんだい」

「東にある海にはもちろん、この川にはフナやヤマメなどたくさん魚がいるよ。とくにこの季節はサクラマスさ。大きくつてきつとおじいさんもたくさん食べればおなががいっぱいになるよ。空気もうまいし、花もきれい、わか葉もたくさんある。水もおいしい」

「そりゃあいいな。おいら川の魚とわか葉は大こうぶつさ」

「秋までいようと思ってるんだ。大じょうぶかな」
「きつと大じょうぶだよ。もしねむろうとするなら、イワテ山のとちゅう、森の中にひみつの場所があつてそこには、ジヨウモンキョジンのためのとびらがあるそうなんだ。その中に入るとぐつすりねむれるつて聞いたことがあるよ」

実はそのころイワテ山の途中には高さ百八十メートル、はば九十メートルのふしぎなとびらがあつてそのとびらを開けるとその先にはふつうの世界より百倍も大きな世界が広がっているのです。そこはちようどくぼ地くぼちになつていて遠くからは見えません。またそこは未開なつかの地ですからふつうはだれも行きません。もともとツキノワグマやオオカミ、イノシシなどこわい動物がいたり、ひどくくずれたがけなどがあつたりして、とても入つて行けないのです。でもジヨウモンキョジンたちには何もこわくはなかつたのです。なかに入るとそこはダイダラボッチでも、今生きているふつうの人間と同じじょうけんになるのです。とびらはオーストラリアの有名な場所、マウント・オーガスタスにもミンダナオ島にもあつたといううわさです。そこではみな同じように入り口から入るとすぐとても広

い草原があります。そしてその向こうには、イワテ山の場合、ダイダラボッチにとって、とても高いイワテ山そっくりの山があるのです。その高さは二百キロメートルです。季節は反対、大きさもまったくちがう世界。そうですね、ダイダラボッチやりょうしんたち、本当はとびらの向こうに住むひとびとたちだったのです。ときどき人間の世界にまよいこんでしまうひとがいましたが、多くのジョウモンキョジンはとびらの外に出た場合、ほとんどのひとは元の世界にもどりました。でもダイダラボッチのお父さんもお母さんもこうき心の強いひとでした。もどらないで、ちがう世界で生きようとしたひとたちでした。

*

ダイダラボッチは春夏秋冬とイワテの地でくらししました。どこへ行くのもふたりいっしょ。キタハチロウをちよこんとかたに乗せていました。なかよしなんです。

夏には東にあるサンリクという海へ泳ぎに行きました。青い海と入り組んだがけの多い所です。ある高いがけの上からダイダラボッチが海へとびこむと波は大きくはねかえって、どおんという音といっしょに岩へきにあたりました。がけの上にはキタハチロウが目を見ながらわらっています。海の中にいるダイダラボッチがやさしく手のひらの上にキタハチロウを乗

せました。キタハチロウは泳ぎがとくいです。なんと手のひらから大波に向かってとびこむのです。

秋にはお母さんがいつていたとおおり、あたりいぢめん色とりどりの色にそまって、それはそれは、きれいでした。また秋はしゅうかくの秋です。たくさんの木の実がなりました。木の実はとても小さいのですがダイダラボッチは両手をじょうずに使い、大木からさらさらともぎとって手のひらにため、キタハチロウといっしょに食べました。二人はいつも話しあい、きょう力し、いろいろなことにちようせんしました。

風がさらにつめたくなつて、とうとう雪のふる季節、冬になりました。ダイダラボッチのあたまに、かたに、うでに、そして足にも雪はふりつもり始めました。南の国に生まれたダイダラボッチはキタハチロウにいました。

「キタハチロウ君、そろそろおわかれの時になったよ。うだ。おいらはあのとびらから元の世界にもどって行くかと思う」

「そうか、そうなんだ。ダイダラボッチさん、いままでいろいろありがとう。おかげで、ほんとうに楽しかった」

「とんでもない、おいらこそキタハチロウ君には世話になったし、とても楽しかった。ありがとう。どこか

「でまた会おう」

しばらくの間ふたりはじつと見つめ合っていました。

ダイダラボッチはしずかに大きなとびらをあげ、昔、お母さんが住んでいた世界へとゆつくりともどつていきました。

これで大男のお話はおしまいです。でもまだなぞはつづきます。そうです。いったいダイダラボッチは今どこにいるのでしょうか。

(中央区)

今回は七作品の応募でした。それぞれに個性ある発想と展開で、興味深く読ませていただきました。

市民文芸賞一作品、入選一作品を選びました。

市民文芸賞「おじょうさんのひみつ」

心やさしいフランス人形のマリーと、その持ち主であるおじょうさんの物語が丁寧に描かれています。おじょうさんが実は「ぶた」だったという意表を突くストーリーがとても新鮮です。人形マリーの語りで物語は進みますが、ところどころ別の視点が入る部分が書き方に工夫が欲しいです。

入選「ダイダラボッチは今どこに？」

有名なダイダラボッチの昔話を再構築し、最後の場面で読者に『もしかししたら、今もどこかにダイダラボッチがいるのかも知れない』と夢想させてくれる作品でした。前半に、ダイダラボッチがとびらを開けて帰っていく『元の世界』につながる伏線があると、さらに良かったと思います。作品中、ダイダラボッチが日本のキウウシユウからイワテの地にたどりつくまでの出来事かなり詳しく描かれていて、その情報量が多すぎてテーマが薄まってしまった点は残念です。

そのほか惜しくも選外となった作品です。

「キラキラのさきへ大作戦」 子ども時代の草遊びを懐かしく思い返すおじいさんに、刈り取られる寸前のオオバコと

ジュズダマが話しかけます。オオバコたちは川の流れにのって、新天地を目指します。文章の運びは巧みでほころびがありません。しかし、主人公がオオバコたちなのか、おじいさんなのかわかりにくく、作者の伝えたいことがぼやけてしまいました。

「スマホの向こうで」 小学三年生の良くんは両親の離婚の危機のただ中において、パパとは別居中です。無理がなく、なめらかに進んでいく物語に引き込まれました。ハッピーエンドの結末もよかったです。終盤で明かされる別居の理由が弱すぎたのが惜しいです。

「タンポポ飛ばそう」 月にタンポポの種を飛ばすという、とても面白い発想の物語です。軽快なテンポで書かれている反面やや展開が忙しいです。また、ファンタジーの中に科学的な理屈を入れる際には、会話を使うなど表現に工夫が欲しいと思いました。

「チーコ、外に出る！」 ある園で飼われているインコのチーコの一日の冒険。楽しく読める作品でした。外の世界から園に戻ったチーコの何かしらの成長が描かれると、より奥行きのある物語になると思います。難しい単語は書きかえが必要です。

「エンデン」 遠州鉄道（赤電Ⅱエンデン）に久しぶりに乗ったスミ婆婆ちゃんの、幼い頃の思い出が丁寧に描写で綴られています。物語としてのまとまりにはやや欠けています。思い出に登場するおじいちゃんの人生を、遠州地方の発展とからめて描いてみてはどうでしょうか。ぜひ読んでみたいですね。

評論

「市民文芸賞」

村木道彦論

木俣統裕

「天唇」の耀く歌集抱きしめぬ神保町田村書店店頭1974

市民文芸70集に採られた一首に目が留まった。私たちにとって村木道彦が若々しさの象徴であることにあらためて気づかされる。古書店の店先で期せず目に留まるなつかしい「天唇」。結句に「1974」と置かれたように、次の瞬間、その歌集は誰しもを若かりし70年代の記憶へと誘うであろう。誰もががかつては持っている、今や誰もが失ったものを想起させるだろう。「耀く歌集」であるところの謂れである。村木道彦は永遠の若さを近現代の短歌史に凍結した。「天唇」のなかでもとりわけ名高い「緋の椅子」10首から幾つか引いて、その淵源をふりかえりたい。

するだろう ぼくをすてたるものがたりマシユマ
口くちにほおばりながら

これほど自分で自分を突き刺すような強い自意識を抱くことは、若い時代にのみ許された特権である。主観でありながら主観から遊離しようとする「するだろう」という推測の視点、すなわち自意識が、マシユマ口を頬張るひと時を動的に切り取る。やわらかなマシユマ口は僕の恋心。今まさにその恋心が嚙下されようとしている。想像上のあつけらかんとした彼女に対して「ぼく」がひとり相撲を取ってしまうところに、青春時代に特有の（誰しもが思い当たる）煩悶をとまなう強い自意識がある。村木は自身が言うところの「他者の目を意識して他者の目で自我を見る意識」によって、自意識そのものを客観視し、器用にも表現へ自在

に取り入れる。失恋の歌の印象があまりに強いため、次の一首も「僕」と彼女について歌ったものだろうとつい反射的に思ってしまう。

めをほそめみるものなべてあやうきか あやうし
緋色の一脚の椅子

緋色の椅子になぞらえた意中の女性が、危険な目に遭う瞬間に立ち会っているようだ。手を差し伸べるほどの意気地はなく、見ないふりをしてやり過ごそうとしているのかもしれない。しかし後になって「天皇への思いが深いのは瞭然である」という評にふれるとき、村木自身がいうところの「あの当時の圧倒的な反体制の機運は、もはやそれ自身、体制の名がふさわしい」時代にずいぶんと挑発的な一首だったろうと思う。緋色の椅子はただ一脚とされており、その限定から唯一性を連想するのであれば、椅子は容易に皇室のメタファーとなる。村木としては、君子危うきに近寄らず、といったところか。皇室の危機を見まいとしながらも、怖いもの見たさに薄っすらと目を開けてみてしまう。あるいは反対に、近視であることを理由に目を細めるのであれば、冷静に現実を見つめる意志の強さが込められている。マシユマロの失恋の歌によって

軟派をよそおいながら、同時代的には際どくも皇室を危惧する思いを重ねたか。読む者を翻弄し解釈のあわいを攻める。

若かりし村木の才を見出した者のひとりに中井英夫がいる。中井は代表作「虚無への供物」でミステリー小説のメインストリームに水を差した。ミステリーのお約束事に対して倫理的な異議申し立てをした。そんな中井だからこそ村木に対して時代に抗う性向を感じたとしてもおかしくはない。表向きでは軟派を気どりがながら、裏では同時代を斜に構えて見る。そのようなアンビバレントな若々しさを読みとっていたことだろう。だから表向き、村木は政治思想的にノンポリティカルであることを広言することになる。ノンポリこそが詩人の本来的な姿であり、芸術的に優位であることを語ってはばからない。

どんな思想も、いかなる恋愛も、それが詩と呼ばれるようになるやいなや、〈生〉の燃焼を演じて見せるための、あてがいの小道具に墮するという不思議を、ミューズの神は課しているのだ。(『村木道彦歌集』より「ノンポリティカル・ペーソス」)

ここで恋愛について政治思想と同列にならべようと

する語り口に注目したくなるが、今は我慢しよう。実際に経験した失恋についての強がりでも思っておくことにする。

そしてぼくらは、ぼくらも徹底した思想への不信から出発した。(中略)

正確にいえば、信じるということに対する徹底した不信から出発した。それは自己執着、あくなき自己追求のためとはいえ、またミューズの神の御神託からとはいえ、思想家としてはついにみずからをノンポリに墮するに至らしめた。(「ノンポリテイクル・ペーソス」)

一見「ノンポリに墮する」と謙虚にいいながらも、この歌論全体からはノンポリであることの優越感にじみ出ている。思想に懐疑を抱くものこそ、ミューズの神について語り、近づくことができるといわんばかりである。その口調は若き日の小林秀雄のようでもある。時代の先端をいく思想など「様々なる意匠」にすぎないと端的に看破したように。または若き日のヴェトゲンシュタインのようでもある。可能世界の限界点で人は登ってきた梯子を捨て、そして語りえぬことについてただ沈黙しなければならぬ。これら曖昧さを

許さない言い切りの口調は、それぞれどこか似通っている。何かを切り捨てることで、何かをクリアに見せようとしている。

事実、当時の村木にとってそれほど強い思想や信仰はいらなかつたのだろう。しかし、信じることへの何らかの自覚を持たずしてどのようにミューズの神へ至る回路を持ちえようか。信じることから離れた歌は、あくまで読み手自身の若さに頼ったつくりにならざるをえない。そのような歌は恋愛を歌うについては軽やかかつ繊細であるが、ひとたび死や内面の闇を歌うについては、それら扱いが極端に直接的で不自然になる。若かりし村木の生と死をともにあつかう歌はどこか上滑りしている。古代ギリシアのミューズの彫刻には、制作にあたって間違はなく何らかの政治的意図があつたであろうし、ルネサンス期のミューズを題材にした作品にも時代の要請に応じた思想性があつたはずである。もしそれらに対して思想性を感じないとすれば、作品が持つ政治的意図の隠蔽という老獪さに感心すべきである。

村木が放つ若々しさの淵源へもっと近づくために、歌づくりから離れた時期を回想した後年のエッセイを見ていきたい。そして「天唇」の時代へと逆照射を試みたい。まず前提として、歌づくりとの別れは次のよ

うに回想された。

ある日曜日、一日足を棒にして歩き回ったあげく、とある橋の欄干に身を持たせたとき、私の内実が全くのガランドウであることに気が付いた。気が付いたというよりも、気が付かないふりをすることに疲れきったというほうが正確なのかもしれない。これが別れだった。何の感傷もなかった。〔続風紋のアンソロジー〕

詠歌を促すものが自意識であれば、筆を折らせるのもまた自意識である。しかしこの場合、精神分析的な内面と自意識の分裂ですらなく、いわんやその葛藤ですらない。想像するに村木の自意識は「ガランドウ」の内面という自らの虚無と相対した。強烈な自意識があるのだからその由来たる内面の存在を当たり前のこととしていたことだろう。しかし信じるということの総体から距離をとっていた村木にとって、いつの間にか内面は「ガランドウ」になっていた。短歌と別れたそのときを「夢も見ずに眠った」と表現する。見るべき夢がないほど、内面が空虚になっていた。

しかしその後時がたち、歌づくりを再開するきっかけに出会う。そのきっかけとは村木がいうところの「自

私の闇」という内なる他者との出会いである。

「先生！ オレもイッポンになりますか？」冒頭のNの発言に皮肉な口吻は全くなかった。むしろ私に対する好意さえ伴っていた。たぶんNは「イッポン」になれば私が喜ぶと思っっている。私の喜ぶ「イッポン」になればうれいと思っっている。純真で心優しいN。不幸な行き違いでせつかくの第一志望校入学をフイにしたばかりだというのに。〔続風紋のアンソロジー〕

村木たち高校の教員たちは、国公立大学の合格者数を自分たちの実績として例年本数で数えていたという。もちろん教員たち内輪でのことで、そのようにカウントしていることは生徒に内密のはずだった。しかし教え子のひとり、Nがまさか自分で自分のことを「イッポン」と呼んでいる。しかも担任教師の村木の実績になるはずと喜ばせようとして。当のNは第一志望の国公立大学へ補欠合格したにもかかわらず、手続き上の過ちで入学を果たせなかったというのに。

だがNの優しさは、ボクシングのボディーブローのように、後になって利いてくる質のものだった。

この胸の疼きはなんだろう。職員室における内輪話が生徒に気付かれなければそれでよいという問題ではあるまい。生徒の進路のために力を尽くすのは当然のことながら、ほかならぬこの私の中で、生身の人間が知らず識らずのうちに、「イッポン」「二ホン」という無機質な数になってしまふことの不気味さ。

〔続風紋のアンソロジー〕

村木は傷ついている。自身から発せられる他者への悪意に気付いて傷ついている。なんとナイーブだろうか。村木にとって悪意や闇は外部にあるものとして排除されていたということである。そしてこのエッセイを書いている村木自身がどの程度自覚しているか分からないが、私たちは次のことに気が付く。村木は若かりし自分とNとを意識下で重ねている。村木たち教師が言う「イッポン」という言葉は、かつて村木が中井英夫に言われた「君はショート・ランナーだ」という言葉とそれほど隔たっていない。Nの屈託ない姿とは、とうに終わった村木の「得意の季節」であり、大人の都合で教え子たちを本数で数えることは、村木自らが過去の己を「イッポン」と扱うに等しいことである。

実はかつての村木は取り巻く闇によって創作を促さ

れ、評価され、輝きを放っていたのだ。けっしてノンポリという無色透明な創作だけではなかった。村木は痛ましいかつての自意識と出会ったはずである。そして、自らもまた闇であることの気付きをもって創作がはじまる。

ただ、Nの一件をきっかけに創作活動を再開することになった。自意識を所与のものとして素直に受け止め、そういう自我・自意識に潜む「闇」―そしてそれは自我の「闇」であると同時に、人間存在それ自体が内包する「闇」であり、その時代その社会の「闇」であるに違いないのだが―そういう「闇」に身を投げ出すことによってしか得られないものが、もしあるとするならば、それは、言語表現たる文芸としては、はなはだ魅力的なものだと思う。そして私にとっての言語表現はやはり、「短歌」を描いてほかになかったのである。（『続風紋のアンソロジー』）

ひるがえって「緋の椅子」をはじめとする当時の歌が、なんと屈託のないものだったろうと感嘆する。もとより瑕疵のない、原罪を知る前の無垢の歌だったといえよう。そしてその純粹さについて、偏狭にあげつ

らうよりも、近現代の短歌史に永遠の若さをとじ込めた、村木の起こした奇跡に驚くべきである。もう歌うことができないことにヒロニーの美しさを想うべきである。

私は、再開してからの歌は自然体で過去と地続きでとても良い歌だと思う。

石に、樹に、われがわれなる自意識に、陽は突き刺さる野面をゆけば

いまや自意識は石や樹のような自然物と等置され、燦燦と陽があたる。もはや自意識は特別な位置を占めてはいない。もし「石」と「野面」を浜松城に見立てることができるとなら、それも雄々しくて面白いと思ったりする。しかし、俵万智は復帰した村木に対して辛辣だった。「村木道彦が、わざわざこんな世界を歌わなくても」「少し私のがっかりしてしまった」という。

ひとが生きて在るといふこと熱を病むやうなものだとおもふゆぐれ

とりわけこの歌は調子の軽やかさに比して内容が重すぎると批判された。

やはり、この調子は捨てなくてはならないのだ、と思う。軽やかに流れて「おもふゆぐれ」でまどめるには、内容が重すぎる。そのアンバランスが、迫力に乏しい比喩となつて出てしまうのだろう。人生に一步踏み込むためには、別の文体が必要だ。(『短歌をよむ』)

俵万智は彼女の理想とするところの成熟を求めている。かつて「すっかりハマってしまった」あの村木道彦が、時を経て円熟してほしかった。しかし村木はそんな期待には永遠に応えないだろう。ビルディングスロマン的な成熟など村木道彦には似合わない。歌人に固有の若さは、闇をも老成をも超えて圧倒的だったのだ。たとえ永遠の青春を生きようとしたところで咎められることもなからう。

風わたるポプラの並木
友といて

その友よりもなお遠い
「われ」を探している日々よ

「われ」をきわめよ
相集う

浜松市立高校われら

(浜松市立高校校歌)

アルチュール・ランボオの「われとは他者なり」を下敷きにしている。村木道彦の歌詞は高校の校歌によく似合う。重くて軽い口語自由律のしらべ。友との交流と追求に先んじて「われをきわめよ」と、内なる他者と真正面から向き合うことをアドバイスする。どこか教師らしい説教臭さと、歌人らしい軽い調子がする。私はとても良い歌詞だと思う。

参考

- 『村木道彦歌集』(現代詩人文庫) 国文社
 『続風紋のアンソロジー』 浜松文芸館
 『短歌研究』2024年9月号 短歌研究社
 『短歌をよむ』 俵万智 岩波書店

(浜名区)

金原明善について

神谷 司

金原明善といえば、天竜川の堤防を築いたことが有名である。浜松に住んでいけば、金原明善についてその功績を知っている人がほとんどであろう。どんな大雨などでも天竜川の堤防は決壊しないだろうとも言われている。

金原明善は、「暴れ天竜」と言われ、毎年のように氾濫し、多くの人々の生命や財産を奪ってきた天竜川を改修し、立派な堤防を築いた。そして、その後には天竜川の通る山々に木々を植えた。この時に植林された木々は、いわゆる「天竜美林」と呼ばれている。この植林された木々は、天然のダムになり、天竜川の洪水を防ぐことになった。

これ以外にも、金原明善は、刑務所から出所した人々を支援したり、銀行を経営してその利益を社会貢献に

使ったりするなど、多くの人々のために貢献した。今回は、金原明善の人となりの中で、明善のお金の使い方を中心に評論したい。

金原明善が、自分の全財産を投げうって、天竜川の堤防を築いたことは有名である。天竜川は、毎年のように氾濫し、天竜川の近くの住民は苦しめられて来た。この苦境を救おうと立ち上がったのが金原明善である。金原明善は、この天竜川の改修と堤防を築くために自分の全財産を寄付し、その後、天竜川の正確な測量を行って、川の改修を行ったり、川の堤防を築いたりした。なお、この測量を行う際には、その時代の優秀な職人に依頼するなど万全を期している。また、天竜川の川の流れが曲がっている箇所にある堤防が壊れやすいことから、天竜川の川の流れをまっすぐに

し、堤防が壊れにくくする工事も行っている。それらの工事の費用の捻出については、

「※①私が所有する財産をすべて官に献納いたしましたから、これを治河協力社にお下げ渡し願いたい。そして天龍川堤防が永久不朽になるような方法を確立したい。なお、このために、官から治河協力社へ、毎年、二万三千円ずつ、今後二十年の間、工事費としてお下げ渡し下されることを、お願いいたします」とした。これに対して、静岡県返事は、「※②申し出の家産献納はこれを許可し、治河協力社へ下げ渡すこととする。ただし、このうち銀行株券の五千円は金原家子孫保続のために、そして、さらに二千五百円は明善夫妻の生活費や長男の家業の資金として必要であるから、この合計七千五百円を差引いた五万六千四百円を、治水工事費として治河協力社に下げ渡すこととする。なお、県庁より補助金は毎年二万三千円を十年間下げ渡すこととする」であった。

明善は、日常生活に最小限必要なもの以外のすべての財産と県からの補助金を得て天竜川の治水工事を行うこととなった。天竜川の治水工事のために、明善は自分のほぼ全財産を差し出している。他の人では決してできないことであろう。明善の天竜川の治水工事に對する並々ならぬ熱意を感じる。

また、金原明善は、治山治水という大きな社会貢献をするためのお金を得るために起業している。銀行を興し、そこで得たお金で支援した。明善は、「※③世の中の事業として実現するには、資金が必要である。資金を作ることも、……重要な根幹部分といってよい。現に明善は、天竜川の治水や、瀬尻の植林という二つの巨大事業を推進しているのであるが、そのための資金供給源として、東京で東里為替店という銀行業を行い、その利益を注ぎこんでいる……それだけでは足りず、明善は自分の私有財産を全部提供するという犠牲まで払って、治水治山事業を行っている」のである。

さらに、「※④世の中には会社を経営して、儲かった利益を社会事業に提供する奇特な人はよくいるが、しかし、最初から社会事業に投入する利益を得ようという目的で企業を経営した人物は、古今東西、明善を除いて稀有なのではあるまいか」と言われるように、経営者が利益の一部を社会に還元することは多々あるが、社会貢献するためのお金を得るために起業した人は他にいないのではないだろうか。起業にはリスクもあるが、そのリスクを省みずに明善は起業し、そして、利潤を得る商売ができたなど商才があった明善は、そこで儲けたお金を社会貢献のために使っている。

明善に商才があつたと言える一例に「※⑤急がなければ銀行の窓口が閉まって、五万円の大金を一日遊ばせてしまうことになる。そうすれば人力車の車代よりも、高い利息を損することになる。人はよく損得を考へて、生きた働きをしなければ駄目だ。わしはいつも歩くことにしているが、急ぐときには二人曳きの車にも乗るのだ」が挙げられる。明善は、必要な時はお金を効率的に使い、また損得勘定を素早く計算でき、効果的にお金を活用できる術を身に付けているのである。また、明善は、赤字だった会社を引き継いで黒字にした例もあつた。明善の商才は優れていたのである。

最終的に、天竜川のこの工事が国に引き継がれた際に、金原明善が寄付した財産は返された。天竜川の工事後の残額について「※⑥明善は、銀行預金や債券購入による金利増殖」など努力して、十七万円を超える資金を蓄えた。このお金は、政府へ「政府からの補助金の累計の九万六千円に、年五分の利息をつけて、十万円を返納した。そして残額七万円を明善は受け取った」としている。明善は、天竜川の工事が終わった時に残ったお金は政府から受けた補助金に利子を付けて返納し、その残りのお金を受け取っているが、そのお金はすべて植林のために使っている。はげ山では治水ができない。植林をして緑豊かな山となれば、その

山は天然のダムとなり、天竜川の氾濫もなくなる。金原明善は考えた。金原明善は、植林を始める時には未経験であつたが、自ら率先して植林に励んだ。

さらに、明善は、天竜川の治水工事のためにプールされていた資金を増やすことも行っていた。基本金という資金を利殖して増やしていたのである。「※⑥治河協力社が：十七万円もの資金を八年間で蓄積することが出来た：」「※⑥治河協力社の運営資金は：金原家財産の献納金五万六千六百円と、県からの毎年の補助金二万三千円が中心」であり、「※⑥一時に全額を使用するものではなく、余った金は翌年以後へ繰り越されていく、『基本金』ともいふべき資産」であり、「極力これを後年に繰り越し、その過程においてこれを利殖して、基本金を大きくしていくことに努力した」。明善は、手元にあるお金をきちんと増やすことにも努めていたのである。

明善は、巨額のお金を惜しむことなく使う一方で、古くなった手拭いを遠くに忘れた際には、再度引き返して取りに行ったり、ぼろぼろになった草鞋を直して使用したりするなどしていた。草鞋を新しいものに替へたらどうかと周りの人が言うとき、草鞋が草鞋の形をしているうちは使い続けると言ったとされる。紙片を拾って再度紙漉きに使うようにしたり、駅弁の弁当が

らを再利用したりとその他の物も大切に使用していたと言われている。明善は、『※⑦明善は捨てられた帯封を見つけると、庭へ降りてきてこれを拾い、紙くず籠へ入れて、「お前たちはこの帯封を何の役にも立たぬくず物と思つて気にもとめないようだが、このままにしておけば土になつてしまふ。しかし、これを拾つて屑屋に出せば、紙に漉いてまた役に立つ。どんな些細なものでも、人の手をかければ、また世の中の役に立つようになる。そこを注意して、小さな物でもそれを活かすように心掛けなくてはならない』と伝えている。

また、明善は、お金を節約することについて、「※⑧この明善も、普通以上の知恵才能はない。だから、普通の人になしえない節約をして、節約した金で、小さくとも公益になる仕事をしているのだ」と言っており、他の人ではできないような節約して得たわずかなお金も公益のために使った。さらに、「※⑨明善には慈善の心が深かったが、明善の慈善には大きな特徴があった。……自分の衣食住を切りつめて、余つたものを分け与える」こともしていた。明善は、自分に必要な衣食住を節約して、その節約したお金を他の人のために使っている。明善の慈善の心は相当に深い。自分のことを犠牲にして、他の人のために役立たせること

ができたのは明善以外にはいないのではないだろうか。

それらに加えて明善は、「※⑩欧米のように、改心して監獄から社会に出た人間を、保護する機関を作らなければ駄目だ」として、出獄した人を支援するために静岡県出獄人保護会社を設立した。

刑務所から出所した人々を支援するためのお金を得るために、「※⑪明善は、その寄付金を集める方法を、明善の揮毫による募金活動を中心とした」。「※⑫明善は出獄人保護会社の基金集めに、人の求めに応じて揮毫し、その筆料をもつて基金とする、いわば『揮毫料による基金募集運動』を始めた」。明善は、自らが揮毫をしてその見返りに筆料を受け取り、その筆料を刑務所から出所した人々を支援するお金としていた。これには反対意見もあつたが、明善はここで得たお金を自分のものにするのではなく、公益のために使うのだから多くの人が賛同してくれるだろうとして、揮毫をしてお金を集めた。明善はここでも集めたお金を自分のものにするとはしないで、人のため、社会のために使った。なお、「※⑬明善はよく習字の稽古をし、暇があれば字を書いていたのだから名筆のほまれが高く、そのために明善の揮毫を求める者が多かつた。……明善の高潔な人格のにじみ出た、素直で温和で精

神性の高い書体が、世人から尊重された」のである。明善の揮毫は、世の中の人々に求められるものであったのである。

金原明善は、天竜川の治水工事のために、自らの全財産を惜しみなく注ぎこみ、さらに、自分の衣食住に必要なお金も儉約して、その儉約したお金を公益の仕事や他の人たちのために使っている。また、使い込んだ草鞋は本当に使いえなくなるまで何度も直して使ったり、手拭いも形がなくなるまで使ったりしている。弁当がらや紙片を再利用や再使用（リサイクルやリユース）するなど物を大切にすることでお金を節約している。

また、公益の仕事を行うためのお金を得るために起業して、そこで稼いだお金を治水治山事業で使っている。明善は、自分が得たお金を自分のために使うことはほとんどせずに、他の人のため、公益の工事のために使っている。自分の全財産を差し出した上に、自分が稼いだお金のほぼすべてを他の人たちために使うことができたのは、明善以外にはいないであろう。明善の功績は多大なものであり、その功績は今後も語り継いでいかねばならない。

【引用文献】

『金原明善の一生』 三戸岡道夫著

栄光出版社

※①七八ページより引用

※②七九ページより引用

※③二七六～二七七ページより引用

※④三八〇～三八一ページより引用

※⑤一八四ページより引用

※⑥一一四～一一五ページより引用

※⑦一四九ページより引用

※⑧一六七ページより引用

※⑨二八二ページより引用

※⑩二七三ページより引用

※⑪二七八～二七九ページより引用

【参考文献】

『金原明善の一生』 三戸岡道夫著

栄光出版社

『金原明善の事歴と指導精神』

土屋喬雄著（財）金原治山治水財団

『金原明善さんと今を生きるわたしたち』

金原明善編集委員会編集

『郷土の偉人・金原明善物語』

浜松市東区役所編集

『金原明善 ―日本の〈偉人〉を捉えなおす』
文学通信

『明善とあばれ天竜 土の偉人 金原明善伝』
御手洗清著 金鈴社

『あばれ天竜を恵みの流れに』
赤座憲久著 P H P 研究所

(中央区)

中西美沙子

論ずるとは、答えを早急に探すことではないようです。優れた思想家や評論家の文章を読むと、そのことが分かります。迷いながらテーマに向かい、その答えを探することに疑問を持つこと。何時も白紙の時点から書き始めること。それが評論の原点のように思えるのです。

その考え方の端的な例が、民俗学、構造主義で著名なレビ・ストロースの言葉ではないでしょうか。

彼は「ブリコラージュ」という概念で、私たちが一見「意味がないと思われるもの」を未開の人々が重要だとしたことに着目しました。彼らはその辺に捨てられたもの、またはありふれたものや端切れを集めることをします。文明人にとって意味のない行為ですが、彼らにとっては「生きること」そのものとしてある。文明とはなにか？ という原初の思いに立ち返らせてくれる、それは概念でもありません。

意味のあるものだけに囚われると、言葉の本質を見失うとレビ・ストロースは示唆しており、そこからのが見えてくるのではないのでしょうか。

今回の応募作品の中に、村木道彦を論じたものがありました。村木は現代短歌の歴史に残る方でした。デビューは衝撃

的で、それを絶賛した塚本邦夫や永田和弘らの文章を、以前読んだことがあります。その口語定型の短歌は、まるで現代詩のように鮮やかに世界を切り取るのです。全く違う言語のように。見慣れたはずのものが、初めて見る風景のように。しかし数年で、彼は短歌を作るのをやめてしまいます。ラッポのように。彼の影響を受けた俵万智（影響を受けた人として佐々木信綱と村木道彦を挙げている・ウイキペディア）は、『サラダ記念日』の歌集で一種の社会現象を引き起こし、口語短歌の裾野を一気に広げました。

村木道彦は浜松に住み、この地に貢献されました。高校教師としてその教えを受けた方も多い。浜松市民文芸の選者として十数年、私も同席させていただいたことは忘れ難いことです。

「村木道彦論」

村木道彦の短歌の中にあるものは、徹底した自意識であり、その自意識は他者に向かうのではなく、自己を刺すようにあると、筆者は論じています。その視野としての村木論は、魅力的です。しかし村木を論ずる方法としては、少し早急ではないか。それは政治・天皇・学校教育への村木の在り方が、「筆者の考える答え」に向かつていくような論の進め方をしていると感じるからです。

「天啓」という短歌群を丁寧読み解くことで、村木の短歌

への矜持とその後の挫折が理解できるのではないでしょうか。

多くの知識を村木に嵌め込むのではなく、彼の短歌そのものが持っている痛み、屈折した心情から生まれるものを論ずる方が、村木に接近できるのでは、と考えます。

中井英夫や俵万智らが寄せる心情と、「天唇」の情緒を去った村木ならでの詠い方を読み解くことで、彼の詩歌の現在の意味が見えてくるのではないか。

浜松市立高校の校歌を村木道彦は書きました。

『「われ」を探している日々よ』『われ』をきわめよ』の「われ」とは、若き日に天啓のように受けた歌集「天唇」を重ねているように思えるのです。

「金原明善について」

金原明善の多様な生き方。筆者は意図的に明善の経済感覚を論じています。伝記や資料を使って論を組み立て、明善の精神の在り方が窺えました。しかし彼の経済の根の奥にあるものが今ひとつ見えてこない。

明善の郷土への愛着、自然観を併記することで、明善の経済意識が見えてくるのでは、と考えます。

金原明善は過去の偉人ではなく、今も現代人に異議や問題点を問いかけているようです。筆者の文章の中にもその思いは見え、さらに思考を深めれば、明善と現代人の生き方を照

らす方法もより鮮明に見えてくるのではないのでしょうか。

金原明善は、今も生きています。

「新技術アイデア」

想像することから創造へ、そして現実となる世界があります。筆者のセラミック・ポイラーとセラミック・タービンという発想は魅力的で、わくわくします。それに付随する資本主義と儒教的なものが発想の自由を奪っていること、また「時」というものも利害に拠って健全な社会が遂行されにくいことへの怒りは理解できます。

ただ、論を成すためには、冷静な文体と論考が求められます。魅力的な発想を自分のものにするためにも是非、次回はそれを試みてください。

随筆

〔市民文芸賞〕

父の最期

平 はられ

だ。

午後二時、医師が来た。父の九十八年の人生にピリオドが打たれた。

その後、ホームのスタッフが次々とお別れに来てくれた。

「昨日、入浴の介助を担当しました。『ああ、さっぱりした。ありがとう』っておっしゃって。普段どおりのご様子だったので、本当に驚きました」

「私は、今朝の食事の介助をしたんです。またお昼に來ます、って言うたら、手を振りながら『ありがとう、ありがとう』と二回おっしゃって。まだ信じられません」

今年一月、とうとう父の心臓は動きが鈍くなり、酸素吸入が必要になった。それでも長いチューブを上手く操って、自室の中を歩いていた。窓の外に広がる浜名湖を眺めなが

師が診るまでは、直接的な言葉を使えないのだろう。

たぶん父は、もう亡くなっている。

急いで身支度をして、ホームへ向かう。

両親の部屋に入ると、ベッドに横たわる父がいた。母は父の枕元に額を当てて、小さな声で話しかけている。私は思わず口走った。

「お父さん、本当に死んでしまったの？」

次の瞬間、母が泣き出した。私は実感した。父は本当に亡くなったのだ。

二〇二五年七月二十六日の午前十一時過ぎ、浜名湖の畔にある老人ホームから電話がかかってきた。「お父様の息がありません。すぐに来てください」

息がないって、どういう状況なのだろう。突然のことでピンとこない。今から準備して、二時間後には着けると伝えると、

「医師には、その頃に来てもらえるよう連絡します。それまで清拭をしてお待ちします」

清拭と聞いてやっとわかった。医

ら、「魚釣りに行きたい」と、父は自分自身を奮い立たせていた。

しかし、日に日に足の筋力は衰えていき、父の世界はベッドの周りだけになった。自室の中にあるトイレや浴室へさえも、歩いて行けなくなった。ベッドの脇にポータブルトイレを置いた。車椅子に乗って浴室へ行き、体を洗ってもらった。

手の力もなくなった。郵便局に出す委任状を書こうとしても、文字にならないくらいに。箸を持つ手が震えて、口まで運べないほどに。

食欲も落ちて、大好物のステーキや鰻を食べても、「おいしい」と言わなくなった。

父が一度だけ吐き捨てるように言ったことがある。

「ちくしょう！」

耳を疑った。そんなきつい言葉を父が使うなんて信じられなかった。

続けてこう言った。

「何でこうなったのかな……」

思うように動かない自分の手足。悔しくて、情けなかったに違いない。

無理もない。一年前までは、車の運転を危なげなくしていたのだから。八カ月前、このホームに入った時は、エレベーターを使わずに、階段を使って移動できていたのに。

担当医からは入院を勧められたが、父ははっきりと答えた。

「延命治療は無用です。入院もしませんし、点滴も結構です」

だから、父の最期がそう遠くないと覚悟していた。しかし、まだ数カ月は先のことで、亡くなる前に、今までの感謝を伝えるくらいの時間はあるだろう、と思いついでいた。

母も同じ気持ちだったと思う。

「私はね、お父さんは、いつものように眠っていると思ってたの。全然わからなかった」

部屋にやって来た看護師さんが、父に気づいて、私に電話してくれたのだった。

死に目に会えなかった。父をたった一人で旅立たせた。そう感じた瞬間、数カ月前に父から聞いた話を、なぜか不思議と思いついた。

「年末、『もはや、これまでか』と思う日があつたんだよ。浜名湖に沈んで行くような感覚になってな。それがとても気持ちいいんだ。でもお母さんが『お父さん、お父さん』って、うるさいくらいに呼ぶものだから、目が覚めた。死ぬ時は、あんな感じなんだろうなあ」

今日の父もこんなふうだったと信じていた。

たぶん、きつとこうだ。

時間は午前十時半頃で、電話をくれた看護師さんと母との会話を聞きながら、旅立った。

「もうすぐ歯医者さんの往診がありますから、歯を磨いた方がいいですね」

「そうなの？ 今日だったかしら」

「そうですね。今日のご主人様は、よく眠ってらっしゃいますね」

「そうなの。さつきからずっと眠ってるの」

「いやいや、眠ってないよ。ああ、気持ちいいなあ。やつとお迎えがきた。もう思い残すことは何もないよ。じゃあな。母娘二人で仲良くな」

思い残すことはあった。結局のところ、一度も浜名湖で魚釣りができなかったのだから。

翌朝、父は湯灌と納棺後、浜松市を発った。遺志に従い、人生のほとんどもを過ごした三重県で通夜と告別式を執り行ってもらった。

骨になった父を抱きながら母が言った。

「いいお父さんだったね。一度として手を挙げたことも、声を荒げたこともなかったわ」

(中央区)

「入選」

匂いのある場所

亀田 貴子

日常の中には、「コミュニケーション」と称して、必要以上に近づいてくる気配がある。それが「仕事の場」であれば、まだ対処できる。マニュアルに沿った振る舞いで、私は自分を守るからだ。

けれど、その場に好きな人がいたとき、そのマニュアルはまったく役に立たなくなる。

私は、好きな人と話すのが苦手だ。言葉をうまく選べない。好きな人。信頼している人。心を許している人。そういう相手の前では、「ちゃんと伝えたい」「誤解されたくな

い」という思いが強くなる。

だからこそ、声に出す前に、心の中で言葉をあれこれと選んでしまう。

私の感情は落ち着きがなく、いつもモヤのように揺れている。その形はどんどん変わっていくから、気づけばもう、最初に言いたかった気持ちには、言葉の隙間にふっと消えている。

そして私は、結局何も発することができなくなる。

そんな時、何も語らない私に相手 が痺れを切らし、文句のひとつでも言おうものなら——もう最悪だ。

相手の苛立ちに触れた瞬間、私はその感情にオロオロしてしまい、言葉を探すとさえできなくなる。責めるような空気に胸の奥がざわつき、探していた言葉にかるうじて引っかかっていた感情の断片さえ、さらに遠くへ散っていく。

言いたいことは、たしかにある。

けれど、伝えたいことを言葉にする前に、相手の言葉や声の温度に心が揺れてしまう。揺れてしまうと、後は自己防衛だ。「何も感じていないふり」をしてしまう。感情を隠しているわけじゃない。ただ、うまく言えないだけなんだ。うまく言えないまま時間が過ぎると、本当に自分が何を感じていたのか、わからなくなる。

そうしてまた、私は黙ってしまう。

黙ることで、相手の気持ちにシャッターを下ろして、どうにか呼吸を整える。

けれど、沈黙の中でも、感情が伝わる瞬間がある。

ふいに、匂いが立つ。言葉のないところにだけ残る、ほんの微かな気配のようなもの。考えるより早く、胸の奥に触れてくる。

——好きな人の匂いだ。

やさしさが、そつと私の中に広がっていく。

そのやさしさに触れると、ふいに
おばあちゃんを思い出す。

おばあちゃんも、静かな人だった。自分のことも他人のこともあまり多くを語らない人だったから、本人から聞いた訳ではないけれど、浜松市の和地町に生まれ、若い頃は洋服のデザイナーとして働き、戦後には東京の大手デパートの制服づくりにも関わっていたという。結婚して有玉南町の「市場」に移ってきた。

私は一緒に暮らしていたわけではなく、小さい頃は、母に連れられて時々おばあちゃんの家を訪れたが、高校生になってからは会いに行くことはなくなっていた。

それでも、静かなおばあちゃんが好きだった。たくさん喋らなくても、ずつと一緒にソファアに座ってくれた。それに、いつも、やさ

しい匂いがした。

石けんでも、花でもない。

内側にあるやさしさと強さが、ふわりと立ちのぼるような匂い。そつと包み込まれるように、心が温かくなる。

——おばあちゃんの匂いだ。

私の家は有玉小学校の近くにあつたので、帰省するときは、新幹線で浜松まで戻り、新浜松駅からさぎの宮駅まで赤電に揺られ、そこから十五分ほど歩くのが、いつもの帰り道だった。

けれど、自動車学校前駅が近づくころになると、胸の中で張り詰めていた糸が、ふつとほどける。おばあちゃんの匂いが、ふいに懐かしく思い出される。だから私は、決まっ

た瞬間、風がびゅつと頬をかすめ、その風に混じって、浜松の匂いがした。少し湿った土の匂いと、胸の奥にそつと触れてくるような、あの懐かしい安堵の匂い。

あのホームで感じた風の匂いは、おばあちゃんの匂いと重なり合つて、いまでも私の中の深いところに残っている。

胸の奥で小さく揺れるその気配は、現在の私にも、静かに流れ込んでくる。

日常の忙しさの中で好きな人とすれ違ふとき、ごく稀に、ふつとやさしい匂いを感じることもある。その一瞬で、昔の呼吸と今の呼吸が重なり、私の心はそつと落ち着いていく。言葉にできないものが、たしかに存在している。そう思える瞬間だ。

(浜名区)

「入選」

家族の肖像画

鈴木千佳代

市内の美術館に、日本画家・野島青茲氏の『農村風景』という作品が所蔵されている。

牛を引いた若い農夫とその家族の五人が描かれた、素朴な肖像画である。等身大ではないが、自宅の天井についてしまうのではないかと思えるほどの大きさだ。

これは、母を含めた家族の肖像画であった。

「私が小学校にあがったばかりの頃、画学生が家に来て、スケッチをしていった。私を描きたかったみたいで、お菓子やおもちゃをくれたりしたけれど、私はおてんばで、じっ

としてるのが嫌で逃げ回っていたのよ」

と、以前より母が話してくれたものだ。

母の実家は、細江町の浜名湖近くの小高い山の途中にあった。画学生は、その山の坂道を足繁く通って来たようだ。家族が揃ったところも、スケッチしていったようだ、母は記憶していた。

その画学生が、のちに有名な日本画家の野島氏であったことは、母も知っていたが、母の家族の肖像画が描かれ完成しているとは、思いも寄らないことであった。

『農村風景』の存在を知ったのは、三十年ほど前、絵画展に行った時のことである。私は、母と一緒に美術館へ出掛けた。二人とも野島氏の作品に会ったのは初めてのことだった。

美しい色使いで、優雅に表現された、芸妓舞妓の日本画は大変印象的

であった。

『農村風景』は、抑えた色使いだったが、私達はすつと惹き付けられた。五人の家族は、皆、端正な顔立ちに描かれているが、誰の絵か分かるほどに、しっかりと表現されていた。

牛を引く農夫の祖父は、仕事や生活に対して真摯な青年に見えた。実際の祖父の性格そのままを表わしているようだった。

農夫の妻の祖母は、乳飲子の叔父を抱き、芯の強さと温かさに溢れる目差しをしている。私を知る祖母は、歌うことが大好きで、いつも周囲を明るくしてくれる方だったが、絵に描かれたような面もあったかもしれない。

牛の上に乗っている、幼い叔母は、ちよつと不安そうな表情でこちらを見ている。実際、物静かで繊細な少女であった。

絵の中の五人目の人物は、牛の前

で西瓜を抱え、何かいたずらでも企んでいるかのような、小学校低学年くらいの少年である。

母はなぜか男の子として描かれていた！

当の本人の母も、自分が坊主頭の男の子になっていたことに、ひどく驚いていた。

「じつとして、いい子でモデルになってやらなかったからだかいやあ……」

と、母は少年を見つめながら苦笑していた。

数年前、気賀の野島氏実家の料亭で、野島氏の親戚の方にお会いした。母の家族のことをお話した。

親戚の方は、『農村風景』のモデルのことは知らなかったようで、大変興味を示してくださった。

野島氏が、なぜ母の家族をモデルに選んだのか、祖父がモデルになることを許したのか、私は知りたい気持ちでいっぱいだが、今となって

は、それは誰にも分からないことである。

『農村風景』との対面を果たした時、既に祖母は亡く、叔母叔父も美術館に足を運ぶ機会を持たず、実際に出会えたのは母だけだった。もっと早い時期に、この絵の存在を知っていたら良かったのに、と残念な気持ちでいっぱいだ。しかし、家族の肖像画が残されていることは幸運なことだ。少なくとも、私は、人生の中で幸せな思い出のひとつになったと思っている。

母は今年九十四歳になり、この肖像画では、遂にたつたひとりの生存者になってしまった。今でも、子供時代のことを懐かしそうに話してくれる。生きていく中では、うれしいこと楽しいことも多かった反面、悲しいこと辛いことも少なくなかったと思われる。母の思い出話を聞きながら、私はあの家族の肖像画のことをよく思い出す。

『農村風景』は、九十年近く前の家族の生きざまを、今を生きる私達に語り掛けてくれている。

(中央区)

「入選」

子と見つめる四季

富永優花

【春】

遠州の空っ風が吹き荒れていた真冬が過ぎ、柔らかな風が吹く頃。冬眠から覚めた小ぐまのように兄妹は毎日散歩に行きたがる。出かける前は大抵「また散歩かあ…」と子どもは後をとほととついていく。でも子どもと歩く道で春に出会える。

近所の公園で遊んだ帰り道。気品ある香りに包まれて木蓮が咲き誇っていた。夕日が辺りを赤く染め上げる中、凜と立つ白い木蓮。幻想的な姿に見とれていると、横で「うさぎだよ」という声がする。木蓮の大きな花びらをふたつ、頭につけた娘が

こちらを向いていた。子どもの手にかかると上品な木蓮が途端にかわりらしくなる。感傷的な気分が朗らかな心地に変化して娘と木蓮の花びらを集めて帰った。

子どもの見つめる春は足元にある。明るい黄色に惹きつけられるのだろうか。子どもは道端のたんぽぽを見つけるとしばらく動かない。よちよち歩きの際は「ポポ、ポポ！」と言いながら摘み取って、バケツいっぱいのだんぼぼを自慢げに見せてくれた。そんなに摘んでいいのかと不安になったが、さすがたんぽぽ。次の日も変わらぬ姿で明るく咲いていた。

ちなみにたんぽぽが咲き誇る時期は意外と早い。我が家の満開予報は2月頃。4月になると「ポポ」集めではなく「ふわふわふー」集めに変わる。両手いっぱい「ふわふわふー」を持つ子どもの側は危険だ。綿の嵐に巻き込まれて目の前は真っ

白、口に綿毛が入って大変な思いをする。

でも何でたんぽぽの綿毛は子どもにあんなに似合うのだろう。春の柔らかな日差し。綿毛。幼い手。全てふわふわとしていて、見ているだけでまどろんでしまう。

【夏】

最近雲をよく眺める。きっかけは息子だ。小学生になったばかりの彼はお天気博士。その日の天気を尋ねると空模様だけでなく気温や風速も教えてくれる。「息子よ、便利な趣味を持ってくれた！」と母は思っている。ただ難点もある。家でも常に天気を観察しているため、ふと見ると窓が開いている。蚊も泥棒も入り放題の家にならぬよう、細心の注意を払っている。

そんな息子と過ごすうちに雲を観察する親子になっていた。夏の雲は分かりやすい。もくもくとわた雲が広がる青空はじりじりと照りつける

陽射しと相まって夏の高揚感を感じる。大抵夏の午後にはわた雲が集まって入道雲ができる。大きくなった入道雲が迫って来て、空に暗い雲が広がり出す。「こつちに来るぞー！」と妙にテンションが上がる子どもたち。夏はそんな夕方が多かった。

雲は私の心の支えでもある。子育てでは幸せな面と辛い面があると思う。終わりの見えない育児に心身共に疲れ果て「母親を辞めたい」と思い詰めることも実はある。そんな真つ黒な世界に沈んでいるとき、空を見て深呼吸をする。空に浮かぶ雲の種類を考える。「すじ雲が優雅に空を舞っている」「ひつじ雲がもこもこして群れみたい」と眺めているうちに狭い世界から意識が少し逸れる。そしてこのリフレッシュ方法を教えてくれたのは他でもない息子だと思ひ返す。彼に救われた気がして子育ても悪くないと今の自分に立ち返る。そんな繰り返しの日々だ。雲

はそんな私の上にいつも浮かんでいる。

【秋】

ある秋の午後、郵便受けから「ぼとん、ぼとん」と音がした。郵便物の音ではない。小さくて固いものだ。不思議に思つて玄関まで行く。郵便受けからこぼれ落ちたどんぐりが足元にコロコロと転がってきた。同時に扉が開いていた。そんな顔が覗く。「びっくりした？」と聞く。息子の背中にはランドセル、両手にはどんぐり。通学路に落ちていたどんぐりを一生懸命拾いながら帰ってきた姿が目につかぶ。

この時期は親子で秋の落とし物を楽しむ。どんぐり探しもよく行くが茶色のどんぐりは土や枯れ葉にまぎれて意外と見つからない。地面をじーっと見つめて「あった！ここに！」と嬉しそうな声。地面から視線を離さず、片手に持った紙袋にどんぐりを入れるのに忙しい。

夢中になっている子ども達の横顔を見ながら思う。どんぐりはこの子たちにとって、「本物の宝物」なのだ。大人の私はどんぐりを見つけても感動しない。多少は嬉しいけれど箱に入れて大事にするほどではない。でも子どもはどんぐりを見つけると瞳がキラキラ輝く。家に帰って何度も眺めて、遊んだり、大好きな友達へのプレゼントになったりする。どんぐり探しは子どもにとって「本物の宝探し」なのだ。そんな子ども達の価値観に驚き、憧れる。宝物が近所の地面に落ちている体験は大人になってからはできない。子ども時代には身近な宝物をたくさん見つけてほしい。どんぐりを拾いながらそんなことを考えている。

【冬】

冬のお出かけは勇気がある。浜松の冬は気温よりも強風が天敵だ。そんな真冬のお助けスポットは浜松城にある「石舞台」だ。薪能などの舞

台として使われる場所で普段は小さな広場になっている。ここが季節を間違えたような暖かさなのだ。囲まれた地形で風が吹かないし、太陽の光がぼかぼかと当たる。いつも着込んでいた上着を脱いでしまふ。「猫の気持ちに分かるね」と大きな石の上で子どもたちと日向ぼっこを楽しむ。

「寒くて外に出られない日は家でコーヒーを飲んでのんびりする。「コーヒー入れてくれる人？」そう聞くと子どもたちが競って立候補してくれる。我が家はドリップ式だ。フィルターからコーヒーの雫が落ちるのを見るのが楽しいのだろう。「砂糖は何個ですか」「ミルクはどれくらいですか」と小さなマスターたちがきりっとした表情で質問してくる。お湯を注ぐ真剣なまなざし。カップから白く柔らかな湯気が上がり、苦味を含んだ香りが漂ってくる。

手渡されたカップには溢れそうな

焦げ茶色のコーヒー。口をつけると同時に「おいしい？」と小さな瞳がのぞき込んでくる。コーヒー通が飲んだらきつと顔をしかめてしまふ。でも私にとつては子どもの思いが溶け込んだ味。心が満たされる。「おいしいよ」と答えると満足げな顔で兄妹はマスターから子どもに戻って遊びに行く。コーヒーに小さな幸せが溶け込んで一つの思い出になっていく。

(中央区)

「入選」

心のつぶやき 五・七・五

池谷 静子

一月下旬になると入選か選外かどきどきしながら封筒をあげ、赤い印が入選にあるとまずホッと。どの句が入ったのかと、三月中ごろからの受け取りの日を楽しみにカレンダーにメモしておきます。今回もどうかしらと思いつつ目次をあげ、名前を確認し最初の方にあつたので少し多いのかなと期待し四句を見つけました。うれしかったです。一つ一つ声に出して読み返しました。

そんな時、ふと昔のことがよみがえりました。寺の雑務にも今ひとつ満足してやれなかった嫁の時代。時

が過ぎ住職の妻の立場になって、嫁ぎ先の両親との生活の中での一つ一つが、無料での学習をさせていただいていたことに気がつきました。自分の身体も心も寺に染まり、一に掃除、二に掃除、お参りにみえた方々がすがすがしい気持ちになっていただければと、花を生けお供え物にも気を配り接待をしながら、時には聞き役となって日々をすごすことに生き甲斐を感じられるようになっていました。四十才を過ぎていました。

ある時、檀家さんとの何気ない話の中で私が自分の気持ちを五七五の言葉にして書き留めていることを話しました。すると季語を入れて市民文芸に投稿してはどうかと勧められました。そしてすぐに応募用紙をコピーして持ってきてくださいました。投稿するなど考えてもいなかった私にとりまして、また俳句とも意識せず書き留めてきましたので、果たしてその中に季語らしき言葉をつ

かった句があったかなと何度も読み返しました。やっと五句を選び出しその五句をこれでもいいのかと考え考えして応募しました。「菊手向く母なりし子に朝日映ゆ」の句が入選しました。一句だけでも心の底からうれしさがどっと込み上げてきました。このことが市民文芸に現在まで投稿するきっかけとなりました。その後、その方の句会に少しの間一緒に緒させていただきましたが、寺です

ので予定した句会に出られなかったことが多く退会することになりました。それから自分なりに感じたことを、エプロンのポケットの中の紙に書き留め夜になって清書して、いいなと思った句にはな丸をつけておきました。感じたままの句ですので文芸性に欠けるかなと思いますが、気楽に素直に作るのが長続きと思えば俳句歳時記で学習しながらほそぼそと楽しんでおりました。秋の彼岸がおわりますと、今までののはな丸の句

を書き出しその中から五句を選ぶ時間がとても勉強になり張り合いになりました。誤字がないかを確認し原稿用紙にしつかりと書きました。そしてお日柄の良い日に願いを込めてポストへ投函。本当にささやかなことですが私にとりましては大切なひとときです。

私が六十才の平成十八年以來、一句のみのときもありましたが、毎年入選の赤印をいただきました。共感してもらえたのかしらと力が湧いてきました。句会であればその場で皆さまのご意見もきけますが、自分ひとりの楽しみでの句作りですので、この市民文芸誌に応募することが私にとりましてどれほど励みになりましたことか、本当に感謝です。思い煩う心のつぶやきを五七五の言葉に書き留めたことからはじまった俳句作り。お風呂に入っている時にも、コオロギがリリリイリイと二分くらいいりリズムよく鳴き、そしてピタッ

とひといき止まりまた鳴き出すそのくり返しを耳にしていますと、まるで五七五のことばあそびをしているように感じられるこのごろです。お墓の花立ての後ろから小さい緑のカエルがのぞく様子にもいとおしさをおぼえ言葉にして書き留めております。ご詠歌の言葉も自然に歌になつて声に出し、その美しさ奥深さに感じ入っております。今さらながらですが、自分に正直に気張らずに俳句作りを続けていければと思っております。

(中央区)

「入選」

花道

中津川久子

夫は三年前の秋、肺の病を告知された。しかも難病指定にされている厄介なものだ。だが当時は、どこが難病なの？ と疑うほど症状もなく元氣そのものであった。

「なーに画像の誤りさ、今は精度が良すぎて何もかも映ってしまうんだ」

「確かに、でも」

私はいまいに返した。

「癌の家系でもないし、陸上をやっていたオレがなるわけないだろ」

また彼の捨てゼリフが始まった。中、高時代の陸上は、夫にとって一番の切り札なんだ。しかし、病は着実に近づいていたのであった。ひた

ひたと忍び足で、ぞわぞわと匍匐前進ほかくで。

一年後、とうとう入退院を繰り返すようになった。自力での呼吸が難しくなったからだ。初回は一カ月にも及んだ。正月は戻れないかも、死亡率は三十パーセントであることも告げられた。低いとみるか高いとみるか。私はひとり怯えていた。こんな私たちにサンタは味方してくれた。退院というプレゼントだ。

令和六年が明けた。いつもどおり、子や孫ら十二人で祝うことができた。普通であることが、とてつもなく幸せに思えた。その一方で、フアインダーを覗く目がしばし滲む。なぜか、次はないような気がしてならないのだ。シャッターが切れない。

八月六日、その日は突然にきた。

「救急車、救急車呼んでくれー」

早朝五時、夫の大声に飛び起きた。これが最期のことばになろうと

は。七月の退院からわずか十日目のことだ。酸素療法生活が始まったばかりで、

「これさえあれば、枝おろしだつて風呂掃除だつて楽勝だぞー」

と、大喜びしていた矢先のこと。救急車に担ぎこまれた時には、もう血の気は失せ反応も乏しかった。

八日、深夜一時前、私に代わつて病院に詰めていた長男から電話がきた。

「父さんが、父さん……が」

ことばが続かない。それだけで察しがついた。次男と車を飛ばす。行き交う車が少ないだけに信号待ちが歯がゆい。深夜の病院は冷気が漂っていた。いや、空調ではない何かがある。

薄暗い病室に駆けこむと、医療機器が目飛びこんできた。ほのかな光の中に、緑色の波形が思い出したように浮き沈みしている。入院から三日、私たちに時間を与えてくれた

夫に感謝したい。優しさが沁みたま。

主治医が息を切らして現れた。

「一時二十六分、ご臨終です」

ふしぎと一滴の涙もない。泣けない自分を責める。医師も、あまりにも急変に驚いてはいたが、このひと言で背を向けて行つた。どこに、誰にぶつけていいのか分からない怒りに震える。

遺体の処置が始まった。かなり待たされて声がかかった。病室から出てくる姿に絶句。先ほどまで彼の身体が見えていたのに、全身すっぽりと寝袋のようなものに入れられてきたのだ。しかも上から紐が掛けられているではないか。人から物に変わったというのか。許せない。これでは息ができないじゃないか、と叫びたいところをぐつと呑みこんだ。

しん、と静まり返つた深夜の街を我が家へと向かう。

——あんな、新婚旅行の帰りもこんな時間だったよ、覚えてる？

五十年前のこと

車体の震動に紛れながら夫の声を
する。

——そうだったな、お前はすっかり疲れて、ちんぷりかいてたよ。そのちんぷりも可愛いかったよ

ときたますれ違う対向車の、どれほどの人が遺体を載せていると分かるのだろうか。

——家に着いたよ、お帰りなさい
布団に落ち着かせた頃には、夜も

白々と明けてきた。皆、一睡もなく、泣いている暇もなかった。心の整理がつかないまま、黒い舞台は忙しく回つてゆく。

午後の湯灌ゆかんを静かに見守つた。長い旅路に、脚絆とわらじの固結び。化粧をほどこした顔が、にっと見栄を切る。

——ヨオツ、日本一
——男前

舞台の袖から客席から、やんやの喝采。いよいよファイナルだ。たく

さんの観客に、祭壇の上の彼はちよつと困り顔。

「どうぞ最後のお別れを、いまいちど」

スタッフの計らいで二度、三度と棺に歩み寄る。そのとたん、一気に感情が溢れ出た。もう止めようがない、止めようとも思わない。

——あなた、ありがとう。お疲れさまでした

——達者でな

拳を高く上げると、すつと花道に消えた。

令和六年夏 享年七十七歳

(中央区)

「入選」

古里へ行く

藤原百合子

私の朝は、ピーちゃんの餌をやることから始まる。餌場と遊び場の小窓を開けてやる。ピーちゃんと言うのは、名古屋コーチンの雌メス、令和元年、ペットショップでヒヨコだった雌メス五羽と雄オス一羽を買ってきて育てていた。

大きくなるにつれ、雄オスはひときわ大きくなり輝くような羽根になって、早朝近所にとどろく様な声で鳴き始めた。雌メスも玉子を産み出し、車で四十分くらいの所に住んでいる娘と孫二人、来る度に今日は何個産んだとか話題になったものだった。

そんな鳥たちが、仲間割れなのか一匹だけイジメられたのか、ある朝

血を流して死んでいた。また、ある時はどこから入って来たのか、恐らくはハクビシンであろうと思うのだが、少し離れた道の端に毛をむしり取られた姿で死んでいた。

ハクビシンには、少しばかり植えてあったとうもろこし畑の実が熟した頃を見計って、次々とむいて食べ散らかされた。

その動物にやられたに違いないと思うのだが定かではない。

また、それから月日が経つにつれ、病気で死んだのか雌メスも雄オスも死んで、二年くらい前からピーちゃん一匹になってしまった。

たった一匹になっても玉子は産んでくれた。しかし、半年くらい前から一個も産んでくれない。それでもピーちゃんはおかしい。

朝、ピーちゃんおはようと声をかけて餌をやり、畑から野菜をとってきて与える。とりわけキュウリが好きで横に半分に切って、その中の種

の部分が好きらしく夢中になって食べる。

もともと鳥の餌やりは夫の日課だった。その間私は朝食の仕度の前に、ストレッチ体操を五、六分やっている日々だった。

六月下旬、夫がヒザの手術のために入院することになり私が世話をすることになった。

夫の手術は変形性人工関節置換手術、数年前から右のヒザが不調でヒアルロンの注射をしていたが、とうとう決意して手術に踏み切った。手術は朝九時頃から始まり三時間以上もかかった。ヒザの骨を切り離し、人工骨が埋め込まれた。手術は無事に終わったのだが主治医から、夫には話してないが術後の合併症等があるかも知れないと聞かされ、随分不安を感じたのだった。

手術が終わって、リカバリの病室に移された夫は、気持ちの悪さと麻酔からさめての痛みに耐えていた。

しかし一日一日確実に快復していき、リハビリを頑張り二週間で退院にこぎつけた。

我が家は夫婦で自営業。生地の小売りの店を営んでいる。畑もある。毎朝ではないが野菜を収穫して近くにある直売所へ出荷している。夫が退院してきても、しばらくは仕事ができない。私一人ですべてやり切れるだろうか、まして生まれてこの方、たった一人での暮らしは初めてである。不安だらけだったが、店の営業時間を朝の始まりと閉店時間を一時間づつ短縮して、一日一日乗り切った。

あつという間に二週間が過ぎた。お客様にも随分迷惑をかけてしまったが、来てくださる方皆さんが「お父さんの具合どう」と心配してくださる。店のこともあつたが、近所の隣人、Sさん、Mさん。Mさんは収穫が遅れている作物を早朝から収穫してくれて、畑の草を刈りその後卜

ラクターで耕してくれた。

Sさんは駐車場の草をエンジン付き草刈機で一度ならず、二度三度刈ってくれた。駐車場は店の前だけでなく、五十メートル程離れた所と、月一回手作りマーケットのイベントをやる時、店の裏にある前は畑だった土地を駐車場にして使っている。その二か所の駐車場の伸びてくる草を何度も刈ってくれた。

今、夫の手術から四ヶ月以上経ったので、まだ完全ではないが店の仕事も畑仕事も今まで通りこなしている。あまり動き過ぎると手術をした足が夕方になるとパンパンに浮腫んで大変である。そんな足も朝になれば元通りになっている。

しかし手術から数ヶ月経つがピーちゃんの世話は今も私の仕事である。

九月の中旬、一枚のハガキが届いた。高校のクラス会の案内状である。コロナ前には二、三度参加した

がなにせ遠い。北海道である。卒業してもう五十八年にもなる。行きたいのは山々だが、足腰も弱っている。もう十年程も前、一人で行った時、飛行機の乗り場で何度も行った記憶がある。どうしたら良いかと思いがぐねていると、月一回我が家の自営業の店の經理をしにくる息子が来たので、何となく話をする、数日して一緒に行つてやると電話をくれた。

息子は飛行機の予約から、ホテルの宿泊場所、レンタカーもすべてインターネットで取ってくれた。さて行くのは十一月十八日、十九日、二十日、二泊三日で行つてくる。

クラス会は十九日の夕方なので、行けば友だちにも会いたい。

生まれた時から同じ村で育ち、たった一軒だけ家族で暮らしている。遠く離れていてもいつも心の交流はある。つい数日前にもおいしいカ

ボチャを送ってくれた。私も家で採れたさつまいもやキウイフルーツ、柿とミカンはおいしい店で買い送った。彼女の家で一泊して積もる話をしたいのだけど、十一月十八日、北海道は寒いだろう。息子がレンタカーで送ると言っているが路面が凍っているだろう。高速でも一時間くらいかかる道のり、もし事故にでもなれば等、考えると心配はつきない。

数日前、テレビで私が中学時代通った幌加内駅が写し出された。

その駅は深名線しんめいせんという大昔から赤字路線で三十年程前廃線になった駅である。私が一時間四十分かけて通った深川の高校がある市が終点で、名寄という所が出发点である。それで深名線と言う。

その駅が写し出されて、廃線になって坂本さんという方が買い取ってお世話をしていると言う。観光客も訪れるのだそうである。

息子と一緒にその駅も見に行つて

みたい。

クラス会に何人の人が来るのかわからないが、古里へ行けるチャンスを与えてくれた幹事さんに感謝して無事に息子と行つてきたいと思う私である。

(中央区)

「入選」

堪え切れなかつた涙

流雲

「行つてきまゝす、さくらをよろしくねー」

「行つといで、この寒いのによく行くな、さくらの世話は任せとけ」

娘浩子夫婦は暮れも押し迫つた十二月十四日、春野町のキャンプ場へ軽四輪満載の荷物も軽やかに、浮き浮きと出掛けました。

数年前の夏からスタートしたキャンプも、最近では装備も年々拡充して、季節に関係なく私の心配をよそに厳寒にも出かけます。

ところが翌十五日の早朝顔色を変えて帰ってきた和也は「浩子が入院した」と私に告げました。

昨夜の一時頃、浩子が小用に起きた際、トイレからテントまでの歩行が困難となり、キャンプ場の管理人に申し出た所、看護師をされていた経験から、脳内出血の恐れがあると判断され、強く救急搬送を進められたそうです。

脳外科医が当直だった聖隷浜松病院へ搬送後、集中治療室で治療中、病状はやはり脳内出血で、一時血圧が二百以上だったが、意識はあつたそうです。

所在なく戸惑うだけの和也の手前、私までがうろたえてはおれません。虚勢ながらも年の功、泰然自若を装い、医学の進歩に頼るしかない

と、涙顔の彼を力づけました。年末は業務多忙で有給休暇が取れない和也の夕食と、さくらの世話一切が瘦身の双肩に重くのしかかりました。

牛丼、かつ丼、親子丼、野菜炒め、魚嫌いな和也には、レパートリーも

一週間が限度、その後は彼のお好みのお惣菜で済ませました。

さくらの餌は浩子不在時の経験から、簡単なものと軽く考えていましたが、「さくら御飯だよ」と食器を置いて顔は見当外れの箇所を探しています。

一回目はおかしいなと思いつつも、二回目には眼も耳も鼻も弱つていと判明しました。犬の十六歳は人間ならば、私と同じ八十半ば、日中の微睡眠も吾身同様、さもありなんの納得です。

先日訪れた次男が「お父さん、さくらは僕が来ても喜ばないよ」

「えー！ 忠男の車を見ただけで尻尾が千切れるほどに大歓迎だったのになー」

「少し来てるんじゃないの」

「そー言えばごみの収集車に気が狂つたように吠え立てていたのが、この頃とんと途絶えて、ご近所の奥さんから収集日を間違つたかと戸惑う

ことがある、なんて言われたな」
食べれば出るのは自然の原理、浩子から

「お父さんさくらの糞は小屋の中まで見て頂戴ね、糞の上に寝ていると、肌が爛れちゃうからね」トイレも寝室も区別がつかないさくらとなつてしまったのか。

思い起こせば十六年前、家にやってきたさくらは殊の外臆病で、散歩に出ても一切社交性はなく、プードルの親愛の情にも逃げ回り、私がバリアーとなつて守りました。

通学途上の学童が優しく手を差し伸べる行為にさえも迷惑千万、私は「人見知りか激しいからごめんね」と謝り続けました。

散歩中こんな状況ですから、外出は大嫌いな隙さえあれば戻りたい一心でした。

かといって「そんなに帰りたいなら一人で帰りなさい」とリードを外しても、私から離れるのは凡そ五十

メートル。誰かに襲われるのが恐ろしいのか、私が迷子になるのを心配してくれたのか未だ謎です。

散歩が嫌いだったもう一つの理由は私の見栄にもなりますが、あたりかまわずしきりに臭いを嗅ぎまわったり、ゼーゼーと首が千切れるほどリードを引っ張ったりするのは嫌でした。

そのため私は飼育士からの知識を元に、軽くリードを二度引く方法で、幼い時から躰けました。一緒に散歩した妻のやよえは「お父さんさくらを苛めないで」

「そうじゃないよ躰だよ」と取り合いません。

でも躰は私とだけの間であつて、浩子夫妻からは「何でお父さんの時だけさくらは従僕のように素直なの」と不思議がられました。

浩子か忠男が教えたのか、さくらの得意技はボール遊びでした。ぽんと投げ上げた野球ボールを見事に口

でキャッチします。

私が犬小屋の近くへ出ると、律義にも必ず出てきてボールを探します。「そんなに好きなのか」と思いきや忠男の弁によると「お父さんの退屈を紛らわすさくらの心遣いじゃないの」等々、一瞬のうちに元氣だったころの思い出は尽きません。

私は犬のように腹ばいになって小屋に潜り込み、奥まで綺麗に掃除をしました。掃除を済ませると、さくらはねぐらを奪われては一大事とばかり、さつと駆け込みます。

そんな私の苦勞を見かねたように、和也が屋根を開閉できる犬小屋を、ネット販売で購入しました。私は内心さくらはそんなに長くはない、と思いましたが口には出しません。

和也とさくらと私の生活も落ち着き、浩子の病状も左半身に少々マヒがあるものの、日増しに回復へ向か

い、院内でのリハビリが始まり、家族に明るさが戻ってきました。

さぞ寂しい正月で、おせち料理も諦めていたところ、東京から妹が来てくれて大掃除やらおせちやら、迎春の準備が整い、妹と長男、次男、和也と新年を迎えることが出来ました。

一月九日にはリハビリテーション病院へ転院となり、医師、看護師による懇切な医療のお陰と浩子の若さで思ったより回復が早く、皆で喜び合いました。

入浴と着替えも自力で可能となり、目出度く二月五日に退院できました。

「さくらら今帰ったよ」喜びを全身で表すさくららの喜び方は誰もまねできません。甘え声は決して私には見せないのに……。浩子の目には涙がいっぱい。まるで母と子の対面です。

事もなく話は一挙に五か月間飛びます。一眠りした暗闇に「ウオーン

ウオーン」と何やら寂し気な鳴き声が聞こえてきました。どこの犬やら知らないが、近所迷惑ではなからうかと夢現。

翌日浩子に聞くと、さくららの様子を見に出たが、どうしたこともないのに鳴いていたようです。ご近所に悪いからその夜から玄関に入れることにしました。

七日後には、身を横たえたままのさくららは水とゼリーだけの介助食と紙オムツになり、間をおかない「ウオーンウオーン」は、まるで浩子を呼ぶナースコールのようでした。

それから三日、令和七年六月二十九日「おむつを替えようね」と言った浩子の顔をジッと見た後、静かに目を落としました。さくららの体を悲し気に擦る浩子の目からは涙がポトポト、堪え切れない私はトイレへ消えました。

家族の一員として泣き笑いの十六年、あの世でやよえのばーちゃん待

つてるよ。

葬儀から火葬へと時代は犬の世界にまで広がりました。骨壺と多くの遺影に飾られたさくらら、今以て犬小屋からひよっと出て来る気がしません。遺骨は私が抱いて参ります。

(中央区)

随筆選評

たかはたけいこ

市民文芸賞

講評

昭和百年、戦後八十年の令和七年が終わった。世界のあちこちで戦争が起きている。世界の先行きは不安だらけだ。叫ばれていた地球の温暖化、異常気象は現実のものになり、地球上で生きているものに影響を与えている。日本国内の先行きもわからない。

確かなことは私たちが生きていること。日々の出来事を受け止めて、前へと進んでいることだ。

受賞作を読み返してみると、行間からその人となり、価値観が見えてくる。共通しているのは「素直さ」「真面目さ」である。受け止める、感じる、考える、次の行動に出る。筆者たちは自分の身に起きている物事に対峙していく。その姿勢が自然体で、見事だ。

話し言葉は口から出て相手に伝わり、消えていくが、書き言葉はペン先から、あるいは指先から活字になって文章に変わり、その瞬間が凝縮されて「永遠」に残る。

応募作を読みながら、同じ言葉でありながら、「書くこと」とは何かを改めて考えた今回の選考になった。

一方で、自然や社会に対する不満や不安はある。けれど、私たちは戦争という物理的な破壊がない毎日を当たり前として享受している。こんな日々が戦後九十年、百年と続きますようにと、祈りながら今年の選考を終えた。

「父の最期」

九十八歳の父親が静かに息を引き取った。死の前の父の様子、筆者が感じた父の死の予感。死とはなにかを教えてください。父の言葉、父の様子。筆者が克明に刻んだ風景。一言一句が吟味され、父が娘と家族に見送られて逝った。読了して、「こういう風に死にたい」と私もまた思った。

入選

「匂いのある場所」

本編を読み進めるとき、足元に柔らかな大地が広がっていて、そこから書く才能という筆者の感性が噴出していると感じた。言葉以外で伝えるものを「匂い」とした筆者の言葉に対する感覚は、新たな人間の五感の可能性がある。別の作品も是非、読みたい。

「家族の肖像画」

牛をひいた若い農夫とその家族五人が描かれた大きな絵が、浜松市内の美術館に飾られている。浜松が生んだ日本画家 野島青茲氏の作品である。このモデルが筆者とその家族である。本作品には画家が絵をどう描くか、モデルのどこを

切り取るのか、画家の本質までも描かれている。確かな筆者の筆力の高さが読者を引つ張っていく。

「子と見つめる四季」

遠州の四季に重なる筆者と母子の思い出と生きてきた道。私たちはこんなにも美しく逞しい遠州・浜松という土地で生きているのだと、改めて感謝した。筆者の言葉の選び方、表現方法が秀逸で、文章を書くことに対する真摯な向き合い方に同じ書き手として、今までとこれから、周りの人々と出来事のすべてに感謝した。

「心のつばやき五・七・五」

寺に嫁いだ筆者が、紹介されて始めた俳句づくり。市民文芸賞に応募し、入選を果たすと、励みになり、更なる高みへと自己研磨していく様子が自然体で描かれていく。筆者の文章の根底に流れる素直さと、思いを形にしようとする真摯さは俳句だけでなく、生きていくすべての術に変わり、血肉となっていく。

「花道」

夫が病を告知されてから、先立つまで、その後筆者が感じたことが、時系列に描かれている。病を受け入れた夫婦は、前向きに生きていき、その延長線上の「死」も受け止める。夫は先立つものとして、妻は見送るものとして。筆者の素直な文章のなかに織り込められた、適切なオノマトペの使い方

に、舌を巻いた。

「古里へ行く」

北海道で生まれ育った筆者は、浜松で結婚し暮らしている。子どもを産み、育てて、畑仕事をし、商売もしている。夫婦でペットを飼っている。夫が手術を受けることになり、すべての日常の仕事を両肩で背負う。そんな時に同窓会の案内がくる。母親だけでは心配だと息子が同行してくれることになった。「しあわせ」は筆者の生き方と共にある。

「堪え切れなかった涙」

別所帯を構えていた娘が、突然、入院して、筆者が飼い犬の世話をすることになった。十六歳の犬は人間年齢なら筆者と同世代になる。慣れない飼い犬の世話をしつつ、筆者と家族は新たな人間関係を築く。やがて娘は快方に向かうが、飼い犬は老衰で亡くなり、筆者はその骨壺を抱く。絶妙なストーリー展開。

詩

〔市民文芸賞〕

海

宮田悦自

何も無いのに 全部在る
そこへ行けば 何者でもなく
かといって 何ものでもあり

風が吹き 浜辺をゆき
砂粒となり 蟹と遊ぶ
空へ舞い 海を泳ぎ

たゆたって たゆたって
なにになるのか ならぬのか
かんがえる からだとけてって

ただただ ゆられて
ただただ ゆだねて
どこまでも きつとこちよい

生きることと 死ぬること
マーブル模様の 大理石
ひとつのもので ふたつの呼び名

嘲る者の 誰もいない
今日も砂丘に 日がのぼる
おんなじようで 今日海

(中央区)

犬

金太郎

呼べば、君は尾を振る
呼べば、君は走り出す
呼べば、君はこっちへ来る
呼べば、君は笑ってくる
名を呼ぶたび、君は来て
名を呼ぶたび、君は来て
名を呼ぶたび、君はうなずき
名を呼ぶたび、君はそばにいた
静かな夜に、君を呼べば
静かな夜に、君は来てくれる
静かな夜に、君は寄りそって
静かな夜に、君は眠っていた
時がたち、声が弱くなり
時がたち、歩くのが遅くなり
時がたち、目を細めながらも
時がたち、それでも君は来た

呼べば、君はそこにいた
呼べば、君はそこにいる
呼べば、君は振り向き
呼べば、君はやっぱり来る

(中央区)

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「市民文芸賞」

ちようだい

ヒメ巴勢里

とんとん
ミルク瓶 軽く叩いて
Nを向かせる
もう一方の手を開いて
ちようだい、の仕草
異国から来たNは振り向いて
そして 戸惑う
ちっちゃな赤ん坊を抱いた
背が低く、肌の茶黒い母
路地の店に吊り下がる麻のバッグ
選り好みしていたところだ
ミルク瓶 とんとんして
おっきな目で 訴える
何度も、ちようだい、の仕草

Nの隣でネパール人通訳が
首を横に弱く振り、目を伏せる
ああ、相手にしちゃいけないんだな
Nは悟るものの、もどかしい想い
また別の日
道路端に座り込む少女と遭遇
やはり赤ん坊を抱きかかえて
一瞬 釘付け
目が合ってしまったN
ああいう人達は たいてい
インドから来てるんです
信号が変わるのを共に待つ通訳が
Nに教える

か細い腕の女の子

その子は誰?!

母はどこ?!

ぎよろつとした目の奥に

空虚な瞳

信号が青になり

そこを離れゆくしかないN

雨がパラついていたはずが

青空も見えているネパールにて

(中央区)



小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

「入選」

遠い国から

平野 旭

春が来た
 もう直ぐつばめがやって来る
 此の地で愛が芽ばえ
 此の地で命を育む
 優しさと気高きつばめ
 希望を携えて
 我が家を忘れずやって来い
 聞かせておくれ
 人の暮らしを世界の事を
 汗を流して動く人や
 穏やかに暮らす人達の事
 労り励まし助け合う姿を
 つばめよつばめ話しておくれ
 変わり行く地球の事を

(中央区)

「入選」

蒸気機関車C58形

石黒 實

北遠の小さな町の駅
 その天竜二俣駅に展示して有る
 蒸気機関車C58形
 この駅に立ち寄り君を見て以来
 その雄々しさに魅せられてしまった
 煙突、シリンダ、ボイラー、車輪
 飾る処は何一つ無く
 蔽ついまだに頑固な鉄の塊
 それでいて何処かに優しさを持つ
 厳かな姿が美しい
 大正から昭和、時代を背負って
 人間、物質を乗せて鉄路を駆けた機関車C58形
 その頑張りに心を引かれる
 山の裾野に「プポー」一声汽笛を鳴らし

何両もの後続車を力強く引つ張り走る君を
人々は焦がれをもつて

見ていたのかも知れない

北遠の田園山野の鉄路の上を走る君の姿が
今も人々の胸に懐かしく残ると言う

二俣駅の十一月の秋風の中

吹き晒しの台座に据え置かれた

蒸気機関車C58形

煙を吐き山野に響く君の声、勇猛に走る君の
姿をもう見ることは無い

固定された動輪、石炭を燃やし続けた火室も

今は冷え切って閉じたままだ

古きものは後に追いやられ

新しきものにその座を譲る

役目を終え今は静かに眼を閉じる君

勇士はいつの時も孤独だ

北遠の小さな町の駅

二、三人の鉄道マニアが

君の姿をカメラに収める

課せられた己の使命を果たし

実直に生き抜いたものの美しさに

人は何かを重ねているのかも知れない

懸命に生きたものの姿は美しい

そして哀しい

なれどもそんな後ろ姿が私は堪らなく好きだ

(中央区)

「入選」

灰色を乗り越えて

船橋次郎

どこからともなく聞えている声が
清清しい何かと拮抗している
面白おかしかった過去の話をすれば
その声はとどろき歓声を上げる
常に私につきまとい
遠方方向に出発すれば
付随するように声がかけてくる
厳しい嫌がらせの声に思わず私は
床に寝ころび心の神に援助を求める
30代は惨敗だった
友人も恋人もろくにできず生活も不規則
黙々と夜中3時に本を読んでいた時もあつた
甘い誘引に乗ると状況が暗転するのは
当然のことなのだろうかこの世の中
道は分かれぬ

そんな私に邪心が攻撃を仕掛けてくる

山を越え 海を渡り

未開の地にたどりついたような

気がしたのが病院の外泊

何もかもが新鮮で豊かな花々が

実家に所狭しと咲き誇っていた

私の人生がまたスタートラインに立ち

新たな模索が始まるようだった

病院に戻れば再び始まる幻覚との対話

暗い影を落とし、佇んでいる自分自身と

言えどもどこかドラマの

演出をしている心地に似ている

流動する川の流れに1つ、2つ、3つと

嘘、狂気、墜落を投げ捨てる

縁がある近隣の人との交流

時折野菜を与え合う関係の人がいる

私は何をしているんだ

皆家庭をもって安定した生活をしている

重宝している子供もいるのではないか

闇が薄まり

灰色も越えようとしている

そんな我にもっと幸を与えてくれないか

明るい陽射しのもと

木々が佇んでいる

夢から覚めても怠惰な生活

支離滅裂な会話を避け

柔かい毛布に包まり愛や未来を思う

尋常から離れている私

今日も手痛い声を受け

それでも私は走りだした

「入選」

カーテンの向こう

高柳龍夫

(中央区)

部屋にはベッドがいくつも並んでいる
水色のカーテンが個々のベッドを囲み
私は出入口のすぐ隣
向かいの窓には濃緑色の遮光カーテン

まぶしく輝くような思い出を
誰もが抱えているが
白いシーツの上では
今の現実を素直に受け入れるばかり

窓際のベッドにずっと寝たきりの人がいた
ひとりごとのように
窓の外の様子を隣のベッドに話している
「桜のつぼみがいくつも開いたよ」
「花壇は赤いアマリリスでいっぱいだよ」

「どこの保育園だろ、黄色の服が歩いてる」

とりとめもない話を耳にしながら

私は乳白色の天井をぼんやりと眺め

永く感じた一週間をその部屋で過ごした

明日には退院という前の晩

ずうっと窓際だった人を

薄いピンク服の看護師たちがベッドごと

急いでどこかへ運び出していった

朝になり

明るいオレンジ色のパジャマと

持ち込んだ日用品を片付けながら

期待で胸は高鳴るばかり

窓から外の多彩な世界

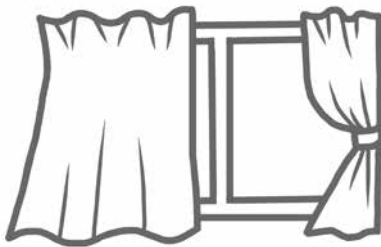
これこそ私が求めている楽園

部屋に残る人たちへの挨拶を終え

初めて窓に近づいて

遮光カーテンの向こうを見た

くすんだ灰色ばかり
ただのコンクリートの壁だった



(中央区)

「入選」

九十九里

内山文久

力強く響いて

―僕達は軽くキスをした
乾いた唇と唇　なのに
心は熱く濡れていた―

そうだあの時

不意に起き上がった　君は
軽く僕の鼻に人差し指を当て
微笑み　嬌声をあげながら
水際へと走って行った

あの時　僕はきつと

君を追いかけていたにちがいない

〈いやいやそうなんかじゃない〉

波に向かつて飛び込み

沖に泳ぎ出す君に背を向け

何故か僕は　裸足のまま

じわじわと沈み込む熱い砂を

静かに踏み分けながら

裏切りだけが行き交う街

夏　むせかえる砂浜

安っぽいビーチマットの上で

僕達は抱き合い

うたた寝をしていた

縞模様のパラソルの下

君の灼けた肢体は

砂にまみれ　ざらつき

僕の腕・掌に伝わる

垂直になった

君の眼差しの向こう

九十九里の海と空が

これまた性懲りもなく

縞模様に青く白く広がり

寄せ来る波音が

騒めく人々の重い心と
籠えた匂いのなかに
溶け込んでいった



(中央区)

短歌

〔市民文芸賞〕

くちびるはきつと何かを言うよりもふさがれたがる一冊の本
重厚に装幀されて一行の嘘も読み取るひまのない夜
結婚は手垢のついた辞書だけど読むたび君は新しくなる
全巻のアリストテレスでも恋のもつれた紐はほどけないまま

中央区

尾内甲太郎

その果てに「らしくないね」と言われてもあなたに見せたわたしも私
後ろへと下げたシートの助手席は君の不在を色濃くしてる
親指でそつとカップのフチなぞりなかつたことにされていく紅^{べに}

天竜区

河合 香織

小
説
児童文学
評
論
随
筆
詩
短
歌
定型俳句
自由律俳句
川
柳

鏡見て知らぬ我が身の笑ひ居り朝の始まり夢のなかなる
 午睡より覚めし子の髪撫でながら夢のつづきをそつと覗きぬ
 窓開けて夜の匂ひを吸ひ込みぬカップの底に月の揺れをり

浜名区
 松島 良一

「お父さんが亡くなりました」と母からLINEが光る午前四時半
 「気をつけて帰れ」が最後にした会話人の心配ばかりしていた
 斎場で喪主挨拶の清書する母の隣で淹れるコーヒー

浜名区
 峯村友香里

次々と小さき家電買いそろえ君は旅立つ何か見つけに
 「夕焼けが綺麗よ、見て」と電話する二五〇km東の街へ
 夜行バス膝に眠れる君の背をトントンとする遠き日のごと

中央区
 高橋祐三子

「入選」

中央区 大山 啓

さりげなく一桁生まれと呟きぬデイサービスの隣の席に
 プラごみを両手に下げてよたよたと週に一度
 を時に怠ける
 気を入れて事に当たれと言ふごとく指先一つ
 に瓶のふた開く

中央区 坂口 ちせ

見るからに重たげな雲が行き止まり落ちてき
 そうで落ちてはこない
 掌を当てて胸の痛みをさすれども癌と言われ
 りやせんかたもなし
 夫との心の距離は五メートル傍らに居て手は
 届くのに

中央区 佐藤 一央

いつもならオペラの響く劇場に五夜続けての
 呼び出しの声
 宇良関が一番人気ざわめきをどよめきに変え
 力士は落ちる
 「アリガトウ」「ガンバッテ」千秋楽の花道
 に舞うやまと言葉が

中央区 鈴木 和子

手術の目ガーゼ取れば光満ち瑠璃色のびん
 碧くまばゆし
 灯台のような役目と思いつつ祖母われ節句の
 柏餅蒸す
 日々に小さき選択重ねおり生きる証と露草の
 青

中央区 和久田 郁江

洗面所に高椅子を置き歯みがきすこれも齢か
 一人納得
 合格の知らせのありて駆け付ける爆睡中の面
 皷顔見る
 作業着の夫のズボンの膝当てに何時かの為の
 切れ端デニム

中央区 井口 絹子

毎朝の新聞広げ拾い読みねぢりはちまき数独
挑戦

みどり摘む庭師の手先^{ちゅう}宙泳ぐあれよあれよ
と樹景が変わる

中央区 石井 泰子

さんずいに立つと書く「泣く」思い切り泣い
てしまつて立ちあがれかな

犬なのにネコと言う名を付けられてネコネコ
ネコと呼ばれて犬は

中央区 石黒 實

「こんにちは訪問看護の仕事です」独居住ま
いの老人尋ぬ

終日を患者宅を駆け巡るこの夏五人臨終を看
る

中央区 伊藤 友治

秋深き宮にアイスをほうばる子^チヨツチヨチ
ヨツチヨの笹鳴きの中

赤黄のみみじ葉集めコンポストへ妻が詰め込
む小春の日和

中央区 内山 文久

キビタキの瞳は写す月窟廟山頭火見し藤の花
邑

ふたつしてアオスジアゲハ高く飛ぶ天守に迫
るクスノキのもと

中央区 内山 正則

明け方の部屋にやまざる秒針の音を押しやる
朝鳥の声

夜ふかくウサギが水呑む音を聞くケージの暮
らしに昼も夜もなし

中央区 遠藤 ゆき

ベンガルの大河に浮かぶ帆掛け船まだ見ぬ景
色友ぞ懐かし

会えねども友は友なり悠々と流るる大河パド
マのごとく

中央区 大庭 拓郎

まな板の亡妻のエプロン思うまで視野のかぎ
りの夕映えにあう

柚子ひとつ風呂呂にゆらゆら安らげり幸せとい
うはかくも小さき

小説 児童文学 評論 随筆 詩 短歌 定型俳句 自由律俳句 川柳

中央区 岡部 澄子

すつぱりと包む布団は茜色人の影なき里の夕暮れ
柿の木が切り倒されし里山にぐんぐん沈む夕日の濃さよ

浜名区 加藤 久子

隊を組み渡りの群れが西の空見送る我に新たな群れが
キーボード叩いて画面見詰めれば二重にぶれた数字が見える

中央区 川合 陽子

姑のための手すりもふる椅子も今は私の必需品なり
そんなにも効くのであればとメモを取る通販サブリの説得話術

中央区 柴田千賀子

十歳の孫に教わりアプリ開く花の名わかった
アグロステンマ
九月なり真夏日なのに何か違う光・風・雲・かすかに違う

浜名区 清水 孜郎

田圃鋤く牛と同じだこの心シツシツと今朝は鞭うつ
レコーダーの向きを変えつつときめきぬホットギスの声近づきってくる

中央区 杉浦 庸暢

戦争は寒い時代の「口減らし」そんなだから進歩を阻む
開けるたび匂い懐かし干しぶどう過ぎ去った日を心に思う

中央区 鈴木 賢三

青梅をカリカリ漬にしたという楽しい便り娘よりくる
ハマボウのレモンイエローの花みごと一日だけの命燃え立つ

天竜区 鈴木 脩慧

北峰にクマが現れわが車庫にハクビシン来て戦後八十年
ありがたうが行き来するなり山の市今年の狙ひは太き自然薯

中央区 鈴木 壽子

買ひ置きし袋のままの馬鈴薯に今朝は驚く芽
の伸びてをり
聞き違ひは言ひ方の不調法と誰れに教はりし
か失敗重ねて

中央区 高橋 幸

あらがわず老いのひと日を絵手紙に没頭しつ
つ冬日沈みぬ
早朝から葉陰に成りしゴーヤの実探す楽しみ
数は少なし

中央区 谷口 章子

酷暑なる夏野に鶉は巢立ちけり三つの頭は今
天翔る
古巢のみ残して去れり鶉親子胸は充ち来る吾
うつろふも

中央区 坪井いち子

干すよりもたたむのが好きと友言えば真逆の
わたし背伸びして干す
108のことばサプリと生きてゆく今日も明日も
また明後日も

中央区 西村みゆき

イチョウの葉そここにふり体温がまだある
ようにひだまりとなる
思い出と暮らしてゆけばいいじゃない花瓶に
バラを投げ込むように

中央区 袴田 成子

快復し一歩進めば好しとする笑顔つくって鏡
をのぞく
忙しなく暮の御礼の電話する姉と三十分弟三
分

中央区 古谷聰一郎

昨日より今日の確かさ自覚せり途切れ途切れ
の分散和音
ハーモニカ音色寂しき「里の秋」やせ衰えて
復員の父

中央区 馬塚 五朗

昼時にペダルをこげばピーヒョロロスローテ
ンポで飛び交う三羽
ハーモニカ選んだことにこの先はどんな経験
をするのであろう

ありがとう使いふるしたパソコンをきれいに
拭きお別れの朝
ゴミ出しにふとよぎりしが分別は必要なれど
分断は悪

中央区 南出 秀重

秋の空無数のトンボ降り注ぐ縦横無尽の厚い
天幕
たい焼きの頭からでも尻尾でも食べて美味し
いモチモチの皮

中央区 みみ ハム

夕月の日々太りゆく散歩道明日あるを信じひ
たすら歩く
渋柿を軒に吊して一日終う足るる思いは明日
への糧に

中央区 宮澤 秀子

草履投げ犬に拾わせ遊ぶ子の日焼けの顔よ待
つ夏休み
ミニトマト初めての出来実ったね一七〇個酷
暑に負けず

天竜区 美山 愛

仰ぎ見る彼岸の空に雲ひとすじそちらからで
も見えていますか？
いつだって今日が一番若いからささと膝打ち
未来へ一歩

中央区 谷野富久恵

月が出るしがみつくよに雲が増えそれをちょ
いとスクロールする
鳴き声を手のひらいつぱい持ち帰る蝉のシャ
ワシャワ「はい」母ちゃんに

中央区 吉川 一美

オリオンの放つ輝き胸を射しやがて優しき星
のゆりかご
シャボン玉風に揺られて空高く笑い声まで天
に昇りぬ

中央区 由倉 典之

きびきびと明るく坊くケアセンターミスソフ
イアのお國はフィリピン
おすおすと部屋の中まで射し込んで小さな秋
を知らせる日射し

中央区 渡野邊すみ子

嫁ぎゆく娘と二人飲む酒は酔いたくもあり酔えなくもあり
中央区 赤堀 進

スマートフォン習いに来たれば先客の背にみどり児はぐつつすり眠る
浜名区 安藤 圭子

小倅の妻を娶れたその笑顔大病の後の塞翁が馬
中央区^{やまい} 飯尾 久光

戸を開けて澄み切る空を見上げれば眼の裏をから風滑る
中央区 井口 海

フジバカマ花に取りつく蝶一頭アサギマダラ
このれからの旅
中央区 池谷 和廣

今夜から母家に寝ようね祖父言いき解かれたような八月十五日
中央区 伊藤 雅章

インボデイ握るハンドル戸惑う手祈る気持ちで評価を待ちぬ
浜名区^{とまじ} 伊藤 美代

行く当ても無きしそぞろに夏落葉拾ふ一枚夕焼けの色
浜名区 岩城 悦子

犬や猫いわんや茄子の苗までも決めた「その子」は「うちの子」となる
中央区 遠藤ひろみ

ビル街のスクランブル行くひるさがり青いデニムの小びとみたい
中央区 桜花 ふみ

我が人生平凡なれども悔いはなしこれで終わり
とそつとペン置く
中央区 大檐 一郎

先生の歌集ひらけば照らさるる我が胸奥の深
き暗闇

中央区 岡部すみれ

真白の木連の花つづく道車窓より見て心おど
りぬ

中央区 岡本 蓉子

恋みくじ水にひたしてみたけれど心の中をた
だようばかり

中央区 尾上 正代

空仰ぐ台風一過の秋晴れに巨大に映える彩虹
架かり

中央区 神谷 司

帰り着き眠れぬ夜の逃避行イヤホンからの推
しの旋律

中央区 河口 美緒

丸まった背中の中のほくろを星に例えたたたひ
とりの観測者

中央区 くらげのおぼけ

看しんご護師の一郎さんと呼ぶ声にアイヨと応う隣
の爺

中央区 栗原 恵子

憧れたそんな大人になれなくてずっと子ども
でいようと思う

天竜区 皐 月

まだ小さきひすいに似たりトマトの実指輪に
見立て暫し眺める

浜名区 澤木 辰子

風走る季節知らせに遠くへと金木犀の香りと
共に

中央区 澤口 真理

風越かざこしに声なく咲けるシロヤシオ神楽の花と山
を訪ねむ

浜名区 すずきとしやす

母逝きし夜に見た夢不思議なり我が臥床がしし家
族が困む

中央区 鈴木由起子

どこ迄も優しくあれと胸底に杖つく夫の歩幅に合わせる
浜名区 早田 キヨ

「ひのやくし」壁画の飛天色さめて北山文化
遠きものなり
中央区 大文字 草

組長宅練り賑ひて大きな輪人・人・人のありがたきかな
中央区 高山 紀恵

ラベンダー吾に贈りしわが娘母の日嬉し生ける希望よ
浜名区 竹内オリエ

夕暮れの信号待ちの群れの中先行く者はどこへ向かうか
中央区 田畑 颯太

突如来る耳鳴り一秒はサインとす宵の編物そのまま明日に
中央区 手塚 みよ

あいさつは言の葉を編む「ボンジャー」「シンチャオ」「オーラ」母語で彩る
中央区 寺澤 昌子

ふるさとのなまりダニ孫得意顔神戸言葉に全てダニつけ
中央区 戸田田鶴子

一歩ずつ公園の落ち葉ふみしめてゆく年を思う夕暮れの路
浜名区 富永 香

毎日の通り道には酔芙蓉朝さわやかに帰路あたたかく
中央区 夏 央 子

スーパードキューリ一本シヤケひとつ慣れも淋しや命日まぢか
中央区 中津川久子

手を合わせガーベラとユリ私だけ多く生めども母は悲しき
中央区 中野万里子

冬化粧天守閣に初雪か夢見て終わる浜松の冬
中央区 中村 篤宏

蛇に熊最新技術なんのその立入禁止の字は読
めませぬ
中央区 中村 照美

紙滑るシャーペンのみがさえずって緊張煽る
五十分間
中央区 仲本 明咲

無駄口は慎みながら暮す日々理数の夫とO型
の妻
中央区 根本フミ子

夕月夜風の便りに友のいくごめんのひと言か
けることなく
中央区 飛 天 女

はらはらと人に懐いて落つさくら一ひらピン
夕箸でつまんで
浜名区 平井 要子

地下道の住民去りてダンボール淋しく残る秋
深まりて
中央区 平野 旭

都会から田舎に移り嬉しきは何もないことそ
れが良いこと
中央区 藤原 孝志

当方は変はらぬつもりで会ひおれど先方どこ
かに労りの心配
中央区 みずのさき糸

冬の朝アラーム二回止めてからやつと起きだ
すいつもの私
中央区 森川クララ

肩車吾子の燥ぎて鯉幟空遊ぎてや輝き増せり
中央区 山下 静子

叶はざる想ひのうらめし春やよひうづきささ
らぎ行つたり来たり
中央区 山田 文好

中央区 山中 伸夫
災害時助ける側に回りたく切磋琢磨で体鍛える

中央区 和久田俊文
大福二個で腹いっぱいになってしまったこの
俺の幸福度

中央区 渡辺 寿三
飛んで来た桜花爛漫レース場和合の谷は驚さ
えずる

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

短歌選評

清水正人

九十三名の皆さんに四一四首の出詠をいただきました。ありがとうございます。短歌は壮大な風景を詠むよりささやかな日常を詠うのになじます。悠久の時間ではなく、ちよつとした一瞬の変化に読者は魅了されるのです。以下の五名の皆さんを本年度の「市民文芸賞」といたしました。

くちびるはきつと何かを言うよりもふさがれたがる一冊の本
重厚に装幀されて一行の嘘も読み取るひまのない夜
結婚は手垢のついた辞書だけど読むたび君は新しくなる

全巻のアリストテレスでも恋のもつれた紐はほどけないま
頭一つ抜けた印象の一連である。「本」を通底するモチー
フとして、もどかしい恋の刻々と変化する表情を活写してい
る。言葉に対するセンスは作者の持つて生まれた資質だろ
う。一首目、「くちびるは」「一冊の本」であると詠う。それ
も「きつと何かを言うよりもふさがれたがる」「本」なのだ。
三首目、「結婚は手垢のついた辞書」と重々承知しながらも「読
むたび君は新しくなる」。アリストテレスの時代も現代も四
首目に詠われたとおり、恋は「もつれた紐」なのだ。

その果てに「らしくないね」と言われてもあなたに見せたわ
たしも私

後ろへと下げたシートの助手席は君の不在を色濃くしてる
親指でそつとカップのフチなぞりなかったことにされていく
紅

短歌の本懐はやはり相聞なのだろう。それも順調に推移する恋愛ではなく、どこか行き違いのある鬱屈した思いである。二首目の「後ろへ下げたシートの助手席」や三首目の「親指でそつと」なぞる「カップのフチ」に曰く言い難い実感があふれる。まさに具体の強みだ。

鏡見て知らぬ我が身の笑ひ居り朝の始まり夢のなかななる
午睡より覚めし子の髪撫でながら夢のつづきをそつと覗きぬ
窓開けて夜の匂ひを吸ひ込みカップの底に月の揺れをり
自分を知らない、理解していかないのは案外自分自身なのか
もしれない。そんなおのれの姿を「夢」は映し出す。覚め際
の夢に、「午睡より覚めし子」の夢に。

「お父さんが亡くなりました」と母からLINEが光る午前
四時半

「気をつけて帰れ」が最後にした会話人の心配ばかりしてい
た

斎場で喪主挨拶の清書する母の隣で淹れるコーヒー
今や実の父親の死が「LINE」で告げられる時代なのだ
と身に染みた。電話の通話ですらない。「人の心配ばかりし
ていた」父だった。三首目の空気がリアルだ。

次々と小さき家電買いそろえ君は旅立つ何か見つけに

「夕焼けが綺麗よ、見て」と電話する二五〇km東の街へ
夜行バス隣に眠れる君の背をトントンとする遠き日のごと

可愛い子には旅をさせよといふことわざの深意と情を思
う。その「旅」が単なる旅行を指す場合と独立して実家を離
れる場合ではかなり意味合いが異なるのは言うまでもないだ
ろう。

定型俳句

〔市民文芸賞〕

遠き樹の呼びかけてくる更衣

中央区

大平悦子

団栗の俄か長者となつてゐし

雪降れば雪の木となり暮れにけり

みどり児の笑みや窓辺に小鳥来る

きのふ見てけふ見て桜新しき

中央区

岩崎芳子

枇杷の実のつぶらなみどり風薫る

掃き出されしやうに出て来し揚羽蝶

火葬場の粗き外壁秋の声

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

蜻蛉の翅海色に染まりをり

浜名区

二橋三千代

秋蝶のゆらりゆらりや漁師町

秋夕焼心の穴へじわじわと

天高しからりと揚がるパンの耳

四拍子の朝ドラの歌水温む

中央区

鈴木 浩子

銀杏の実少しも見えぬ大地かな

軽トラへ大きな梯子松手入

スーパ―にスマホ忘れて日短

八月の海は饒舌潮笈

中央区

川口八重子

濃紫陽花読経に彩のありにけり

虚も実も知り尽くしたる水中花

初雪や静止画像のやうな朝

ものの芽の一つ一つを鼻眼鏡

中央区

館石 照子

立ち話笑ふと揺るる花南天

電子化に戸惑ふばかり汗拭ひ

教会の蔦紅葉這ふ日曜日

小説

児童文学

評論

随筆

詩

短歌

定型俳句

自由律俳句

川柳

水打って遠来の友待ちにけり

中央区

小栗 道子

焼鮎を串ごと頬ばる旅の空

雨つれて青き六月来たりけり

突然の訃報の沙汰や五月憂し

女子会の菓膳ならぶ良夜かな

中央区

松尾 孝子

梅狩りの少年の声透通る

雨上がり鳥飛び交ふや桐の花

清流に足遊ばせて広島忌

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「受験子の「楽しかったよ面接は」

中央区

和久田郁江

面炮顔の声変りして夏休

ゴスペルの舞台震はす夏ライブ

手作りの播粉木の香やとろろ汁

濁点を天地へ満たす夏の雨

中央区

尾内甲太郎

橋桁を叩く川面へ揚羽降る

塵の世の音をのみこむ出水かな

虹を太らせ水没のクラクション

「入選」

年新たバス停一区歩ききる

中央区

池田 智子

降り立てば駅舎のきしみ新社員

遠巻きに老鷺見詰む湖畔径

日向ぼこ水平線を進む船

父と指す飛車角落ちの涼み台

中央区

石塚 十三一

蟪蛄と反身を競ふ米寿かな

香り立つ焼焔や空の色

出雲路や旅の終りは蜆飯

紙垂しでを立て柏手うちて初田打ち

中央区

池谷 和廣

風死せる今日も体感四十度

法師蟬生の証あかしと暮るるまで

ラグビーの華はスクラムさあ押すぞ

天草や石垣洗ふ秋の浪

浜名区

市川 敏

雲流るるイルカの海の秋思かな

神代へと誘ふ太鼓鷹渡る

火の国の旅終へて置く扇かな

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

青空やミラーに映る白椿

中央区

伊藤アツ子

剪りとりし牡丹はらりとくづれけり

中央区

伊藤好子

灯ともるや樽の金魚を掬う子等

稲穂垂れ実る重さに渡る風

新藁に残る大地の息づかひ

卓袱台に焼き鮎二尾の馳走なり

ドレミファと弾む音して木の実落つ

浜名区

伊藤正

浜名区

梅川一恵

ひたすらに青き稲妻走りをり

葉脈を透かして芭蕉玉解きぬ

おさな児が歩むはやさや星おぼろ

風はらむ洗いざらしのアツパツパ

手習ひは今が匂なり秋の風

蒼天を突き抜け桜さくらかな

野っぱらに仰向く吾といわし雲

指ギプスとれてトントン刻む葱

友達と励まし合いのクリスマス

中央区

大熊 柚希枝

今はもう相手のいない毛糸玉

七色の風をまとひて新人生

中央区

太田 沙知子

通学路銀杏の海漬しけり

牛蛙父の声かと又一步

晩酌の話し相手は冷奴

気が付けば皿から消えたわせみかん

言の葉へ返事送るる白露かな

白南風しろはえに絡まるカーテン孫来る

中央区

大重 晴よし

昭和百年我も百歳年始め

中央区

大村 千鶴子

蔓伸ばし風船カズラ空を編む

整はぬ初音にふつと首竦め

朝顔の花芯に小虫潜みおり

「天に召さる」願ひ棚上げ燕来る

雷鳴や鶴折りかけて孫と我

空蟬や娘が拾ひ吾が膝に

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

立春や解き放たれし駒の音

中央区

小粥 通恵

原爆は要らざるものと秋の空

中央区

小澤 幸一

連弾の腕たくましく薄暑かな

産土の神も微睡む小六月

秋風にはぐれてゆくや肩の凝り

他に手がなくてしたこと冬銀河

冬はじめ街角ジャズを立ち見して

三舟の扁額並ぶ今朝の冬

中央区

小川 恵子

中央区

おっさん

春風やいつしか遠き帰路となり

老夫婦朝から涼みにパチンコ屋

刺繍糸七色揃へ春浅し

秋なのにTシャツの汗ハート形

春立つ日ぼつんとひとつ旅鞆

ネコ飽きず春のハエ追う昼下がりに

冬の金魚ときをり泡を浮かせけり

クール便タツパぎゆうぎゆう嫁菜飯

紫の豌豆の花兎の目

中央区

勝田 洋子

膨らんでばちんと爆ぜる夏の恋

中央区

河合三代子

三友花君^{さんゆうか}亡き夏を咲きつづけ

友の忌やシオカラトンボ付いて来る

義捐金送り見上げる冬の虹

ひなげしの花と花触れ恋始め

葛湯吹く恋の傷あと疼きをり

中央区

加藤 雅子

中央区

川合 泰子

昇降機の残り香四角フリージア

チューリップと古本並ぶ花屋さん

うっかりと棘ある言葉ピラカンサ

鳳仙花本音ぼろんと飛び出して

高齢の元氣さ競ふ初電話

万緑や笑顔を乗せる送迎車

雷鳴に右往左往の犬二匹

歩行器を頼りに歩む秋日和

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

朝曇り波静かなる舟溜り

中央区

川島 泰子

朝採りの小振り選びて茄子の牛

車上にはサーフボードや道の駅

おぼろげな記憶の中を花の散る

刈り終えてスズメが遊ぶ案山子かな
清水 康成

風雪や野猿群がる露天風呂

うららかや流れし雲に我身おく

菜の花や朽ちし切株休耕田

登校子の先頭代はり初燕

天竜区

笹瀬 幸代

尺花火利那遅るる大歓声

灯火親し付箋だらけの参考書

秋冷や星を観に乗るロープウェイ

サーカスのとんがりテント月のぼる
杉田みさき

中央区

夜ひとり水も気づかぬ泳ぎかな

冬立つや鳥の群れ追う連写音

漁終えて舳先を湾へ冬に入る

中央区
菊の香や卒寿の日々を丁寧

過ぎし日は今日の礎栗ごはん

坐臥に鳴る身の節々よ小鳥くる

露草の露のさららを摘まんかな

鈴木みちゑ

中央区
滝枯れてますます山の静けさよ

暗い朝新聞受けにつもる雪

空の色映して蒼き氷柱かな

夕空に土つくかぶら燕菁洗いけり

たろう

中央区

水蛭子乗る船流れ着くおぼろかな

天帝の息吹はらりと朴落葉

綿虫や幾度も覗く登り窯

姑の農事日記や古暦

鈴木由紀子

中央区

みそ汁のかをり際立ち蝉しぐれ

昼下がり茅の輪くぐりの城下町

万華鏡静かなる夜の虫の声

アトリエの閻魔こほろぎピョンと跳ね

外山 加代

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

遠足の吊橋わたる声声浜名区

中川 正男

春風やポニーテールの赤い布中央区

根本 文子

里つなぐ手掘りトンネル秋祭

戸袋に蟻螂居すわる夜の月

紅葉かつ散る大道芸の広場

大文字の本読んで居る文化の日

陶片を敷きつめし坂冬の鴟

茹だる夏朝一番の無人市

中央区

中村 つぎ子

中央区

野田 多満子

花筏ただ流れゆき友逝きぬ

良い便りあり春光の街に出づ

裏庭にででむし明日へ一歩かな

ごんぎつね覗いてゐるよ夏木立

言霊も載せてやはらか青田風

耳朵にびゅんびゅんと来るからつ風

忘れざる忘れたきこと赤とんぼ

ふる里の小包ほどく冬ぬくし

中央区

夢に向け大志を抱き入学式

橋本 英夫

老い二人月見の仕度手分けて

胎動の古き記憶や赤とんぼ

中央区

菱田 淡海

春雨や白線濡らす通学路

半球の青を狭しと鯛雲

何事も無き日祝ひて衣被

顔にあてひそひそ話しの扇かな

喜びを反転に込め燕二羽

中央区

貝母咲き前坊守を偲びをり

林田 昭子

街道の薄ら闇なり宝鐸草

初霜の駅や土産のなき帰郷

中央区

藤井 星子

校庭の桑の実熟れし古木かな

新米は何はともあれ塩むすび

嫁ぎ来て六十余年万年青の実

陽炎ひて天浜ディーゼルゆれて来る

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

主ぬしの如き播鉢をもて木の芽和

中央区

藤田 節子

豆撒くや猫が駆け寄り転がしぬ

中央区

古谷 とく

不揃ひもありてぼたもちのどけしや

梅園の一樹たたへて又一步

鉛筆と原稿用紙文化の日

言ひ合ひをしてゐるやうな行々子

鈍色にびへ移ろふ海や八雲の忌

いわし雲岩につまづく水の音

中央区

藤本 幸子

中央区

松島 義徳

枯木山燃やす如くに夕焼かな

コンビニの外に出待ちの雪女郎

ストーブの薬缶の音か風音か

妖精の寝息すこやかチューリップ

手に振るるものみな愛し煤払

緑蔭やペットボトルを開ける音

もぎたての柚子をしばりてすぢごはん

吾子伸びて老父縮みて七五三

浜名区

春めくやハンドメイドのピアス買う

峯村友香里

少しだけ唐辛子足す高学年

弟の名字変はるや春の雷

言い過ぎた言葉のありて懐手

島の子の顔つきになる夏休み

お降りや子の折る紙の多面体

兄といふ称号要らぬクリスマス

中央区

白雲を風の解きゆく今朝の秋

宮澤 秀子

解体の生家の庭の穴まどひ

天竜区

穂すすきを背にして猫の毛づくろひ

美山 愛

菊剪るやひかりの雫こぼしつ

腕時計くさり冷たし今朝の秋

蔓たぐり働きづめの指太く

鰯雲昭和百年あとわづか

中央区

書初や父より母の男文字

宮田 悦自

待ちわびて過ぐるは早き三日かな

中央区

山口 一郎

蓬萊橋渡りて茶摘み富士を背に

名月を映し飲み干す生一本

酔い覚めの素足の廊下夜寒かな

中央区

山田 知明

落日の色の広がる冬田かな

山々や雲を生みつつ春を待つ

踏切で手を振る子等や麦の秋

畑のもの摘みて乗せるや冷奴

風そよぐ木漏れ日抜けて彼岸入り

中央区

和久田俊文

柿熟れて聞く声うれし旅の空

老夫婦蕎麦分け合いて大晦日

七十路の弥生冷たし一人旅

中央区

有賀 千子

病室に差し込む朝日青蜜柑

春塵や昭和の色の広辞苑

秋澄むや浜納豆で朝御飯

中央区

伊藤 倭夫

赤せうびん小国神社の餅かな

夜釣人背後にでんと命山

庭の柿老いてよろめく長挟み

日差し濃しピーマンしゃくれてしまひけり
中央区 伊藤 久子

秋暑し夕餉迷った時はカレー

距離を置く子らとの暮し秋茄子

中央区 伊奈 宜子

梅雨傘や杖に変わりに安土城

更衣髪は栗色染めにけり

冬瓜や使い切りたる達成感

右崎 容子

水の秋風のささやき野道にも
中央区

秋気満つ瘤瘤の御神木

月を愛で野の花愛でし今宵かな

白雲や田植え手伝う義母の里
中央区 内山 昭子

品評会集まる金魚花もよう

初恋は十五の夏の踊り会

中央区 大田 勝子

香り来る雨の軒場や返り花

十六夜の北斎壁画波打てる

兄在りし天竜河口揚花火

小楠 恵津子

花虻やマーマレードを煮詰めおり
中央区

伐採の予告の幹に咲く桜

軽やかに走る自転車青蜜柑

新年やネット利用のオードブル

中央区

小楠 勝代

旅に出づる鍵音確しかと夏帽子

中央区

尾林せい子

村歌舞伎見得切る子らや秋まつり

柿実る小さき駅舎にジャズバンド

飴細工見入る人の輪春彼岸

回生の叶ひし河川鴨の陣

中央区

小楠 達司

中央区

糟谷 修子

夏座敷我が物顔に寝たる猫

負けぬぞと走るえんぴつ夏休み

新米の雲より白し握り飯

また会えた寄り添ふ二りん曼珠沙華

分校の小さき机に萩咲けり

天高し真青まごおに染むる吾子の顔

中央区

小野田みさ子

中央区

片橋 絹代

あばら屋も新玉の年祝ひけり

生きづらき人に手を伸べ草の花

待ち針と縫ひ針束ね針納

石榴裂け母への手紙経となる

リボンつく白酒の瓶貰ひけり

楽都はやジャズ一色の秋深む

真木茂る森の使者かな黒揚羽

中央区

金子 治夫

吊橋を渡る小径や青胡桃

従きゆくも遠のく歩荷尾瀬の夏

中央区

柴田ミドリ

地図見入る青葉波打つ吾子の顔

母屋より古き物置菫の花

綜解く笹の香りを愛であひて

中央区

齋藤 純子

浜名区

清水 孜郎

夏蒲団目醒めてみれば何処かな

住職と一礼交わす初御空

藤棚を風が吹き抜け深呼吸

香煙る本堂出るや初御空

節分や親たちだけとなりにけり

菩提寺の納豆からし初御空

中央区

笹本 栄里

中央区

す ず き

ハンモック心揺るがす曲かけて

雲の峰船で渦潮越えにけり

メロン食べ季節のページ変わりゆく

土産屋の前一時間夏の果て

桜桃忌太宰は雨の男なり

一輪の黄水仙あり秘密基地

蒼天に産毛の光る辛夷の芽

中央区

鈴木 嘉子

十六夜の月は太古の色なせる

中央区

竹平 安則

浜名湖の潮の香纏ふ蜜柑挽ぐ

カーテンに光染み入る冬の月

窓からはゴッホの黄色秋の色

もうひとつ白寿の母に黒葡萄

中央区

関 和子

剪定の枝が山積み春一番

中央区

戸田田鶴子

秋風に鳴く鹿の声開拓地

君子蘭つぼみが見えて玄関へ

ほどほどの笑みこぼれるや母の秋

合格に声弾ませて抱き合う子

中央区

竹平 和枝

中央区

戸塚 忠道

父母を誘ひ桜の名所まで

草刈りやムラサキシジミ蝶の舞ひ

雨宿り樹下に座す鹿袋角

凸とレンズ女郎蜘蛛の目しかと見す

しぐれ煮と一緒に届く新走り

涼風の素肌に触れる人心地

秋まつりうどん食べたく急ぎ足

中央区

富岡 百子

秋まつり夜道に響く太鼓かな

猫の恋軒から軒へ飛び移り

中央区

永田 恵子

夜桜やライトアップに人の山

夕方に蜻蛉飛び交う野原かな

秋風に誘われて飛ぶ白鷺かな

中央区

中津川 久子

額紫陽花近くて遠き子の所帯

錦秋や夫の遺せし腕時計

模試の子の大きむすびや雲の峰

スニーカー野辺をかければ草紅葉

浜名区

中野 ふさ子

背ボタンをはめる指先カンナ咲く

冬の夜ラム入りチョコの苦味かな

中央区

中村 日出子

葉桜やカーテンコール鳴りやまず

両の手に小さな秋を抱きしめる

玄関の日本水仙誰も来ず

中央区

中村 史子

春風や軌跡残して遊覧船

夕焼^{ゆやけ}さり湖面ノリ棚安らぎぬ

湖面風湖西の山の春淡し

中央区

号泣の晩夏の夜は人恋し

ノーリターン新

中央区

銅鐸のせつせつの声木の実降る

松本憲資郎

またあおうとびきり笑顔蓮の花

蓮根掘畔に時計の置かれをり

クリティカル方向音痴のスイカ割り

煮凝を融かす言の葉熱きかな

中央区

ぎこちない絡線人形浅き春

平野 旭

中央区

青空への字を描く渡り鳥

松本 栖枝

老いて直駕鴛夫婦新茶の香

母の日や贈る花束ほほえみて

新茶の香雲なき富士を仰ぎ見る

水仙を一輪生けてよい香り

中央区

子の餌を風雨に探す親燕

藤原 孝志

中央区

冬晴や手袋外しひた走る

ミネラル

猛暑の日雀羽根打つ水溜り

山眠る生きる力を蓄えて

風強きバス待ち合や虎落笛

のどかさに心じんわり一人旅

中央区
天空を覆う花火の降り止まぬ

みみハム

煌々と旅路の空に月のある

中央区
陋屋に色を添へたり萩の花

山田まつ子

秋うららココアが満たす空き時間

「秋雨や亡夫の断捨離渉らず

ひいふうと数へたくなる万年青の実

中央区

山川美恵子

中央区

吉野 民子

浴衣着てフォークダンスおつなもの

「木が泣いてる」切株去らぬ兎の夏よ

ひぐらしや声が淋しい一軒家

山の端に残光わづか鯉跳ねる

味気なやメールで届く年賀状

冬立ちぬ富士見て祝ふ喜寿の会

浜名区

山口 英男

中央区

赤堀 進

夜の新樹一期一会を酌み交す

人生はしめんそかなり秋の風

野ざらしの石仏ぬらす半夏雨

久かたに木曾路の秋を眺むれば

底冷の金色堂や如来像

玉砂利を一步一步と初詣 中央区

井口 絹子

骨折の指にマニキュア菊日和 浜名区

岩城 悦子

熱地獄日本列島避暑地ナシ

ハロウィン傘寿の恋を呼び覚ます

中央区

池谷 静子

中央区

内山 文久

透花火背な支え合い老夫婦

水着濡れ泣く孫愛し川遊び

幼子ら猿をまね跳ぶ秋の園 えん

ひとりゐる外は風花小和田駅

浜名区

市川 園美

中央区

大村 猛

曼珠沙華 集合写真は墓石前

デイケアに通う轍に霜柱

萩こぼれ風が散り敷く涙かな

吾が庭に白く気高き夏椿

浜名区

伊藤 美代

中央区

岡部 澄子

枯すすき吾が人生と重ね知る

近隣へもらひ子となる次郎柿

秋夕焼輝き増してネリネ笑む

鬱々の身を芯に置く秋日傘

窓若葉養護教諭の知恵袋
中央区

岡部すみれ

神無月あ開かぬ臉に礼拝す
中央区

菊地奈々子

ジーンズの脚を投げ出す夏岬

微笑みの遺影に寄り添う胡蝶蘭

中央区

岡本 蓉子

中央区

切 畠 正子

落ち葉ふみ行きかう人の笑顔かな

秋立つや気力で歩む老いの足

春の雲乗って行きたい亡母はのもと

秋の陽に光る庭石鳥遊ぶ

中央区

加 藤 喬

中央区

後 藤 とも

おでん酒鬼監督の笑ひ皺

お見舞に齒の折れそうな柿を持ち

若葉風妣の指紋の日記かな

重ね着に重ねまとい九十才

天竜区

河 合 香 織

中央区

酒 井 浩 之

カレンダー厚着の僕が薄くする

冬天や渡り廊下の小さき富士

初恋や足跡つけた白き雪

空蟬の爪立て眠る鎮魂碑

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

大輪が咲き乱れるや百合の花

中央区

柴田うた子

尽くすこと惜しまず尽くす法師蟬

中央区

鈴木 早苗

軒下につばめすいすい朝の客

秋刀魚食ぶきれいに食べる夫の居て

逆光に芒の波のはてもなし

中央区

鈴木 章子

小さな輪浜松まつり大きな輪

中央区

高山 紀恵

天までも伸びる勢い石路の黄

風立ちてつくつくぼうし遠のけり

夕暮れに心うきうき盆踊り

中央区

鈴木 綾子

サングラス誰かわからず手を振って

中央区

竹田たみ子

登山とは自分自身に挑戦だ

秋刀魚焼く隣家に気兼ね路地裏や

ポーズとる竿の先なる赤とんぼ

中央区

鈴木 賢三

蟬しぐれ採石跡の方射筋

中央区

竹田 道広

クマゼミやうさふきとばす雨のあと

百歳を自称弟子らのスターマイン

院食のやはらかとろみまづき夏

中央区

田中 愛子

美男子に襷袢^{むつぎ}替えられパンジーの花

デイケアの窓枠離れ夏の雲

中央区

野田 俊枝

窓開けて風と冷気の競い合い

中央区

田畑 颯太

兄妹の寝言応酬ラムネ玉

浜名区

服部 節子

衣替え気持ちが変わり後戻り

斑雪の朝や全てが声潜ませ

中央区

坪井 いち子

飛 天 女

寒晴れやマニキュア早く乾きおり

そら耳か母の声する青岬

中央区

白桃のするりと剥けて朝の卓

ふだん着で町会に行く春日より

袋抱く蜘蛛を逃がして追いもせず

中央区

手塚 みよ

学校早引き夜店いっぱい村祭り

中央区

古橋 美由紀

長らえてああも強さか黄蝶とぶ

秋夕焼そっとみやげ持つ母笑顔

秋澄むや時も溶けゆく音もなく

中央区

堀内 太賀

春光に足取り軽く猫が行く

中央区

由倉 典之

星月夜時計の音は壁を這い

秋の庭背伸びしている影法師

浜名区

牧 元久

中央区

渡辺 晴子

朝霧の下手の谷に不動尊

青空やガラスに映える鯛雲

大騒ぎ仔猫引き連れ野良一家

青蜜柑ころがる先に夫おわす

中央区

松本 幹一

中央区

飯塚 日出子

掛塚の海老芋ありて祭りかな

月光や水面にゆれる旅の宿

日差し浴び光の春はすぐそこに

中央区

氏原 未織

地下足袋の老いの日日にも青田風

中央区

山下 静子

石をどけ割れてほっこりさつまいも

涼新た恙なき旅にぎり飯

中央区

尾上 正代

寒いねとにこりと笑うお月様

夏が過ぎ何でも美味の味覚かな

中央区

神谷 司

浜松祭町内廻りの子の少な

中央区

鈴木 和子

秋の浜岩を飲み込む白い波

浜名区

澤木 辰子

風紋の一期一会の浜便り

中央区

鈴木 利定

街路樹を震わす風や秋深し

中央区

澤口 真理

水平線ピュンと離れた初日の出

中央区

鈴木由起子

踏むまじく槇の実赤し長屋門

中央区

塩見 規子

受験票持ちて巡れる初詣

中央区

高橋祐三子

開けるたび匂い懐かし干しぶどう

中央区

杉浦 庸暢

枯れてなほ山あじさいは色残し

中央区

高山 功

遠州灘灯台跡の夕千鳥

中央区

鈴木 敦子

令和春詩集まとめて安堵して

浜名区

竹内オリエ

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

春雷や眠りを覚ます夢半ば

浜名区

戸田 敬三

古里の神代の響き秋祭り

中央区

水野 健一

はまゆふの大橋また跨ぐ春の虹

中央区

中嶋 倫夫

希望の光夜空に光る平和の花火

磐田市

村松 夢

雨上がり眸引き寄せ柿若葉

中央区

中野万里子

灼熱にニガウリの葉も萎えていく

中央区

山中 伸夫

白き世の握るカイロのあたたかさ

中央区

藤本 仁子

石蹴りて鳳仙花はぜこ嬰も元氣

浜名区

別所 慶則

夏の川キケンであるが美しい

中央区

間部 凜咲

定型俳句選評

高柳克弘

俳句は「余白」を重んじる文芸です。一句一句の背景には、作者のふだんの生活や、人生観なども透けてみえます。逆に、あれこれと説明しようとすると、俳句としての魅力が削がれてしまうようです。松尾芭蕉の言葉「いひおほせて何かある（すべて言ってしまうとそれが何になるというのだから）」（『丟来抄』）を心に置きたいと思います。

市民文芸賞として選んだ十名の方の作品も、豊かなる沈黙を抱えています。

遠き樹の呼びかけてくる更衣

衣替えをして、さつぱりと軽やかな身なりとなりました。それは心も同じです。心が軽やかになり、遠くの樹が語りかけてくる、声なき声が聞こえてきたのです。詩情のある句です。

きのふ見てけふ見て桜新しき

いつ見ても、桜は新鮮に見えます。桜という花の寿命の短さが、そう見せるのです。一日だつて無駄にはできず、全力で咲いています。桜花の本質をつかんでいます。

秋蝶のゆらりゆらりや漁師町

漁師さんの働く船上、そして市場は、活気に満ちています。しかし漁師町の全体は、静かで和やかな雰囲気です。その穏やかさが、秋蝶の緩慢な動きを通して伝わってきます。

四拍子の朝ドラの歌水温む

いかにも俳句らしく、神社仏閣や名所旧跡を題材にしなくても、こういう身近な素材からも、すぐれた俳句は生まれ得

るのです。なるほど朝ドラのオープニング曲は、一日のはじまりにふさわしい、ポップな曲調です。「水温む」の季語へ、軽やかに飛躍した、この句自体もポップといえましょう。

虚も実も知り尽くしたる水中花

水中花自体は「虚」ではありますが、そこには「実」も確かに含まれていると見たのが慧眼です。

もの芽の一つ一つを鼻眼鏡

草木の芽を、興味深そうにじつと観察しています。「鼻眼鏡」の人物の真剣な表情を思い浮かべると、くすりと笑えます。日々の雑事にとらわれている人は、こういう時間は持てません。

焼鮎を串ごと頬ばる旅の空

「串ごと頬ばる」が痛快です。もちろん串は食べられませんが、それくらい勢いがかぶりついているのです。作者像に、親しみの情が湧いてきます。「旅の空」という、約めた言い方も巧みでした。

清流に足遊ばせて広島忌

どこか山奥の清流で、広島のことを思いやっているのでしよう。水のきらめきが、平和な世を象徴しています。

手作りの播粉木の香やとるる汁

「手作り」というところで、「香」がはつきりと感じられました。日々の家事の一つ一つにじっくり時間をかけることで、豊かな時間を取り戻そうとする、引退後の人物像を想像します。

虹を太らせ水没のクラクション

水害のドキュメントを、連作形式で表現しています。空はすでに晴れ、虹が出ているのに、地上では車が水没したままになっているという情景を想像しました。リアリティだけではなく、幻想性も取り込んだ、意欲作でした。

自由律俳句

〔市民文芸賞〕

夫の遺影少しずらして脱ぐ理性

中央区

中津川久子

行方なき恋して胸元を渡る鎖

天竜区

河合 香織

風鈴のとなりにぬけがらのジャケット

天竜区

リコリス

小説
児童文学
評論
随筆
詩
短歌
定型俳句
自由律俳句
川柳

「入選」

中央区

またいつかが消えていくまたいつか

杉田みさき

百歳の福耳にこ・ん・に・ち・は

怒る勇氣青トウガラシ辛し

流星は無音群青に朱き矢

浜名区

草摘む妻のよこを小走りに去る

伊藤 正

惚恍と不安交差するデイケアの朝

背を丸め猥雑なアーチを潜る私がいる

天竜区

堂々と歩く子枯れ枝は剣

河合 香織

故郷と書いて声に出せばふるさと

静寂とグラスをなぞる細い指

中央区

六十年ぶりのクラス会薪風呂の暖かさ

豊田 恵子

店主古本の手入れ空っ風通り抜ける

夫の手術無事終わる窓から金木犀の香り

脱いだ赤襦袢に下弦の月の遠吠
中央区

中津川久子

気温下った公園こどもも虫もはじける
中央区 井手賀代子

白椿の花芯熟れてく罪へ夜の雨

花言葉知らずして受くミモザの花の色
浜名区 岩城悦子

赤い月に乳房あずけて夜叉

認知なる友の顔より秋の声のする

天竜区

リコリス

中央区

加藤美恵子

予期せぬ再会冷えた部屋

夕焼け空明日の余白埋める

金妻の再放送ときめく赤い紅

これで最後31階のレストラン

中央区

神谷司

枯れ木の間隠れるように咲いた梅

暑い日も虫の演奏秋を知らせる

中央区
ハイビスカスの灼熱の恋ひと夏限り
菊川 文江

主役にこだわりメラメラと赤く燃える彼岸花

浜名区
竹内オリエ

ソバージュで若見え陽気に音楽聞く

浜名区
渋柿吊した間から見ている空の青
縣 敏子

悲報続き冬季節喪服の女演じている

天竜区
雷鳴の威嚇じつと受け止む^{ひとり}独人
岩本尋津子

天竜区
七回忌過ぎてても父っ子仏壇の晩酌
ちばつゆこ

ワイパーの速さで過去が追ってくる

中央区
寄せては返す波の声まほろばよ
内山 文久

中央区
爪に垢腕に搔き笔った跡朝の月
ヒメ巴勢里

中央区
敬老会デビュー灰色イメージも心は虹色
お里さん

逝く先の幸せ願って花埋み

中央区
腕、肩にケロイドのある被爆女が酒を飲む
古谷聰一郎

電車通学の娘今日は飼育当番八月六日

祭り太鼓のリズムにおかめインコが首を振り
中央区 おっさん

晴天に傘の花咲く炎天下
中央区 鈴木由起子

月光を拭っても月光のにおい
中央区 尾内甲太郎

仰向けに倒れたくなる蝉しぐれ
中央区 高橋祐三子

話をさがさないで上弦の月の夜半
中央区 河本まり子

踏切で一刻見上げ鱈雲
中央区 戸田田鶴子

大変は大きく変わる幸福間近
中央区 か ん

選挙後にめくれる知られざる真実
中央区 ヒ デ

山を延^はう万里の長城野菊咲く
中央区 鈴木 和子

ぼた餅を作る傍にくりくり坊の小さき手
中央区 藤井 星子

トマトの家来^{コンバオウ}でバジル弾ける
天竜区 鈴木 脩慧

みじかい秋眩しく飛びこむ木立の色
中央区 ミ チ

真横に座ってきたあなた浴衣の温もり

中央区

渡邊美恵子

写真には

- (i) うまくていい写真
(ii) うまくてダメな写真

(iii) ヘタでいい写真

(iv) ヘタでダメな写真 があるという。

これは写真家・アートディレクターのワタナベアニ（以下W氏）著『カメラは、撮る人を写しているんだ。』からの引用ですが、この中で一番ダメな写真はどれだと思いますか？

大抵の人は(iv)だと答えるのではないのでしょうか。

しかし、W氏はなんと(ii)であると主張しています。

写真を俳句に置き換えれば一番ダメな俳句は

「うまくてダメな俳句」となります。

その理由として先の著書の中で

「『他人の満足を想定した創作物は貧しい』という言葉がある。写真を撮ることは底抜けに自由だし、撮りたい世界は地球上に無限であるにもかかわらず、この場合は背景をボカすべしとか、こういうレンズを使えとか、桜は四月上旬にこの場所から撮れとか・・・目の前の自由にあふれた豊かな世界を似たものばかりのとても小さいものに狭めてしまっているじゃないかと感じるんだ」

更に「うまくていい写真はまったく別物」とまで言い

切つて、(i)になり得るためには「自分が持っている衝動を表現すれば他人とは重ならないオリジナリティを生むことができる。その結果、写真の存在意義は、なぜその一枚を撮ったのかに集約される」と述べている。

再び写真を俳句、特に自由律俳句に照らし合わせれば

『自由律俳句の存在意義は、なぜその句を作ろうとしたのかの衝動にある』・・・*となるでしょう。

奇しくも本誌七十集の選評における拙文中の山頭火の日記の一文 感動なくして制作するなかれ。ホントウの句は下手でもよろしいが、ウソの句は上手でも駄目 と符合しております。

我々が志す自由律俳句は季語を入れるとか十七音にせよ、という制約から解放されており、底抜けに自由です。この自由を*で述べた自らの句の存在意義を表現するのに利用しない手はありません。

ただし、本誌六九集の選評において「自由律俳句って何でもあるか？」で触れましたとおり、自由律俳句の姿（形）として一つの「段落」（即ち「句切り」）を持ちます。更に俳句は詩の一部である、即ち自由律俳句は詩の精神・ポエジイをもつていなければならぬ、という自由律俳句の祖荻原井泉水の言葉を礎にしましょう。

以上の観点と*に留意し選句させていただきます、次の三句を市民文芸賞に推します。

夫の遺影少しずらして脱ぐ理性

一抹の背徳感のイメージを見事に視覚的ドラマに仕立てあげられました。自由律俳句ならではの世界観を表現した秀句です。

行方なき恋して胸元を渡る鎖

この句の生命線は「鎖」の措辞にあります。上句の「行方なき」と相俟って、恋のドラマを垣間見る気分酔わせていただきました。作者のこの感性も前句同様、自由律俳句でこそ輝くものと確信しております。

風鈴のとなりにぬげがらのジャケット

説明的にならず「ぬげがら」の措辞によって読者に判断を委ねる余白を生みだしています。自由律俳句の手本たる句です。

最後にひとこと

この欄は自由律俳句です。

定型句・定型句まがいの句については主旨に御留意ください。

川柳

〔市民文芸賞〕

あるがまま生きて心を軽くする

浜名区

山口 英男

今日の無事明日へと手繰る夢の糸

中央区

浅井 常義

身の丈に少し欲添え夢を見る

中央区

池田 稔

母の海尖った心丸くなる

中央区

宮崎 和子

さりげないやさしさにまた助けられ

中央区

足立 和代

スマホ見て時間も脳も溶けてゆく

中央区

曾 根

在宅勤務遠慮の要らぬ大きくさめ

中央区

藤原 孝志

やることを探してる間に日が暮れる

浜名区

石原 陽元

〔入選〕

手話楽し動き見守る笑顔の輪

中央区

伊熊 靖子

鏡覗く笑めば母の眼笑つてる

モチベーション夢を形へ活かされる

胸躍るその一言へ好奇心

握手する両手でにぎる懐かしさ

明日への夢を育む茜空

中央区

牧田 龍司

青空を見上げてジャンプ子の巣立ち

真っ白な明日を自分彩で描く

傷を負い青く澄む空八月忌

影法師儂く映る月明かり

しみじみと桜ながめて春を抱く

浜名区

縣 芳子

変化球背伸びをしつつ受けてみる

本番に足並乱れ馬の足

分々に吹く風に乗り散るもみじ

それぞれ

締め付ける胸を抱えて夢を見る

中央区

浅井 常義

温もりの微かに残る夢の夢

じつと手のしわを摩さすって探る夢

夕焼けの明日を占う茜雲

暇つぶし昔はマンガ今スマホ
浜名区

浅岡久二一

じつくりと煮込んだおでん母の味

猛暑日が判断力を鈍らせる

生き抜くと心にきめて迷いなし

家計簿へニヤリ買い込む備蓄米
中央区

池田 稔

遺影撮るいい顔だけど笑い過ぎ

脳のストレス育ち酒が要る

着膨れの温ぬくさもぎ取る春の風

買うだけで何か変わった気がするよ
浜名区

石原 陽元

冷蔵庫開けてみるけど何もない

勉強をしようとするも進まない

最後まで終わらぬ課題生き地獄

復活の二刀流待ち世界沸く
中央区

稲垣久美子

彼岸過ぎやつと満開曼珠沙華

生き物へ異常気象が振り回す

猛暑日の日ざしは秋に疲れ気味

新米の何とぜいたく塩むすび

浜名区

梅川 一恵

生きる意味何だろるかトホトギス

中央区

高原 詩音

支えられ感謝感謝と桜咲く

入園へばあばのミシン歌い出す

かくれんぼ小さな秋が顔を出す

自分との対話の時間庭仕事

割れ目からポンとタンポポンジュール

豊作へ柿を土産に友の来る

授業中うなずきながら落ちてゆく

中央区

曾 根

今日の日も動き疲れて生きている

中央区

高柳 龍夫

急ぎ足なぜか信号全部赤

悩み事孫の笑顔で溶けていく

授業中ノートに写る謎の跡

知らぬ間にここまで来れた老いの幸

目覚めるとなぜか現る先生が

夢の先自分ひとりが気にしてる

敷島の希望を託す細腕に
中央区

高山 功

妻の手の温みしみじみ揉みほぐす

特売日あつちこつちに目が泳ぐ

打って投げ敵も味方も夢心地

中央区

竹川美智子

田植えする農夫眩しい米高値

手こずった母子手帳の娘母となり

伝統の神楽消えゆく過疎の村

遺伝性病抱えて母を恋う

車窓から愛犬がするご挨拶
浜名区

谷田貝忠弘

居心地が良くて居座る熊が居る

朝夕に交わす笑顔で気が晴れる

暑いから頭のタガもちと緩む

中央区

赤堀 進

枯枝にみの虫ゆれて秋の雨

秋の雨信楽の道ほのぼのと

車窓よりひときわ映えてひがん花

またひとつ肩の荷物がふえてゆく

中央区

足立 和代

ため息を吐いては今日も進む道

甲子園熱き魂散る涙

中央区

氏原 彩帆

まだやれるその精神で生きてゆく

声援に背中を押され立ち上がる

プログラマー日々の努力が道開く

中央区

安立 壮汰

朝晴れの頭上に響くセミの声

浜名区

小川 憲雄

スクロール気づいたらまたスクロール

人生は風に流れる雲みたい

悔しいがいちいち涙流せない

父に母僕にコロナが流れ着く

涼しくなり酷暑の辛さ忘れるよ

浜名区

伊藤 正

浜名区

島田 紗衣

野球人海を渡って英雄に

汗と声夕陽ににじむボール追う

先生と呼ばれ浮き立つ新議員

黒板のチョークの粉に夢がまう

新聞の計報欄見る朝の癖

夏休み課題おわらずなまきまくる

甘酒でちよいと一杯暑氣払い

中央区

鈴木 賢三

行水と団扇と蚊帳でエコぐらし

高熱と高物価とにうなされて

子供より年寄り多い秋祭り

中央区

鈴木 敏子

上がってるつもりの足が蹴躓く

びびる役腹を括って無事に終え

今となりたくまし母の愛し子よ

浜名区

竹内オリエ

戦争は終わりとニュース聞き安堵

心からだ心細きや八十路なり

秋空に宇宙感じる飛行雲

中央区

手塚 美誉

底穴をあける火鉢に菜花咲く

炎暑なる蟻の行列消え失せる

老い隠すマスク外せず冬がくる

中央区

寺田喜代子

物忘れ老いを隠せず四苦八苦

特売の広告並べ思案する

四位でもうれし涙の一ページ

浜名区

夏目 正樹

くしゃみして浮かんだ一句パツと消え

世渡りに多少の嘘は必需品

中央区

エアコンが無くて帰省をあきらめる

根本 文子

中央区

ロボットに頭上がらぬ上司かな

藤原 孝志

さつま芋シルクスイート名に惚れる

スーパーでママが選んでパパはカゴ

おばさんと言われ振り向く人五人

人間も修理をしては長寿命

中央区

紫陽花が雨の景色に色つける

長谷 雄也

中央区

誘惑へ心が揺れる停止線

宮崎 和子

芝の上熱風に乗せ蹴るボール

折らぬようじつところえる親心

雨の音布団にもぐり耳隠す

諦めず一歩前へと追い求め

中央区

芋掘りにひっくり返る園児たち

藤井 星子

浜名区

街中が活気あふれる夏祭り

めい

また明日友の訃報に言葉なし

ひまわりのようにまっすぐ生きていく

すりこぎを廻すリズムやとろろ汁

帰り道分かれるときに立ち止まる

夏課題やる気は出ずに汗がでる

中央区

明戸 征徳

英単語覚えたはずが消えていく

中央区

大庭美依奈

夜の窓深夜の明かり星のよう

授業中眠気に負けて下を見る

温暖化餌不足熊人里に

中央区

池谷 和廣

絵手紙を楽しんだ友天国へ

中央区

岡本 蓉子

猛暑日に鴉口開け暑さ耐う

毎日がありがとうにてすぎていく

宿題をやる気スイッチでてこない

浜名区

石野 裕大

安心をお金で買っていて不安

中央区

尾内甲太郎

地球泣く便利さ求め森を切る

生きるのを忘れるくらい死んでいた

晩酌の回数減らす新紙幣

中央区

大重 貴子

部活動汗水垂らしはげみあう

浜名区

叶木 裕翔

約束を守らぬ夫狸なり

テスト前一夜漬けではだめだった

雨により英気養う緑かな
中央区

神谷 司

通学路夏の暑さにめまいする
浜名区

ゴンちゃん

雨降りて息吹き返す青緑

朝起きて開かぬまぶた夢の中

中央区

賀茂 直央

中央区

舜 大

炎天下服をしほれば水たまり

夜起きて寝れずにととも朝眠い

夏課題机に向かいにらめっこ

夏休み光の様な速さです

中央区

嘉山 和美

中央区

しょーた

到達は更なる先を見せる為

靴ひもを結びなおして勝負の日

満腹の重い腰上げ立つ流し

扇風機誰もゆずらぬ風之道

中央区

くるみん

浜名区

鈴木 海斗

夏休み恋と宿題追いかけて

風鈴が鳴るたび思う夏のこと

ゴミ拾い町も心も輝く日

夏休み宿題だけが残っている

手術の目ほこりよく見え掃除増す

中央区

鈴木 和子

立ち上がる声かけあつて老夫婦

中央区

戸田田 鶴子

額二つ戦死の伯父は若きまま

親子猫腹出しあつて熱帯夜

的の芯息を整え矢を放つ

中央区

鈴木 健留

朝日浴び昨日の悩みふき飛ばす

中央区

長津 陸矢

夕焼けで今日という日が色づいて

変化こそ生きる証と風は言う

夏祭り部活で行けず悲しいな

湖西市

高須 逸希

これが恋私の胸を締め付ける

浜名区

西野 榛希

最終日夏の課題を恨みたい

親と子が会話もしない家の中

空に咲く自分を照らす花がちる

湖西市

高須 祐太

シャボン玉追えばどこまで青い空

中央区

パ ン 粉

飛びこんで広がる青は無限大

どろんこで笑い転げた夕暮れよ

負けたんじゃない心がちよっと折れただけ
 浜名区 藤田 盛雄

平和だな日本一周グルメ旅

酷暑でも時期迎え咲く彼岸花
 浜名区 山田 良藏

ものづくりものだけでなく人の輪も
 浜名区 松浦 剛士

あふれでる元気の種を育てよう
 中央区 渥美 陽奏

初日の出海に反射し夢を描く

夏休みバテてどこにも行けぬまま
 中央区 荒木 優吾

モニターに映る自分とにらめっこ
 浜名区 松浦 陽太

姥桜育てし若木花が咲く
 浜名区 池谷 八重子

勉強中気づけばスマホ持っている

指先に実った努力嬉しいな
 袋井市 みゆみゆ

軒下に並ぶ干柿手が伸びる
 中央区 伊藤 アツ子

習題をやるうとしてもスマホ見る

税金でしぼりとられてがりがりだ

浜名区

伊藤 公太

夏課題明日からやると今日もいう

湖西市

片橋 十輝

古古米をさがし訪ねて幾千歩

浜名区

伊藤 美代

夏課題顔を上げると朝日差す

浜名区

片山 亮太

上ばかり向いて気付かぬ地の温み

中央区

内山 敏子

暑いから外出せずに過ごしてた

中央区

川口 愛奈

夏休み花火見ながらかき氷

中央区

大城 空也

聞く耳と聞きたくないを使い分け

中央区

河島いずみ

平和な日八十年とこれからも

中央区

大塚 千聖

宿題中少しただけだと手にスマホ

中央区

河本 彩里

山茶花の甘い蜜恋う小鳥達

中央区

大村 猛

日本史を学ばばいずれ今を知る

中央区

絆

下戸だけど今日は梅酒で憂さ晴らし
中央区 恭子
 暑い夏汗をかくから嫌いな中央区 鈴木彩隼

新学期にぎやかな日が戻って中央区 児玉遼平
 夢は見るだけで止めるな摺むもの中央区 鈴木均

汗かいて部活終わりに食うアイス中央区 佐藤凜
 大晦日そばすすり聞く除夜の鐘中央区 高林快

新米は眺めるだけで古米買う浜名区 澤木辰子
 糸通し穴は見えれど手が震え中央区 高山紀恵

法多山風鈴聞きて夏しのぐ磐田市 柴田琉生
 部活後に友と乾杯ラムネ飲む中央区 竹内奏人

「どっこいしょ」立つも座るも「どっこいしょ」中央区 菅沼秀代
 古鳥ふるどりや輪のまんなかで腕相撲中央区 竹田道広

トランプは裸の王へまつしぐら

中央区

竹平 安則

命日の雨いやだなあ空見上げ

中央区

中野万里子

駐輪場鳴いてた蝉はもういない

磐田市

つよみ

知らぬ間に低くなつてた祖母の肩

中央区

なな

夏休みおわつてもなおつづく夏

中央区

徳田 湖羽

扇風機涼しい風はどこ行つた

中央区

西林 杏彩

あかぎれの痛みかかえて四苦八苦

浜名区

戸田 敬三

笑顔かなマスクの下は本当に

中央区

長谷川 優

葬儀屋の招待状に鼻白む

中央区

戸塚 忠道

焼けた腕くつきり跡に夏がいる

浜名区

平野 滉大

さてさてと号令ばかり春炬燵

中央区

中津川 久子

新米の値札に怯む年金者

中央区

古谷聰 一郎

夏休み何をしたのか記憶なし 中央区 ほん 酔 中央区 村上 陽依

じりじりと夏の熱風暑すぎる 浜名区 本多 柚一郎 中央区 森下 彩心

母がすごい初めて知った過去の恋 中央区 松井 康男 浜名区 森下 侑哉

プレッシャー自らかけて何とする 中央区 馬塚 五朗 浜名区 山口 口

しやれた店未知の街角胸踊る 中央区 松本 浜名区 山口 英男

ガチダツシユびったり八時ギリセーフ 中央区 間 潤 中央区 由倉 典之
中央区 颯太

キューピッドバレンタインに知らん顔

昇太さん大笑いだよ中ホール

天竜区

リ
コ
リ
ス

登校時涼しさを求め影さがす

中央区

り
な

スマホ見てまた時間だけ溶けていく

中央区

り
ん
ご

寝て食べてユーチューブ観て四畳半

中央区

和
久
田
俊
文

実る稲穂これぞ日本の命綱

浜名区

渡
辺
明
子

散歩中昔の君が蘇る

中央区

渡
邊
順
也

川柳選評

今田久帆

川柳は五七五の日本語特有のリズムを持っています。自分の思いを五七五のリズムに乗せると、相手の胸に響き共感を生みます。ただ同じ五七五でも説明文だと、「そうですか」で終わってしまいます。「朝起きて顔を洗って飯を食う」では行動を説明しているだけで、「心」がありません。「朝起きて顔を洗うと青い空」で晴れやかさが伝わりますが、平凡です。自分が体験したり、見たりしたことを句に表現すると思いが伝わります。「子のためと夢を編み込む母の指」のような句は母の行動から子どもに対する思いが伝わります。

今回は高校生の投句があつたため、例年の二倍の一五四名の参加がありました。その中で私の心を捉えた二五句を市民文芸賞候補句とし、熟考した上で、八句を市民文芸賞といたしました。

市民文芸賞候補句

声援に背中を押され立ち上がる
しみじみと桜ながめて春を抱く
耐え抜いたあの苦しみが今光る
人間も修理をしては長寿命
老い隠すマスク外せず冬がくる
びびる役腹を括って無事に終え
生き抜くと心にきめて迷いなし

入園へばあばのミシン歌い出す
青空を見上げてジャンプ子の巢立ち
手話楽し動き見守る笑顔の輪

悩み事孫の笑顔で溶けていく

ひまわりのようにまっすぐ生きていく

父に母僕にコロナが流れ着く

割れ目からボンとタンポポボンジュール

締め付ける胸を抱えて夢を見る

明日への夢を育む茜空

猛暑日の日ざしは秋に疲れ気味

市民文芸賞

◎あるがまま生きて心を軽くする

社会生活をしていると人間関係や地域、社会などの関係を意識しながら生活しているが、良い面や悪い面を含め、今ある状態のそのままを受け入れていくと、心がずつと軽くなる。

◎今日の無事明日へと手繰る夢の糸

今日一日を健康で過ごしていると、明日はあれをやってみようなどと、明日への思いが浮かび、明るい未来を手繰り寄せることができる。

◎身の丈に少し欲添え夢を見る

日頃、身の丈の生活をして、つつがなく生きているが、身の丈の生活では平凡な日になってしまおうので、少し欲を添え

てみると、いろいろな夢が浮かんで来る。

◎母の海尖った心丸くなる

思春期は半分大人で半分子どもという面があり、ちよつと尖んがって大人ぶってみるが、母親が暖かく包んでくれると、その刺がまるくなつていく。

◎さりげないやさしさにまた助けられ

困っている時、周囲の人々のやさしさに出会うと、心が暖かくなり、元気になつて、一步を踏み出すことができる。

◎スマホ見て時間も脳も溶けてゆく

スマホを見ていると時間も興味もスマホに奪われ、中毒になつたように、またスマホを開いてしまう。表現が秀逸である。

◎在宅勤務遠慮の要らぬ大きさめ

在宅勤務をしていると周囲の人に気を遣う必要もないので、思い切りくしゃみをして気持ち切り替え、仕事を続けられる。

◎やることを探してる間に日が暮れる

今日は何をしようかと考えていると時間ばかりが過ぎ去り、やることを実行できないまま、一日が終わってしまう。

浜松市芸術祭

『浜松市民文芸 第72集』作品募集要項

- 一 趣 旨 市民の文芸活動の向上と普及を図るため、創作された文芸作品(未発表)を募集して、「浜松市民文芸第72集」を編集・発行します。
- 二 発 行 浜松市
公益財団法人浜松市文化振興財団 浜松文芸館
- 三 編 集 浜松市内に在住・在勤・在学されている人(ただし、中学生以下は除く)
- 四 応募資格
- 五 募集部門及び応募原稿

部 門	枚数等(一人)	部 門	枚数等(一人)
小説(戯曲を含む)	50枚以内(一編)	児童文学	30枚以内(一編)
評論	25枚以内(一編)	随筆	7枚以内(二編)
詩(漢詩を除く)	50行以内(一編)	短歌	5首以内
定型俳句	5句以内	自由律俳句	5句以内
川柳	5句以内		

- ※ 原稿用紙はB4判(四〇〇字詰め、縦書き)を使用してください。
- ※ ワードプロ・パソコン原稿(二〇字×二〇行・縦書き)A4判でも結構です。
- ※ 原稿が複数枚になる場合はページ番号を付けてください。

- 六 選 者
- 七 募集期間

選者の氏名は、令和八年七月配布(予定)の「浜松市民文芸第72集」の作品募集要項に記載します。
令和八年九月一日(火)から十一月二十日(金)まで。(必着)

八 応募上の注意

① 応募作品は、本人の創作で未発表のものに限ります。他のコンクール及び同人誌・結社、新聞等へ投稿した作品は応募できません。

② 応募する作品ごとに、規定の応募票(コピー可)を必ず添付してください。応募票付き募集要項は、浜松文芸館、浜松市文化振興財団、中央区まちづくり推進課、市内の協働センター・支所、図書館等の公共施設で入手できます。浜松文芸館ホームページからも印刷できます。

③ 応募原稿の書き方は、作品募集要項内の「応募原稿の書き方」を御覧ください。

④ 応募時に、選考結果通知のための返信用の定形封筒に自分の住所・氏名を書き、切手110円分を貼って、作品に添えて出してください。返信用の封筒は応募作品の部門の数に関係なく一通で結構です。

⑤ 難読の語や特殊な語、地名・人名などの固有名詞、歴史的な事柄などにはふりがなを付けてください。応募原稿は必ず清書したものを提出してください。

⑥ 作品掲載の際には、清書原稿を活字にします。文字遣い・句読点・ルビ・符号など表記に関わることについては、「浜松市民文芸」として一部統一させていただくことがあります。

⑧ 応募の規定や注意に反する作品・判読しにくい作品は、失格になることがあります。

⑨ 応募原稿は、返却いたしません。必要な方は事前にコピーをおとりください。

⑩ 応募後の、原稿の修正はできません。

選考結果は、応募時に提出された返信用封筒で令和九年二月初旬までにお知らせします。

市民文芸賞及び入選の作品は、令和九年三月発行予定の第72集に掲載いたします。

市民文芸賞の方には、令和九年三月の表彰式で賞状と記念品、「浜松市民文芸第72集」を二部贈呈いたします。

ます。

十一 その他 入選の方には、「浜松市民文芸第72集」を一部贈呈いたします。

購入される場合は、一部七〇〇円です。

御提供いただいた個人情報、応募者への連絡及び確認のために使用し、目的外に利用することはありません。また、御本人の同意なく第三者に開示・提供することはありません。

〈提出及びお問い合わせ先〉

浜松文芸館

〒430-0109 浜松市中央区早馬町二丁目クリエイト浜松内 ☎053-4531393

「浜松市民文芸」第72集応募票

必須 チェックしたら

をつけてください



作品は、未発表のもですか。

(他のコンクール及び同人誌、結社、新聞等へ投稿されていないものですか)

小説 ・ 児童文学 ・ 評論

随筆 ・ 詩 ・ 短歌 ・ 定型俳句

部門 自由律俳句 ・ 川柳

1箇所○で囲んでください

小説・児童文学・評論・随筆・詩を投稿される方は記入してください
題名は、原稿用紙1枚目の右欄外にも、同じように記入してください

題名

原稿枚数（ページ数）

枚

ふりがな

ふりがな

氏名

発表名
ペンネーム

通学先・市外在住の方の勤務先

年齢

歳 名称
所在地

(令和8年11月20日現在)

〒

文芸館使用欄

住所

電話番号

お願い

返信用の封筒（110円分の切手を貼る）を御同封ください。応募票は、作品ごとに作成をお願い致します。
応募票は原稿に貼らずにそのまま御提出ください。



紙表集第一市民文芸会
第一集第一市民文芸会

浜松市民文芸第1集は、昭和三十一年（1956年）三月、浜松市教育委員会によって発行されました。市民が主役の市民のみなさんのための文芸冊子づくりを目指したもので、その後、毎年の発行という長い歴史を積み重ね、今回で誕生から七十年を超え、第71集となりました。

今回の応募総数は、小説・児童文学・評論・随筆・詩・短歌・定型俳句・自由律俳句・川柳の九部門で二二五二点、投稿者は五三二名でした。特に、高校生の応募が一〇六名（応募の20%）あり、若い世代の応募が昨年より増えた点がうれしい出来事でした。十代から九十代まで、幅広い世代の皆さんが投稿してくださったことに感謝申し上げます。

投稿された皆さんの熱い思いが込められ、そして、浜松の文芸を愛する多くの方に支えられている『浜松市民文芸』です。市民文芸賞を受賞された作品だけでなく、応募された皆さん全ての、自ら書くことに挑戦した思いに、事務局として心から敬意を表したいと思います。

なお、前号70集から文字の大きさにつきまして、可能な範囲で大きくし、少しでも読みやすく…と考え編集しています。

生成A-1の急速な発達が進むことから、自ら書くこと、自ら読む（詠む）ことを大切に！

浜松文芸館がかかげている合言葉です。デジタルの便利さを享受するだけでなく、自らの創造や手作りを大切にしたい。先人の文芸活動を紹介する展示も、講座・講演会・朗読会も、そしてこの市民文芸の編集発行も、その思いで進めています。これからも自ら書き、自ら読み（詠み）、文学や文芸に親しみ楽しんでくださる方が増えていくことを期待しています。

なお、裏表紙は、例年「十湖賞俳句大会」を企画運営している「浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会」にお願いしました。

発行にあたり、改めて、投稿者・選者・関係機関の皆様方のご理解、ご協力に感謝し、厚くお礼申し上げます。

浜松文芸館 館長 伊熊敬一

浜松市民文芸 第71集

令和八年三月十五日 発行

発行 浜松市
編集 (公財)浜松市文化振興財団
浜松文芸館

〒四三〇一〇九一六

浜松市中央区早馬町二一

〇五三一四五三三三三三

印刷 杉森印刷株式会社



主催 浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会、浜松市

お問合せ

東行政センター 地域振興担当 「十湖賞」俳句大会係
〒435-8686 浜松市中央区流通元町 20 番 3 号
E-mail : e-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp
TEL : 053-424-0115 FAX : 050-3737-5872

応募期間 令和 7/1~9/30 必着
8年

浜松文芸館 × 浜松市中央区東地域
俳句の里づくり事業実行委員会